
行 田 市

築道下遺跡Ⅲ

行田南部工業団地造成事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

—Ⅳ—

<第2分冊>

2 0 0 0

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

〈第1分冊〉		〈第2分冊〉	
序		2. 掘立柱建物跡	311
例言		3. 柵列跡	341
例則		4. 土壙	344
目次		5. 井戸跡	385
挿図目次		6. 溝跡	419
表目次		7. 土器焼成窯跡	431
図版目次		8. ピット	439
I 発掘調査の概要	1	9. 性格不明遺構	452
1. 調査に至るまでの経過	1	10. その他の遺物	456
2. 調査の経過	2	(1) 縄文土器	
3. 調査の組織	4	(2) 石器・石製品	
II 遺跡の立地と環境	6	(3) 片岩製品	
III 遺跡の概要	19	(4) 砥石	
IV 遺構と遺物	36	(5) 紡錘車	
1. 住居跡	36	(6) 玉類(管玉・ガラス玉・白玉・土玉・土錘)	
		(7) 滑石製模造品	
		(8) ミニチュア・手捏ね土器	
		(9) 鉄製品	
		(10) その他のグリッド出土遺物	
		V 結語	472
		1. 築道下遺跡出土土器について	
		付編 築道下遺跡出土遺物の科学分析	490
		1. 分析の目的	
		2. 土器胎土分析	
		3. ガラス製丸玉・碧玉製管玉の化学分析	

插图目录

第321图 第78号掘立柱建物跡	311	第356图 土壤 (4)	351
第322图 第63号掘立柱建物跡	312	第357图 土壤 (5)	323
第323图 第80号掘立柱建物跡	313	第358图 土壤 (6)	355
第324图 第99号掘立柱建物跡	314	第359图 土壤 (7)	358
第325图 第100号掘立柱建物跡	315	第360图 土壤 (8)	359
第326图 第101号掘立柱建物跡	316	第361图 土壤 (9)	361
第327图 第102号掘立柱建物跡	317	第362图 土壤 (10)	365
第328图 第103号掘立柱建物跡	318	第363图 土壤 (11)	367
第329图 第104号掘立柱建物跡	319	第364图 土壤 (12)	369
第330图 第105号掘立柱建物跡	320	第365图 土壤 (13)	371
第331图 第106号掘立柱建物跡	320	第366图 土壤 (14)	373
第332图 第107号掘立柱建物跡	321	第367图 土壤 (15)	375
第333图 第108・109号掘立柱建物跡	322	第368图 土壤 (16)	377
第334图 第110号掘立柱建物跡	323	第369图 土壤 (17)	378
第335图 第111号掘立柱建物跡	324	第370图 土壤出土遺物 (1)	379
第336图 第112号掘立柱建物跡	325	第371图 土壤出土遺物 (2)	380
第337图 第113号掘立柱建物跡	326	第372图 土壤出土遺物 (3)	381
第338图 第114号掘立柱建物跡	327	第373图 井戸跡 (1)	386
第339图 第115号掘立柱建物跡	328	第374图 第147号井戸跡出土遺物	387
第340图 第117号掘立柱建物跡	329	第375图 井戸跡 (2)	389
第341图 第116号掘立柱建物跡	330	第376图 井戸跡 (3)	391
第342图 第118・119号掘立柱建物跡	332	第377图 井戸跡 (4)	393
第343图 第120号掘立柱建物跡	333	第378图 井戸跡 (5)	395
第344图 第121号掘立柱建物跡	334	第379图 井戸跡 (6)	397
第345图 第122号掘立柱建物跡	335	第380图 井戸跡 (7)	399
第346图 第123号掘立柱建物跡	336	第381图 井戸跡 (8)	401
第347图 第125号掘立柱建物跡	337	第382图 井戸跡 (9)	403
第348图 第126号掘立柱建物跡	338	第383图 井戸跡 (10)	405
第349图 掘立柱建物跡出土遺物	339	第384图 井戸跡 (11)	407
第350图 第8号柵列跡	341	第385图 井戸跡 (12)	409
第351图 第9・10・11号柵列跡	342	第386图 井戸跡 (13)	411
第352图 第12号柵列跡	343	第387图 井戸跡 (14)	412
第353图 土壤 (1)	345	第388图 井戸跡出土遺物 (1)	413
第354图 土壤 (2)	357	第389图 井戸跡出土遺物 (2)	414
第355图 土壤 (3)	350	第390图 井戸跡出土遺物 (3)	415

第391図 溝跡断面図(1)	424	第411図 第14号性格不明遺構	452
第392図 溝跡断面図(2)	425	第412図 第14号性格不明遺構出土遺物	452
第393図 溝跡断面図(3)	426	第413図 第15号性格不明遺構	453
第394図 溝跡断面図(4)	427	第414図 第16号性格不明遺構	454
第395図 溝跡出土遺物(1)	428	第415図 第16号性格不明遺構出土遺物	455
第396図 溝跡出土遺物(2)	429	第416図 調査区内出土縄文土器	456
第397図 第1号土器焼成窯跡	432	第417図 調査区内出土石器・石製品	457
第398図 第1号土器焼成窯跡出土遺物	433	第418図 調査区内出土片岩製品(1)	459
第399図 第60号溝跡(第1号土器焼成窯跡関連) 出土遺物(1)	435	第419図 調査区内出土片岩製品(2)	460
第400図 第60号溝跡(第1号土器焼成窯跡関連) 出土遺物(2)	436	第420図 調査区内出土砥石	461
第401図 ピット(1)	442	第421図 調査区内出土紡錘車	462
第402図 ピット(2)	443	第422図 調査区内出土玉類	464
第403図 ピット(3)	444	第423図 調査区内出土土玉・土錘	464
第404図 ピット(4)	445	第424図 調査区内出土滑石製白玉	465
第405図 ピット(5)	446	第425図 調査区内出土滑石製模造品	466
第406図 ピット(6)	447	第426図 調査区内出土ミニチュア・手捏ね土器	467
第407図 ピット(7)	448	第427図 調査区内出土鉄製品(1)	469
第408図 ピット(8)	449	第428図 調査区内出土鉄製品(2)	470
第409図 ピット出土遺物(1)	450	第429図 グリッド出土遺物	471
第410図 ピット出土遺物(2)	451	第430図 坏Ⅱ類(小針型‘糸’坏)の細分と変遷	476
		第431図 土師器の変遷(1)	480
		第432図 土師器の変遷(2)	482

表目次

第147表 掘立柱建物跡出土遺物観察表	339	第166表 ピット出土遺物観察表	451
第148表 掘立柱建物跡一覧表	340	第167表 第14号性格不明遺構出土遺物観察表	453
第149表 柵列跡一覧表	343	第168表 第16号性格不明遺構 出土遺物観察表(1)	455
第150表 土壙出土遺物観察表(1)	381	第169表 第16号性格不明遺構 出土遺物観察表(2)	456
第151表 土壙出土遺物観察表(2)	382	第170表 調査区内出土石器・石製品観察表	458
第152表 土壙出土遺物観察表(3)	383	第171表 調査区内出土片岩製品観察表	458
第153表 土壙一覧表(1)	383	第172表 調査区内出土砥石観察表	462
第154表 土壙一覧表(2)	384	第173表 調査区内出土紡錘車観察表	463
第155表 井戸跡出土遺物観察表(1)	416	第174表 調査区内出土玉類観察表	463
第156表 井戸跡出土遺物観察表(2)	417	第175表 調査区内出土土玉・土錘観察表	465
第157表 井戸跡一覧表(1)	417	第176表 調査区内出土滑石製臼玉観察表	465
第158表 井戸跡一覧表(2)	418	第177表 調査区内出土滑石製模造品観察表	467
第159表 溝跡出土遺物観察表	430	第178表 調査区内出土ミニチュア・ 手捏ね土器観察表	468
第160表 第1号土器焼成窯跡出土遺物観察表	434	第179表 調査区内出土鉄製品観察表	468
第161表 第60号溝跡出土遺物観察表(1)	437	第180表 グリッド出土遺物観察表(1)	470
第162表 第60号溝跡出土遺物観察表(2)	438	第181表 グリッド出土遺物観察表(2)	471
第163表 ピット一覧表(1)	439		
第164表 ピット一覧表(2)	440		
第165表 ピット一覧表(3)	441		

図版目次

- 図版 1 築道下遺跡全景 (昭和22年米軍撮影航空写真) 第366号住居跡貯蔵穴
- 図版 2 築道下遺跡全景 (遺構合成航空写真) 第366号住居跡カマド
- 図版 3 調査区全景 1 第367号住居跡
- 調査区全景 2 図版 9 第367号住居跡遺物出土状況
- 図版 4 調査区全景 3 第369号住居跡
- 調査区基本土層 第370号住居跡
- 図版 5 第140号住居跡 第370号住居跡カマド
- 第193号住居跡 第371号住居跡
- 第198号住居跡 第371号住居跡遺物出土状況
- 第345・350号住居跡 第371号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
- 第346・349号住居跡 第374号住居跡
- 第347・348・351号住居跡 図版10 第375号住居跡
- 第351号住居跡 第376号住居跡
- 第351号住居跡遺物出土状況 第377号住居跡
- 図版 6 第351号住居跡遺物出土状況 第378号住居跡
- 第351号住居跡 第378号住居跡カマド
- 第351号住居跡カマド 第378号住居跡貯蔵穴
- 第351号住居跡カマド遺物出土状況 第379・380・381号住居跡
- 第351号住居跡カマド遺物出土状況 第382号住居跡
- 第351号住居跡カマド遺物出土状況 図版11 第382号住居跡
- 第351・352・353号住居跡 第383号住居跡
- 第354号住居跡 第385号住居跡
- 図版 7 第354号住居跡貯蔵穴 第386号住居跡
- 第355号住居跡 第386号住居跡貯蔵穴
- 第355号住居跡カマド 第387号住居跡
- 第356号住居跡 第387号住居跡遺物出土状況
- 第356号住居跡カマド遺物出土状況 第388・389号住居跡
- 第358号住居跡 図版12 第388号住居跡カマド
- 第359号住居跡 第389号住居跡カマド
- 第359号住居跡 第389号住居跡内ピット5 遺物出土状況
- 図版 8 第360・361・362号住居跡 第391号住居跡
- 第363・364号住居跡 第392・393・394・396号住居跡
- 第365号住居跡 第395号住居跡
- 第365号住居跡貯蔵穴 第397・398号住居跡
- 第366号住居跡 第399号住居跡

- 図版13 第399号住居跡貯蔵穴
 第399号住居跡遺物出土状況
 第400号住居跡
 第401号住居跡
 第402号住居跡
 第403号住居跡
 第404号住居跡
 第405・420号住居跡
- 図版14 第406号住居跡・第111号溝跡
 第407・408号住居跡
 第409・415号住居跡
 第410号住居跡
 第411号住居跡
 第411号住居跡
 第412・413号住居跡
 第412号住居跡遺物出土状況
- 図版15 第412号住居跡遺物出土状況
 第412号住居跡カマド
 第412号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
 第414号住居跡
 第414号住居跡カマド遺物出土状況
 第414号住居跡ピット5遺物出土状況
 第416号住居跡
 第417号住居跡
- 図版16 第418・421号住居跡
 第418号住居跡遺物出土状況
 第418号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
 第419号住居跡
 第425号住居跡
 第426号住居跡
 第427・428・429号住居跡
 第430号住居跡
- 図版17 第430号住居跡カマド
 第431号住居跡
 第431号住居跡遺物出土状況
 第432・433号住居跡
 第435・436号住居跡
- 第437号住居跡
 第438号住居跡
 第439・442号住居跡
- 図版18 第440・446号住居跡
 第440・446号住居跡
 第441号住居跡
 第441号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
 第443号住居跡
 第444・445号住居跡
 第452号住居跡
 第452号住居跡
- 図版19 第452号住居跡カマド
 第454・455・456・467号住居跡
 第454号住居跡貯蔵穴
 第456号住居跡カマド
 第467号住居跡カマド
 第457号住居跡
 第457号住居跡
 第457号住居跡カマド
- 図版20 第458号住居跡
 第458号住居跡カマド遺物出土状況
 第459号住居跡
 第460号住居跡
 第461号住居跡
 第461号住居跡
 第461号住居跡カマド
 第461号住居内土壌
- 図版21 第462号住居跡
 第463号住居跡
 第464号住居跡
 第465・466号住居跡
 第465・466号住居跡
 第465号住居跡貯蔵穴
 第466号住居跡貯蔵穴
 第468・469号住居跡
- 図版22 第468・469号住居跡遺物出土状況
 第468・469号住居跡カマド

- 第470・471・493号住居跡
 第470・471・493号住居跡
 第470号住居跡カマド
 第493号住居跡貯蔵穴
 第472号住居跡
 第472号住居跡遺物出土状況
 図版23 第473・474号住居跡
 第473・474号住居跡
 第475・476・477・478号住居跡
 第477号住居跡
 第479・480・489号住居跡
 第479・480号住居跡貯蔵穴遺物出土状況
 第481号住居跡
 第482・483・484・485・486・491号住居跡
 図版24 第482・483・484・485・486・491号住居跡
 第485号住居跡カマド・貯蔵穴
 第487号住居跡
 第488号住居跡
 第490号住居跡
 第492号住居跡
 第494号住居跡
 第495・496号住居跡
 図版25 第497号住居跡
 第498・499・500・501・502・503・505・506・
 510・511号住居跡
 第500・501号住居跡
 第502・506号住居跡
 第507・508・509号住居跡
 第512号住居跡
 第513・514・515・516・517・518・519・525号
 住居跡
 第514号住居跡玉出土状況
 図版26 第514号住居跡玉出土状況
 第520・521・522・523・526・540・541・542・
 546・547・548号住居跡
 第522・540・541・542・546・547・548号
 住居跡
 第521・523号住居跡
 第524号住居跡
 第524号住居跡カマド
 第527号住居跡
 第528・529・530・531号住居跡
 図版27 第529・530・531号住居跡カマド
 第532号住居跡
 第533号住居跡
 第533号住居跡カマド
 第534・535・536号住居跡
 第534・535・536号住居跡
 第534・535・536号住居跡
 第534号住居跡カマド
 図版28 第537・538・539号住居跡
 第537号住居跡カマド
 第543号住居跡
 第544・545号住居跡
 第549号住居跡
 第549号住居跡焼土出土状況
 第550号住居跡
 第550号住居跡カマド
 図版29 第552号住居跡
 第553号住居跡
 第554号住居跡
 第555号住居跡
 第556号住居跡
 第557号住居跡
 第558・559・560・561・562・563・564・565号
 住居跡
 第558・559・560・561・562・563・564・565号
 住居跡
 図版30 第566号住居跡
 第566号住居跡住居内土壙遺物出土状況
 第567・568号住居跡
 第569号住居跡
 第573・579号住居跡
 第575号住居跡

	第576号住居跡		第553号土壙
	第577号住居跡		第563号土壙遺物出土状況
図版31	第577号住居跡		第566号土壙
	第578号住居跡		第146号井戸跡
	第578号住居跡		第147号井戸跡
	第63号掘立柱建物跡ピット21	図版36	第147号井戸跡曲物出土状況
	第63号掘立柱建物跡ピット22		第147号井戸跡曲物出土状況
	第99号掘立柱建物跡		第154号井戸跡
	第100号掘立柱建物跡		第167号井戸跡
	第101号掘立柱建物跡		第170号井戸跡
図版32	第102号掘立柱建物跡		第172号井戸跡
	第103号掘立柱建物跡		第175号井戸跡
	第105号掘立柱建物跡		第176号井戸跡
	第106号掘立柱建物跡	図版37	第177号井戸跡
	第107号掘立柱建物跡		第178号井戸跡
	第107・108・109・111号掘立柱建物跡		第178号井戸跡
	第108・109号掘立柱建物跡		第180号井戸跡
	第110号掘立柱建物跡		第191号井戸跡
図版33	第111号掘立柱建物跡		第200号井戸跡
	第112号掘立柱建物跡		第201号井戸跡
	第113号掘立柱建物跡		第202号井戸跡
	第114号掘立柱建物跡	図版38	第203号井戸跡・第457号土壙
	第116号掘立柱建物跡		第207号井戸跡
	第116号掘立柱建物跡		第208号井戸跡
	第117号掘立柱建物跡		第209・210号井戸跡
	第119号掘立柱建物跡		第211号井戸跡
図版34	第119号掘立柱建物跡		第212号井戸跡
	第120号掘立柱建物跡		第213号井戸跡
	第121号掘立柱建物跡		第216号井戸跡
	第122号掘立柱建物跡	図版39	第217号井戸跡
	第123号掘立柱建物跡		第218号井戸跡
	第126号掘立柱建物跡		第219号井戸跡
	第126号掘立柱建物跡ピット1		第220号井戸跡
	第436号土壙遺物出土状況		第220号井戸跡遺物出土状況
図版35	第442号土壙遺物出土状況		第221号井戸跡
	第442号土壙遺物出土状況		第222号井戸跡
	第477号土壙		第222号井戸跡遺物出土状況

図版40	第223号井戸跡	第15号性格不明遺構
	第224号井戸跡	第15号性格不明遺構
	第225号井戸跡	第16号性格不明遺構
	第226号井戸跡	図版45 第337号住居跡出土遺物
	第227号井戸跡	第351号住居跡出土遺物
	第228号井戸跡	第354号住居跡出土遺物
	第230号井戸跡	第355号住居跡出土遺物
	第231号井戸跡	図版46 第356号住居跡出土遺物
図版41	第232号井戸跡	第365号住居跡出土遺物
	第233号井戸跡	図版47 第365号住居跡出土遺物
	第236号井戸跡	第366号住居跡出土遺物
	第237号井戸跡	図版48 第366号住居跡出土遺物
	第238号井戸跡	第367号住居跡出土遺物
	第239号井戸跡	第370号住居跡出土遺物
	第240号井戸跡	第371号住居跡出土遺物
	第241号井戸跡	第378号住居跡出土遺物
図版42	第242号井戸跡	図版49 第378号住居跡出土遺物
	第243号井戸跡	第382号住居跡出土遺物
	第245号井戸跡	第383号住居跡出土遺物
	第248号井戸跡	図版50 第385号住居跡出土遺物
	第250号井戸跡	第386号住居跡出土遺物
	第261・262号井戸跡	図版51 第386号住居跡出土遺物
	第77号溝跡	第387号住居跡出土遺物
	第106号溝跡	図版52 第387号住居跡出土遺物
図版43	第106号溝跡	第399号住居跡出土遺物
	第110号溝跡	第400号住居跡出土遺物
	第117号溝跡遺物出土状況	第410号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	第412号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	図版53 第412号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	第418号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	図版54 第418号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	第421号住居跡出土遺物
図版44	第1号土器焼成窯跡	第425号住居跡出土遺物
	第1110号ピット	第427号住居跡出土遺物
	第1110号ピット遺物出土状況	図版55 第429号住居跡出土遺物
	第1121号ピット	第431号住居跡出土遺物
	第14号性格不明遺構	第436号住居跡出土遺物

図版40	第223号井戸跡	第15号性格不明遺構
	第224号井戸跡	第15号性格不明遺構
	第225号井戸跡	第16号性格不明遺構
	第226号井戸跡	図版45 第337号住居跡出土遺物
	第227号井戸跡	第351号住居跡出土遺物
	第228号井戸跡	第354号住居跡出土遺物
	第230号井戸跡	第355号住居跡出土遺物
	第231号井戸跡	図版46 第356号住居跡出土遺物
図版41	第232号井戸跡	第365号住居跡出土遺物
	第233号井戸跡	図版47 第365号住居跡出土遺物
	第236号井戸跡	第366号住居跡出土遺物
	第237号井戸跡	図版48 第366号住居跡出土遺物
	第238号井戸跡	第367号住居跡出土遺物
	第239号井戸跡	第370号住居跡出土遺物
	第240号井戸跡	第371号住居跡出土遺物
	第241号井戸跡	第378号住居跡出土遺物
図版42	第242号井戸跡	図版49 第378号住居跡出土遺物
	第243号井戸跡	第382号住居跡出土遺物
	第245号井戸跡	第383号住居跡出土遺物
	第248号井戸跡	図版50 第385号住居跡出土遺物
	第250号井戸跡	第386号住居跡出土遺物
	第261・262号井戸跡	図版51 第386号住居跡出土遺物
	第77号溝跡	第387号住居跡出土遺物
	第106号溝跡	図版52 第387号住居跡出土遺物
図版43	第106号溝跡	第399号住居跡出土遺物
	第110号溝跡	第400号住居跡出土遺物
	第117号溝跡遺物出土状況	第410号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	第412号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	図版53 第412号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	第418号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	図版54 第418号住居跡出土遺物
	第1号土器焼成窯跡	第421号住居跡出土遺物
図版44	第1号土器焼成窯跡	第425号住居跡出土遺物
	第1110号ピット	第427号住居跡出土遺物
	第1110号ピット遺物出土状況	図版55 第429号住居跡出土遺物
	第1121号ピット	第431号住居跡出土遺物
	第14号性格不明遺構	第436号住居跡出土遺物

	第441号住居跡出土遺物		第524号住居跡出土遺物
図版56	第441号住居跡出土遺物		第526号住居跡出土遺物
	第443号住居跡出土遺物		第532号住居跡出土遺物
	第445号住居跡出土遺物	図版66	第537号住居跡出土遺物
	第452号住居跡出土遺物		第543号住居跡出土遺物
図版57	第452号住居跡出土遺物		第545号住居跡出土遺物
	第454号住居跡出土遺物	図版67	第545号住居跡出土遺物
	第457号住居跡出土遺物		第549号住居跡出土遺物
図版58	第457号住居跡出土遺物		第552号住居跡出土遺物
	第458号住居跡出土遺物	図版68	第553号住居跡出土遺物
	第460号住居跡出土遺物		第554号住居跡出土遺物
	第461号住居跡出土遺物	図版69	第554号住居跡出土遺物
図版59	第461号住居跡出土遺物		第557号住居跡出土遺物
図版60	第461号住居跡出土遺物	図版70	第557号住居跡出土遺物
	第466号住居跡出土遺物		第558号住居跡出土遺物
	第467号住居跡出土遺物		第560号住居跡出土遺物
	第469号住居跡出土遺物		第567号住居跡出土遺物
図版61	第469号住居跡出土遺物		第436号土壙出土遺物
	第470号住居跡出土遺物		第442号土壙出土遺物
	第471号住居跡出土遺物	図版71	第442号土壙出土遺物
図版62	第471号住居跡出土遺物		第455号土壙出土遺物
	第472号住居跡出土遺物		第489号土壙出土遺物
	第473・474号住居跡出土遺物		第543号土壙出土遺物
	第476号住居跡出土遺物		第565号土壙出土遺物
	第477号住居跡出土遺物	図版72	第149号井戸跡出土遺物
	第485号住居跡出土遺物		第253号井戸跡出土遺物
図版63	第485号住居跡出土遺物		第254号井戸跡出土遺物
	第488号住居跡出土遺物		第77号溝跡出土遺物
	第491号住居跡出土遺物		第123号溝跡出土遺物
	第499号住居跡出土遺物		第654号ピット出土遺物
図版64	第501号住居跡出土遺物		第14号性格不明遺構出土遺物
	第506号住居跡出土遺物		第16号性格不明遺構出土遺物
	第507号住居跡出土遺物	図版73	第16号性格不明遺構出土遺物
	第508号住居跡出土遺物		グリッド出土遺物
図版65	第508号住居跡出土遺物		第1号土器焼成窯跡出土遺物
	第514号住居跡出土遺物	図版74	第1号土器焼成窯跡出土遺物
	第518号住居跡出土遺物	図版75	第60号溝跡出土遺物

- 図版76 第60号溝跡出土遺物
 図版77 第60号溝跡出土遺物
 図版78 第351号住居跡出土遺物
 第355号住居跡出土遺物
 第358号住居跡出土遺物
 第365号住居跡出土遺物
 図版79 第365号住居跡出土遺物
 第366号住居跡出土遺物
 第370号住居跡出土遺物
 第372号住居跡出土遺物
 図版80 第377号住居跡出土遺物
 第381号住居跡出土遺物
 第383号住居跡出土遺物
 第385号住居跡出土遺物
 図版81 第385号住居跡出土遺物
 第386号住居跡出土遺物
 図版82 第386号住居跡出土遺物
 第387号住居跡出土遺物
 第388号住居跡出土遺物
 第389号住居跡出土遺物
 図版83 第404号住居跡出土遺物
 第412号住居跡出土遺物
 第414号住居跡出土遺物
 第415号住居跡出土遺物
 第418号住居跡出土遺物
 図版84 第429号住居跡出土遺物
 第431号住居跡出土遺物
 第441号住居跡出土遺物
 第452号住居跡出土遺物
 図版85 第454号住居跡出土遺物
 第457号住居跡出土遺物
 第458号住居跡出土遺物
 第461号住居跡出土遺物
 図版86 第461号住居跡出土遺物
 第465号住居跡出土遺物
 第470号住居跡出土遺物
 第471号住居跡出土遺物
 図版87 第471号住居跡出土遺物
 第472号住居跡出土遺物
 第473・474号住居跡出土遺物
 第477号住居跡出土遺物
 図版88 第485号住居跡出土遺物
 第488号住居跡出土遺物
 第524号住居跡出土遺物
 第534号住居跡出土遺物
 第537号住居跡出土遺物
 図版89 第537号住居跡出土遺物
 第541号住居跡出土遺物
 第549号住居跡出土遺物
 第557号住居跡出土遺物
 第566号住居跡出土遺物
 図版90 第567号住居跡出土遺物
 第584号土壇出土遺物
 第209号井戸跡出土遺物
 グリッド出土遺物
 図版91 第337号住居跡出土遺物
 第351号住居跡出土遺物
 図版92 第356号住居跡出土遺物
 第358号住居跡出土遺物
 第362号住居跡出土遺物
 第366号住居跡出土遺物
 図版93 第366号住居跡出土遺物
 第370号住居跡出土遺物
 第371号住居跡出土遺物
 図版94 第377号住居跡出土遺物
 第378号住居跡出土遺物
 第387号住居跡出土遺物
 第389号住居跡出土遺物
 図版95 第399号住居跡出土遺物
 第412号住居跡出土遺物
 図版96 第414号住居跡出土遺物
 第418号住居跡出土遺物
 図版97 第418号住居跡出土遺物
 第421号住居跡出土遺物

- | | | | |
|-------|--|-------|---|
| 図版98 | 第421号住居跡出土遺物
第441号住居跡出土遺物 | 図版109 | 第549号住居跡出土遺物
第553号住居跡出土遺物
第554号住居跡出土遺物
第556号住居跡出土遺物 |
| 図版99 | 第441号住居跡出土遺物
第443号住居跡出土遺物
第445号住居跡出土遺物 | 図版110 | 第556号住居跡出土遺物
第557号住居跡出土遺物 |
| 図版100 | 第452号住居跡出土遺物
第454号住居跡出土遺物
第458号住居跡出土遺物 | 図版111 | 第566号住居跡出土遺物
第567号住居跡出土遺物
第101号掘立柱建物跡出土遺物
第210号井戸跡出土遺物 |
| 図版101 | 第461号住居跡出土遺物
第462号住居跡出土遺物
第469号住居跡出土遺物 | 図版112 | 第222号井戸跡出土遺物
第117号溝跡出土遺物
第926号ピット出土遺物
第1110号ピット出土遺物 |
| 図版102 | 第469号住居跡出土遺物
第472号住居跡出土遺物 | 図版113 | 第147号井戸跡出土曲物 |
| 図版103 | 第472号住居跡出土遺物 | 図版114 | 第147号井戸跡出土曲物
調査区内出土縄文土器 |
| 図版104 | 第472号住居跡出土遺物
第476号住居跡出土遺物 | 図版115 | 調査区内出土石器・石製品
調査区内出土片岩製品 |
| 図版105 | 第477号住居跡出土遺物
第479号住居跡出土遺物
第485号住居跡出土遺物 | 図版116 | 調査区内出土片岩製品
調査区内出土砥石 |
| 図版106 | 第485号住居跡出土遺物
第501号住居跡出土遺物
第506号住居跡出土遺物 | 図版117 | 調査区内出土紡錘車 |
| 図版107 | 第507号住居跡出土遺物
第524号住居跡出土遺物
第526号住居跡出土遺物
第539号住居跡出土遺物 | 図版118 | 調査区内出土玉類
調査区内出土滑石製臼玉 |
| 図版108 | 第541号住居跡出土遺物
第543号住居跡出土遺物
第549号住居跡出土遺物 | 図版119 | 調査区内出土土玉・土錘
調査区内出土滑石製模造品 |
| | | 図版120 | 調査区内出土ミニチュア・手捏ね土器 |
| | | 図版121 | 鉄製品 |

付 図

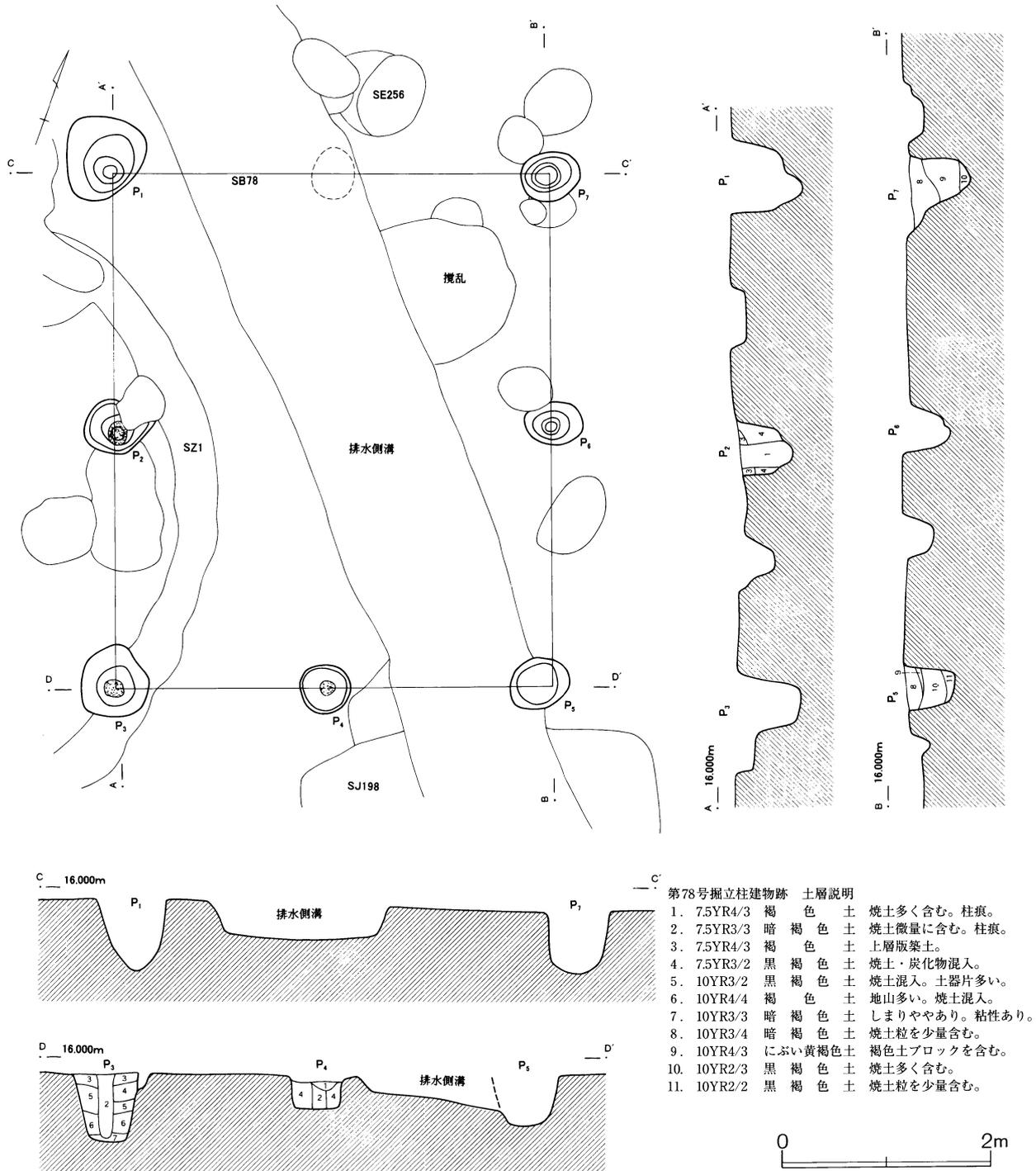
築道下遺跡全測図

2. 掘立柱建物跡

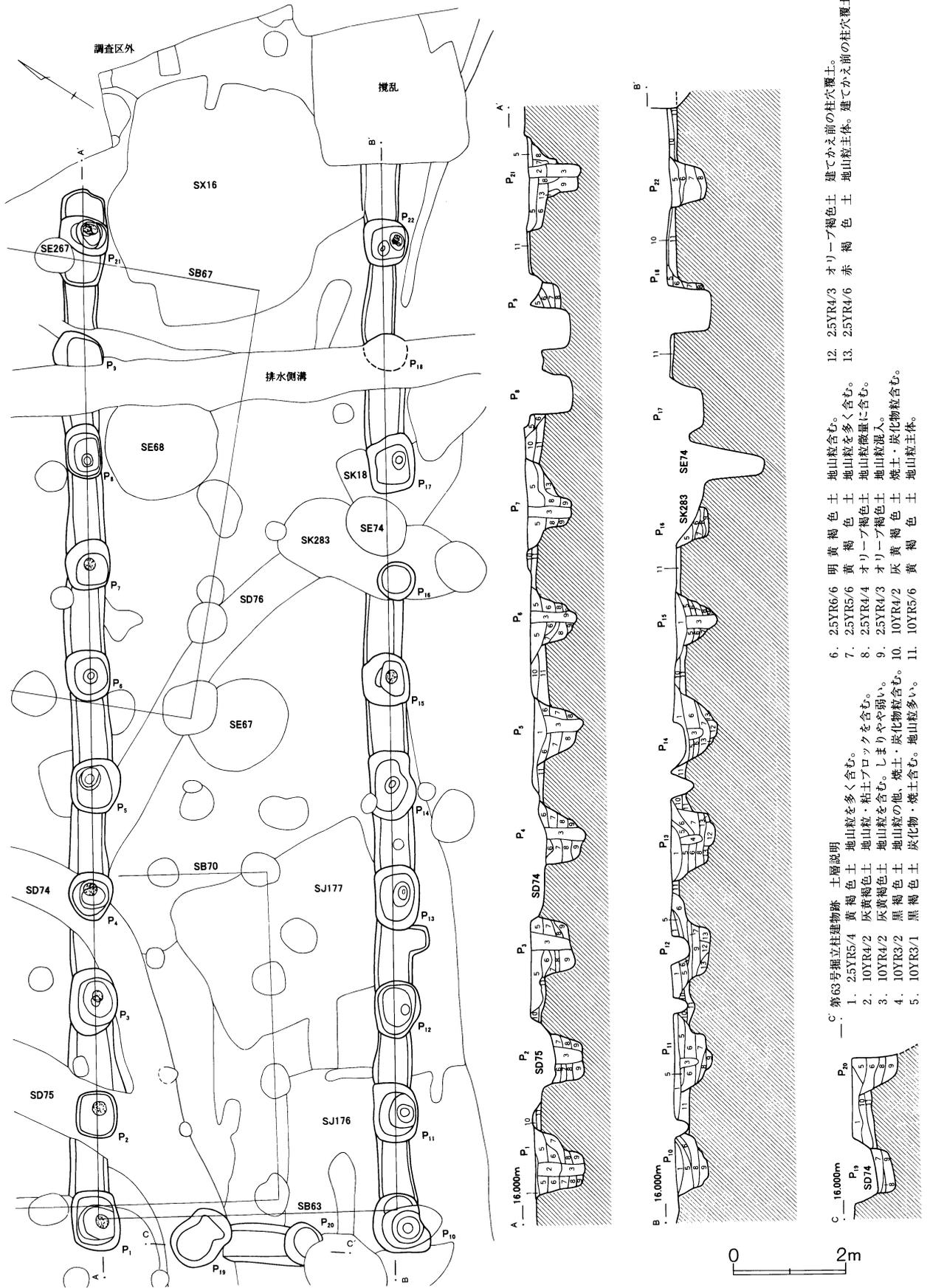
本書における報告対象は、第99～126号掘立柱建物跡までの28棟である。但し、住居跡と同様、C区北辺部で調査区の拡張があったため、『築道下遺跡Ⅱ』（1998）で報告済みの第63・78・80号掘立柱建物跡の3

棟についても、新規検出分を補って再録する。建物跡の規模や形状などは、『築道下遺跡Ⅱ』の記載と異なる部分が生じたが、3棟については、本書をその改訂版とご承知頂きたい。

第321図 第78号掘立柱建物跡

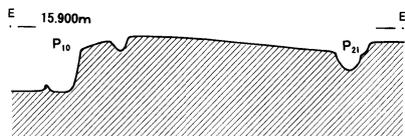
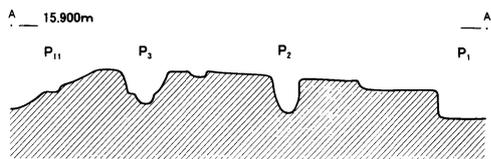
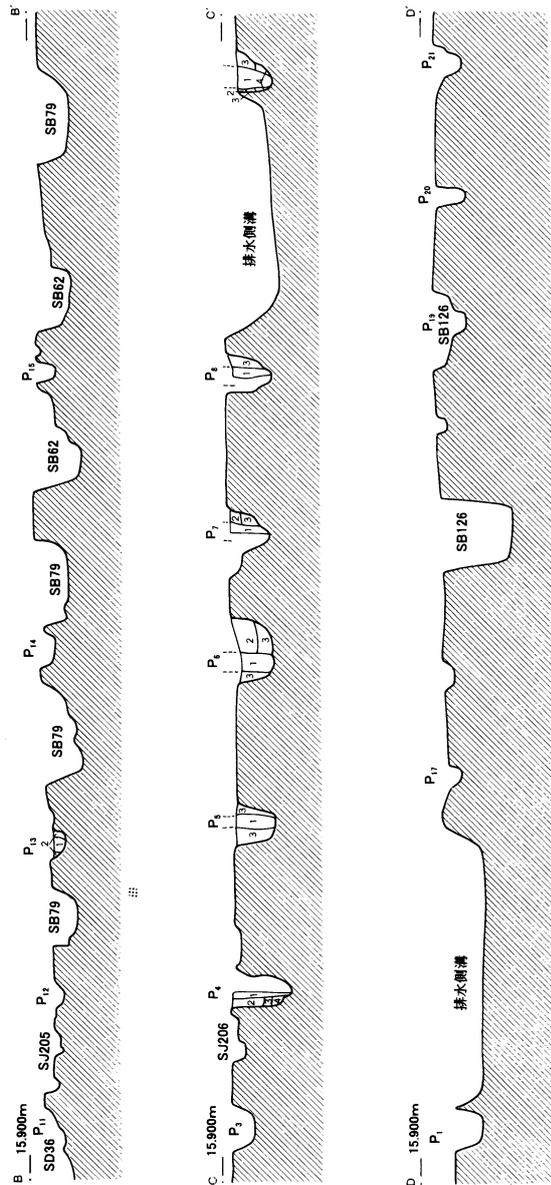
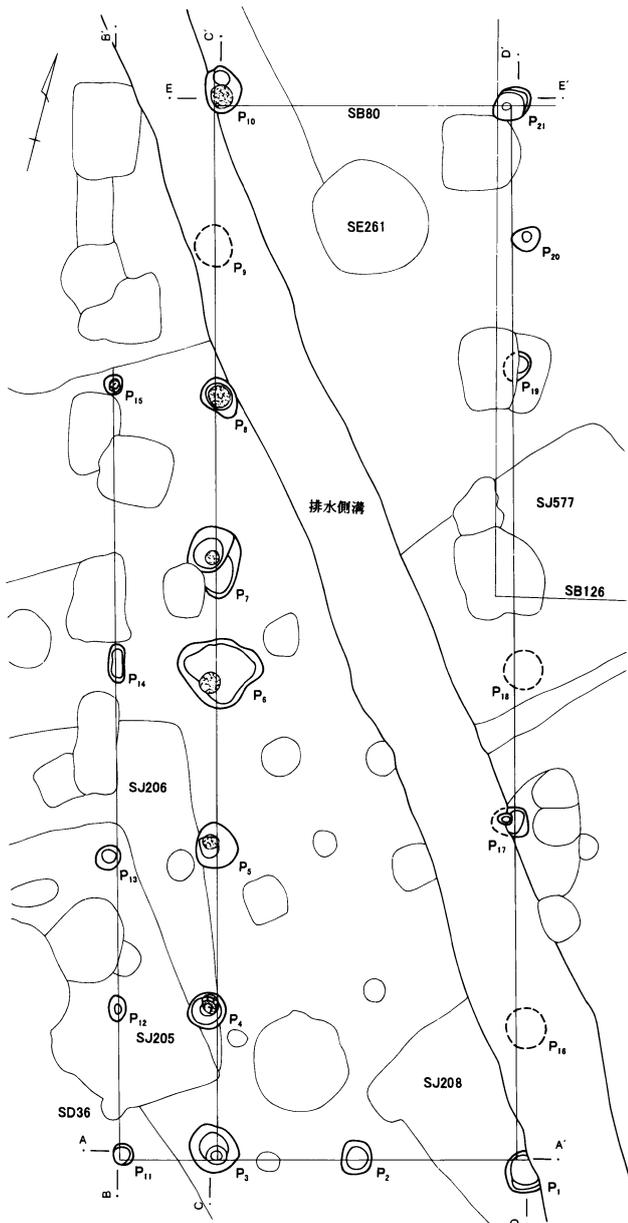


第322図 第63号掘立柱建物跡



- C: 第63号掘立柱建物跡 土層説明
1. 25YR5/4 黄褐色土 地山粒を多く含む。
 2. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・粘土ブロックを含む。
 3. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒を含む。しまりやや弱い。
 4. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒の他、焼土・炭化物粒を含む。
 5. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物・焼土含む。地山粒多い。
 6. 25YR6/6 明黄褐色土 地山粒含む。
 7. 25YR5/6 黄褐色土 地山粒を多く含む。
 8. 25YR4/4 オリーブ褐色土 地山粒微量を含む。
 9. 25YR4/3 オリーブ褐色土 地山粒混入。
 10. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土・炭化物粒含む。
 11. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒主体。
 12. 25YR4/3 オリーブ褐色土 建てかえ前の柱穴覆土。
 13. 25YR4/6 赤褐色土 地山粒主体、建てかえ前の柱穴覆土。

第323図 第80号掘立柱建物跡

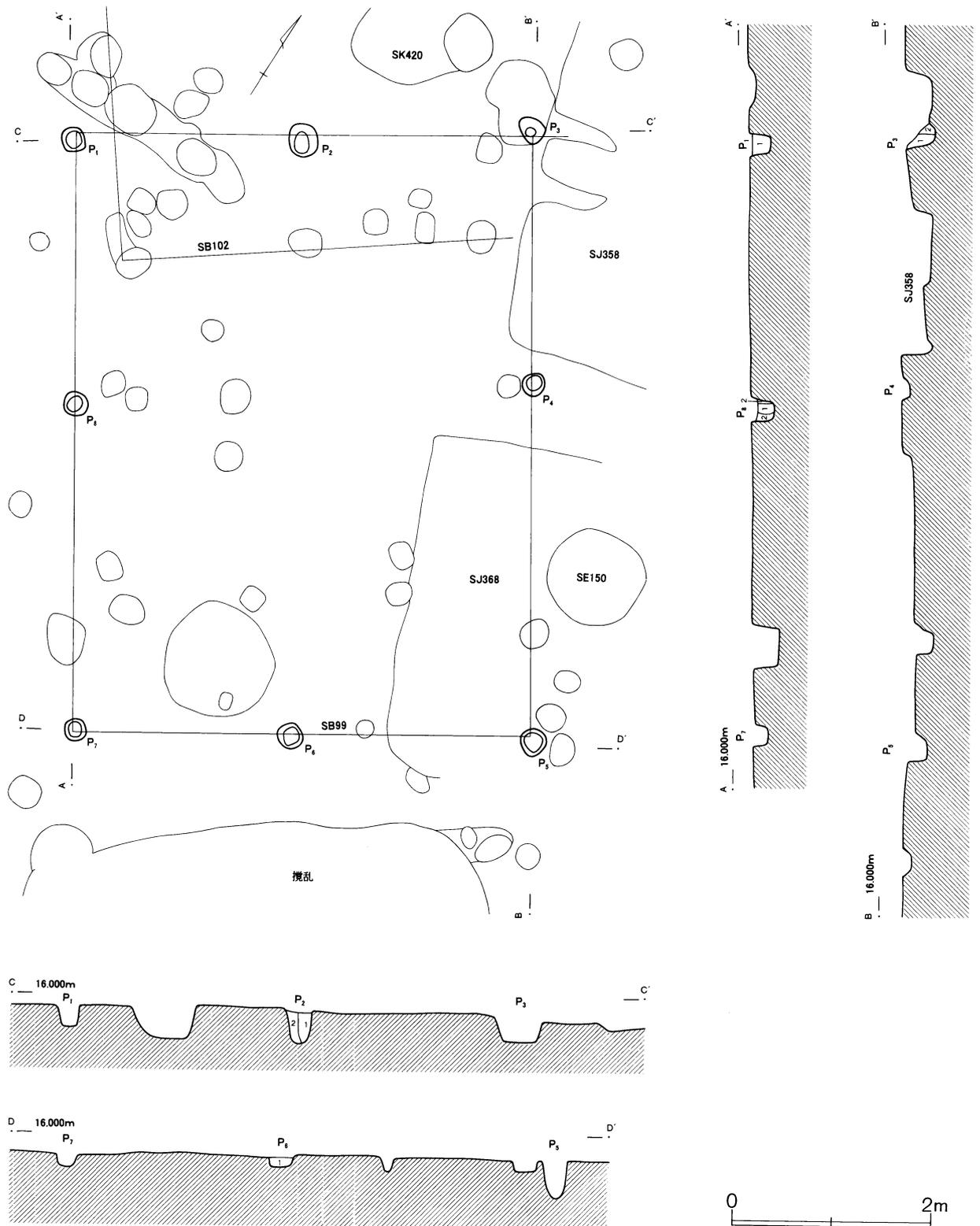


第80号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 砂質地山を多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 砂質地山を多く含む。
3. 10YR4/6 褐色土 砂質地山を含む他、焼土粒を含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 砂質地山粒を多く含む。



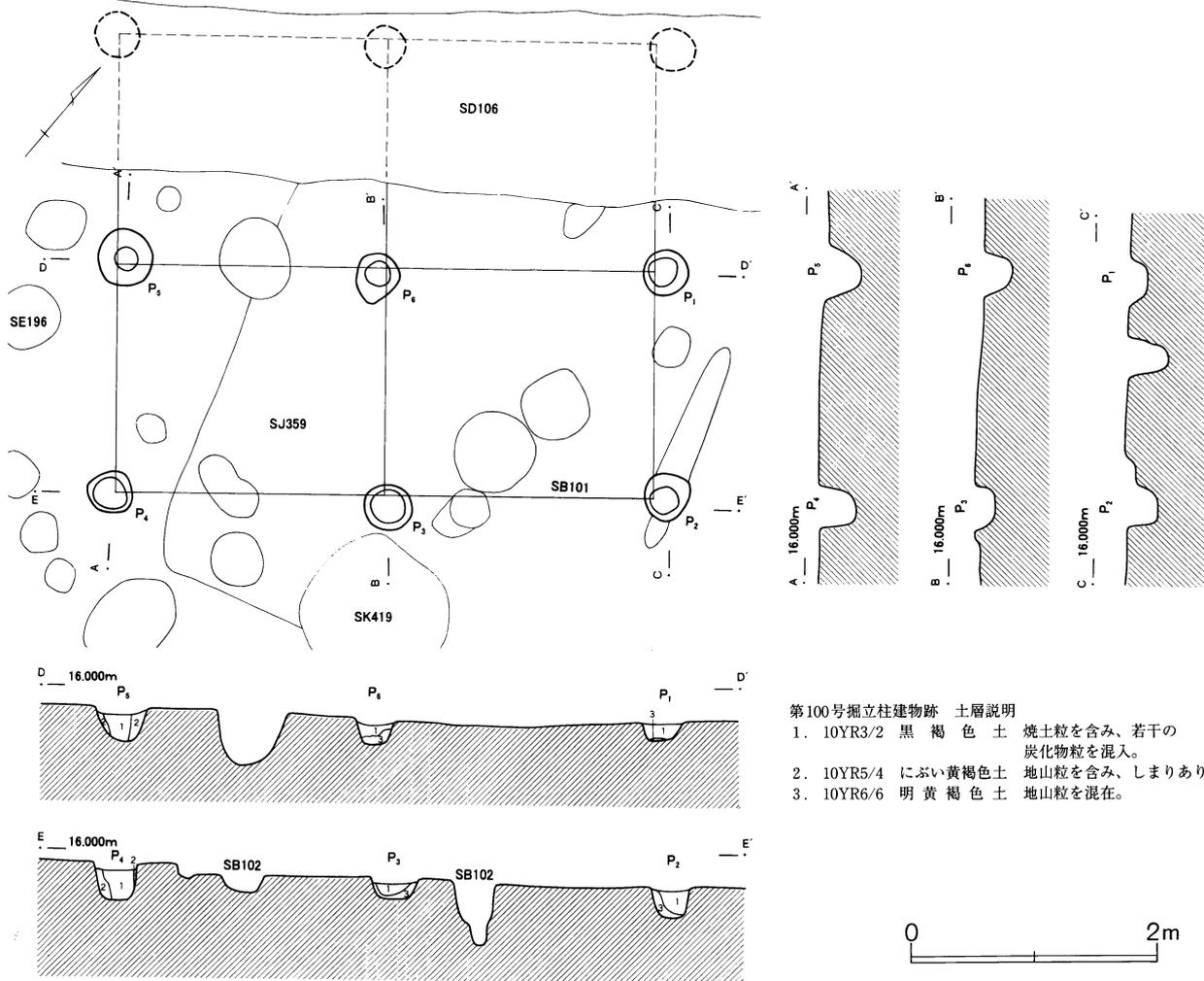
第324図 第99号掘立柱建物跡



第99号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒を含み、しまりやや弱い。
2. 10YR4/4 褐色土 地山粒・ブロックを含む。

第325図 第100号掘立柱建物跡



第100号掘立柱建物跡 土層説明
 1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒を含み、若干の炭化物粒を混入。
 2. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒を含み、しまりあり。
 3. 10YR6/6 明黄褐色土 地山粒を混在。

掘立柱建物跡の分布は北西部に濃密で、南東のF区寄りでは希薄となる。柱穴を含めた建物の規模にしても、前者が大型であるのに対し、後者は小型である。

遺物の出土がほとんど見られず、構築時期を明らかとすることはむずかしいが、多くは古代のものと思われる。中世の掘立柱建物跡が存在する可能性は否定しきれないものの、規模や分布から分別することは困難である。

建物跡は桁行・梁行ともに2～3間で、側柱のものが大半である。なかには、第63号掘立柱建物跡のように、桁行が10間以上となる大型のものや、総柱の建物跡も数棟見られる。

建物跡の方向は自然堤防の方向に一致しているようで、相対的な統一性は窺えない。但し、大型の建物に

はある程度の規則的な配置があったようで、遺跡全体として見れば、いくつかのブロックに分けられるようである(栗岡 潤 5. 古代の掘立柱建物跡について『築道下遺跡Ⅱ』P624～634参照)。

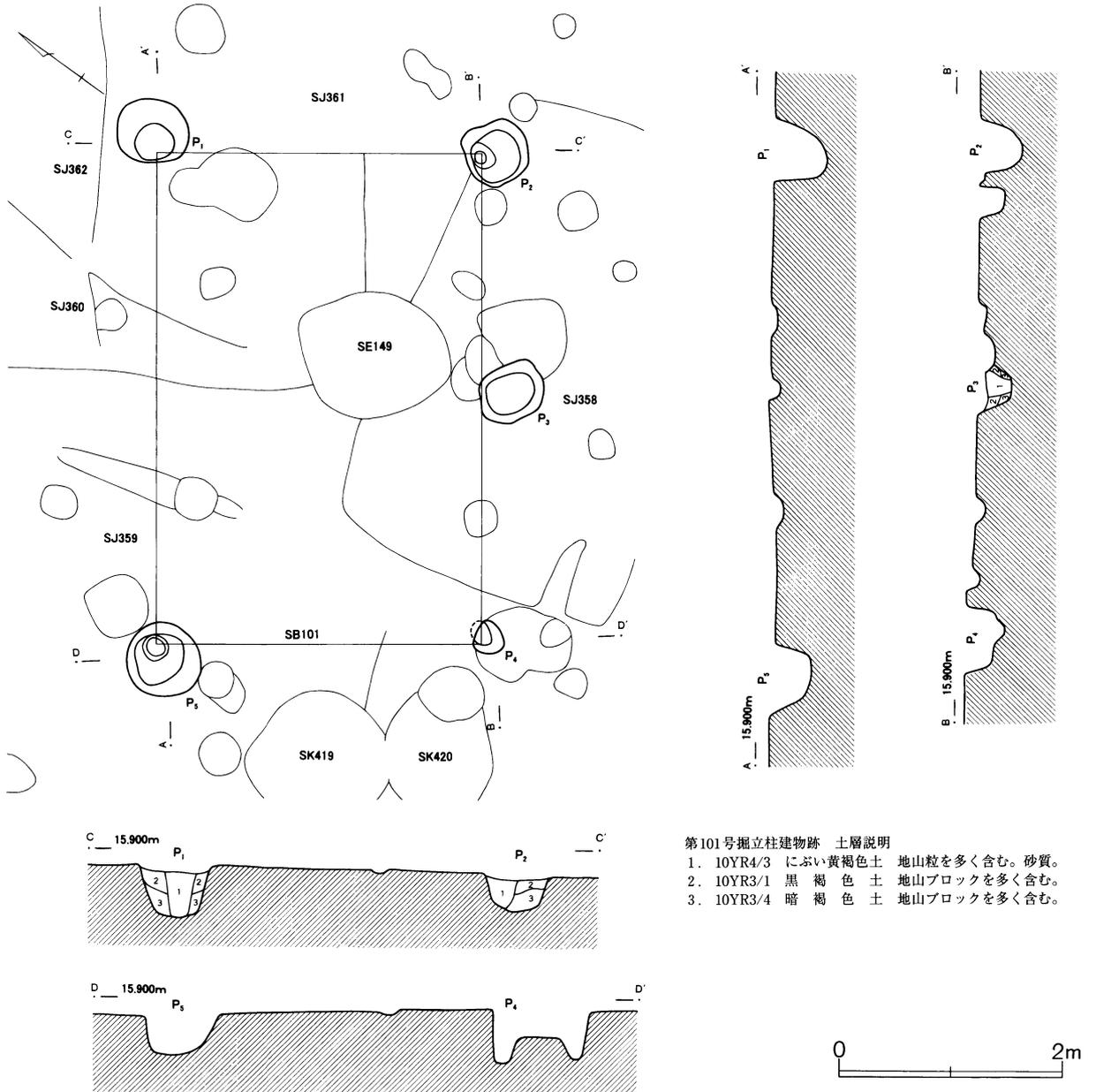
なお、柱穴が等間隔に連続しながらも、掘立柱建物跡と認定できなかったものについては、「柵列跡」として別項を設け掲載した。

第63号掘立柱建物跡 (第6・7・322図)

W-17・18、X-16～18、Y-17グリッドに位置する。既に『築道下遺跡Ⅱ』で報告を行なっているが、調査区の拡張に伴い、さらにその東側を検出したため、ここにこれを補って再録する。規模などの各数値については、これを訂正されたい。

今回の検出は2間分で、その東側は攪乱坑や第16号

第326図 第101号掘立柱建物跡



性格不明遺構に切られる。このため、建物跡の東端は検出できなかったが、桁方向はさらに東の調査区外へ延びるものと思われる。

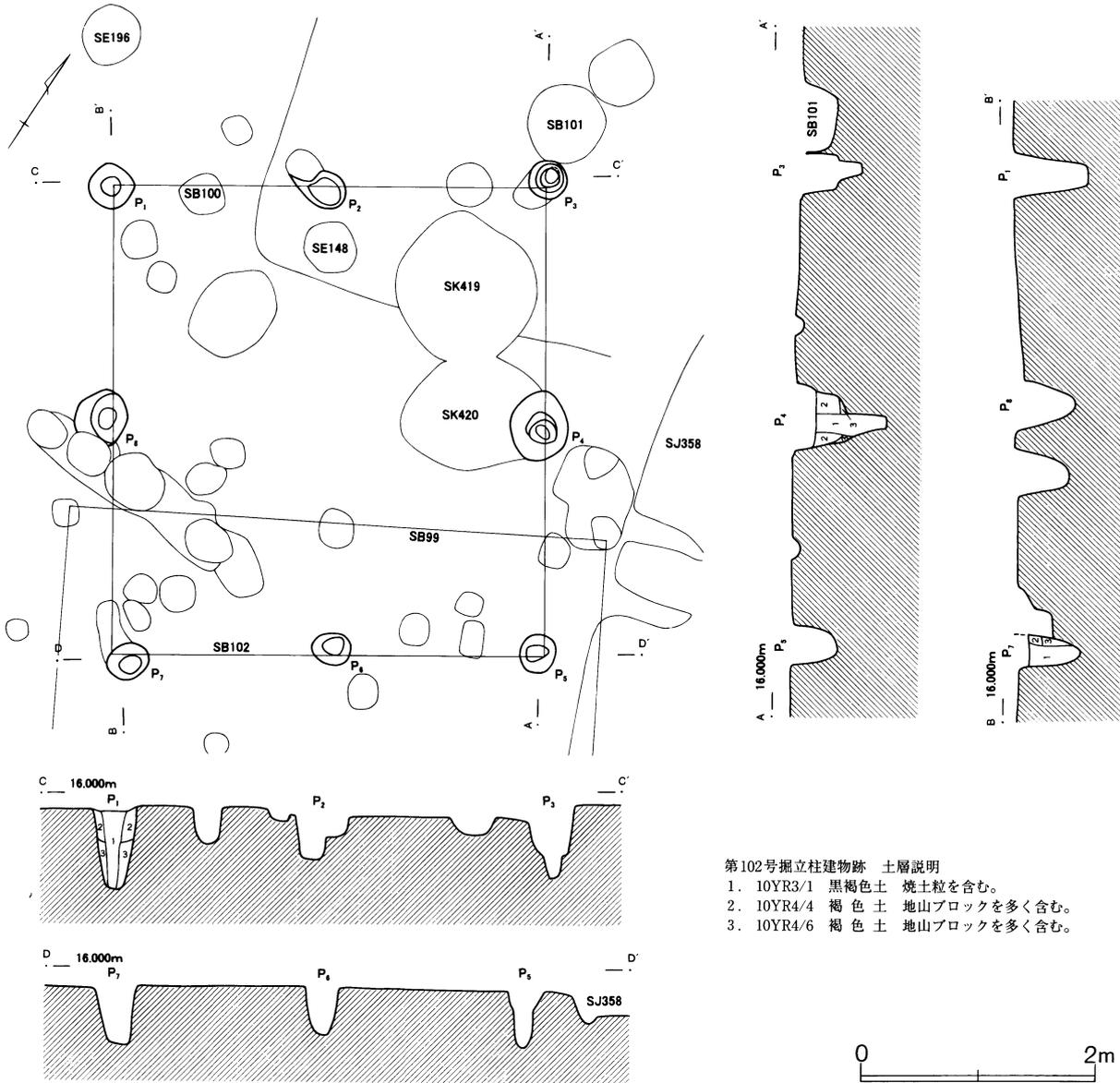
全体は10間以上×3間の長大な側柱建物(東西棟)で、桁行19.70m以上、梁行5.40mで、面積は106.38㎡以上となる。柱間の寸法は桁行が1.95m、梁行が1.80mを測り、主軸方向はおよそN-59°-Eを指す。

柱穴は溝で連結されており、径58~172cm、深さ48~95cmを測る。全体は丸みを持った箱型の土壇状で、

底面に円形の小穴が掘り込まれる。P₁~P₇・P₁₁~P₁₅・P₂₁で観察された柱痕は、その小穴部に対応している。

溝は幅約80cm、深さ約40cmで、覆土は人為的に埋め戻されている。柱穴はこの覆土を切って掘り込まれており、工法上に矛盾を生じている。しかし、柱穴の一部には柱痕の重複するものがあることから、溝と柱穴は時期の異なるものと捉えることができる。すなわち、溝は先行する建物の構築に伴うもので、柱穴はそ

第327図 第102号掘立柱建物跡



の後の建て替えに際し、掘りなおされたものということである。

遺物はP₂₂の充填土より、土師器の高坏や坏・甕が少量出土している。いずれも細かい破片で、図示し得たものはわずかである。

第78号掘立柱建物跡 (第7・321図)

Y-19グリッドに位置する。これも既に報告を行なっているが、新たに東側を検出したため、これを補って再録する。建物跡の形状や各数値などについて、前書と異なる部分は、これを訂正されたい。

遺構は2間×2間の側柱建物であるが、北辺中央の

柱穴は排水側溝で切り取ってしまったらしく、まったく検出できなかった。

全体は桁行4.95m、梁行4.20mの南北棟で、面積は20.79㎡を測る。柱間は桁行2.50m、梁行2.16mで、主軸方向はほぼN-20°-Wを指す。

柱穴は径50~78cmの不整な円形が主体で、深さ26~70cmと統一性に欠ける。柱痕はP₂~P₄で観察された。『築道下遺跡Ⅱ』において、コーナー部の柱穴は本来「L」字形ではなかったか、と報告者は指摘したが、今回検出された部分には、そのような傾向は看取されなかった。

遺物の出土はわずかだが、土師器の甕や坏の破片が見出された。いずれも8世紀前半の遺物と考えられるが、微細であるため、図示することは叶わなかった。

第80号掘立柱建物跡 (第7・323図)

Z-20・AA-20グリッドに位置する。これも既に報告を行なっているが、新たに東側を検出したため、これを補って再録する。『築道下遺跡Ⅱ』に記された各計測値などは、これを訂正されたい。

第126号掘立柱建物跡、第577号住居跡を切って構築される。7間×2間の庇付きの側柱建物で、庇は西辺に付設されていた。全体は桁行14.00m、梁行4.20mの南北棟で、面積は58.80㎡を測る。柱間は平均すると桁行2.00m、梁行2.10mとはなるものの、一定していない。また、北辺の中央柱は検出されなかった。柱筋の通りも悪く、全体に不規則な印象を拭えない。身舎と庇との距離は1.30mで、主軸方向はおおよそN-17°-Wを指す。

柱穴は円形を基本とするが、径40~90cm、深さ20~80cmと一定しない。柱痕はP₄~P₈・P₁₀、庇のP₁₅で観察された。

今回、遺物の出土は見られなかった。

第99号掘立柱建物跡 (第9・324図)

AG-22グリッドを中心に位置する。第358・369号住居跡、第102号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。2間×2間の側柱建物(南北棟)で、規模は桁行6.05m、梁行4.65m、面積28.13㎡を測る。柱間は桁行が3.00m、梁行が2.32mであるが、P₄はやや北に寄っている。主軸方向はおおよそN-33°-Wを指す。

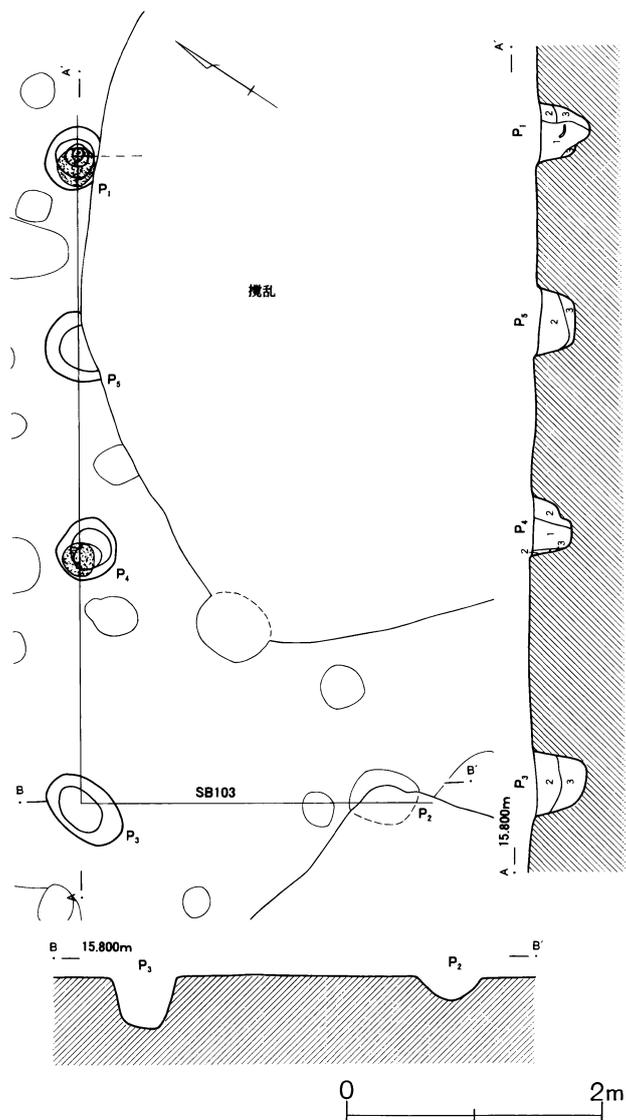
柱穴の配置は概ね整然となされている。掘り方は径21~24cmの円形で、深さ7~31cmを測る。柱痕は西辺のP₈で観察された。

遺物の出土は見られなかった。

第100号掘立柱建物跡 (第9・325図)

AF-22グリッドを中心に位置する。第359号住居跡、第106号溝跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。2間×2間の総柱建物と判断されるが、北

第328図 第103号掘立柱建物跡



第103号掘立柱建物跡 土層説明

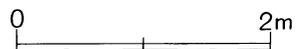
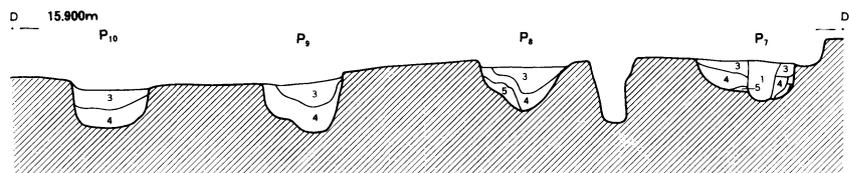
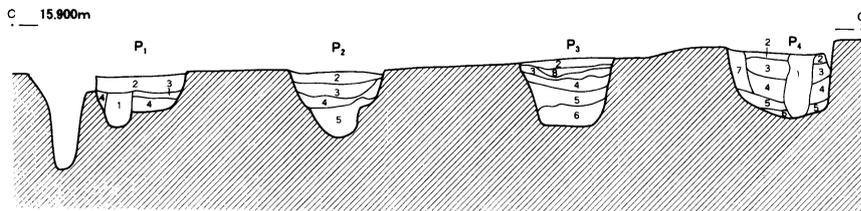
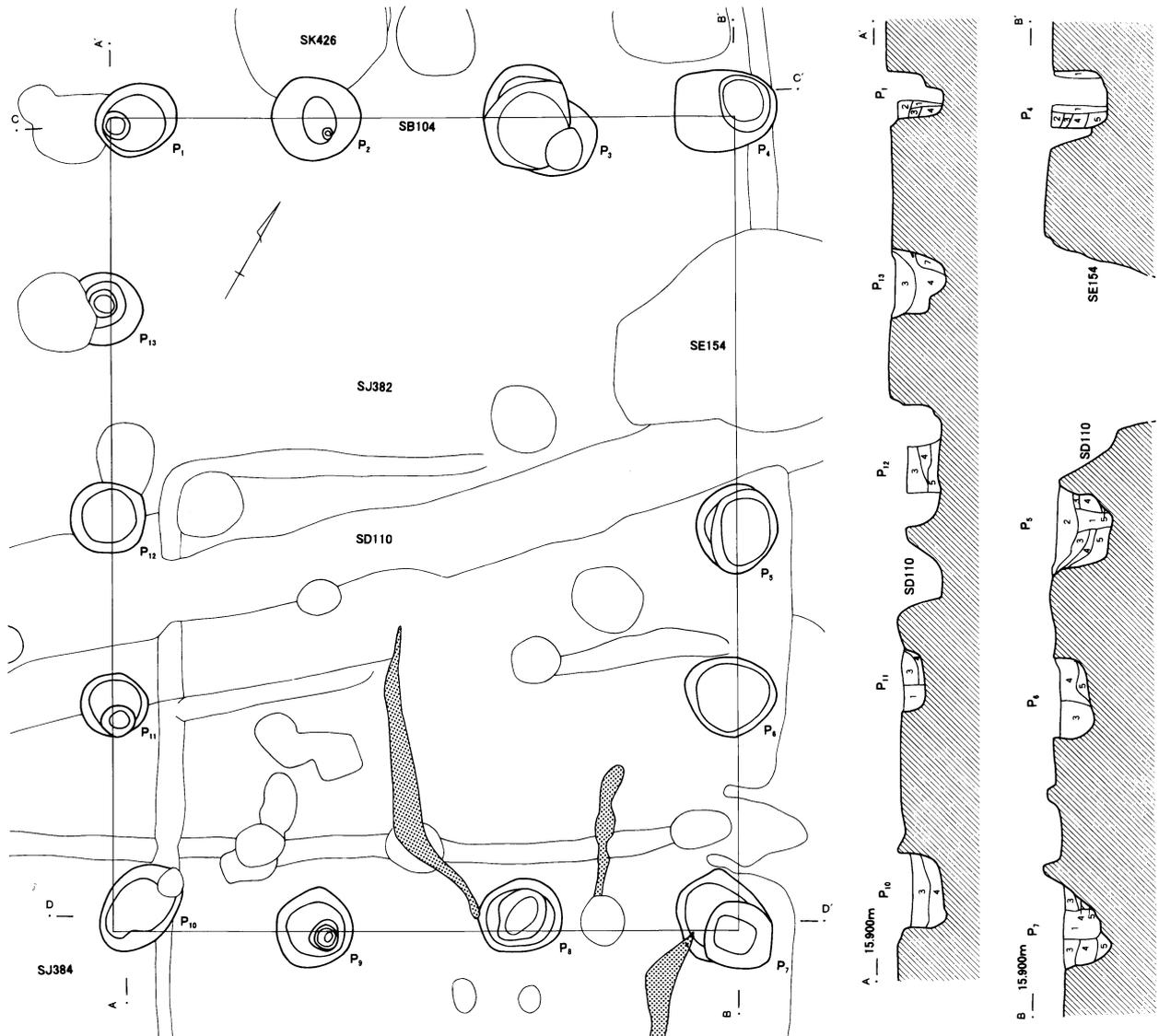
1. 10YR3/1 にぶい黄褐色土 焼土粒を含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を多く含む。
3. 10YR4/6 暗褐色土 地山・黒褐色土ブロック。

西側は第106号溝跡に切られている。全体の規模は桁行4.42m、想定される梁行約3.80mで、面積はおおよそ16.80㎡となる。柱間は桁行が2.20m、梁行が1.90mで、主軸方向はおおよそN-50°-Eを指す。

柱穴はすべて円形で、径は34~44cmとほぼ同様である。深さは14~31cmと一定しないが、隅部の柱穴が深く、中間の柱穴は浅い傾向が看取される。柱痕は西のP₄・P₅で観察された。

遺物はP₄より、甕や坏の小片が数点出土している。いずれも細片のため、図示するには至らなかった。

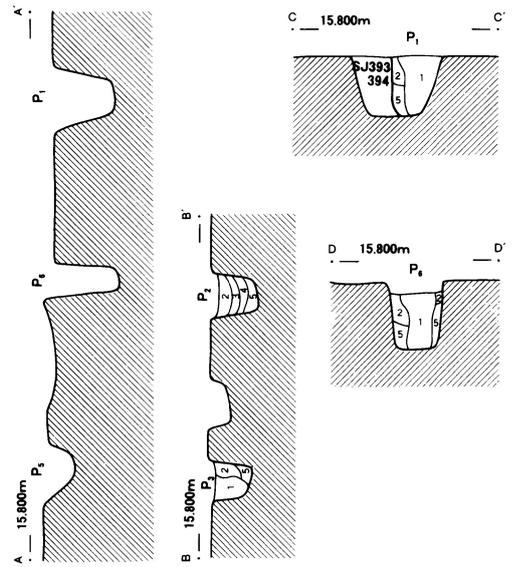
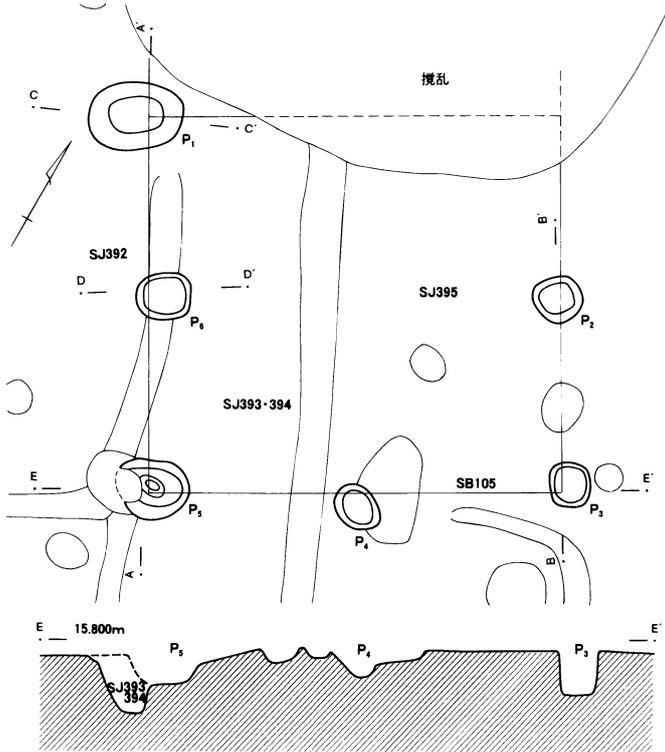
第329図 第104号掘立柱建物跡



第104号掘立柱建物跡 土層説明

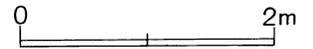
- | | |
|---------------------------------------|--------------------------------|
| 1. 10YR3/2 黒褐色土 微量の焼土粒の他、地山粒・ブロックを混入。 | 5. 10YR4/4 褐色土 地山粒やや多い。 |
| 2. 10YR4/4 褐色土 地山粒・ブロックを含む。しまりあり。 | 6. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山土を主体とする。 |
| 3. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロックを混在。 | 7. 10YR5/6 黄褐色土 焼土粒を多く含む。 |
| 4. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒を微量に含む。地山粒混入。 | 8. 10YR6/3 におい黄褐色土 砂質粘土粒を多く含む。 |

第330図 第105号掘立柱建物跡

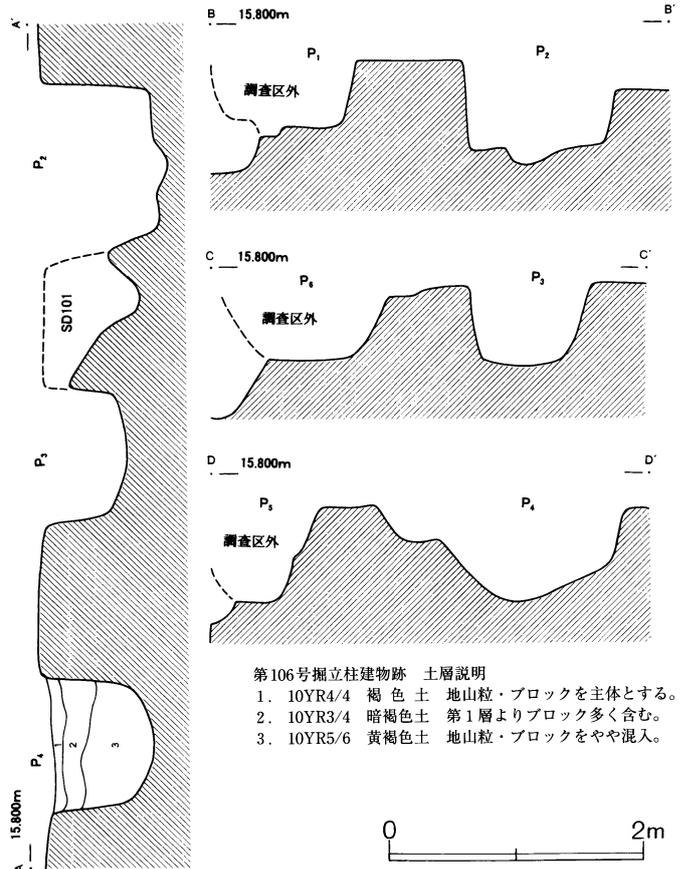
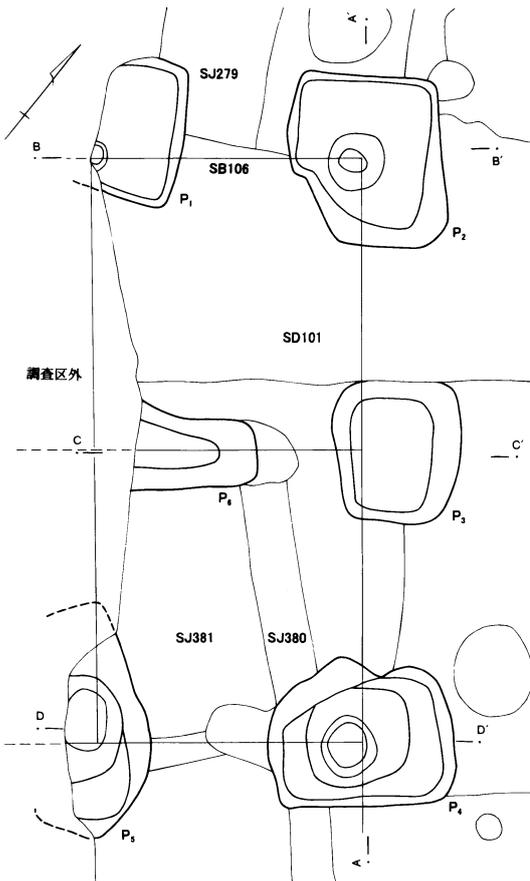


第105号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 黄地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒を含む。
4. 10YR4/4 褐色土 地山ブロックを多く含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・焼土粒を含む。



第331図 第106号掘立柱建物跡

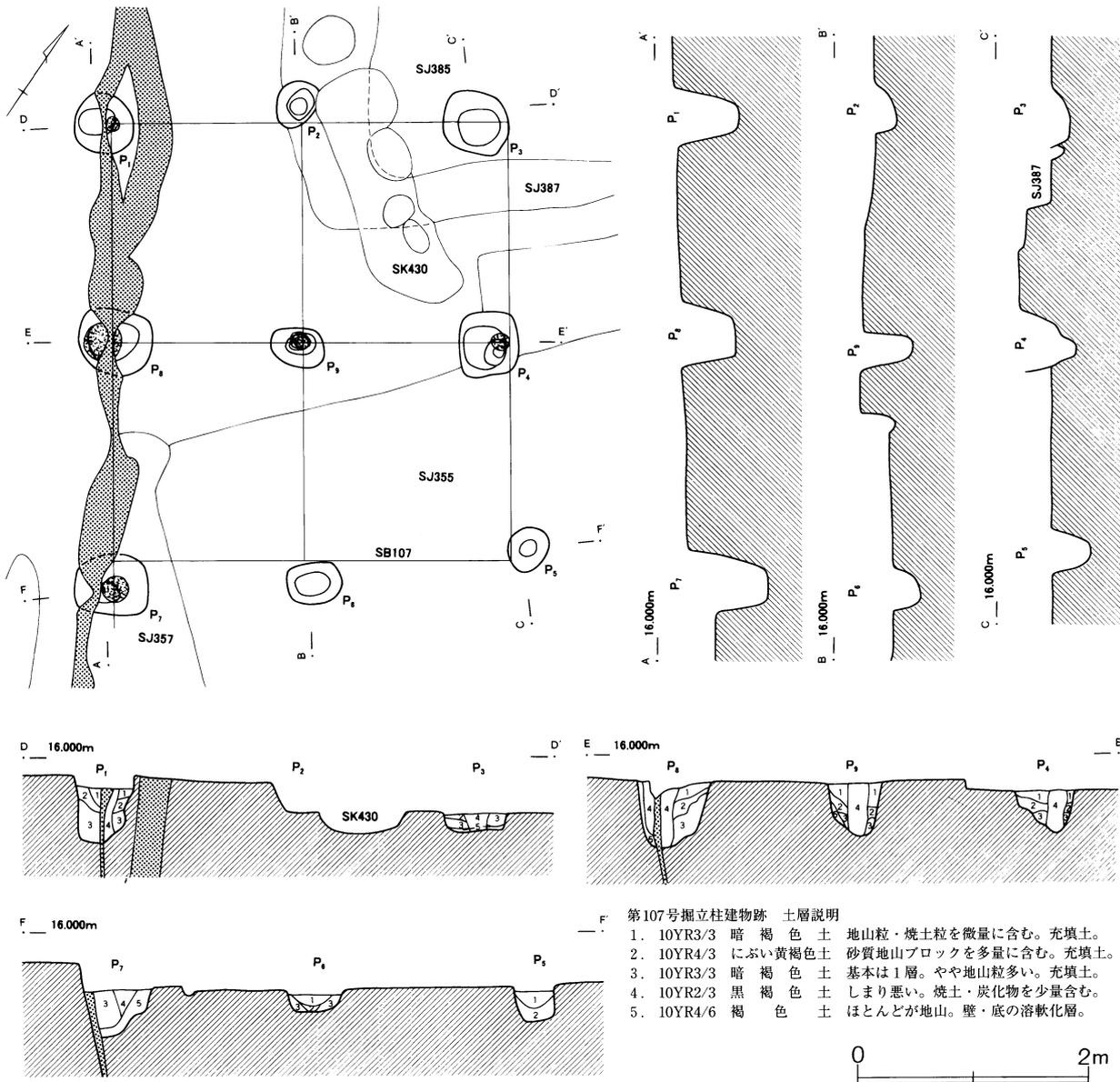


第106号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山粒・ブロックを主体とする。
2. 10YR3/4 暗褐色土 第1層よりブロック多く含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒・ブロックをやや混入。



第332図 第107号掘立柱建物跡



第101号掘立柱建物跡 (第9・326図)

A F-22グリッドを中心に位置する。第358・361号住居跡と重複するものの、新旧関係は確認できなかった。2間×1間の側柱建物であるが、北西辺の中央には柱穴が検出されなかった。規模は桁行4.42m、梁行2.92mで、面積は12.91㎡を測る。柱間は桁行が2.21mで、主軸方向はおよそN-53°-Eを指す。

柱穴は円形を基本とし、径21~65cm、深さ36~54cmを測る。同等規模(P4は土壌に切られているため、図上では小さくなっている。)の柱穴が整然と配置されているが、P3は柱筋よりやや外側へ出ている。柱痕は

P1~P3で観察された。

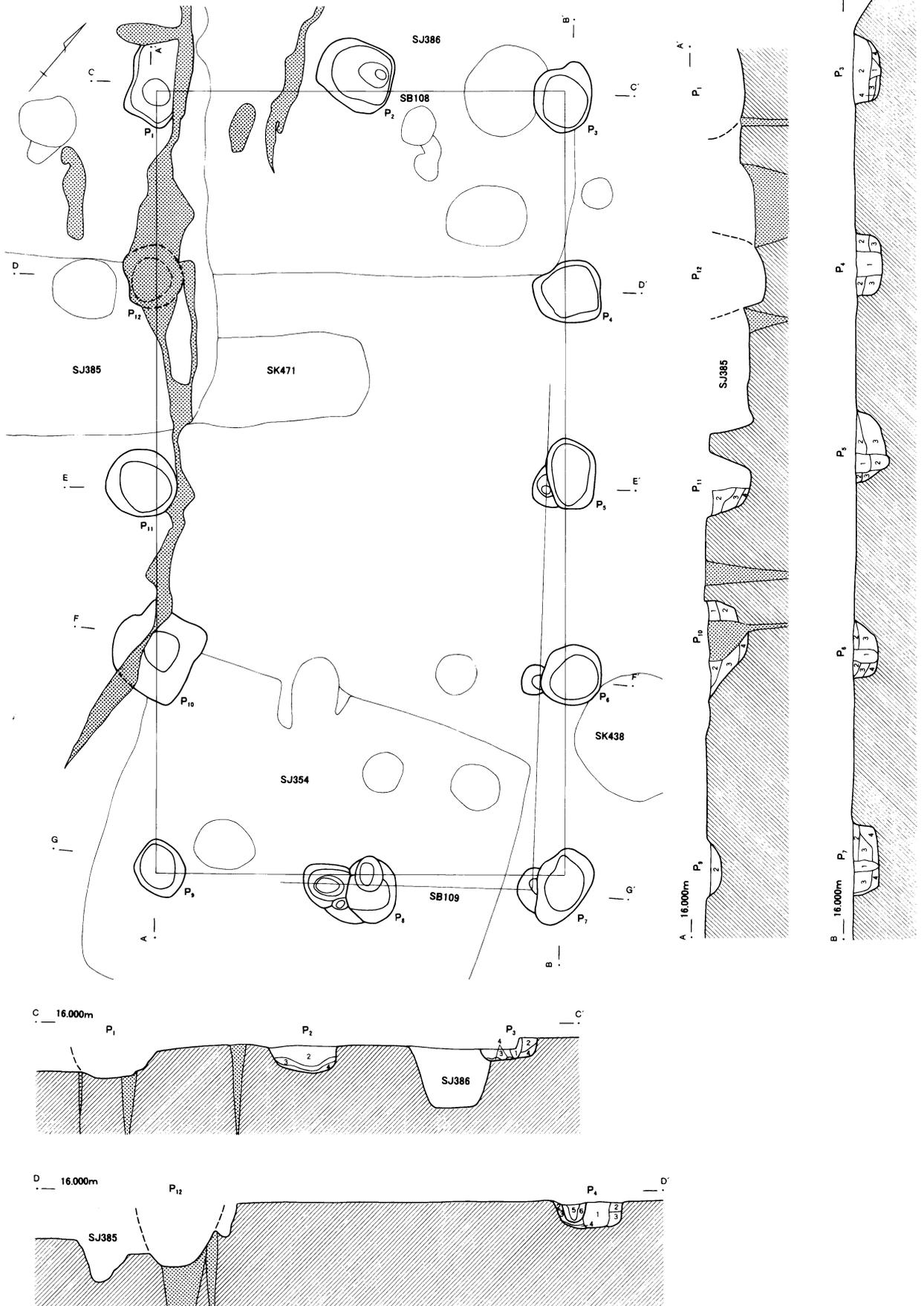
遺物はP5より土師器の甕が出土している。

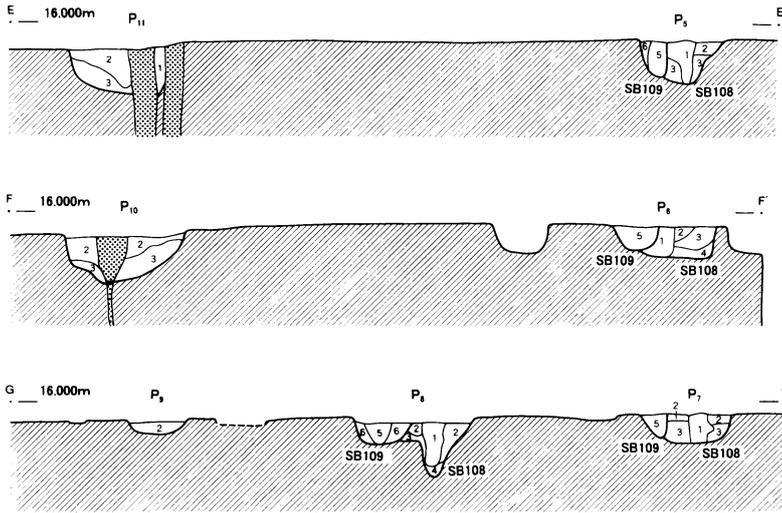
第102号掘立柱建物跡 (第9・327図)

AG-22グリッドを中心に位置する。第357号住居跡、第99号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。2間×2間の側柱建物で、規模は桁行4.06m、梁行3.72m、面積61.32㎡をそれぞれ測る。柱間は桁行が2.03m、梁行が1.86mで、主軸方向はおよそN-34°-Wを指す。

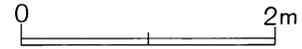
柱穴の配置はいくぶん乱れており、平面的には平行四辺形気味となる。掘り方は円形だが、径32~60cmと

第333图 第108·109号掘立柱建物跡

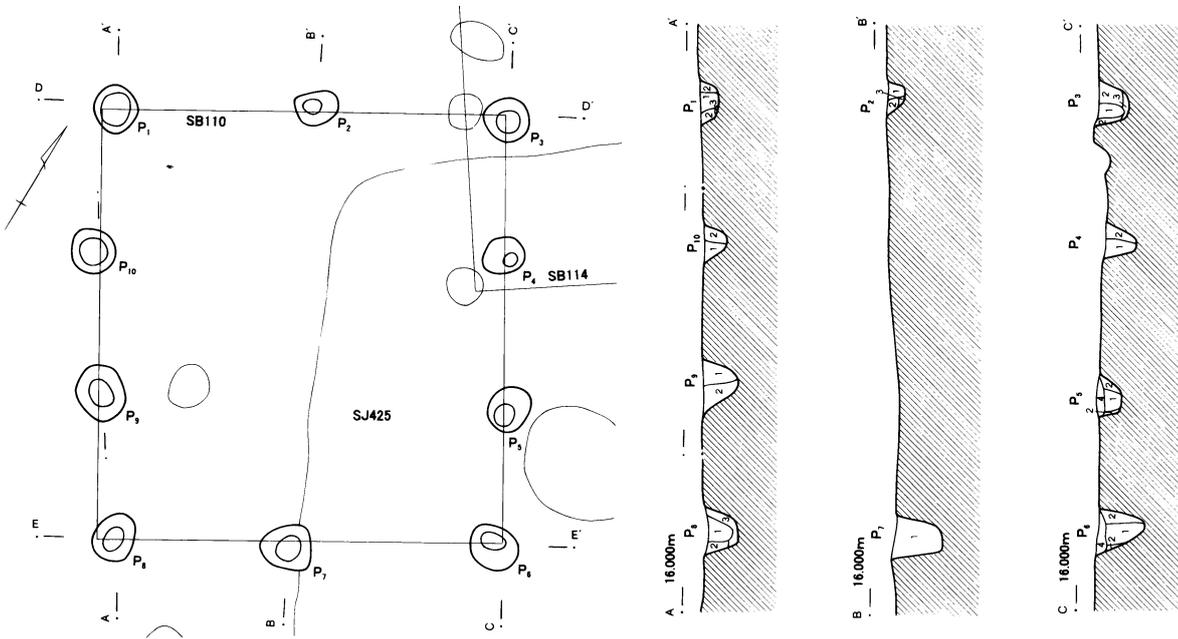




- 第108・109号掘立柱建物跡 土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・地山粒微量に含む。
 2. 10YR4/4 褐色土 地山粒・ブロックを混入。
 3. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・ブロックを混入。
 4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒・地山土主体。
 5. 10YR4/4 褐色土 地山粒を混入。
 6. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒を多く含む。



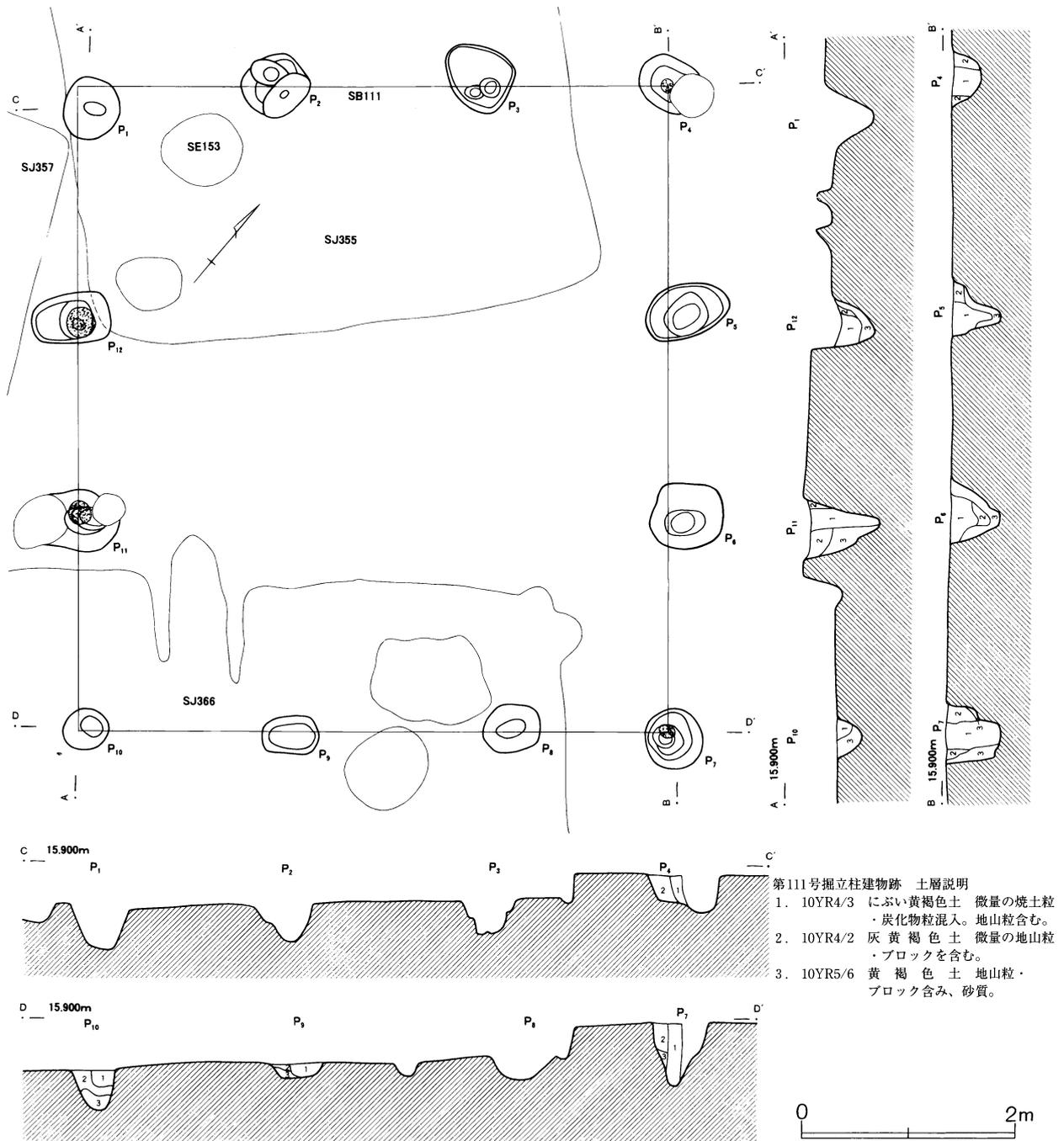
第334図 第110号掘立柱建物跡



- 第110号掘立柱建物跡 土層説明
1. 10YR4/4 褐色土 地山粒・ブロックを微量に含む。しまりやや弱い。
 2. 10YR3/4 暗褐色土 地山をやや多く含む。
 3. 10YR5/6 灰黄褐色土 地山主体。しまりあり。
 4. 10YR4/4 褐色土 砂質土を混在。しまり弱い。



第335図 第111号掘立柱建物跡



一定しない。深さは34~38cmを測り、P₁・P₄・P₇で柱痕が観察された。

遺物は土師器の甕や坏が少量検出されたが、微細な破片のため図示できなかった。

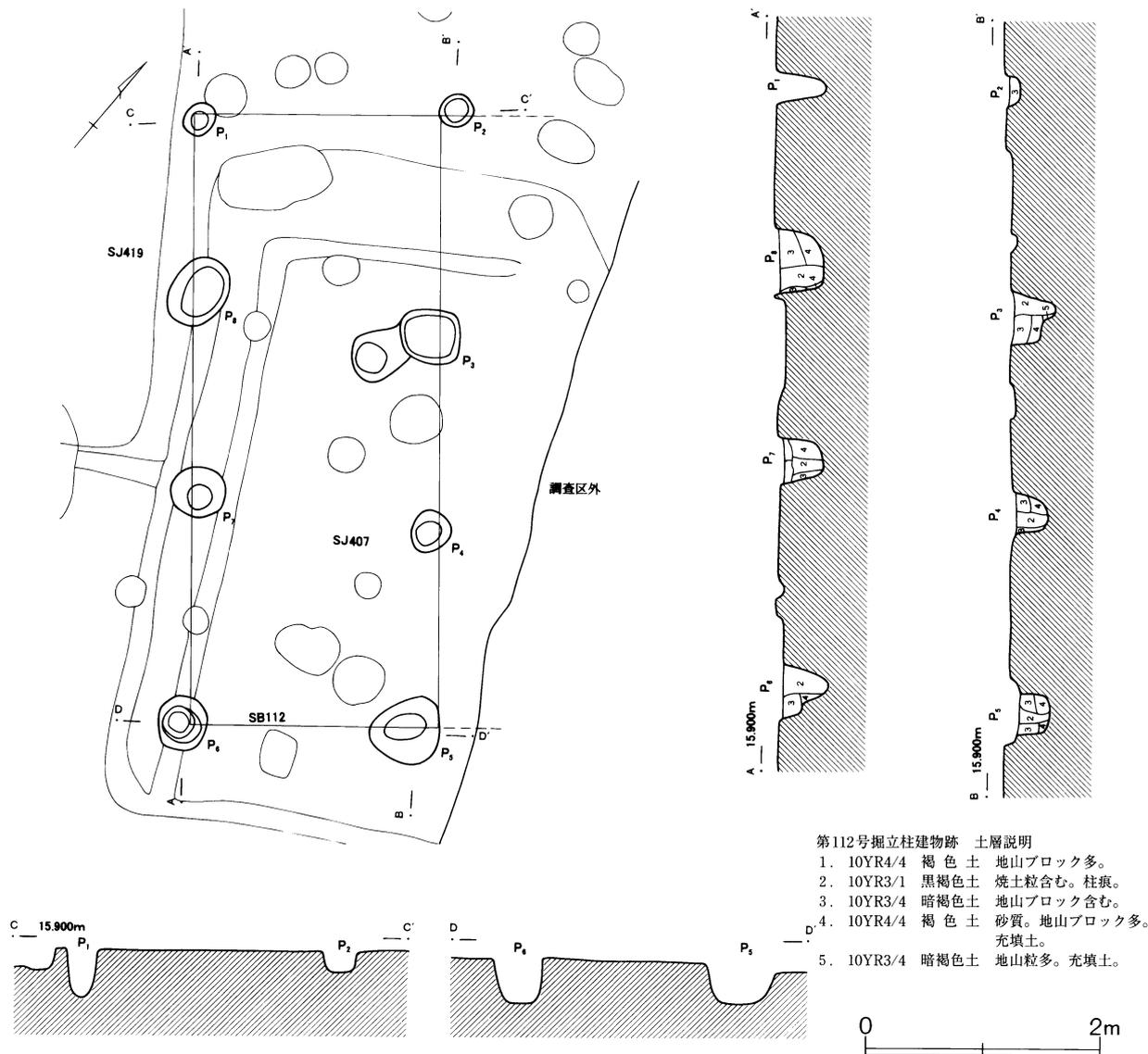
第103号掘立柱建物跡 (第9・328図)

AG-23・AH-23・24グリッドに位置する。東側の大半は攪乱坑に切られており、全体の規模や形状な

どは明らかとし得ない。3間×1間以上の東西棟で、検出部分では桁行5.20m、梁行2.40m以上、面積は12.48㎡以上を測る。柱間は桁行1.70m、梁行2.40mで、主軸方向はおおよそN-55°-Eを指す。

柱穴は円形が主体で、西隅のもののみが楕円形である。径48~68cm、深さ30~40cmを測る。柱痕はP₁・P₄で観察された。

第336図 第112号掘立柱建物跡



第112号掘立柱建物跡 土層説明
 1. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多。
 2. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒含む。柱痕。
 3. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック含む。
 4. 10YR4/4 褐色土 砂質。地山ブロック多。
 5. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒多。充填土。

遺物は土師器の甕や坏のほか、常滑産の鉢片を出土している。

第104号掘立柱建物跡 (第9・329図)

AG-20・AH-20グリッドに位置する。北半部で第382号住居跡を切って構築されるが、第383・384号住居跡との関係は確認できなかった。また、東側の北から2本目は、第154号井戸跡に掘り抜かれようで検出できなかった。全体は4間×3間の側柱建物(南北棟)で、桁行7.04m、梁行5.40m、面積は38.02㎡を測る。柱間は桁行1.76m、梁行1.80mで、主軸方向はおおよそN-32°-Wを指す。

柱穴は円形を基本とし、底面は平坦となるものが多

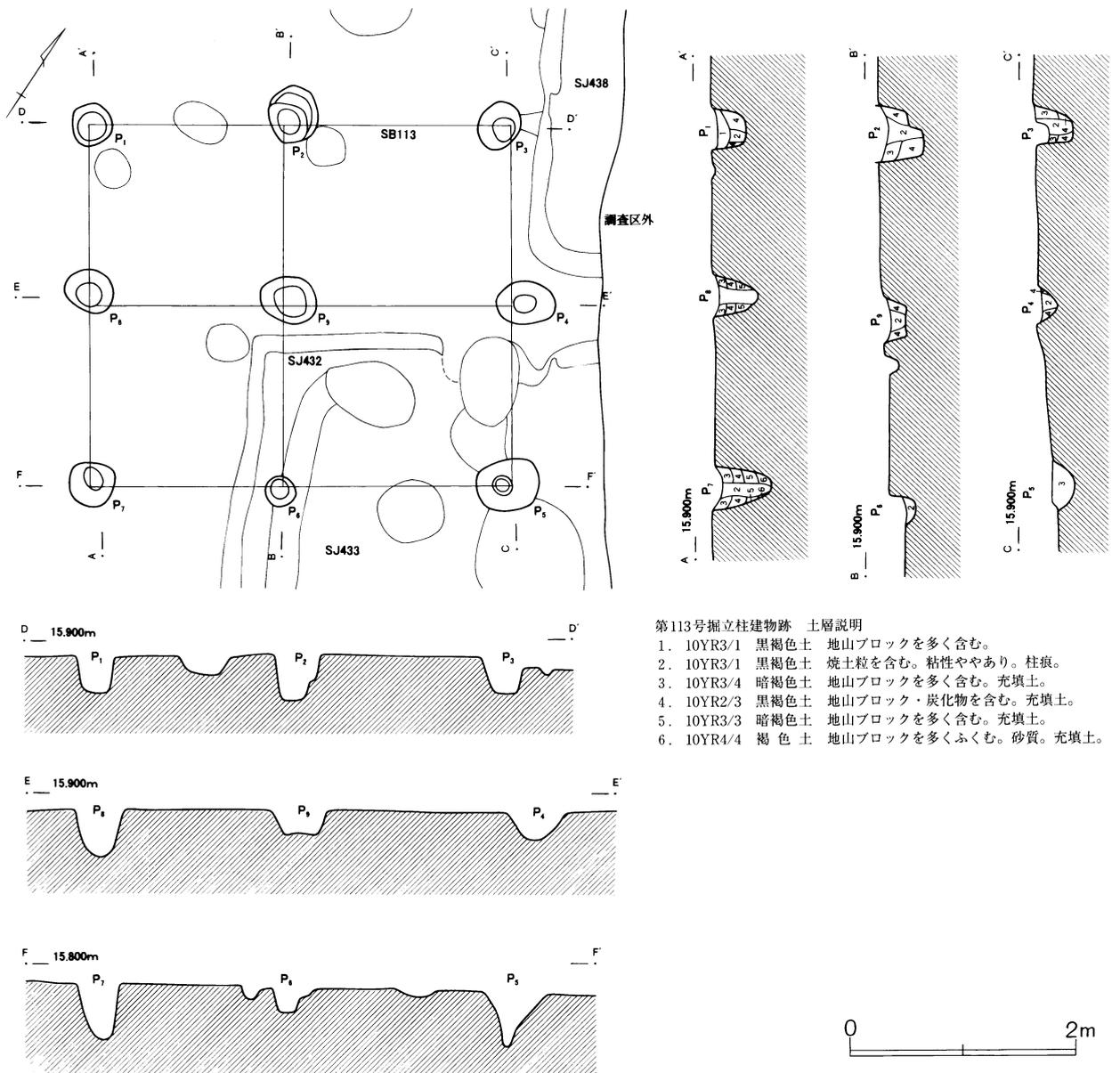
い。径42~94cm、深さ28~72cmを測る。柱痕はP1・P4・P5・P7・P11で観察された。

土師器・須恵器の甕や坏が少量出土しているが、微細な破片ばかりで、図示し得たものは1点のみである。

第105号掘立柱建物跡 (第9・330図)

AH-23・24グリッドに位置する。第393・394号住居跡を切って構築される。第382・383・384・385号住居跡との新旧関係は確認できなかった。また、北側は攪乱坑に切られているため、全体の規模は明らかとし得なかった。検出は2間×2間分のみであるが、桁はさらに北へ延び、南北に長い側柱建物になると思われる。よって、規模は桁行3.30m以上、梁行3.00m、面

第337図 第113号掘立柱建物跡



積9.90㎡以上となる。柱間は桁行が1.65m、梁行が1.50mで、南北棟とすれば、主軸方向はおよそN-28°-Wである。

柱穴は隅丸方形、ないしは楕円形で、径34~82cm、深さ16~56cmを測る。柱痕はP₁・P₃・P₆で観察された。柱筋の通りはやや悪く、南辺の中央柱P₄は外側へ、西辺のP₆は内側へ、それぞれ外れる。

遺物の出土は見られなかった。

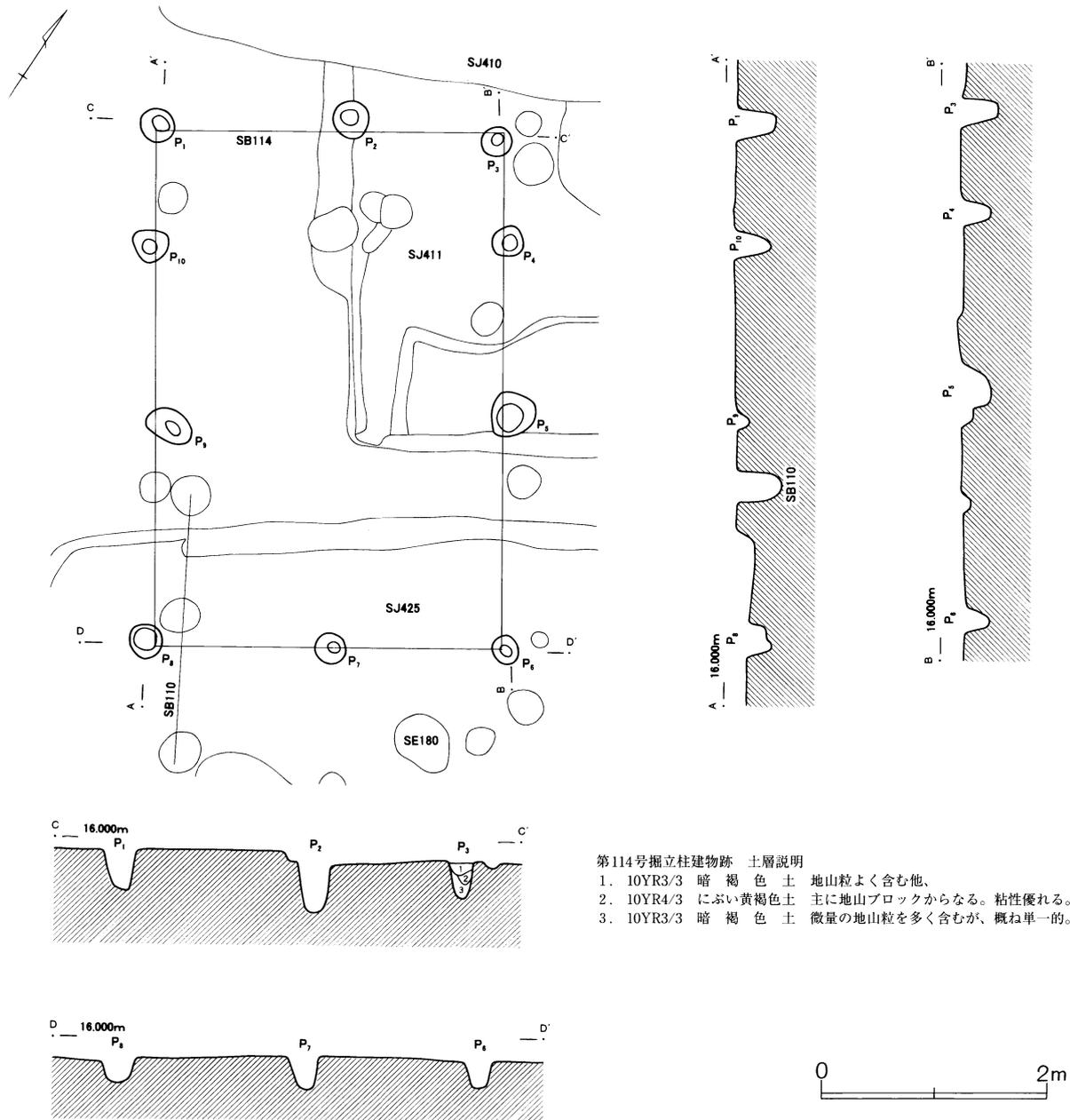
第106号掘立柱建物跡 (第9・331図)

AG-18・AH-18・19グリッドに位置する。第

377・379・380・381号住居跡を切るが、第279・282号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。西側は調査区外となるため、全体の規模や形状は不明である。柱穴の配置からすれば、2間×2間の総柱建物であろう。検出規模は南北4.66m、東西2.10m以上、面積は9.79㎡となる。柱間は桁行2.33m、梁行2.10mで、北を指準とした時の軸方向は、およそN-38°-Wを指す。

柱穴は大型で、方形を基本としている。底面の中央には、円形の掘り込みが見られた。配置は整然とし、

第338図 第114号掘立柱建物跡



径110~145cm、深さ50~90cmを測る。柱は抜き取られたようで、柱痕は観察できなかった。

遺物は甕の破片が少量出土したが、微細であるため図示できなかった。

第107号掘立柱建物跡 (第9・332図)

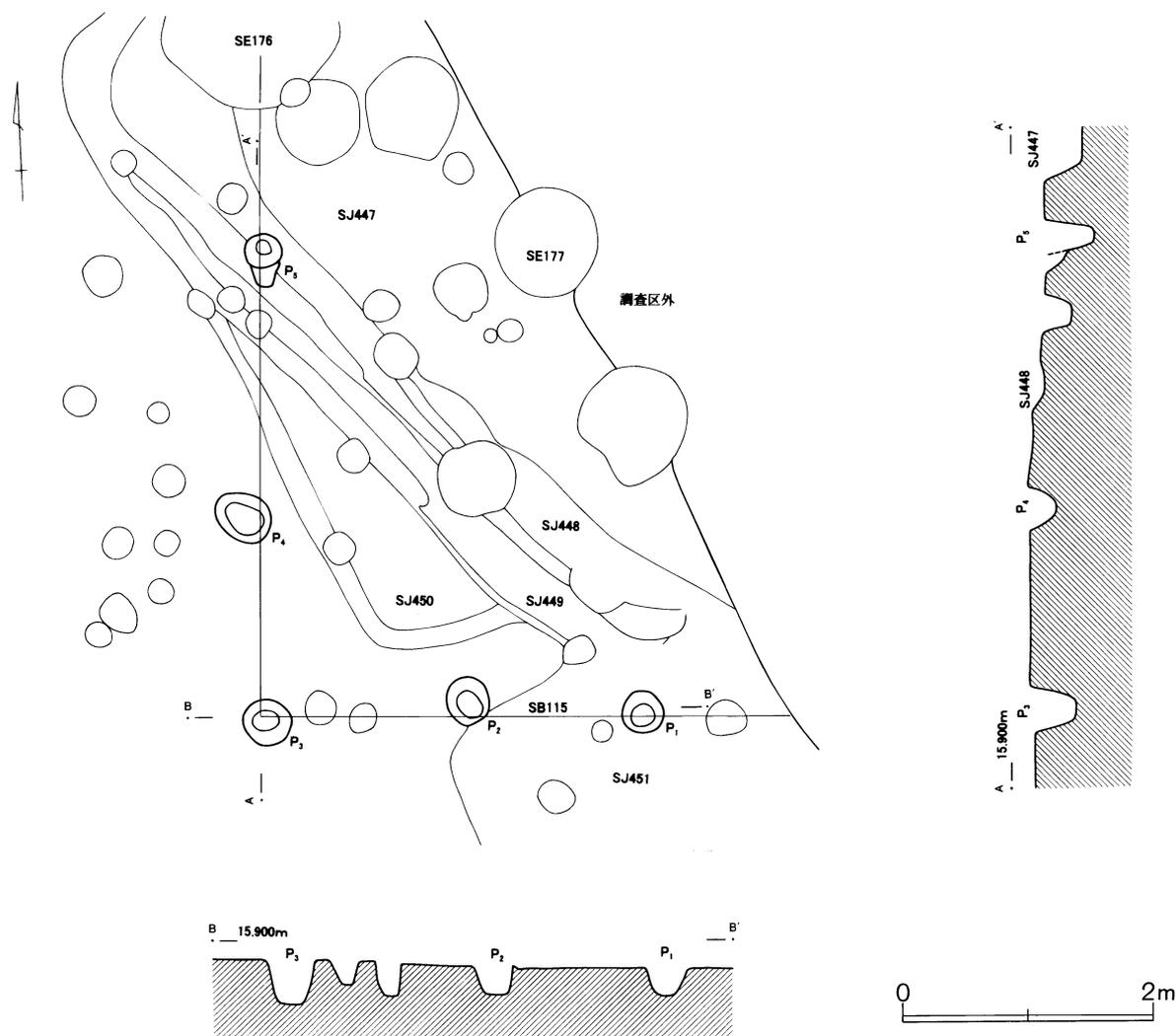
A I - 20グリッドに位置する。第355・357・387号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。西辺は地震の亀裂で分断されている。全体は2間×2

間の総柱建物で、南北3.86m、東西3.50m、面積は13.51㎡を測る。柱間は南北が1.93m、東西が1.75mで、主軸方向はおおよそN-37°-Wを指す。

柱穴は隅丸の方形、ないしは長方形で、径40~64cm、深さ16~56cmと一定しない。配置は概ね整然となさされているが、柱筋の通りは悪く、平面的には歪んでいる。柱痕はP₁・P₃・P₈・P₉で観察された。

遺物の出土は見られなかった。

第339図 第115号掘立柱建物跡



第108号掘立柱建物跡 (第9・333図)

AH-20・21グリッドからAI-21グリッドに位置する。第386号住居跡をきって構築され、第109号掘立柱建物跡に切られる。第354号住居跡との新旧関係は確認できなかった。全体は4間×2間の側柱建物(南北棟)で、桁行8.40m、梁行4.40m、面積は36.96㎡を測る。柱間は桁行2.10m、梁行2.20mで、主軸方向はおよそN-38°-Wを指す。

柱穴は隅丸の方形を基本とするようで、径62~100cmを測る。深さは50cm前後で一定するが、南西隅のP₉のみは約10cmと浅い。柱痕はP₃~P₈で観察された。柱穴の配置は整然とし、柱筋の通りも良い。しかし、北辺中央のP₂だけは外側へ外れている。

覆土より甕や坏の破片が出土しているが、微細なた

め図示し得なかった。

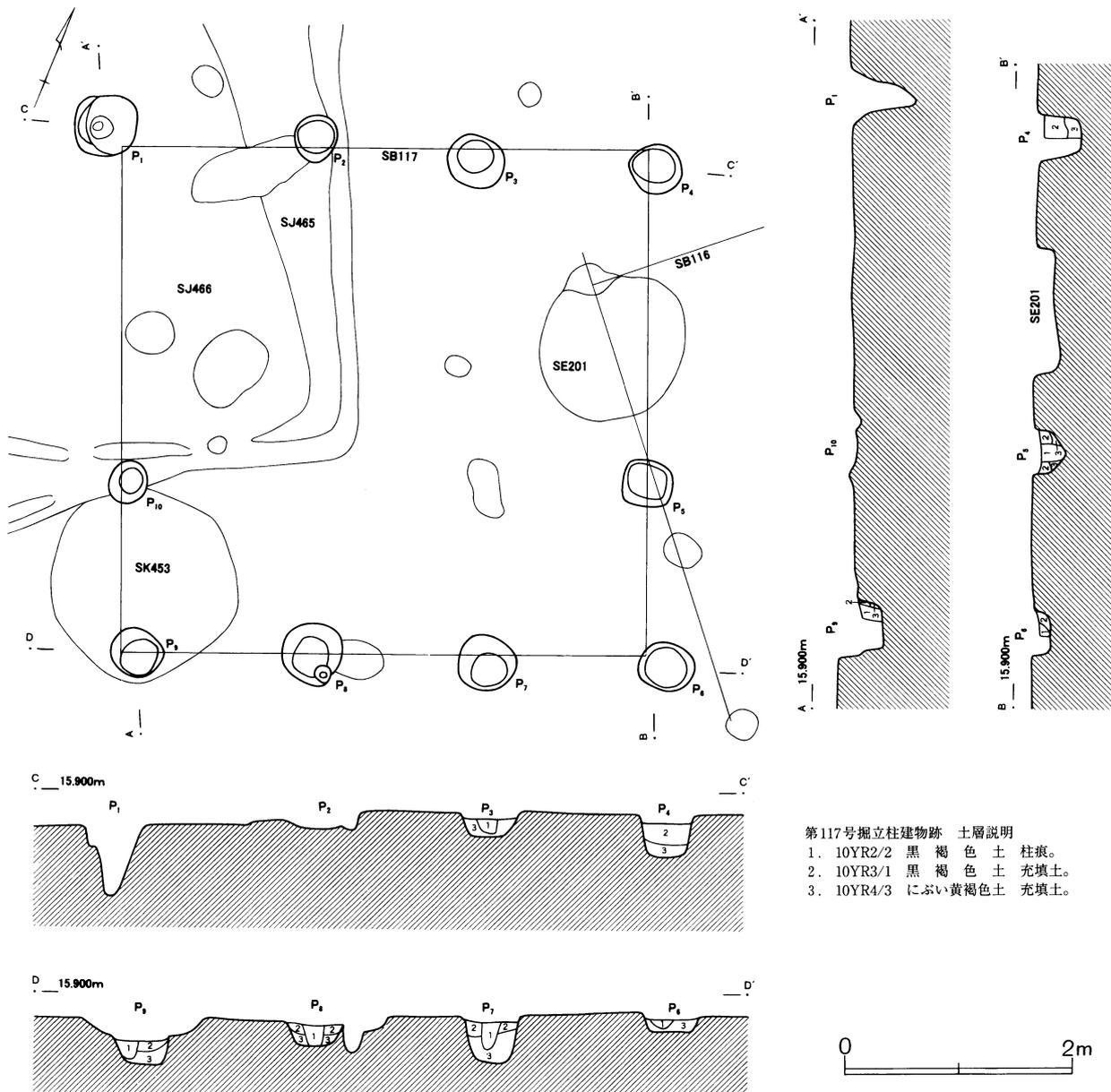
第109号掘立柱建物跡 (第9・333図)

AH-20・21グリッドからAI-21グリッドに位置する。第108号掘立柱建物跡を切って構築される側柱建物であるが、西と北に予想される柱穴は検出できなかった。このため、全体の規模や形状は不明である。検出は桁行? 2間(4.38m)以上、梁行? 1間(2.20m)以上で、北を指準とした時の軸方向は、およそN-35°-Wとなる。

柱穴は小型で、径は34~45cm、深さも20cm前後である。柱痕は観察されなかった。

少量の土師器片が出土しているが、微細なため図示できなかった。

第340図 第117号掘立柱建物跡



第117号掘立柱建物跡 土層説明
 1. 10YR2/2 黒褐色土 柱痕。
 2. 10YR3/1 黒褐色土 充填土。
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 充填土。

第110号掘立柱建物跡 (第9・334図)

A I-22・A J-22グリッドに位置する。東側で第425号住居跡、第114号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。全体は3間×2間の側柱建物で、桁行3.45m、梁行3.20mとほぼ方形を呈する。面積は11.04㎡である。柱間は桁行1.15m、梁行1.60mで、主軸方向はおよそN-30°-Wを指す。

柱穴は円形の小穴ばかりで、径32~48cm、深さ14~40cmを測る。柱痕は不明瞭ながら、すべてで観察された。柱穴の配置は概ね整然としており、隅柱穴がわず

かずつ内側へずれる。

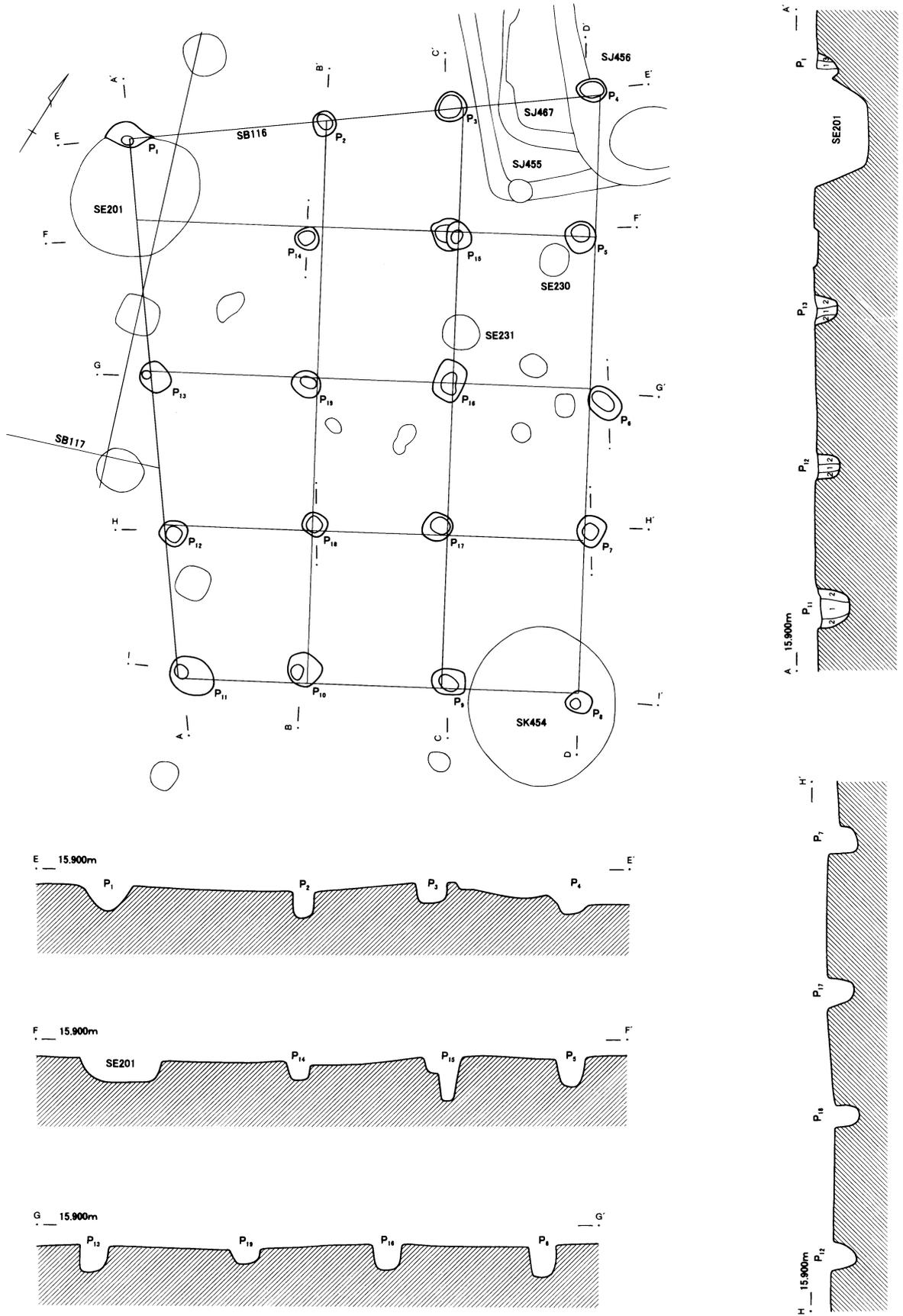
遺物の出土は見られなかった。

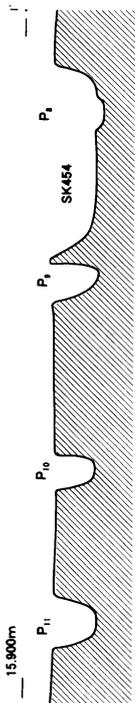
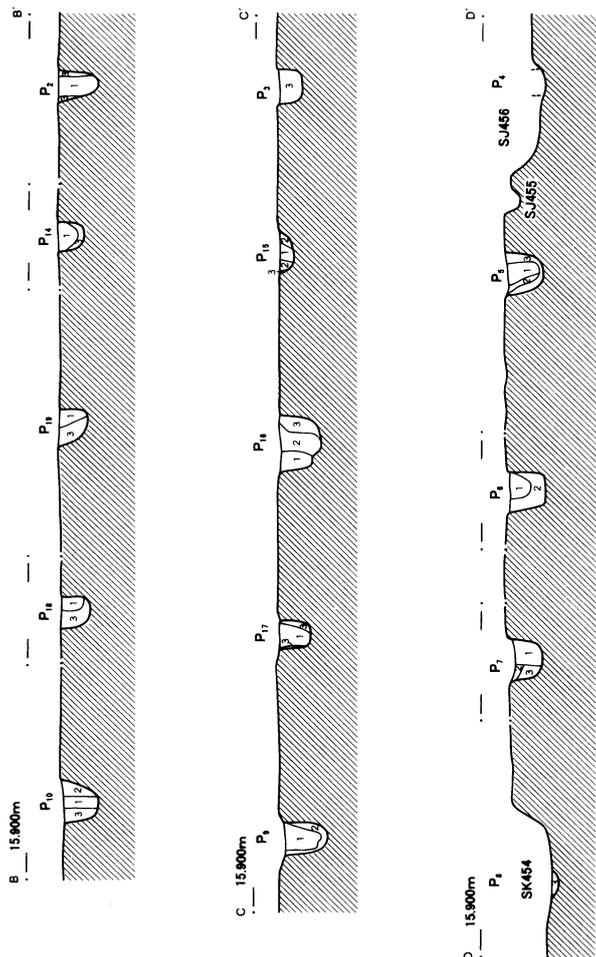
第111号掘立柱建物跡 (第9・335図)

A I-20・21、A J-21グリッドに位置する。北側で第355号住居跡を切るが、南側で重複する第366号住居跡との新旧関係は確認できなかった。3間×3間の側柱建物で、桁行6.10m、梁行5.60m、面積は34.16㎡を測る。柱間は桁行が2.03m、梁行が1.86mで、主軸方向はほぼN-40°-Wを指す。

柱穴は不整形のものが大半であるものの、隅丸の方

第341图 第116号掘立柱建物跡





- 第116号掘立柱建物跡 土層説明
1. 10YR2/1 黒色土 柱痕。
 2. 10YR2/2 黒褐色土 充填土。黄褐色土をブロック状に含む。
 3. 10YR3/2 黒褐色土 充填土。



形、ないしは長方形が基本ではなかったかと思われる。径44~85cm、深さ18~66cmと一定しない。配置はおおよそ整っているが、東西両辺の柱筋は通りが悪く、中央の2本は外側へ外れている。柱痕はP₄・P₇・P₁₁で観察された。

遺物は微細な破片が少量出土したのみで、図示することはできなかった。土師器の甕や坏が認められる。

第112号掘立柱建物跡 (第9・10・336図)

A I-24グリッドを中心に位置する。第407・408号住居跡を切って構築される。検出は3間×1間の側柱建物で、桁行5.30m、梁行2.14m、面積11.34㎡となるが、東側は調査区外へと展開していると思われる。この場合は、3間×2間の総柱建物が想定できよう。柱間は桁行1.76m、梁行2.14mとなるものの、東辺と西辺の桁行は揃わず、対応関係が乱れている。主軸方向はほぼN-40°-Wを指す。

柱穴は径28~62cm、深さ26~40cmとともに不揃いで、柱筋の通りもあり良くない。柱痕は北辺の柱穴以外で観察された。

遺物の出土は見られなかった。

第113号掘立柱建物跡 (第10・337図)

A J-25グリッドを中心に位置する。第432・433号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。2間×2間の総柱建物で、南北3.24m、東西3.76m、面積12.18㎡を測る。柱間は南北が1.62m、東西が1.88mで、主軸方向はほぼN-60°-Eを指す。

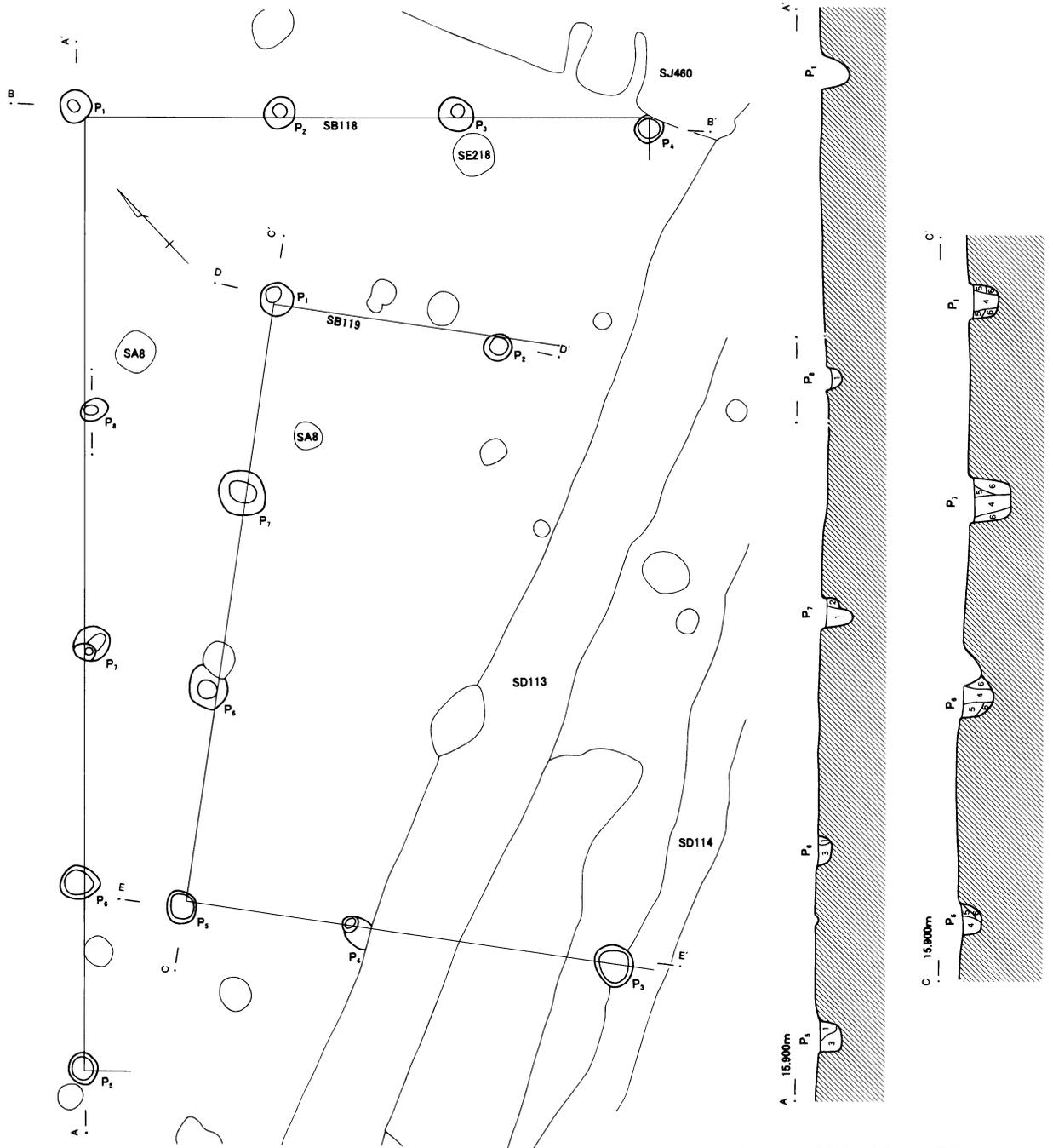
柱穴は円形から隅丸方形で、径26~54cm、深さ8~44cmと一定しない。配置は整然となされているが、東辺中央の柱穴は柱筋の外側へやや外れている。

遺物の出土は見られなかった。

第114号掘立柱建物跡 (第9・338図)

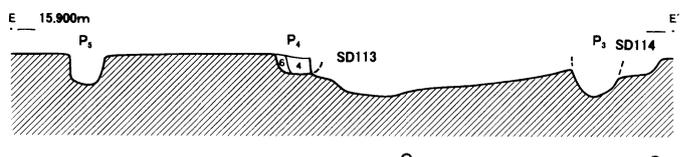
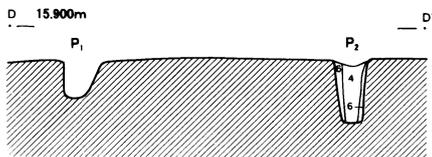
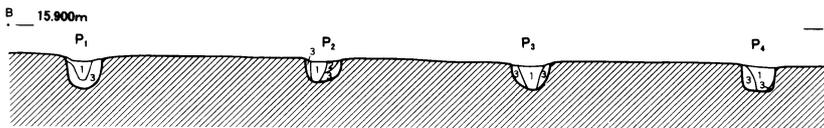
A I-22グリッドに位置する。北東部で第411号住居跡を切るが、南側で重複する第425号住居跡、および第110号掘立柱建物跡との新旧関係は確認できなかった。建物は3間×2間の側柱建物で、桁行4.60m、梁行3.10m、面積14.26㎡を測る。柱間は桁行が1.53m、梁行が1.55mで、主軸方向はおよそN-32°

第342図 第118・119号掘立柱建物跡

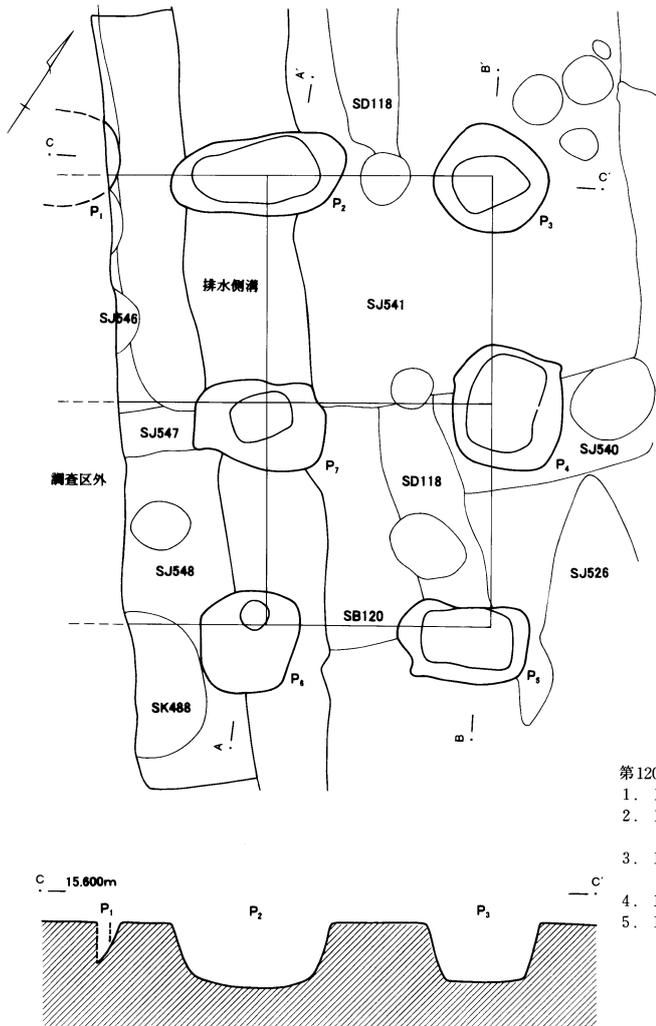


第118・119号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 柱痕。
2. 10YR3/1 黒褐色土 充填土。黄褐色土ブロック含む。
3. 10YR3/4 黒褐色土 充填土。地山状のブロック土。
4. 10YR2/2 黒褐色土 柱痕。
5. 10YR3/1 黒褐色土 充填土。黄褐色土ブロック含む。
6. 10YR3/4 黒褐色土 充填土。地山ブロック。

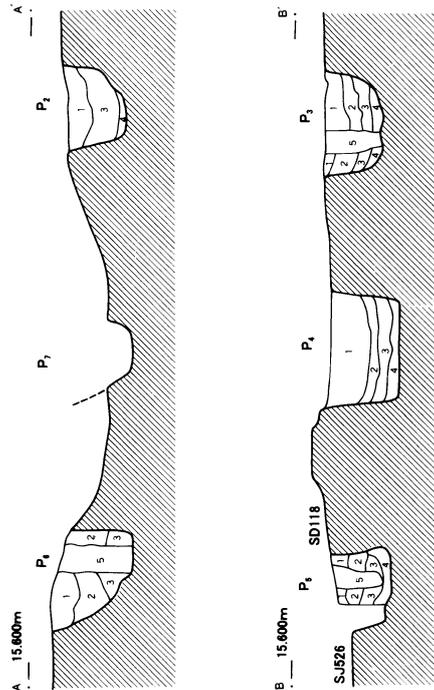


第343図 第120号掘立柱建物跡



第120号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 砂質地山ブロック・焼土粒・ブロックを多く含む。充填土。
2. 10YR3/3 暗褐色土 大型の砂質地山ブロックを多量に含む他、炭化物をよく含む。充填土。
3. 10YR3/2 黒褐色土 砂質地山ブロック・焼土粒を少量含む。しまり・粘性優れる。充填土。
4. 10YR4/4 褐色土 ほとんど砂質地山。掘込時のさらい残しと思われる。
5. 10YR2/3 黒褐色土 砂質山地ブロック・焼土粒・炭化物を微量に含む。しまりなくボンボン。柱痕。



—Wを指す。

柱穴は径26~40cmの円形で、深さも12~42cmと小穴ばかりである。その配置は整然とせず、柱筋は通りが悪い。柱痕も観察されなかった。

土師器の甕や坏が数点出土しているが、微細な破片のため図示できなかった。

第115号掘立柱建物跡 (第10・339図)

AK-25グリッドを中心に位置する。第447・448・449・450・451号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。また、東側は調査区外となるため、全体の規模や形状は明らかでない。検出状況からすれば、3間以上×3間以上の側柱建物となろう。柱間は南北が1.90m、東西1.55mで、北を指準とした時の軸

方向は、およそN-2°-Eを指す。

柱穴は径30~50cmの円形で、深さは20~40cmを測る。柱痕は観察されなかった。

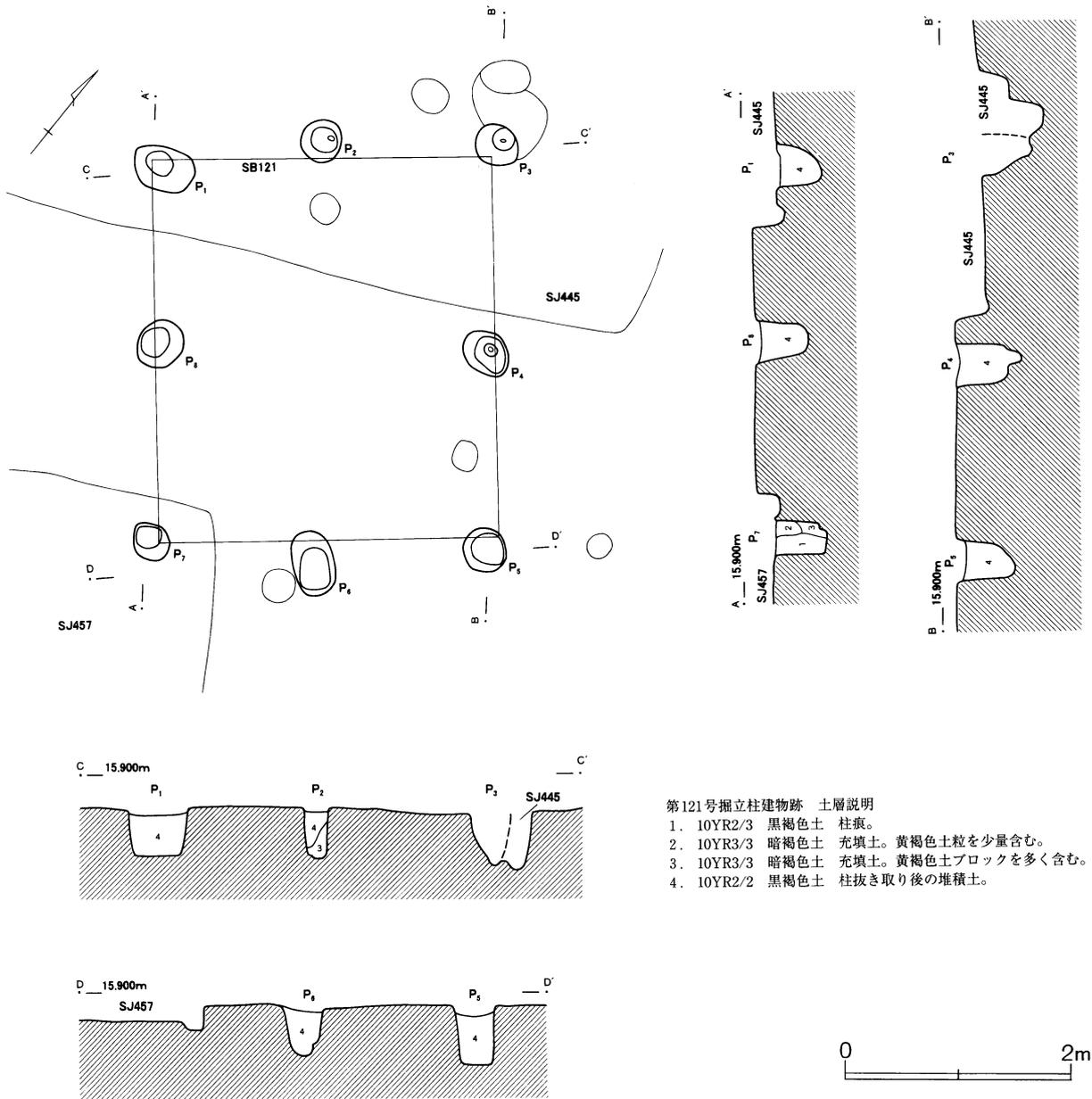
遺物の出土は認められなかった。

第116号掘立柱建物跡 (第10・341図)

AL-25・AM-25グリッドに位置する。北東の隅部で第455・456・467号住居跡と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。3間×2間の総柱建物で、北と西に庇の付く南北棟と想定した。身舎は桁行4.80m、梁行2.85m、面積13.68㎡を測る。柱間は桁行1.58m、梁行1.63mで、主軸方向はおよそN-32°-Wを指す。

柱穴は径22~50cmの円形、ないしは楕円形で、深さ

第344図 第121号掘立柱建物跡



18~34cmを測る。その配置はやや雑然とした感があり、各柱筋の通りは悪い。柱痕は断面観察されたP₁・P₁₁~P₁₃で観察されたが、充填土には築き固められた様子を窺えなかった。

庇は北および西の2面に付設されるが、身舎の軸方向とは大きく異なり、およそN-39°-Wである。このため、当初は2棟が重複するものかとも思われたが、東側の柱穴はまったく検出されなかった。また、柱穴自体の規模や形状も身舎のものと大差ない。そこで庇として扱ったが、不自然な印象は拭いきれない。

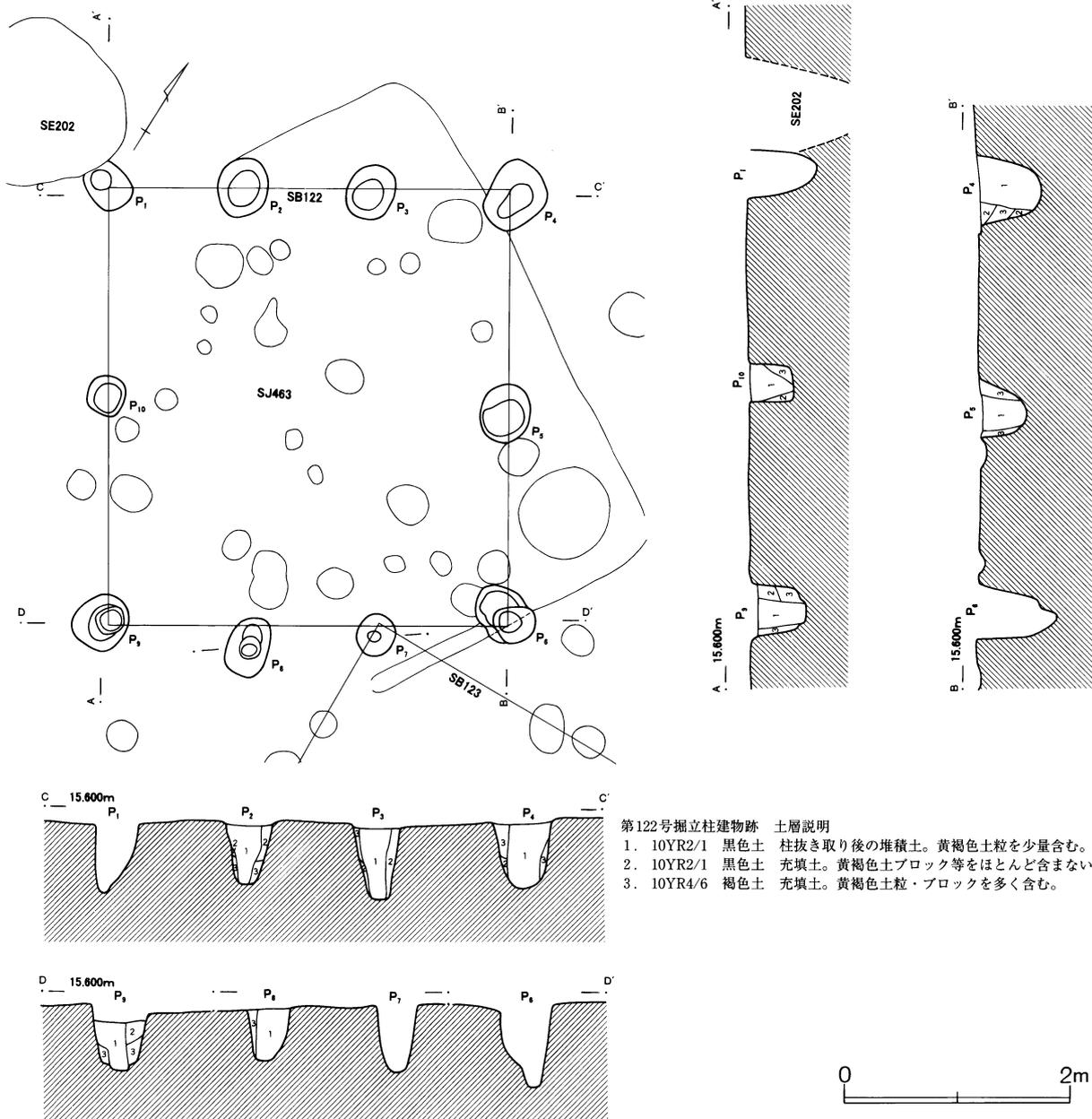
あるいは、柵のようなものであろうか。

遺物の出土は見られなかった。

第117号掘立柱建物跡 (第10・340図)

AL-25グリッドからAM-24・25グリッドに位置する。第465・466号住居跡、第116号掘立柱建物跡と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。3間×2間の側柱建物で、桁行は4.67m、梁行4.53m、面積は21.15㎡を測る。柱間は桁行が1.56mと等間隔なのに対し、梁行は中央の柱穴が南へ偏るため、北側は3.00m、南側は1.53mとなる。主軸方向はおよそN-

第345図 第122号掘立柱建物跡



第122号掘立柱建物跡 土層説明
 1. 10YR2/1 黒色土 柱抜き取り後の堆積土。黄褐色土粒を少量含む。
 2. 10YR2/1 黒色土 充填土。黄褐色土ブロック等をほとんど含まない。
 3. 10YR4/6 褐色土 充填土。黄褐色土粒・ブロックを多く含む。

73°-Eを指す。

柱穴は径38~56cmの円形で、深さは10~35cmと一定しない。配置はおおよそ整っているものの、柱筋の通りはやや乱れている。柱痕はP3・P5~P9で観察されたが、充填土には突き固めた様子を窺えない。

遺物の出土は認められなかった。

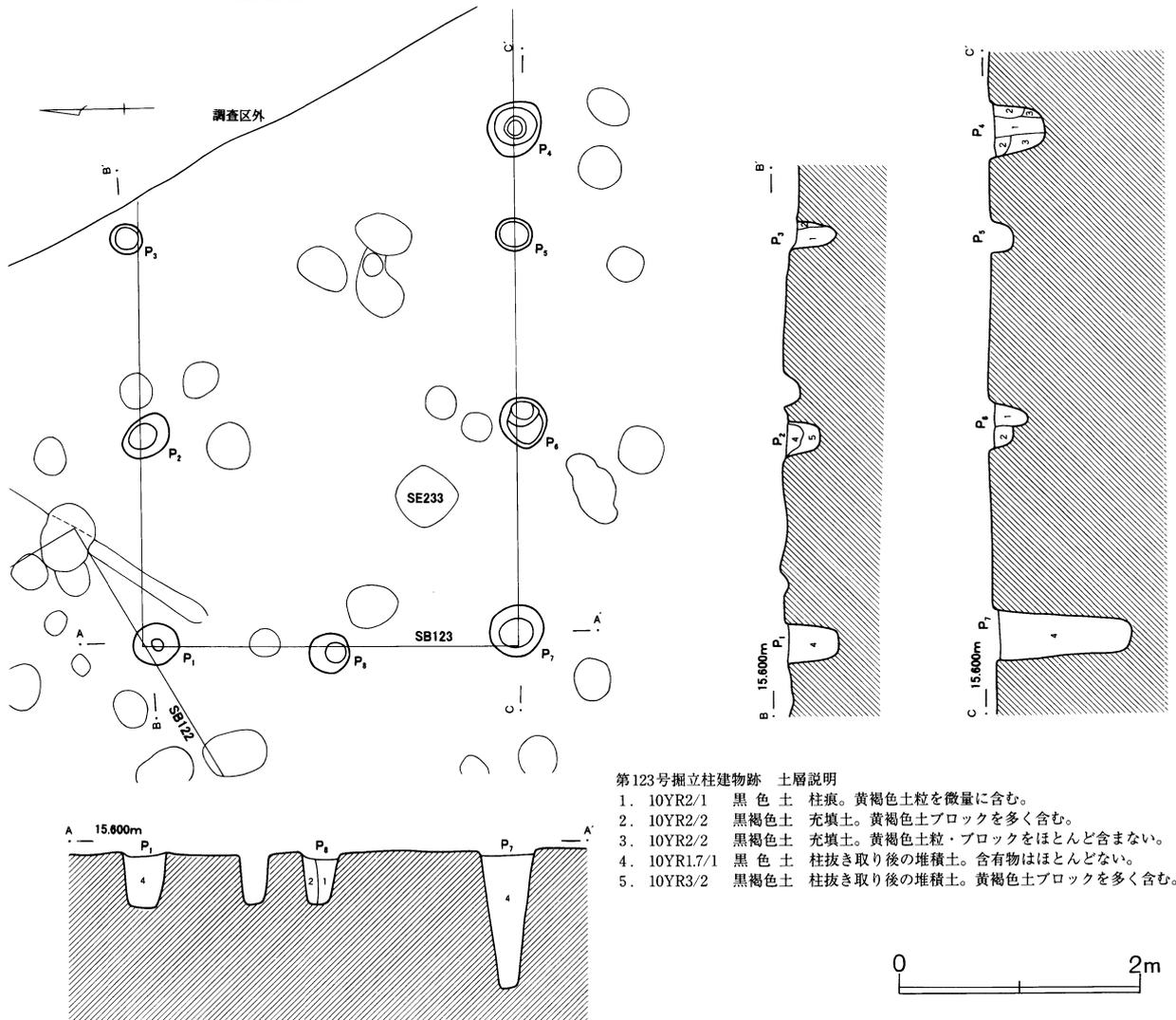
第118号掘立柱建物跡 (第10・342図)

AM-24・AN-24グリッドに位置する。中央部に第119号掘立柱建物跡が重複するが、その新旧関係は

確認できなかった。検出し得たのは北東辺と北西辺のみで、他の2辺は不明である。第113・119号溝跡部分に展開しているとも思われるが、これも明らかにし得なかった。可能性としては、4間×3間の側柱建物が想定されよう。その場合の桁行は8.96m、梁行は5.76mで、面積は51.61㎡となる。柱間は桁行が2.24m、梁行が1.92mで、主軸方向はおおよそN-43°-Eを指す。

柱穴は小型円形のもので、径は25~36cm、深さは10

第346図 第123号掘立柱建物跡



第123号掘立柱建物跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 柱痕。黄褐色土粒を微量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 充填土。黄褐色土ブロックを多く含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 充填土。黄褐色土粒・ブロックをほとんど含まない。
4. 10YR1.7/1 黒色土 柱抜き取り後の堆積土。含有物はほとんどない。
5. 10YR3/2 黒褐色土 柱抜き取り後の堆積土。黄褐色土ブロックを多く含む。

～24cmを測る。柱痕はすべての柱穴で観察された。

遺物の出土は見られなかった。

第119号掘立柱建物跡 (第10・342図)

AM-24・AN-24グリッドに位置する。第118号掘立柱建物跡、第113・119号溝跡と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。3間×2間の側柱建物と判断したが、東側の柱穴は検出できなかった。想定される規模は、桁行5.66m、梁行4.00mで、面積は22.64㎡となる。柱間は桁行が1.88m、梁行が2.00mで、主軸方向はおおよそN-51°-Eを指す。

柱穴は径22～46cmの円形で、深さは13～46cmと一定しない。柱痕はすべてのもので観察された。柱筋の通りはやや悪い。

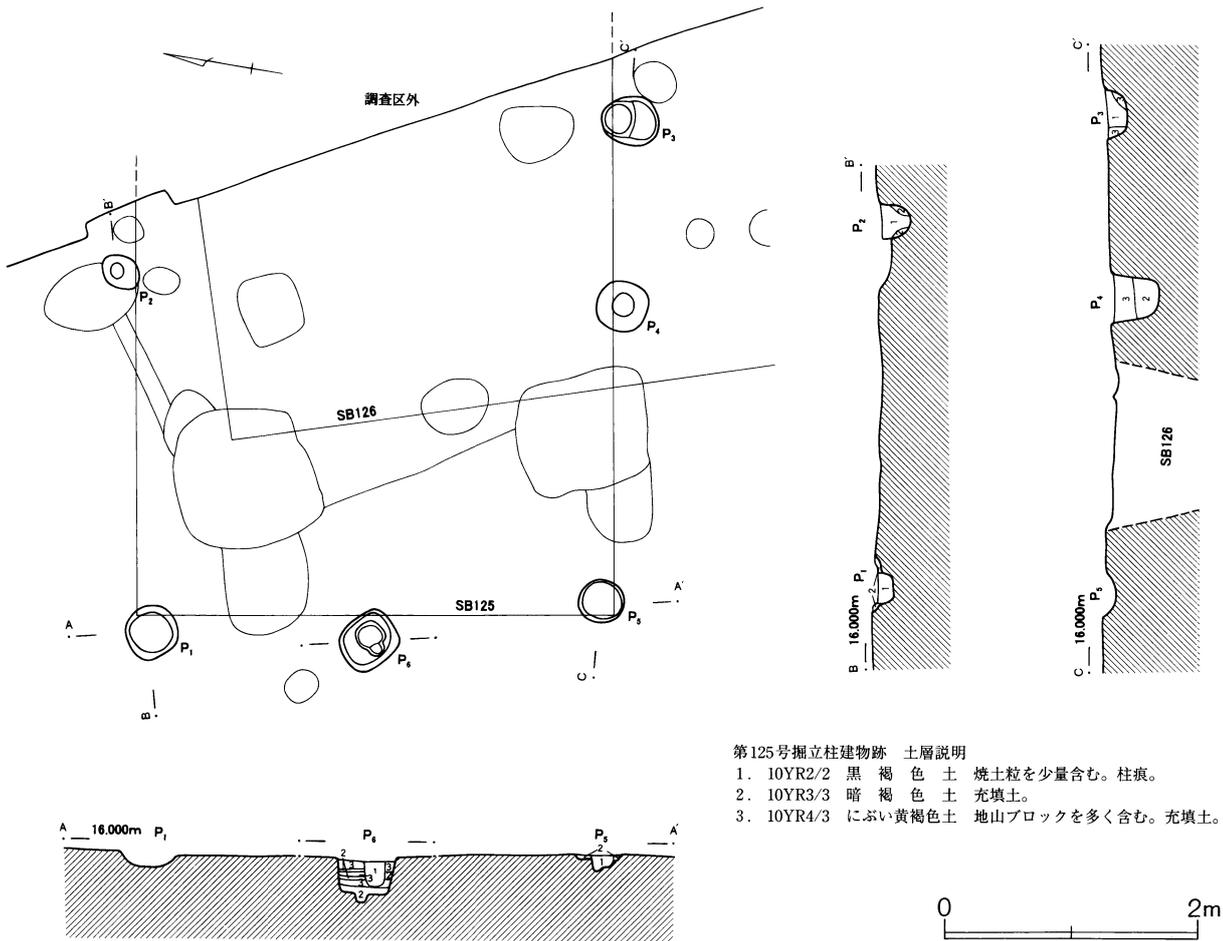
遺物の出土は見られなかった。

第120号掘立柱建物跡 (第10・343図)

AL-21グリッドに位置する。第546号住居跡を掘り抜き、第118号溝跡に切られる。第540・541・548・549号住居跡との関係は不明である。西側は調査区外となるため、全体の規模は明らかでない。検出状況から見れば、2間×2間の総柱建物が考えられる。この場合の規模は、東西・南北ともに3.60m前後で、面積は12.96㎡程となる。柱間はそれぞれ1.80mで、北を指準とした軸方向はおおよそN-6°-Wを指す。

柱穴は径80～140cmの方形または長方形で、深さ40～54cmを測る。底面はおおよそ平坦であり、全体は箱型の土塊状となる。柱痕はP3・P5・P6で観察された。いずれも明瞭に残っており、充填土も版築状に強く締まっていた。これより復元される柱の太さは、約

第347図 第125号掘立柱建物跡



第125号掘立柱建物跡 土層説明
 1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。柱痕。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 充填土。
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。充填土。

20cmである。

遺物は微量ながら、土師器の甕や坏が出土している。

第121号掘立柱建物跡 (第10・344図)

AK-25グリッドに位置する。第445・457号住居跡を切る。2間×2間の側柱建物で、桁行3.40m、梁行3.06m、面積10.40㎡を測る。柱間は桁行が1.70m、梁行が1.53mで、主軸方向はおよそN-37°-Wを指す。

柱穴は径34~56cmの円形で、深さは38~52cmを測る。これらの配置は概ね整然となされているが、北辺と南辺の中央柱穴は柱筋の外側へ外れている。柱痕はP7のみに観察され、他は埋め戻しの土であった。おそらく、抜き取られた(折り取られた)ものと思われる。

少量の甕や坏の破片が出土しているが、微細なため図示できなかった。

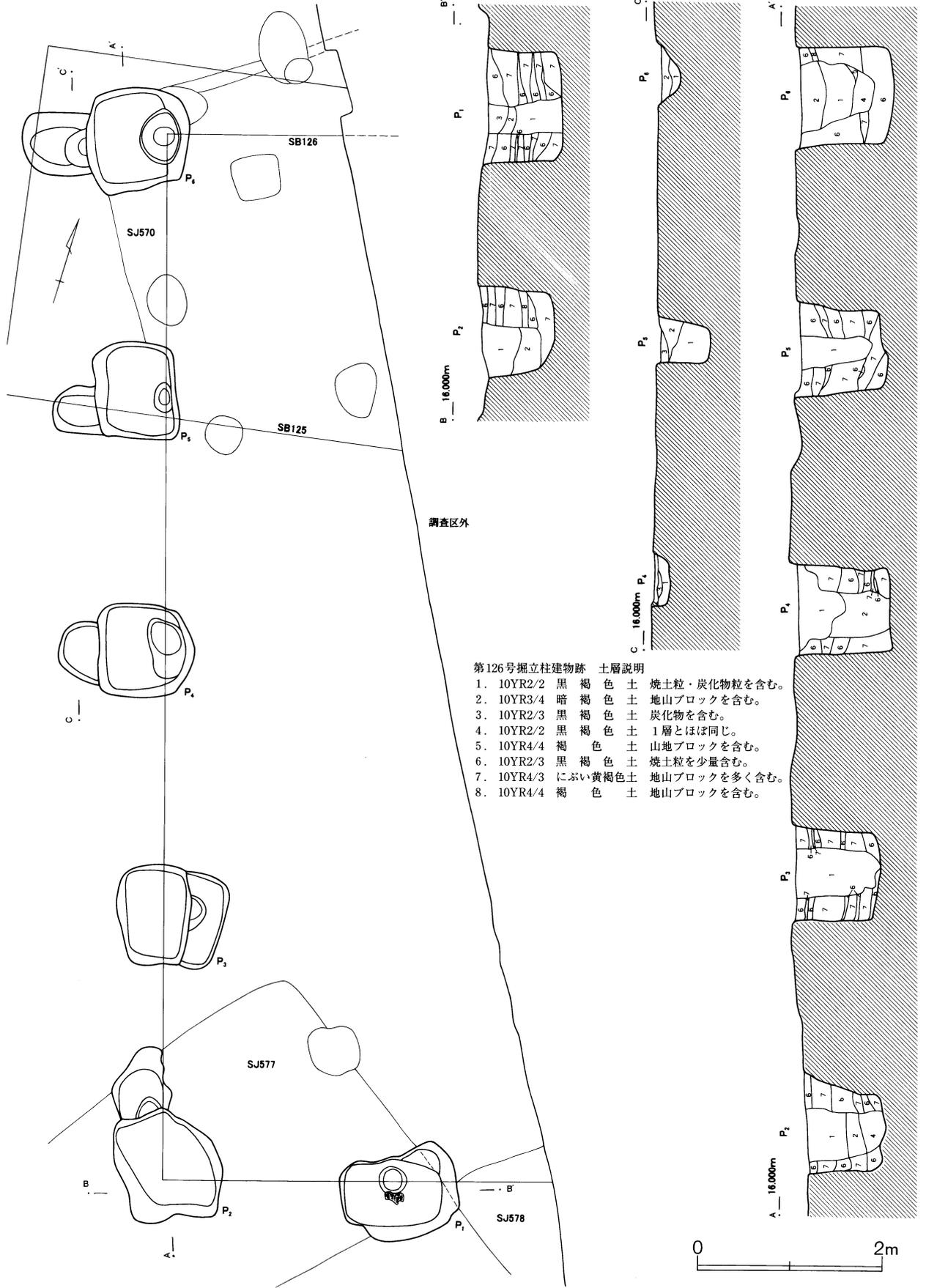
第122号掘立柱建物跡 (第11・345図)

AN-26・27グリッドに位置する。大きく第463号住居跡を切り込んで構築される。第123号掘立柱建物跡、および第202号井戸跡との重複関係は、明らかとし得なかった。全体は2間×3間の側柱建物で、桁行3.90m、梁行3.60m、面積は14.04㎡を測る。柱間は桁行が1.95m、梁行が1.20mで、主軸方向はおよそN-29°-Wを指す。

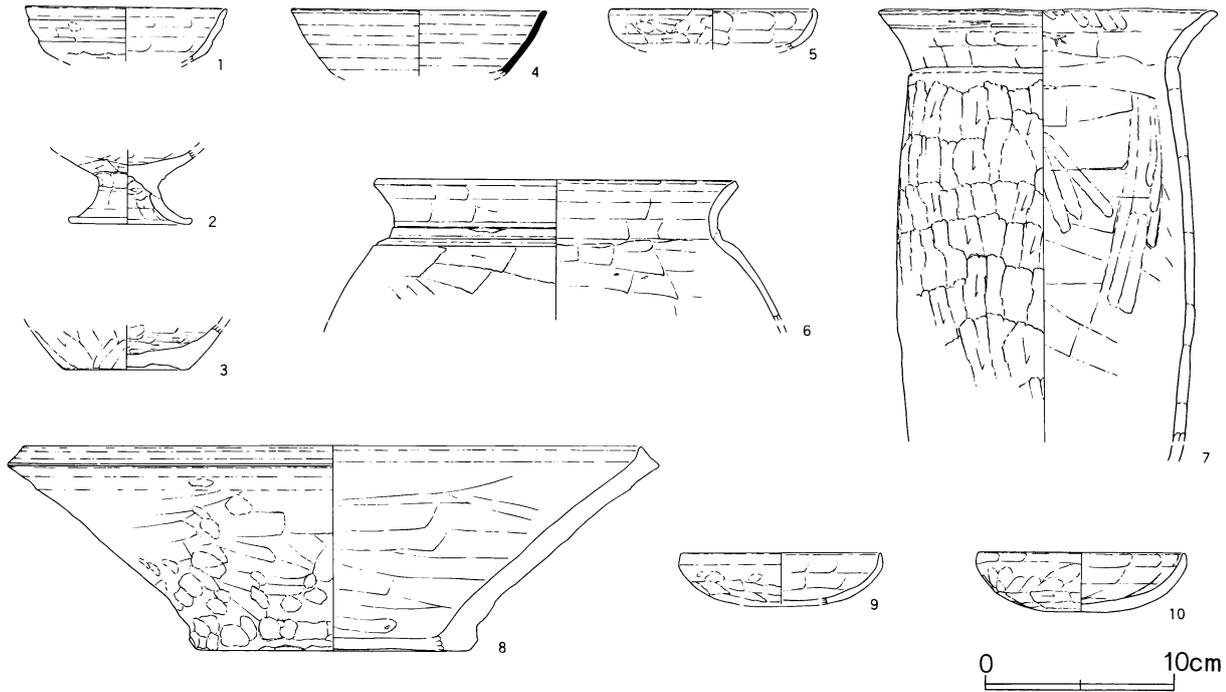
柱穴は径34~60cmの円形で、深さは38~62cmと不揃いである。その配置は概ね整ったものながら、南辺の中央2穴は柱筋の外へ出ている。柱はすべて抜き取られたようで、柱痕は観察できなかった。

遺物は少量(土師器の甕・甑・坏)出土しているが、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第348図 第126号掘立柱建物跡



第349図 掘立柱建物跡出土遺物



- 1 ~ 3 - SB63 7 - SB101 10 - SB126
 4 - SB104 8 - SB103
 5・6 - SB120 9 - SB125

第147表 掘立柱建物出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SB 63	坏	(10.7)	(2.9)		細 (W, B, R)	普	にぶい黄橙	破片	南比企
2	SB 63	高 坏		(4.0)	(6.6)	細 (W, B, R)	良	にぶい 橙	25	
3	SB 63	甕	(2.4)	(2.4)	(6.7)	細 (B, R)	普	灰 黄 褐	破片	
4	SB 104	須恵器坏	(13.5)	(3.5)		粗 (W, F, 針)	良	灰	25	
5	SB 120	坏	(10.8)	(2.2)		細 (B, R)	良	にぶい黄橙	20	
6	SB 120	甕	(19.7)	(7.5)		粗 (W, R)	良	橙	破片	
7	SB 101	甕	18.0	(23.0)		礫 (C, R)	良	にぶい黄橙	40	
8	SB 103	常滑鉢	(34.7)	10.9	(14.5)	礫 (W, F)	良	にぶい赤褐	破片	
9	SB 125	坏	(10.7)	(2.7)		細 (W, B, R)	普	橙	20	
10	SB 126	坏	(11.0)	3.2		細 (W, B)	普	橙	40	

第123号掘立柱建物跡 (第11・346図)

AN-27グリッドに位置する。北東側は調査区外となるため、全体の規模は明らかでない。検出状況から推せば、4間以上×2間の側柱建物(東西棟)となる。その場合、桁行は4.40m以上、梁行は3.20mで、面積は14.08㎡以上となる。柱間は桁行が1.46m、梁行が1.60mで、主軸方向はおよそN-89°-Wを指す。

柱穴は径26~46cm、深さ20~110cmと不定である。柱筋の通りはやや悪く、西辺中央の柱穴は外側へ出ている。柱痕は観察されたものと、そうでないものが混

在する。抜き取られたものは埋め戻されていることから、柱痕の残るものも、折り取られたのではなかろうか。

遺物は3片(土師器の甕と坏)が出土しているが、微細な破片で図示できなかった。

第124号掘立柱建物跡 欠番

第125号掘立柱建物跡 (第7・347図)

Y-20・Z-20グリッドに位置する。第126号掘立柱建物跡と大きく重複するが、その新旧関係は確認できなかった。東側は調査区外となるため、全体の規模

は明らかでない。東辺中央に柱穴が検出されなかった
ので、桁方向は3間以上になるものと考えられる。仮
に3間×2間の側柱建物とすれば、桁行5.40m、梁行
3.82mの東西棟となり、面積は20.63㎡を測る。柱間
は桁行1.98m、梁行1.91mであるが、桁行は一定しな
い。主軸方向はおおよそN-13°-Wを指す。

柱穴は径32~46cmの円形で、深さは12~36cmを測る。
それらの配置は、上述のように桁方向が不定である上、
西辺中央の柱穴は柱筋の外へ出ている。そのP₄のみ
は柱痕が明瞭で、充填土も版築状に良く締まっていた。

遺物は少量かつ細片ばかりであるが、土師器の甕や
坏が出土している。

第126号掘立柱建物跡（第7・348図）

Y-20・Z-20グリッドに位置する。北西隅で第
570号住居跡を切るが、南西で重複する第577・578号

住居跡との新旧関係は、確認できなかった。東側は調
査区外となるため、梁行の間数や全体の規模は明らか
とし得ない。可能性としては、4間×2間の側柱建物
が考えられる。その場合の規模は、桁行11.40m、梁
行5.00m、面積57.00㎡となる。柱間は桁行2.85m、梁
行2.50mで、主軸方向はおおよそN-19°-Wを指す。

柱穴は径100~120cmの方形を基本とし、深さは80~
100cmを測る。底面は平坦で、これより立ち上がる壁
は垂直に掘り込まれる。配置は整然となされ、柱筋の
通りも良い。柱は抜き取られており、それぞれの柱穴
には抜き取り穴が張り出している。充填土は地山土と
腐植土を交互に詰め込み、版築状としている。

遺物の出土はわずかで、かつ微細な破片ばかりであ
る。図示したもののほか、土師器の甕や坏、須恵器の
甕がある。

第148表 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	種類	規 模			主軸方向	備 考
			桁行 (m)	梁行 (m)	面積 (㎡)		
63	X-18	側	(10 (19.70))	3 (5.40)	(106.38)	N-59°-E	
78	Y-19	側	2 (4.95)	2 (4.20)	20.79	N-20°-E	
80	AA-20	側	7 (14.00)	2 (4.20)	58.80	N-17°-W	西面に庇 SJ 577・SB 126より新
99	AG-22	側	2 (6.05)	2 (4.65)	28.13	N-33°-W	
100	AF-22	総	2 (4.42)	(2 (3.80))	(16.80)	N-50°-E	
101	AF-22	側	2 (4.42)	1 (2.92)	12.91	N-53°-E	
102	AG-22	側	2 (4.06)	2 (3.72)	61.32	N-34°-W	
103	AH-23	-	3 (5.20)	(1 (2.40))	(12.48)	N-55°-E	
104	AG-20	側	4 (7.04)	3 (5.40)	38.02	N-32°-W	SJ 382より新
105	AH-24	側	(2 (3.30))	2 (3.00)	(9.90)	N-28°-W	SJ 393・394より新
106	AH-18	(総)	2 (4.66)	(1 (2.10))	(9.79)	N-38°-W	SJ 377・379・380・381より新
107	AI-20	総	2 (3.86)	2 (3.50)	13.51	N-37°-W	
108	AH-21	側	4 (8.40)	2 (4.40)	39.96	N-38°-W	SJ 386より新 SB 109より古
109	AH-21	側	(2 (4.38))	(1 (2.20))	(9.64)	N-35°-W	SB 108より新
110	AI-22	側	3 (3.45)	2 (3.20)	11.04	N-30°-W	
111	AI-21	側	3 (6.10)	3 (5.60)	34.16	N-40°-W	SJ 355より新
112	AI-24	側	3 (5.30)	1 (2.14)	11.34	N-40°-W	SJ 407・408より新 総柱建物の可能性あり
113	AJ-25	総	2 (3.76)	2 (3.24)	12.18	N-60°-E	
114	AI-22	側	3 (4.60)	2 (3.10)	14.26	N-32°-W	SJ 411より新
115	AK-25	側	(2 (3.80))	(2 (3.10))	(11.78)	N-2°-E	
116	AM-25	総	3 (4.80)	2 (2.85)	13.68	N-32°-W	北・西面に庇
117	AM-25	側	3 (4.67)	2 (4.53)	21.15	N-73°-E	
118	AM-24	側	(4 (8.96))	(3 (5.76))	(51.61)	N-43°-E	
119	AN-24	側	3 (5.66)	(2 (4.00))	(22.64)	N-51°-E	
120	AL-21	総	(2 (3.60))	(2 (3.60))	(12.96)	N-6°-W	SJ 546より新
121	AK-25	側	2 (3.40)	2 (3.06)	10.40	N-37°-W	SJ 445・457より新
122	AN-26	側	2 (3.90)	3 (3.60)	14.04	N-29°-W	SJ 463より新
123	AN-27	側	(3 (4.40))	2 (3.20)	(14.08)	N-89°-W	
124	欠番						
125	Y-20	側	(3 (5.40))	2 (3.82)	(20.63)	N-13°-W	
126	Z-20	側	4 (11.40)	(2 (5.00))	(57.00)	N-19°-W	SJ 570より新

3. 柵列跡

柵列跡は同等規模の柱穴が、ほぼ等間隔で直線的に並ぶものである。多くは一辺ないし二辺からなり、掘立柱建物跡と認定できなかったものを含む。住居跡や掘立柱建物跡に伴うことが明らかなものもなく、「柵」遺構とする根拠は乏しいが、このような柱穴列を一括して扱うこととした。

今回の対象は5列であるが、第9・11号柵列跡は1本の柱穴を共有し、「L」字形の配置となっている。

いずれも柱穴は小型で、円形の浅いものである。

遺物の出土は一切認められなかった。

第8号柵列跡 (第10・351図)

AM-24・AN-24グリッドに位置する。第118・119号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。第461号住居跡の南壁近くから、南東の第113号溝跡手前まで続く。検出は5間分、長さにして9.30mである。柱間は約1.86mで、北を指準とする軸方向は、ほぼN-23°-Wを指す。

柱穴は径17~38cmの円形で、深さ20~26cmを測る。柱筋の通りはやや悪いものの、概ね直線的と言える。柱痕はP₂のみ確認された。

第9・11号柵列跡 (第10・351図)

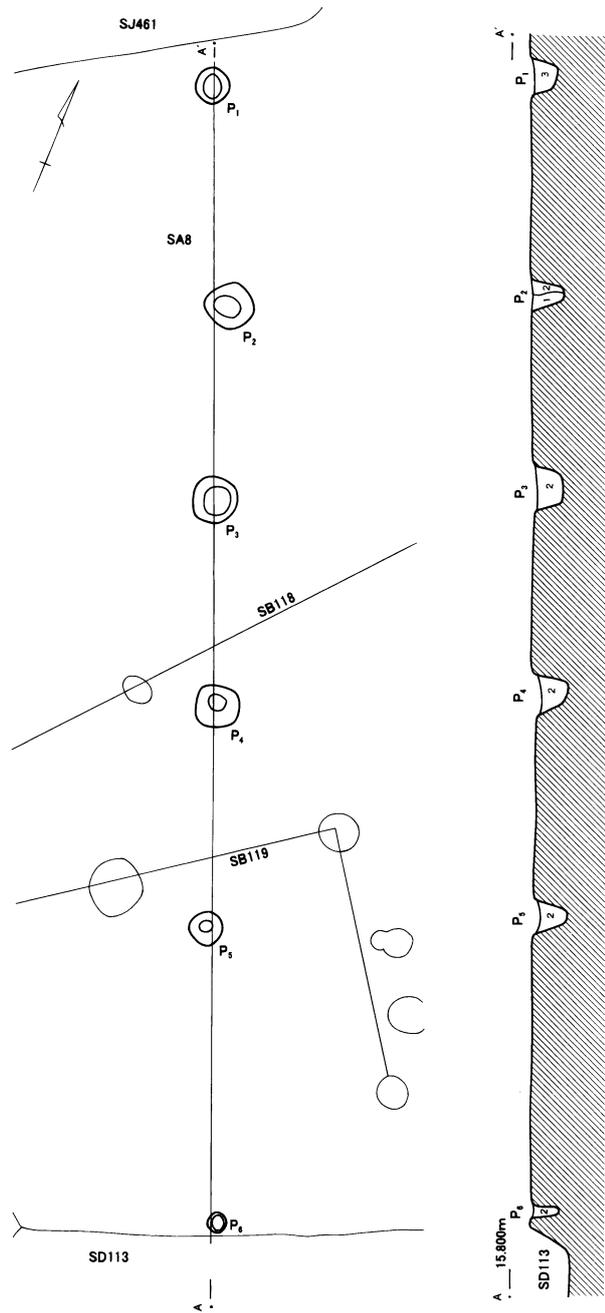
AK-22・23グリッドに位置する。P₁を軸に南西方向へ延びるものが第9号柵列跡、南東方向へ延びるものが第11号柵列跡であり、全体的には「L」字状を呈する。柱穴の配置は悪く、南側での検出もないが、掘立柱建物跡である可能性も否定しきれない。

第9号柵列跡は3間分、長さにして5.15mである。柱間は約1.71mで、軸方向はほぼN-40°-Eを指す。

第11号柵列跡は2間分、長さにして7.85mである。柱間は約3.25~4.32mで、北を指準とした時の軸方向は、ほぼN-40°-Wを指す。

第9号柵列跡の柱穴は径48~53cmの円形で、深さ18~40cmを測る。柱は抜き取られたようで、柱痕は観察されなかった。柱筋の通りは悪く、大きくずれるものもある。

第350図 第8号柵列跡



- 第8号柵列跡 土層説明
1. 10YR3/1 黒褐色土 柱痕。
 2. 10YR2/3 黒褐色土 充填土。
 3. 10YR3/3 暗褐色土 充填土。

0 2m

第351図 第9・10・11号柵列跡



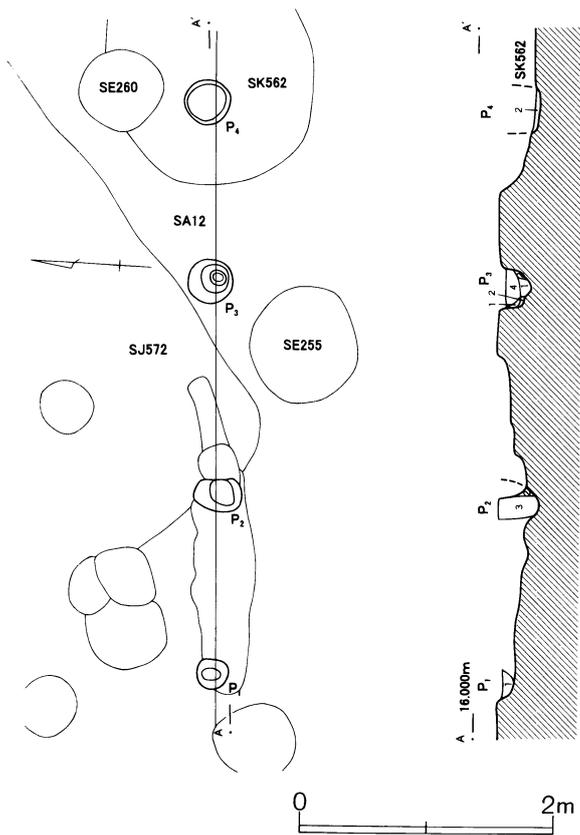
第11号柵列跡の柱穴も円形を基本とするが、径30～50cmと一定せず、深さも18～43cmとまちまちである。なお、第431号住居跡の支柱穴(P₃)、および第223号井戸跡の位置にそれぞれ1本想定できたとしても、P₂とP₃の間がかなりあいてしまうことから、P₃は

単独の柱穴とすべきかもしれない。

第10号柵列跡 (第10・351図)

AK-22・23グリッドに位置する。第11号柵列跡に沿うように延びる。検出は3間分、長さにして5.10mである。柱間は約1.75mで、北を指準とする軸方向

第352図 第12号柵列跡



第12号柵列跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土のブロックを含む。充填土。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土のブロックを含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・焼土ブロックを上層に多く含む。柱痕。
4. 10YR2/2 黒褐色土 柱抜き取り後の堆積土。

は、およそN-47°-Wを指す。

柱穴は径42~50cmの不整な円形で、深さは9~25cmと一定しない。柱筋の通りは良いが、柱痕は観察できなかった。

第12号柵列跡 (第7・352図)

X-19グリッドに位置する。P4は第562号土壌に切られるが、第572号住居跡との重複関係は明らかでない。検出は3間分、長さにして4.39mである。柱間は約1.46m、北を指準とする軸方向は、およそN-85°-Eである。

柱穴は径34~36cmの円形で、深さは20~32cmを測る。柱筋の通りは良く、等間隔で直線的に並ぶ。部分的ながら、柱痕が観察された。

第149表 柵列跡一覧表

番号	位置	長さ(m)	柱間(m)	主軸方向	備考
8	AM-24	9.30	1.86	N-23°-W	
9	AK-22	5.15	1.71	N-40°-E	
10	AK-22	5.10	1.75	N-47°-W	
11	AK-22	7.85	3.25~4.32	N-40°-W	
12	X-19	4.39	1.46	N-85°-E	SK 562より古

4. 土壌

本書の対象となる土壌は、第414号から第585号までである。但し、第422・443・448号の3基は、既に『築道下遺跡Ⅱ』で報告を行っており、第458・459号は欠番である。このため、以下ではこれらを除いた167基について報告する。なお、第366号土壌も報告済みではあるが、紡錘車が今後の整理分に混入していたため、これを掲載する。

土壌は特に集中して分布する傾向もなく、遺跡全体に散在している。大きさは直径1 m前後、深さ50cm以下のものがほとんどである。

出土遺物から見た土壌の時期は、古墳時代から中世までに及んでいる。

第414号土壌（第9・353図）

A F-22グリッドに位置する。第360号住居跡、および第106号溝跡と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径1.05 m × 0.94 mの不整な円形で、確認面からの深さは21cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

遺物は微量ながら、古墳時代後期の甕や坏が出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第415号土壌（第9・353図）

A F-22グリッドに位置する。第360号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。平面は径1.22 m × 1.18 mの円形で、深さは27cmを測る。底面は中央部がやや高まるものの、ほぼ平坦である。

覆土より少量の土師器(甕・坏)が出土しているが、図示することができたのは2点(第370図1・2)のみである。

第416号土壌（第9・353図）

A F-22グリッドに位置する。東側を第143号井戸跡に掘り抜かれる。平面は径1.01 m × 0.90 mの円形で、深さは31cmを測る。底面は皿状の窪みとなっている。

覆土からは土師器の甕や坏が少量出土したが、微細な破片であるため、図示できたのは1点(第370図3)

にすぎない。

第417号土壌（第9・353図）

A F-23グリッドに位置する。第418号土壌の南端部を掘り抜いて構築される。平面は不整な長方形で、径2.32 m × 0.94 m、深さ13cmを測る。底面は皿状を呈する。

覆土は灰や焼土を多く含み、カマドのそれを思わせる。しかし対応すべき住居跡は、これをまったく確認できなかった。カマドの可能性は否定できないが、確証を得られないため、土壌として取り扱った。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示することは叶わなかった。

第418号土壌（第9・353図）

A F-23グリッドに位置する。第417号土壌、および第143・144号井戸跡に切られる。平面は径1.14 m × 0.76 mの不整な楕円形で、深さは約16cmを測る。底面は概ね平坦である。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)をわずかに出土したが、微細な破片のため図示できなかった。

第419号土壌（第9・353図）

A F-22グリッドに位置する。第357号住居跡を切って構築されるが、隣接する第420号土壌との関係は明らかでなかった。平面は径1.31 m × 1.23 mの円形で、深さは15~32cmを測る。底面は皿状に窪み、中心に径23cm程の小穴を穿つ。

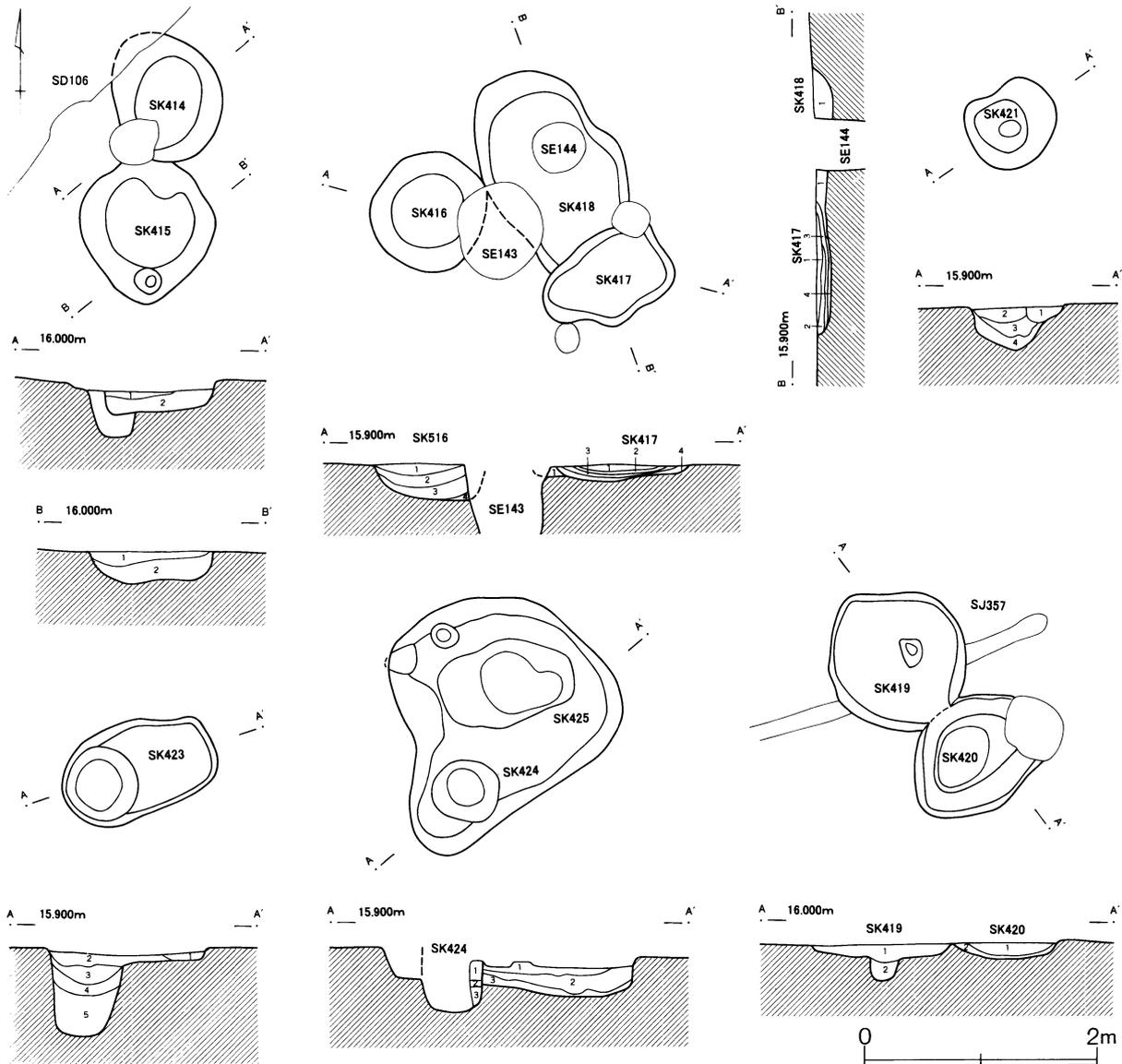
遺物は図示し得なかったが、古墳時代後期の土師器(甕)片2点が出土している。

第420号土壌（第9・353図）

A F-22グリッドに位置する。第419号土壌の南に隣接する。平面は不整な円形で、径1.25 m × 1.05 m、深さ14cmを測る。底面は皿状で、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・赤色塗彩の高坏・坏)がわずかながら出土している。但し、い

第353図 土壌 (1)



第414・415号土壌 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化粒・地山粒を含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・焼土ブロックを多く含む。

第416号土壌 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・ブロック・炭化物粒を含む。
2. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・ブロックを多く含む。地山粒を含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘土粒・ブロック・焼土粒を含む。
4. 10YR5/6 黄褐色土 地山主体。

第417号土壌 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR6/1 褐灰色土 灰主体。
3. 10YR3/1 黒褐色土 炭化物主体。
4. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒を含む。

第418号土壌 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・焼土ブロックを含む。地山粒を多く含む。

第419号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・焼土粒を含む。

第420号土壌 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。

第421号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒・焼土粒を含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 1層に炭化物が加わったもの。
3. 10YR2/2 黒褐色土 1層より構成粒が大きい。
4. 10YR2/2 黒褐色土 1層より地山粒が大きく、未風化。

第423号土壌 土層説明

1. 10YR2/1 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒を含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 1層より地山多く、やや小粒。
3. 10YR3/4 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒を多く含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 3層より地山極めて少ない。
5. 10YR3/4 黒褐色土 3層に同じ。

第424号土壌 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。人為的埋め戻し。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロックを多く含む。人為的埋め戻し。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。人為的埋め戻し。

第425号土壌 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック・黒褐色土粒を多く含む。砂質。人為的埋め戻し。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。砂質。人為的埋め戻し。
3. 10YR4/6 褐色土 地山ブロックと黒褐色土ブロックの混合土。人為的埋め戻し。

ずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第421号土壌（第9・353図）

A F-21グリッドに位置する。平面は径0.80m×0.66mの不整形で、深さは36cmを測る。底面は丸く、壁の立ち上がりは急である。

覆土は腐植土を主体とするものの、故意に埋め戻されたものようである。

遺物の出土は少なく、かつ微細な破片ばかりであった。古墳時代後期の土師器(甕・坏)が見られるが、図示するには至らなかった。

第422号土壌 『築道下遺跡Ⅱ』において既報告。

第423号土壌（第9・353図）

A F-21グリッドに位置する。第349号住居跡内に掘り込まれているが、その重複関係は明らかとし得なかった。平面は径1.38m×0.62mの長方形で、深さは5cm前後である。底面はおおよそ平坦で、西端部はこれよりさらに掘り込まれる。この部分は径65cmの円形を呈し、深さは71cmを測る。

覆土は腐植土を主体とするが、人為的な埋め戻しのようである。

遺物の出土は見られなかった。

第424号土壌（第9・353図）

A H-24グリッドに位置する。第425号土壌の南端部を掘り抜いて構築される。平面は径0.86m×0.58mの円形で、深さは45cmを測る。

全体は掘立柱建物跡の柱穴状で、柱痕は観察されなかったものの、覆土も充填土を思わせる。しかし、相応の建物跡は検出されなかったため、土壌として処理した。

遺物の出土は見られなかった。

第425号土壌（第9・353図）

A H-24グリッドに位置する。南端部を第424号土壌に切られる。平面は径2.01m×1.76mの不整形で、深さ25cmを測る。底面は北側が深くなる。

覆土は地山と腐植土の大型ブロックからなる、人為的な埋め戻しである。

遺物の出土は認められなかった。

第426号土壌（第9・354図）

A G-20グリッドに位置する。第382号住居跡の床を掘り抜き、肩部を第104号掘立柱建物跡(P₂)に切られる。平面は径1.36m×1.35mの円形で、確認面からの深さ56cmを測る。壁の立ち上がりは急で、底面は中央部が一段深くなる。

覆土は自然堆積で、焼土や炭化物を良く含む。これは第382号住居跡のカマドがすぐ脇となるため、その覆土から流入したものと思われる。

遺物の出土は見られなかった。

第427号土壌（第9・354図）

A I-19グリッドに位置する。第388・389・398号住居跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかとし得なかった。平面はきれいな長方形を呈し、径2.12m×1.33m、深さ14cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりも急である。

覆土は砂質の地山を主体とすることから、人為的に埋め戻されたと判断される。

覆土からは少量の土師器(甕・坏・赤色塗彩の坏)が出土している。いずれも細片であるため、図示し得たのは1点(第370図4)のみである。

第428号土壌（第7・368図）

X-19グリッドに位置する。第77号溝跡、および第575・576号土壌と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかにできなかった。平面は径3.76m×3.41mの不整形で、確認面からの深さは37cmを測る。底面はおおよそ平坦なものと言えよう。

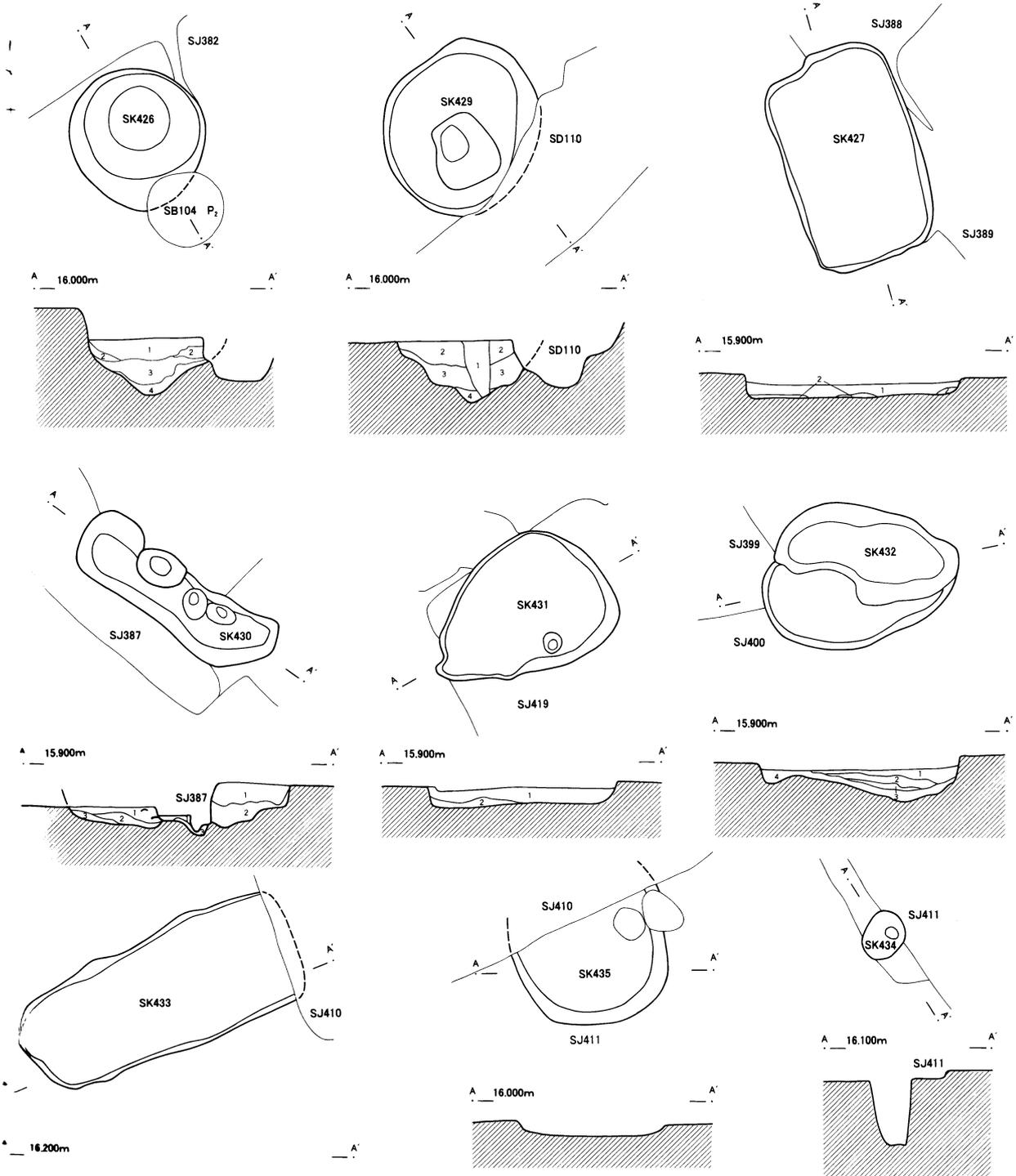
遺物の出土は見られなかった。

第429号土壌（第9・354図）

A H-19グリッドに位置する。埋没後、南側肩部を第110号溝跡に切られる。第378号住居跡内に掘り込まれているが、重複関係は明らかにできなかった。平面は径1.69m×1.24mの楕円形で、深さは60cmを測る。底面、および壁面は凹凸が激しい。

遺物は微細な破片ばかりで図示できなかったが、奈良時代の須恵器、土師器が出土している。

第354図 土壌 (2)



- 425号土壌 土層説明
 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土・炭化物含む。
 2. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒を多く含む。
 3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒・ブロック含む。
 4. 10YR5/8 黄褐色土 炭化物粒を混入。
- 426号土壌 土層説明
 1. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒・砂質ブロックを混入。
 2. 10YR6/6 明黄褐色土 砂質土主体。

- 第429号土壌 土層説明
 1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒含む。
 2. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒混入。
 3. 10YR4/6 褐色土 地山多く含む。
 4. 10YR5/8 黄褐色土 地山主体。
- 第430号土壌 土層説明
 1. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック含む。
 2. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック含む。
 3. 10YR4/4 褐色土 地山主体。

- 第431号土壌 土層説明
 1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・地山ブロック含む。
 2. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・地山粒含む。

- 第432号土壌 土層説明
 1. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。
 2. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック含む。
 3. 10YR4/4 褐色土 黒色土ブロック含む。
 4. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック含む。
- 第433号土壌 土層説明
 1. 10YR3/3 暗褐色土 大型地山ブロック含む。埋め戻し。

第430号土壌 (第9・354図)

A I-20グリッドに位置する。埋没後、第387号住居跡に大きく切られる。平面は細長い溝状で、径2.19 m×0.56 m、深さ44 cmを測る。底面には小穴が多く、細かい凹凸を生じている。

覆土はほとんど地山のブロックであることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第431号土壌 (第9・354図)

A I-24グリッドに位置する。第419号住居跡の内部に掘り込まれるものの、その重複関係は確認できなかった。平面的には不整形な形で検出されたが、本来は方形を意識したもののようである。径1.86 m×1.13 m、深さ17 cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりも急である。

覆土からは土師器、および須恵器の甕・坏が出土している。但し、細かい破片ばかりであり、図示できたのは2点(第370図5・6)にすぎない。

第432号土壌 (第9・354図)

A I-24グリッドを中心に位置する。第399・400号住居跡と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。平面は楕円を二つ重ねたような形で、径1.96 m×1.23 m、深さは最大33 cmを測る。底面は中心から東へ深くなる。

覆土は腐植土と地山のブロックを主体とすることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

遺物の出土は見られなかった。

第433号土壌 (第9・354図)

A I-21・22グリッドに位置する。東端部は第410号住居跡の覆土を切り込んでいる。平面は径2.88 m×1.05 mの整った長方形で、深さは5 cmを測る。底面は緩やかな凹凸を有する。

覆土は人為的な埋め戻しと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第434号土壌 (第9・354図)

A I-22グリッドに位置する。第411号住居跡の壁と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。

た。平面は径0.43 m×0.38 mの不整形な円形で、深さ57 cmを測る。

当初、第114号掘立柱建物跡の柱穴として調査に臨んだが、形状や覆土が異なっていることから、単独の遺構として処理した。土壌というより、ピットとしたほうが良いかもしれない。

遺物の出土は見られなかった。

第435号土壌 (第9・354図)

A I-22グリッドに位置する。第410・411号住居跡と重複するが、その切り合い関係は確認できなかった。検出分は径1.57 m×1.07 mの半円形ながら、本来は楕円形であったものと思われる。第411号住居跡床面からの深さは、約13 cmである。底面は皿状に中央部が窪む。

図示し得たものはわずか(第370図7~10)だが、覆土からは須恵器の甕・蓋・坏、土師器の甕・坏が出土している。

第436号土壌 (第9・355図)

A I-24グリッドに位置する。第419号住居跡、第163号井戸跡をそれぞれ切る。北西部はピット状に突出し、しかも一段深く掘り込まれている。平面的には径2.22 m×1.92 mの不整形となり、深さは突出部で22 cmを測る。底面は概ね平坦である。

覆土からは土師器の甕・坏、須恵器の長頸瓶・蓋・坏など(第370図11~22)が集中して出土している。いずれも破片ではあるが、須恵器には湖西や末野の製品が見られる。

第437号土壌 (第9・355図)

A J-23グリッドに位置する。第430号住居跡の覆土上に検出された。平面は径1.04 m×0.45 mのやや崩れた楕円形で、深さは14 cmを測る。底面は長軸の南へ向けてやや傾斜する。

覆土中には焼土や炭化物を良く含み、壁の一部も火熱を受け焼土化している。形状とともに判断するならば、カマド燃焼部の可能性は極めて高いと言える。しかし、これに対応する住居跡が検出できなかったため、土壌として取り扱うこととした。

遺物の出土は少量で、図示し得るものもわずか(第370図23・24)である。

第438号土壌 (第9・355図)

AH-21グリッドに位置する。平面は円形を呈し、径1.31m×1.30mのきれいな円形で、深さは11cmを測る。底面は皿状に中央が窪む。

遺物の出土は認められなかった。

第439号土壌 (第9・355図)

AI-23グリッドに位置する。第426号住居跡と重複するが、その新旧関係は明らかでない。平面は径1.71m×1.37mの楕円形で、深さは23cmを測る。底面はおおよそ平らながら、東端部は円形に一段深く掘り込まれる。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)がわずかに出土したが、微細な破片のため図示できなかった。

第440号土壌 (第9・355図)

AI-23グリッドに位置する。第425号住居跡を掘り込んで構築されるが、第426号住居跡との関係は明らかにならなかった。平面は径1.97m×1.41mの不整な長方形で、深さは16cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土からは、奈良時代の土師器(甕・坏)が出土している。いずれも微細な破片であるため、図示することができなかった。

第441号土壌 (第9・355図)

AI-23グリッドに位置する。第426号住居跡を掘り抜く。平面はやや崩れた長方形で、径1.97m×1.14m、第426号住居跡床面からの深さ9cmを測る。底面は概ね平坦である。

覆土からは古墳時代後期の土師器(甕・坏)、奈良時代の須恵器(甕)をわずかながら出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第442号土壌 (第10・355図)

AJ-24グリッドに位置する。第436号住居跡北東壁の一部を掘り抜く。平面は不整な長方形で、径1.46m×1.05m、確認面からの深さ13cmを測る。底面は緩

やかな凹凸を有する。

覆土からは、器形の窺える土師器が集中して出土している。大半は坏で、これに甕の小片が混在する(第371図25~35)。

第443号土壌 『築道下遺跡II』において既報告。

第444号土壌 (第10・355図)

AK-21グリッドに位置する。第440号住居跡、および第540号住居跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかとし得なかった。平面は長方形を意識したもののようで、径0.99m×0.91m、深さ50cmを測る。底面は平坦で、壁はこれより垂直に立ち上がる。

覆土からは少量の土師器・須恵器が出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第445号土壌 (第10・355図)

AK-21グリッドに位置する。平面は径0.87m×0.84mの円形で、深さ95cmを測る。底面は平坦で、横断面は円筒状を呈する。

遺物の出土は見られなかった。

第446号土壌 (第10・356図)

AK-25グリッドに位置する。第448~450号住居跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は確認できなかった。平面は径0.65m×0.61mの円形で、深さ21cmを測る。底面は細かい凹凸を生じている。

調査当初は第450号住居跡の貯蔵穴、ないしは支柱穴かとも考えたが、位置や形状、覆土の状態から単独の遺構と判断した。

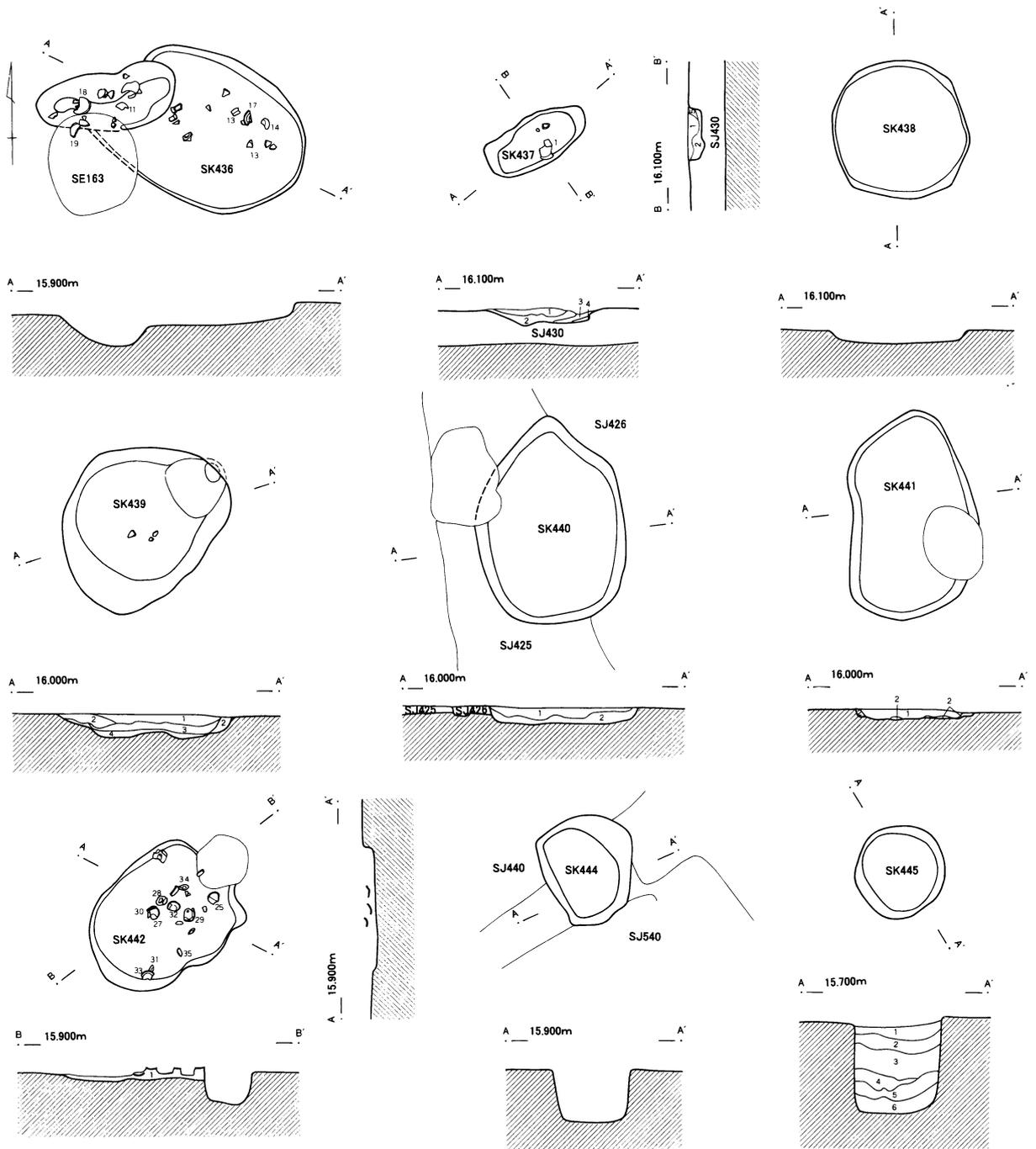
覆土上層より土師器の破片が出土しているが、図示するには至らなかった。

第447号土壌 (第9・356図)

AF-20・21グリッドに位置する。第349号住居跡の西端部に重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径1.44m×1.19mの楕円形で、深さ30cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

古墳時代後期の土師器(甕)をわずかに出土したが、微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第355図 土壌 (3)



第437号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・ブロック・炭化物粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 第1層に比べ、焼土ブロックを多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 若干の焼土粒・炭化物粒を含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘質土を混入。
5. 10YR4/2 灰黄褐色土 第4層に近似するが、やや焼土粒を含む。

第439号土壌 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・ブロックを多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒を混入。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 砂質粒を含み、炭化物粒・ブロックを多く含む。
4. 10YR6/6 明黄褐色土 砂質の地山粒を混入。

第440号土壌 土層説明

1. 5Y5/6 オリーブ色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 7.5YR6/6 橙色土 地山粒・ブロックを含む。

第441号土壌 土層説明

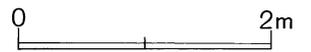
1. 5Y5/6 オリーブ色土 焼土粒・ブロックを多く含む。炭化物粒を含む。
2. 7.5YR6/6 橙色土 地山粒・ブロックを含む。しまりあり。

第442号土壌 土層説明

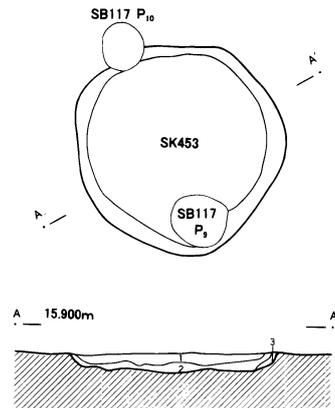
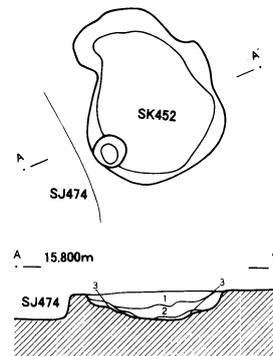
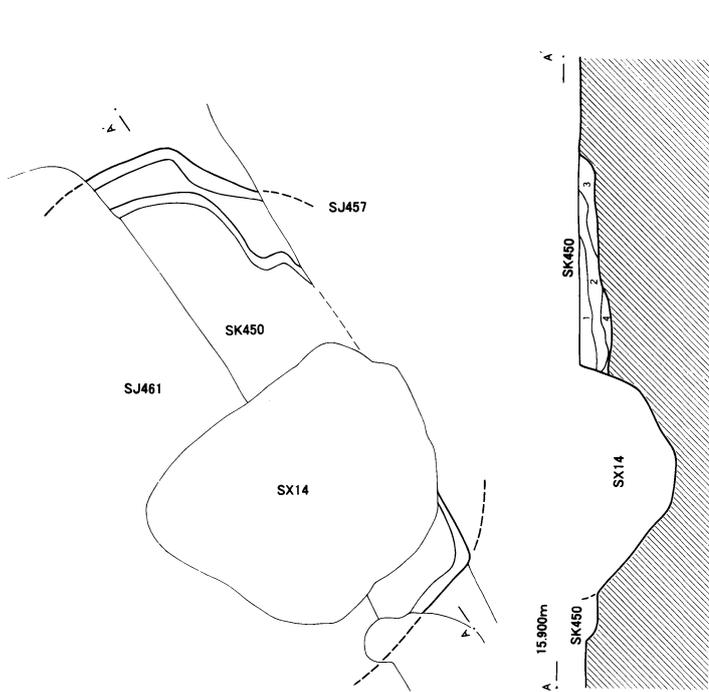
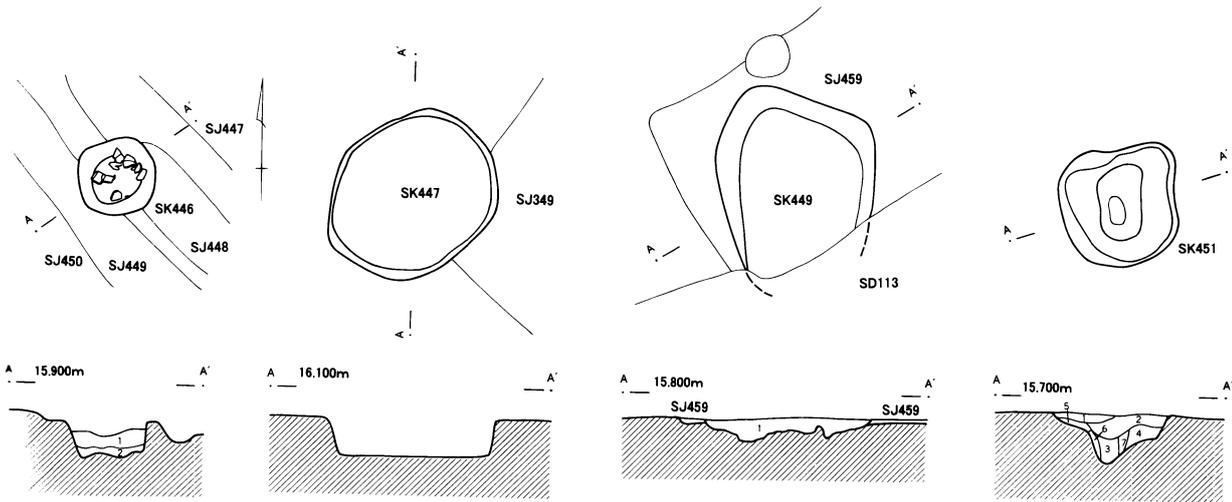
1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・粘土ブロックを含む。

第445号土壌 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 大型の地山粒を少量含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 大型の地山粒を少量含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 大型の地山粒を多く含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を少量含む。
6. 10YR7/6 黄褐色土 黄褐色地の粘質土主体。黒色土粒を微量に含む。



第356図 土壌(4)



第446号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物粒を含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山粒を含む。

第449号土壌 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土ブロックを多く含む。人為的埋め戻し。

第450号土壌 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロックを多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒・炭化物粒を微量に含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを少量含む。

第452号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 微細な地山粒を多く含む。空隙に灰色粘質土入る。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。しまり・粘性強い。
3. 10YR4/6 褐色土 地山。壁の溶軟化層。

第451号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 粘質土。
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘質土。
3. 10YR3/4 暗褐色土 黒褐色粘質土ブロックを含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘質土。
5. 10YR4/6 にぶい黄褐色土 黒褐色粘質土ブロックを含む。
6. 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い。粘質土。
7. 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い。粘質土。

第453号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・灰色粘質土多く、焼土・炭化物微量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・炭化物多く含む。
3. 10YR4/6 褐色土 地山。壁の溶軟化層。



第448号土壌 『築道下遺跡Ⅱ』において既報告。

第449号土壌 (第10・356図)

AM-26グリッドに位置する。第459号住居跡の床を掘り抜く土壌であるが、第113号溝跡との関係は明らかにできなかった。検出した部分は径1.44m×1.16m、深さ17cmである。本来は楕円形であったものと判断され、底面と壁面は細かい凹凸が付く。

覆土は地山ブロックが主体であることから、人為的な埋め戻しと判断される。

遺物の出土は認められなかった。

第450号土壌 (第10・356図)

AL-24グリッドに位置する。第457・461号住居跡、および第14号性格不明遺構に大きく切られる。このため、全体の規模や形状は明らかでない。検出範囲では4.30m×0.89m、深さ24cmを測る。底面は皿状で、中央部へ向け緩やかに傾斜する。

覆土は地山を主体とすることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第451号土壌 (第11・356図)

AM-27グリッドに位置する。平面は径0.94m×0.92mの不整形で、深さは39cmを測る。底面は2段となり、中央部は円形に掘り込まれる。

土壌として処理した遺構ではあるが、覆土には柱痕と思しき部分も観察された。しかし、他に掘立柱建物跡を構成するような柱穴は検出されず、南側に位置する第122号掘立柱建物跡の柱穴とも規模は異なる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第452号土壌 (第10・356図)

AM-24グリッドに位置する。平面は径1.41m×1.09mの不整形で、深さは23cmを測る。底面は緩やかなU字状を呈する。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土しているが、いずれも微細な破片で図示できなかった。

第453号土壌 (第10・356図)

AM-24・25グリッドに位置する。南北の肩部に第117号掘立柱建物跡の柱穴が重複するが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径1.66m×1.64mの円形で、深さは15cmを測る。底面は概ね平坦で、壁の立ち上がりは急である。

古墳時代後期の土師器(甕)を少量出土しているが、微細な破片のため図示し得なかった。

第454号土壌 (第10・357図)

AM-25・26グリッドに位置する。第116号掘立柱建物跡の柱穴と重複するが、その関係は確認できなかった。平面は径1.68m×1.52mの円形で、深さは40cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはやや緩めである。

覆土からは土師器の甕や坏、須恵器の坏などが出土している。細かい破片がほとんどで、図示できたものはわずか(第371図36~40)である。

第455号土壌 (第11・357図)

AO-24グリッドに位置する。第483号住居跡の北隅部を切る。平面は径1.85m×1.38mのやや崩れた楕円形で、深さは9cmを測る。底面はおおよそ平坦である。

覆土中より埴型の壺が出土している(第371図41)。

第456号土壌 (第11・357図)

AO-24グリッドに位置する。第485号住居跡の覆土を切り込み、埋没後に第482号住居跡に切られる。平面は径1.46m×0.76mの楕円形で、確認面からの深さは13cmを測る。底面はほぼ平坦である。

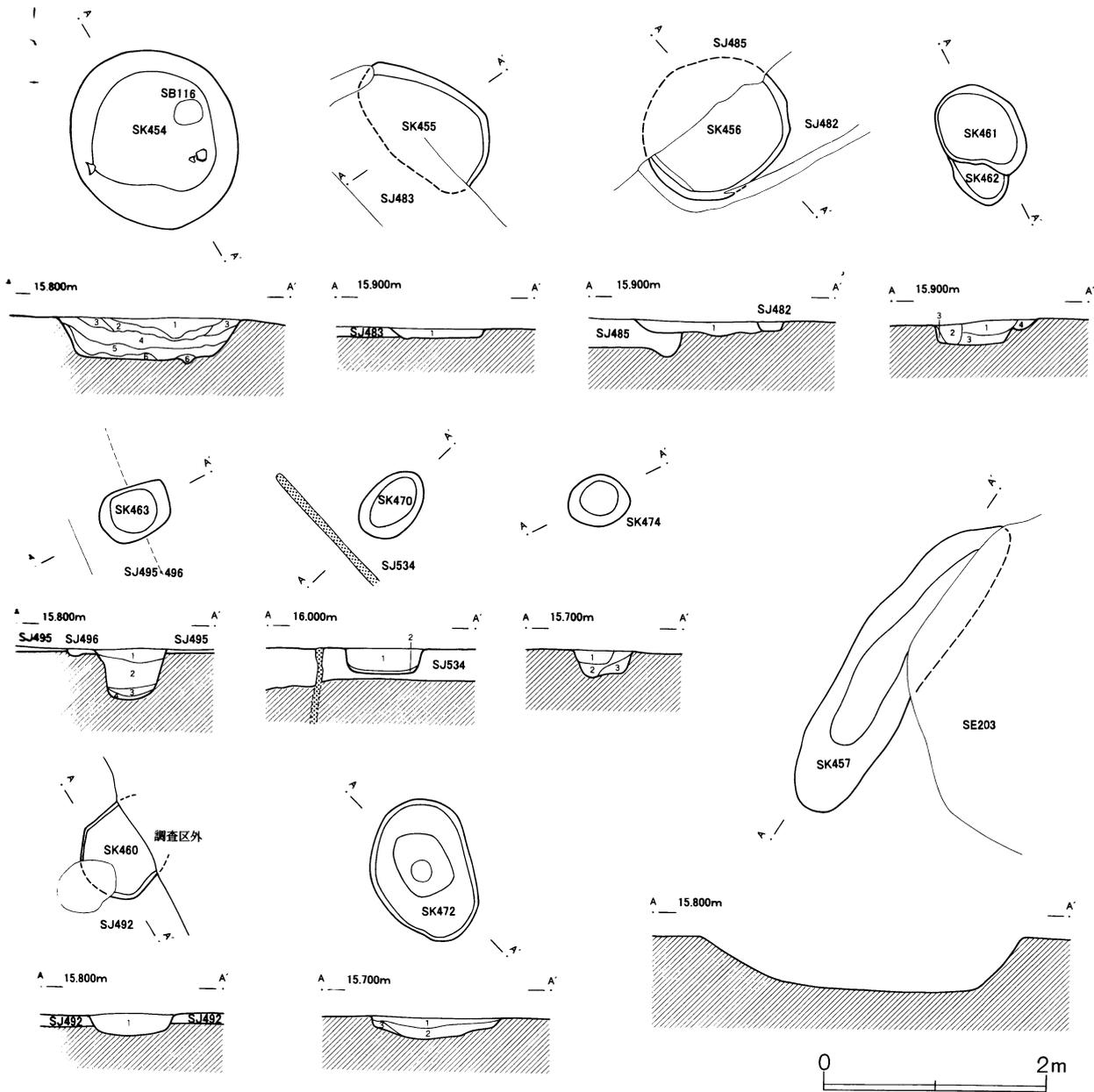
遺物の出土は見られなかった。

第457号土壌 (第10・357図)

AM-26グリッドに位置する。第203号井戸跡に北側を切断される。平面は細長い溝状で、径2.94m×0.67m、深さ46cmを測る。底面は南から北へわずかに傾斜する。

古墳時代後期の土師器(甕)を数点出土したが、微細な破片のため図示できなかった。

第357図 土壌 (5)



第454号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 溶化進行した地山粒・焼土・白色バミス微量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒多。白色バミス(火山灰?)含みザラザラ。
3. 10YR3/3 暗褐色土 微量の地山粒・焼土含むが、概ね単一的。しまり・粘性強い。
4. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・ブロック(やや砂質)よく含む。若干の焼土粒含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 多量の砂質地山ブロック含む。
6. 10YR4/6 褐色土 砂質ブロック主体。壁の崩落及び底のさらい残し。

第455号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。

第456号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロックを少量含む。

第460号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を少量含む。

第461号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒まだらに混入。
2. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒を含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 しまり強い。
4. 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒を含む。

第463号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを少量含む。
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを非常に多く含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第470号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロックを多く含む。人為的埋め戻し。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロックを含む。壙底(床土)に敷き詰めた土層。

第472号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒を非常に多く含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粒を非常に多く含む。

第458・459号土壌 欠番

第460号土壌 (第11・357図)

AO-27グリッドに位置する。第492号住居跡の床を掘り抜き、北東部分は調査区外となる。平面は径0.74m×0.64m程の円形を呈すると思われる。確認面からの深さは19cmで、底面は皿状に窪む。

覆土からは土師器の甕や甌、坏などが少量出土している。微細な破片が多く、図示し得たのは1点のみ(第371図42)である。

第461号土壌 (第11・357図)

AO-25グリッドに位置する。南端部で第462号土壌を掘り抜く。平面は径0.87m×0.74mの不整な円形で、深さは21cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

古墳時代後期の土師器(甕・赤色塗彩の坏など)を少量出土したが、微細な破片で図示できなかった。

第462号土壌 (第11・357図)

AO-25グリッドに位置する。北側を第461号土壌に切り取られる。検出部は径0.48m×0.39mの半円形で、深さは11cmを測る。底面は丸みを帯びる。

遺物の出土は見られなかった。

第463号土壌 (第11・357図)

AP-26グリッドに位置する。第495・496・497号住居跡の床を掘り抜く。平面は径0.66m×0.48mの隅丸方形で、確認面からの深さは46cmを測る。底面は丸みを帯び、壁の立ち上がりは急である。

位置や形状から、第497号住居跡の貯蔵穴かとも思われたが、切り合い関係からその可能性は否定された。

覆土は地山を主体としており、人為的な埋め戻しと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第464号土壌 (第11・358図)

AO-27グリッドに位置する。第495・496号住居跡、および第578号土壌を切るが、第465・466号土壌との重複関係は明らかにできなかった。平面は径1.39m×1.05mの円形で、確認面からの深さは27cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土からは図示した土製丸玉(第423図8)のほか、古墳時代後期の土師器(甕)を少量出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第465号土壌 (第11・358図)

AO-27グリッドに位置する。第495・496号住居跡、第578号土壌を切るが、第464号土壌との重複関係は明らかにできなかった。平面は径1.66m×1.06mの楕円形で、確認面からの深さは31cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は地山を主体とすることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)をわずかに出土したが、図示するには至らなかった。

第466号土壌 (第11・358図)

AO-27・AP-27グリッドに位置する。第495・496号住居跡、および第578号土壌を切るが、第464号土壌との重複関係は明らかとし得なかった。平面は径1.09m×1.06mの円形で、確認面からの深さは24cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は第465号土壌に酷似しており、故意の埋め戻しを思わせる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕)を少量出土したが、図示するには至らなかった。

第467号土壌 (第11・358図)

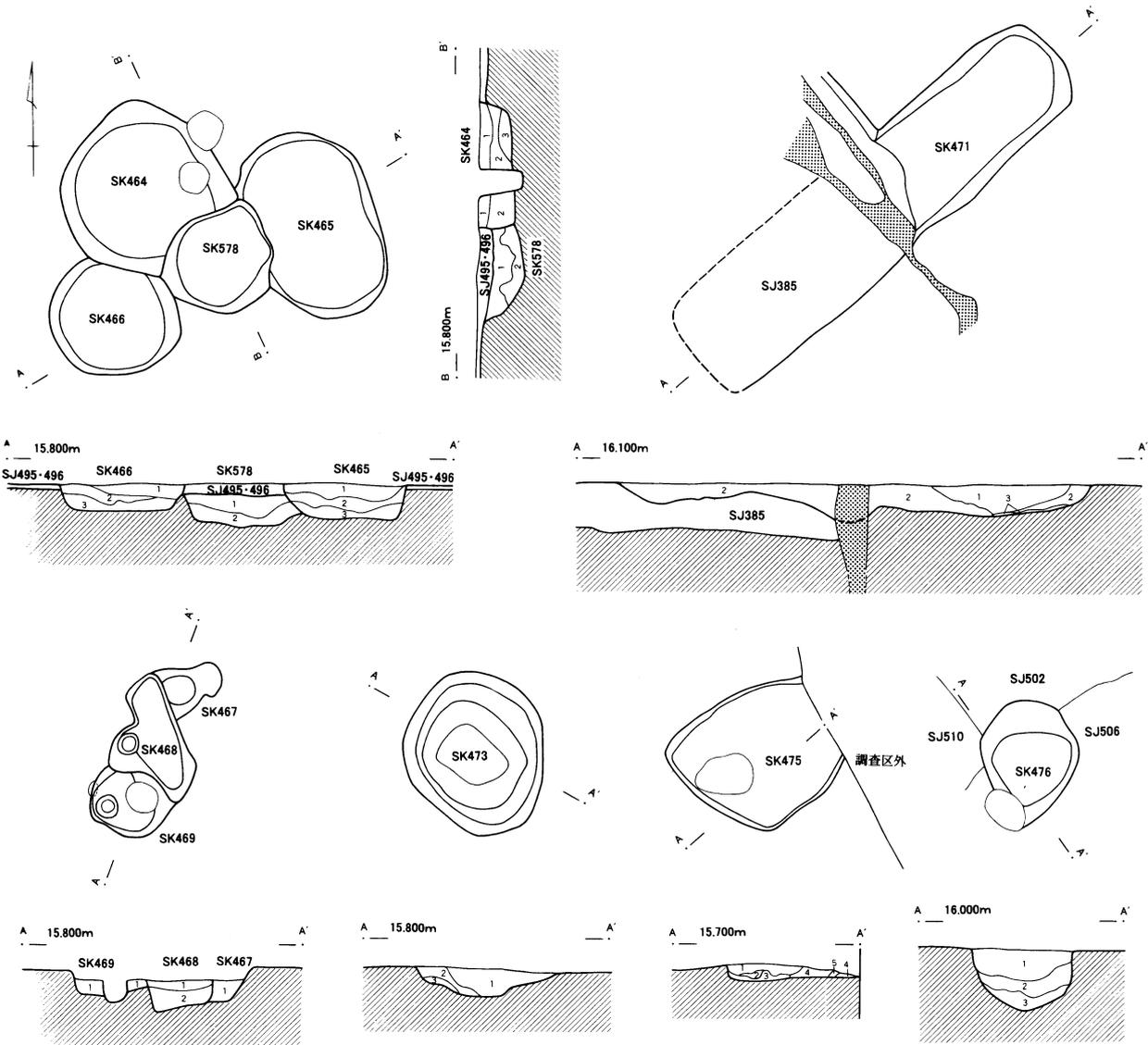
AO-27グリッドに位置する。第468号土壌に切られる土壌であるが、第495・496号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。検出は径0.52m×0.44m程の不整形で、確認面からの深さは18cmを測る。底面はほぼ平坦である。

遺物の出土は見られなかった。

第468号土壌 (第11・358図)

AO-27グリッドに位置する。第467・469号土壌を切ったの設営であるが、第495・496号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。平面は径1.08m×0.64mの不整形で、確認面からの深さは26cmを測る。底面はいくぶん南へ傾斜し、壁の立ち上がりは急である。

第358図 土壌 (6)



第464号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒を少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第465号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒を少量含む。
3. 10YR5/3 黄褐色土 地山ブロックを非常に多く含む。焼土粒微量に含む。

第466号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粒を多く含む。焼土粒を少量含む。

第467号土壌 土層説明

1. 10YR2/1 黒褐色土 地山粒を少量含む。

第468号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックを微量に含む。

第469号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを少量含み、焼土粒を微量に含む。

第478号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを非常に多く含む。

第471号土壌 土層説明 (土色観察欠落)

1. 砂質地山ブロック主体。やや粗雑でしまり・粘性弱い。
2. 第1層の土質に加え、地山粒を含む。
3. 地山主体。

第473号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第474号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロックを多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。粘性強い。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘土ブロックを少量含む。

第475号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。しまり強い。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 ブロック状になっている。
3. 10YR2/3 黒褐色土 2層のブロックを多く含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物を少量含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 混入物は見られない。

第476号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山は薄く全体に溶混。焼土微量に含む。しまり強い。
2. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・ブロック含む。焼土微量に含む。粘性強い。
3. 10YR2/2 黒褐色土 暗褐色土地山ブロック・焼土粒少量含む。しまり・粘性強い。

遺物の出土は認められなかった。

第469号土壌（第11・358図）

A O-27グリッドに位置する。北側を第468号土壌に切られるが、第495・496号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.68m×0.62m程の円形になるものと思われる。確認面からの深さは約12cmで、底面は皿状に中央が窪む。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)がわずかに出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第470号土壌（第11・357図）

A P-25グリッドに位置する。第534号住居跡の覆土を掘り込む土壌で、平面は楕円形を呈する。規模は径0.71m×0.47m、深さ23cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は人為的な埋め戻しで、骨や歯の破片を含む。墓壙であろうか。

遺物の出土は見られなかった。

第471号土壌（第9・358図）

A H-21グリッドに位置する。西半部は第385号住居跡の覆土を掘り込み、中央部を地割れによって分断される。平面は1.75m×0.92mの長方形を呈し、深さは19cmを測る。底面は地震の影響からか、やや凹凸を生じている。

覆土は地山を主体とすることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は認められなかった。

第472号土壌（第11・357図）

A Q-28グリッドを中心に位置する。平面は径1.31m×0.94mの楕円形で、深さは19cmを測る。壁の立ち上がりは急ながら、底面は皿状の窪みとなる。

遺物の出土は認められなかった。

第473号土壌（第11・358図）

A P-28グリッドに位置する。平面は円形を呈し、径1.29m×1.24mの楕円形で、深さは24cmを測る。底面は緩やかな皿状の窪みとなる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、故意に

埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は少量で、かつ細かい破片ばかりである。このため、図示することができたのは2点(第371図43・44)にすぎない。他に須恵器や土師器の甕、坏片が見られる。

第474号土壌（第11・357図）

A M-27グリッドに位置する。平面は径0.54m×0.45mの円形で、深さ24cmを測る。底面は平坦といてよく、壁の立ち上がりも急である。

遺物の出土は見られなかった。

第475号土壌（第11・358図）

A M-27グリッドを中心に位置する。東端部は調査区外となるが、全体はおおよそ径1.27m×1.07mの楕円形と予想される。確認面からの深さは15cm前後で、底面は平坦である。

遺物の出土は見られなかった。

第476号土壌（第10・358図）

A L-23グリッドを中心に位置する。第502・506・510号住居跡を切る。平面は径0.86m×0.82mの不整な楕円形で、第506号住居跡床面からの深さは53cmを測る。底面は丸みが強く、壁の立ち上がりは垂直となる。

遺物の出土は認められなかった。

第477号土壌（第10・359図）

A K-23グリッドに位置する。埋没後、第498・499号住居跡に上面を切られる。平面は径1.09m×1.01mの円形で、第498号住居跡床からの深さは31cmを測る。底面は概ね平坦である。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕)がわずかに出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第478号土壌（第10・359図）

A L-23グリッドに位置する。第501号住居跡埋没後、その覆土と床を掘り抜く。平面は径0.85m×0.80mの円形で、第501号住居跡床面からの深さは27cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は大型の地山ブロックを主体とすることから、

人為的に埋め戻されたものと思われる。

覆土からは数片の土師器の坏(古墳時代後期)を出土したが、微細なため図示できなかった。

第479号土壌 (第10・359図)

AL-23グリッドに位置する。第501・506・510号住居跡を切る。当初、南東端部が第506号住居跡の壁面と一致するため、住居跡にかかわる施設かとも思われたが、土層観察によって切り合うことが確認された。平面は径1.52m×1.23mの不整形で、確認面からの深さは72cmを測る。底面は概ね平坦で、壁はこれより垂直に立ち上がる。

覆土にはカマドのそれと共通するものが窺える。焼土ブロックや造り付けの支脚片が見られることから、ある住居のカマドを掘り取って、ここに投棄したものと思われる。

覆土からは少量の須恵器、および土師器の細片を出土している。図示できたのは3点(第371図45~47)のみである。

第480号土壌 (第10・359図)

AL-23グリッドに位置する。第501・506・510号住居跡の埋没後、それぞれの覆土や床を掘り抜く。平面は径2.01m×0.94mの長方形で、第506号住居跡床面からの深さは29cmを測る。底面はほぼ平坦ながら、中央部は方形の浅い窪みとなる。

覆土は地山ブロックを主体とし、締まりはなくボンボソであった。おそらく人為的な埋め戻しであろう。

覆土からは、奈良時代の土師器(甕・坏)が少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第481号土壌 (第10・359図)

AL-23グリッドに位置する。第501・506号住居跡埋没後、その床を掘り抜く。平面は径1.64m×1.32mの楕円形で、第501号住居跡床面からの深さは13cmを測る。底面はほぼ平坦である。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)をわずかに出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第482号土壌 (第10・359図)

AL-22グリッドに位置する。第519号住居跡の床を掘り抜く。平面は径1.44m×1.28mの楕円形で、同住居跡床面からの深さは9cmを測る。底面はおおよそ平坦である。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土したが、細片ばかりのため図示できなかった。

第483号土壌 (第10・359図)

AM-22グリッドに位置する。位置的には第527号住居跡と重複するが、住居跡の遺存が少ないため、新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.76m×0.70mの円形で、深さは32cmを測る。底面は南側へ傾斜し、端部はピット状になる。

覆土は故意の埋め戻しで、主に地山ブロックで構成されていた。

覆土からは土師器の甕を出土している。図示した1個体(第371図48)が破片となっていたもので、坏などの破片は見られなかった。

第484号土壌 (第10・359図)

AK-21グリッドに位置する。第440号住居跡の壁に掘り込まれているが、重複関係は明らかとし得なかった。平面は径0.99m×0.69mの長方形で、確認面からの深さは38cmを測る。底面は平坦で、北壁には段を有する。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと判断される。

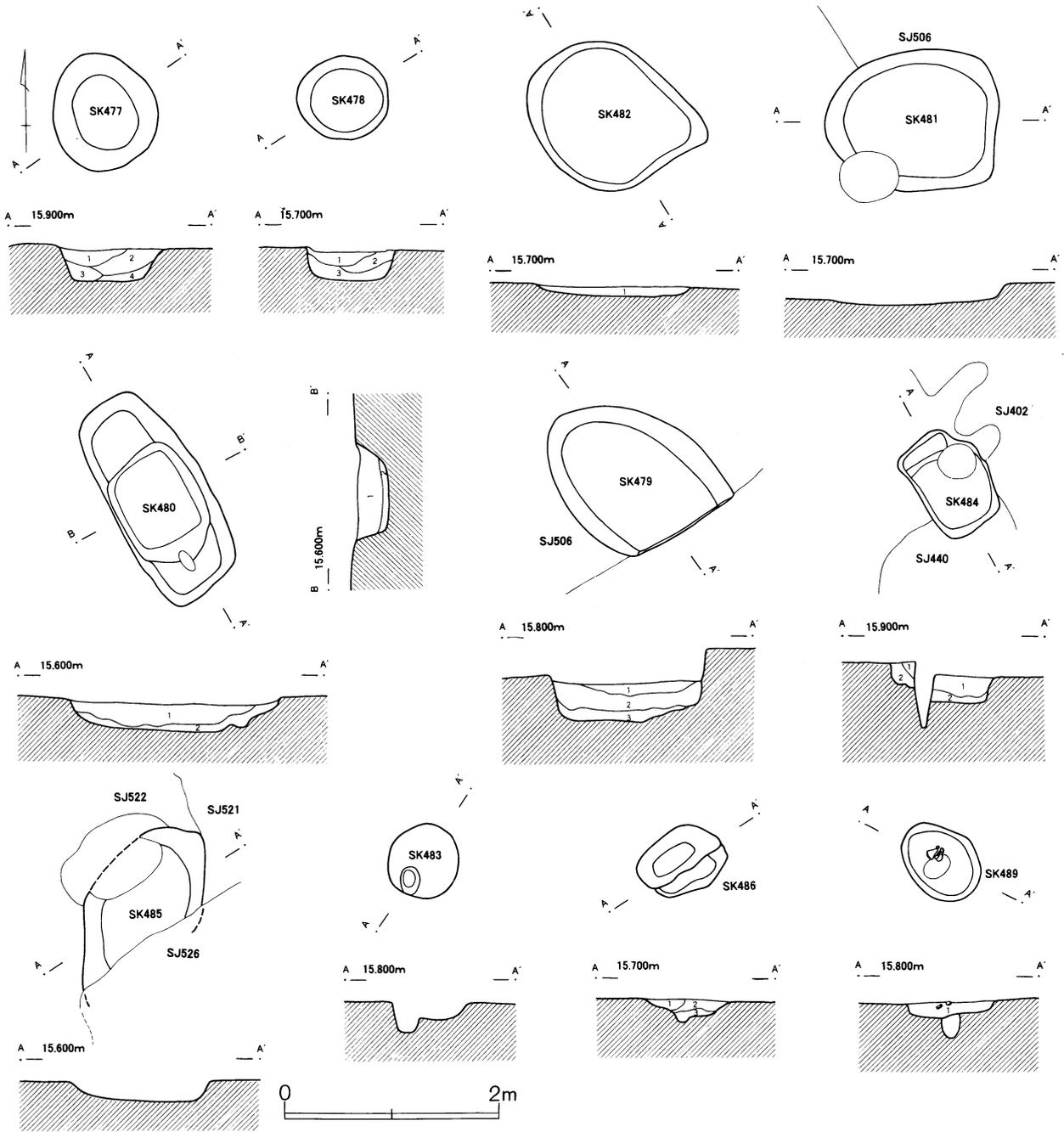
遺物の出土は認められなかった。

第485号土壌 (第10・359図)

AL-21グリッドに位置する。第521・522・526号住居跡と重複するが、新旧関係は確認できなかった。検出部は1.32m×0.87m程の不整形であるが、本来は楕円形を呈していたものと思われる。確認面からの深さは約21cmである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土からは数点の土師器片を出土したが、内1点(第371図49)が図示できたにすぎない。

第359図 土壌 (7)



第477号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒・小型ブロック多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック多量、焼土少量、炭化物含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 1層に準ずる。焼土を少量含む。粘性強い。
4. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。壁の崩落土と思われる。

第478号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘質地山粒多く含む。焼土・炭化物微量に含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 基本は1層。大型の粘質地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 砂質大型地山ブロックを多く含む。人為的埋め戻しと思われる。

第479号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 砂質地山粒・焼土粒を微量に含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・ブロック・炭化物・灰を多く含む。カマドの内容物・支脚の残骸を投入したと思われる。
3. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒多量、焼土粒少量含む。上層との境界明瞭。しまり粘性強い。

第480号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・小型ブロック・炭化物多く含む。しまり悪い。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック主体。粗くボソつく。

第482号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・小型ブロックを多く、焼土粒・炭化物少量含む。しまり・粘性強い。

第484号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。しまりなくボソつく。人為的埋め戻し。
2. 10YR4/4 褐色土 砂質地山ブロック主体。人為的埋め戻し。

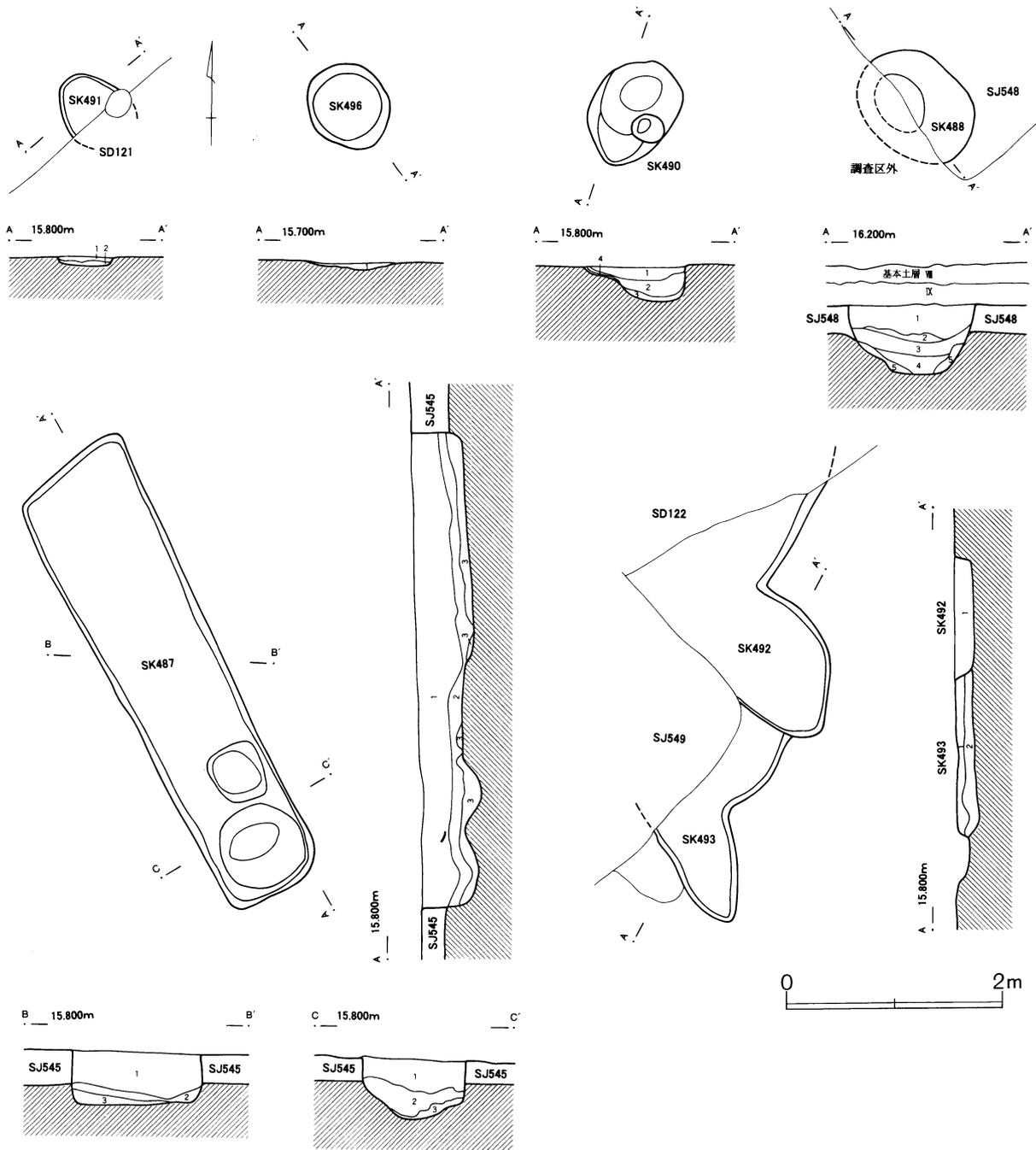
第486号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質地山粒・焼土粒多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 1層に近似。焼土少量、地山粒・ブロックを多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山・炭化物を多く含む。粘性強い。

第489号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック・焼土粒を少量含む。

第360図 土壌 (8)



第487号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 しまり・粘性強い。
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘土ブロックを多く含む。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 しまり強い。

第488号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 砂質地山粒・焼土粒・ブロック多く含む。しまりなく、ボソつく。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 砂質地山ブロック主体。他遺構掘削土の二次堆積。
3. 10YR2/3 黒褐色土 1層に準ずるが、焼土・炭化物を多く含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 砂質地山を全体に溶混し、黄色味帯びる。
5. 10YR4/3 におい黄褐色土 砂質地山からなる壁の崩落流入土。

第496号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。

第490号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 砂質地山粒・焼土粒少量含む。しまり悪い。
2. 10YR3/2 黒褐色土 シルト質灰黄色地山粒・ブロックを多く含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 灰黄色シルト質地山主体。壁・底の崩落・溶軟化土。
4. 10YR3/3 暗褐色土 2層に準ずるが、地山ブロックを多く含む。しまり弱い。

第491号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を多く含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。

第492号土壌 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山粒・炭化物粒を少量含む。

第493号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を多く含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。

第486号土壙 (第10・359図)

AK-21グリッドに位置する。第402・440号住居跡内に掘り込まれているが、重複関係は明らかとし得なかった。平面は楕円を二つ重ねたような形状で、径0.75m×0.62m、深さ21cmを測る。底面と呼ぶほどの部分はなく、壁面と一体となって緩やかに立ち上がる。

遺物の出土は見られなかった。

第487号土壙 (第12・360図)

AS-29グリッドに位置する。第544号住居跡の埋没後、覆土と床を掘り抜く。平面は径4.48m×0.99mの長方形で、確認面からの深さは56cmを測る。底面は凹凸を有するものの、おおよそ平坦である。

覆土からは土師器の甕、坏などを少量出土している。いずれも小さな破片であるため、図示し得たのは1点(第371図50)のみである。

第488号土壙 (第10・360図)

AL-21グリッドに位置する。第548号住居跡埋没後、その床面を掘り抜く。南西側は調査区外になるため、全体の規模は明らかでない。検出部は1.29m×0.49mで、掘り込み面からの深さは65cmを測る。底面はU字状、壁の立ち上がりは急である。

覆土は基本的に自然堆積であるが、一部に故意の投入と思われる土層が見られる。

遺物の出土は認められなかった。

第489号土壙 (第12・359図)

AS-29グリッドに位置する。平面は径0.83m×0.64mの円形で、深さ14cmを測る。底面は皿状にやや中央部が窪み、そこに切られたピットを検出した。

覆土は人為的な埋め戻しと思われる。

出土した遺物は、図示した土師器の坏2点(第371図51・52)のみである。

第490号土壙 (第10・360図)

AM-22グリッドに位置する。平面は円形の掘り込みが二つ重なったような形状で、全体は径0.68m×0.34m、深さは12cmを測る。底面は平坦で、南側に段を有する。

遺物の出土は認められなかった。

第491号土壙 (第12・360図)

AT-30グリッドに位置する。第121号溝跡と重複するが、新旧関係は明らかとし得なかった。検出部は径0.59m×0.42mの半円形で、深さは8cmを測る。底面は平坦である。

覆土は主に地山で構成されており、人為的な埋め戻しを窺わせる。

第492号土壙 (第12・360図)

AT-30グリッドに位置する。第493号土壙を切り取り、第549号住居跡と第122号溝跡に掘り抜かれる。不整形の土壙と思われるが、規模は明らかとし得ない。確認面からの深さは12cmを測り、底面は平坦である。

遺物の出土は見られなかった。

第493号土壙 (第12・360図)

AT-30グリッドを中心に位置する。北から西を第549号住居跡、第492号土壙に切られる。このため、全体の形状や規模は明らかとし得ない。確認面からの深さは20cm前後で、底面はほぼ平坦である。

覆土からは、甑と思しき破片が1点出土したにすぎない。細片であるため図示できなかった。

第494号土壙 (第11・361図)

AQ-27グリッドに位置する。西側で第495号土壙を切る。平面はやや崩れた楕円形で、径1.18m×0.71m、深さ65cmを測る。底面は西から東へやや傾斜し、東端部の壁はオーバー・ハングして立ち上がる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕)片を少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

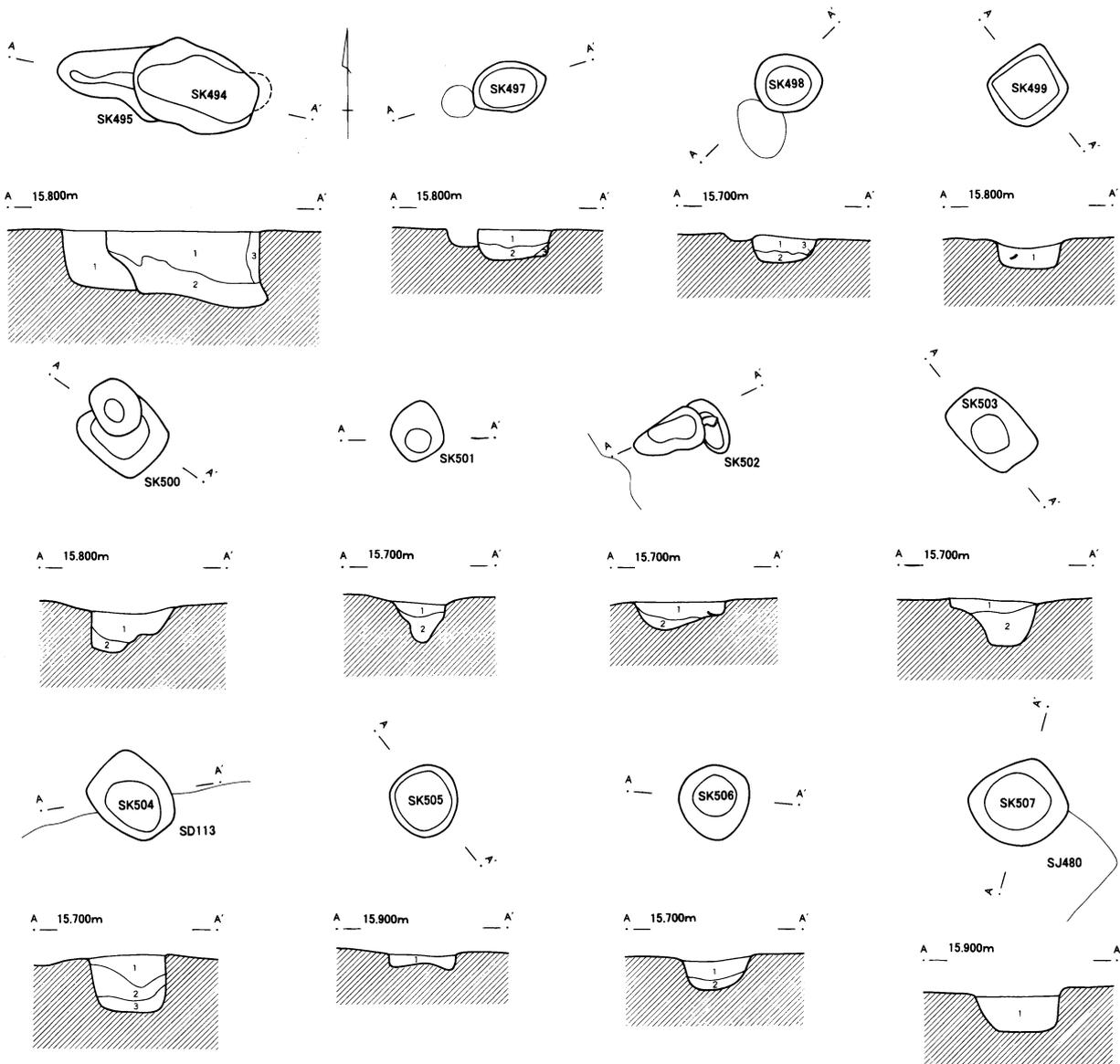
第495号土壙 (第11・361図)

AQ-27グリッドに位置する。東部を第494号土壙に大きく切り取られる。検出は0.59m×0.41m程の不整形な形をしており、深さは48cmを測る。底面は平坦で、壁はこれより垂直に立ち上がる。

覆土には地山ブロックを多量に含むことから、第495号土壙設営に伴い、人為的に埋め戻されたものと判断される。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)をわずかに出土した

第361図 土壌 (9)



第494号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第495号土壌 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 暗褐色土ブロック多。SK494構築に伴う人為的埋め戻し。

第497号土壌 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土との混入層。埋め戻しか？
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第498号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒を多く含む。埋め戻しか。
2. 10YR3/3 暗褐色土 黒色土ブロック含む。焼土粒少量含む。埋め戻しか。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第499号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。人為的な埋め戻し。

第500号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土ブロックを少量含む。

第501号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。

第502号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒を多く含む。人為的な埋め戻しか。

第503号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土粒・ブロックを多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。焼土粒少量含む。

第504号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック・粒多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒を少量含む。
3. 10YR4/6 褐色土 黄褐色土ブロック主体。

第505号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。

第506号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を微量に含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロックを多く含む。

第507号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロックを多く含む。人的に埋め戻した層で交互になっている。

が、細片のため図示するには至らなかった。

第496号土壌（第11・360図）

AP-27グリッドに位置する。第532号住居跡の床面に検出されたが、その重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.84m×0.74mの円形で、住居跡床面からの深さは6cm程である。底面は皿状に中央が窪む。

遺物の出土は認められなかった。

第497号土壌（第11・361図）

AP-27グリッドに位置する。平面は径0.68m×0.45mの楕円形で、確認面からの深さは26cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。

覆土からは2点の甕破片が出土したが、図示するには至らなかった。

第498号土壌（第11・361図）

AP-28グリッドに位置する。平面は径0.58m×0.51mの円形で、深さは22cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は地山と腐植土のブロックを主体とすることから、故意に埋め戻されたものと考えられる。

遺物の出土は認められなかった。

第499号土壌（第10・361図）

AL-24グリッドに位置する。第461号住居跡の内部に掘り込まれるが、その重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.64m×0.57mの方形で、住居跡床面からの深さは18cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は地山ブロックで構成されることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

古墳時代後期の土師器(甕)が数片出土したが、図示するにはいたらなかった。

第500号土壌（第10・361図）

AM-24グリッドに位置する。これも第461号住居跡の内部に掘り込まれるが、その重複関係は明らかにできなかった。方形と円形の土壌が重なったような形状で、方形の部分は0.80m×0.64m、住居跡床面からの深さは20cmを測る。円形部分はこれより15cm程深くなる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)が少量出土したが、微細なため図示できなかった。

第501号土壌（第10・361図）

AM-24グリッドに位置する。これも第461号住居跡の内部に掘り込まれるが、その重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.46m×0.46mの円形で、住居跡床面からの深さは34cmを測る。底面は丸くピット状である。

覆土は地山を主体とすることから、人為的な埋め戻しと判断される。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)が少量出土したが、微細なため図示できなかった。

第502号土壌（第10・361図）

AM-23グリッドに位置する。やはり第461号住居跡の内部に掘り込まれる土壌であるが、その重複関係は明らかにできなかった。平面は二つの小穴を合わせたような形で、おおよそ0.81m×0.34m、住居跡床面からの深さ24cmを測る。底面はU字状に中央が窪む。

覆土は地山を多く含み、締まりに欠ける。おそらく人為的な埋め戻しであろう。

覆土からは少量、土師器の甕や坏を出土している。いずれも微細な破片であるため、1点(第371図53)が図示できたにすぎない。

第503号土壌（第10・361図）

AN-23グリッドに位置する。第475～477号住居跡と重複するが、それぞれとの関係は確認できなかった。平面は径0.76m×0.54mの隅丸長方形で、第477号住居跡床面からの深さは39cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりはいくぶん緩やかである。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物の出土は認められなかった。

第504号土壌（第10・361図）

AN-23グリッドに位置する。第477号住居跡の床を掘り抜くが、第113号溝跡との重複関係は確認できなかった。平面は径0.76m×0.64mの隅丸長方形で、住居跡床面からの深さは約50cmを測る。底面は平坦

で、壁はこれより垂直に立ち上がる。

覆土は主に地山ブロックで構成されることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

覆土からは土師器の甕や坏を少量出土しているが、微細な破片であるため、図示できたものはわずか(第371図54~56)である。

第505号土壌 (第10・361図)

AN-24グリッドに位置する。平面は径0.60m前後の円形で、確認面からの深さは11cmを測る。底面はほぼ平坦ながら、わずかに中央部が高まる。

遺物の出土は見られなかった。

第506号土壌 (第11・361図)

AO-24グリッドに位置する。第485号住居跡の内部に掘り込まれるが、重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.64m程の円形で、住居跡床面からの深さは24cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状を呈する。

覆土からは土師器の甕片を数点出土したが、微細なため図示できなかった。

第507号土壌 (第10・361図)

AO-24グリッドに位置する。第480号住居跡の北壁と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径0.78m×0.71mの隅丸方形で、確認面からの深さは42cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁はこれより急角度で立ち上がる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと考えられる。

覆土からは数点の土師器(甕・坏)片を出土しているが、図示するには至らなかった。

第508号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。第550号住居跡のカマド上部を掘り込む。平面は不整な円形を呈すると思われる、およそ径は1.00mが想定される。確認面からの深さは13cmを測る。底面は平坦である。

覆土からは、埴輪の破片を1点(第371図57)出土したのみである。形象埴輪の一部と思われるが、種類は明らかでない。

第509号土壌 (第12・362図)

AS-29グリッドを中心に位置する。平面は径1.50m×0.85mの楕円形で、深さは9cmを測る。底面は平坦だが、全体的には皿状の窪みといった印象である。

覆土からは土師器(甕)の破片がごく少量出土している。奈良時代以降のものと思われるが、図示するには至らなかった。

第510号土壌 (第12・362図)

AS-29グリッドに位置する。北西部を第511号土壌に切られる。本来は楕円形の土壌であろうが、検出部分は0.51m×0.49m、深さ15cmであった。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は人為的に埋め戻されたものようである。

古墳時代後期の土師器(甕)片を少量出土したが、微細なため図示できなかった。

第511号土壌 (第12・362図)

AS-29グリッドに位置する。第510号土壌の南東部を掘り抜く同等規模の土壌で、平面も同じく楕円形である。径0.83m×0.54m、深さ21cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面は緩いU字状を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第512号土壌 (第13・363図)

AW-31グリッドに位置する。第513号土壌の南に接するものの、検出面での重複は見られなかった。平面は径2.50m程のきれいな円形で、深さは66cmを測る。底面は平坦で、横断面は円筒状となる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第513号土壌 (第13・363図)

AW-31グリッド、第512号土壌の北側に位置する。平面は不整な楕円形を主体とし、これに溝状の浅い突出部が備わる。楕円形の部分は径0.86m×0.82mで、深さは82cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は段を有している。

出土遺物には掲載した刀子(第427図16)のほか、古墳時代後期の土師器(甕・坏)片が少量ある。但し、土

師器はいずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第514号土壌 (第13・362図)

AW-31グリッドに位置する。平面は径1.14m×0.72mの楕円形で、深さは13cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第515号土壌 (第13・362図)

AX-33グリッドに位置する。平面は径0.76m×0.60mの楕円形で、深さ5cmを測る。底面は平坦であるが、ピット状に一段深まる部分がある。

遺物の出土は認められなかった。

第516号土壌 (第13・362図)

AW-32グリッドに位置する。東端部を第126号溝跡に切られるため、平面は不整形となる。検出部分は0.51m×0.49m、深さ9cmで、底面は平坦である。

遺物の出土は見られなかった。

第517号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。東側を第518号土壌に切り取られるが、北側の第519号土壌との重複関係は確認できなかった。このため、全体の規模や形状は明らかとし得ない。確認面からの深さは、最大で9cmを測る。

遺物の出土は見られなかった。

第518号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。第126号溝跡、第517号土壌を掘り抜くが、第519号土壌との重複関係は明らかにできなかった。平面は径1.31m×1.06mの不整な長方形で、深さは38cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面は緩いU字状となる。

遺物の出土は見られなかった。

第519号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。第517・518号土壌と重複するが、それぞれとの関係は明らかにできなかった。平面は径0.66m×0.49mの楕円形で、深さは33cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はピット状となる。

覆土からは土師器(甕)の細片2点を出土したが、図示するには至らなかった。

第520号土壌 (第13・363図)

AW-32グリッドに位置する。平面は径1.23m×0.31mの細長い楕円形で、北端部はピットで切られる。確認面からの深さは15cmを測り、凹凸を有する底面は北側へ傾斜する。

遺物の出土は認められなかった。

第521・522号土壌 (第13・362図)

AW-32グリッドを中心に位置する。当初、2基の土壌として調査に臨んだが、重複関係は明瞭でなかった。また、第524号土壌との重複関係も、これを明らかにできなかった。深さは、北側の第521号土壌部分で9cm、南側の第522号土壌で12cmを測る。底面はともに平坦である。

第521～527号土壌までは重複が激しく、遺物の所属を峻別することができなかった。全体での出土量もわずかで、かつ微細な破片ばかりであった。時期不明の土師器や須恵器(坏)が見られるが、図示するには至らなかった。

第523号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。土層観察ができなかったため、重複する第524・526・527号土壌との関係は不明である。検出部分は0.63m×0.41m、深さ14cmを測り、底面はほぼ平坦である。

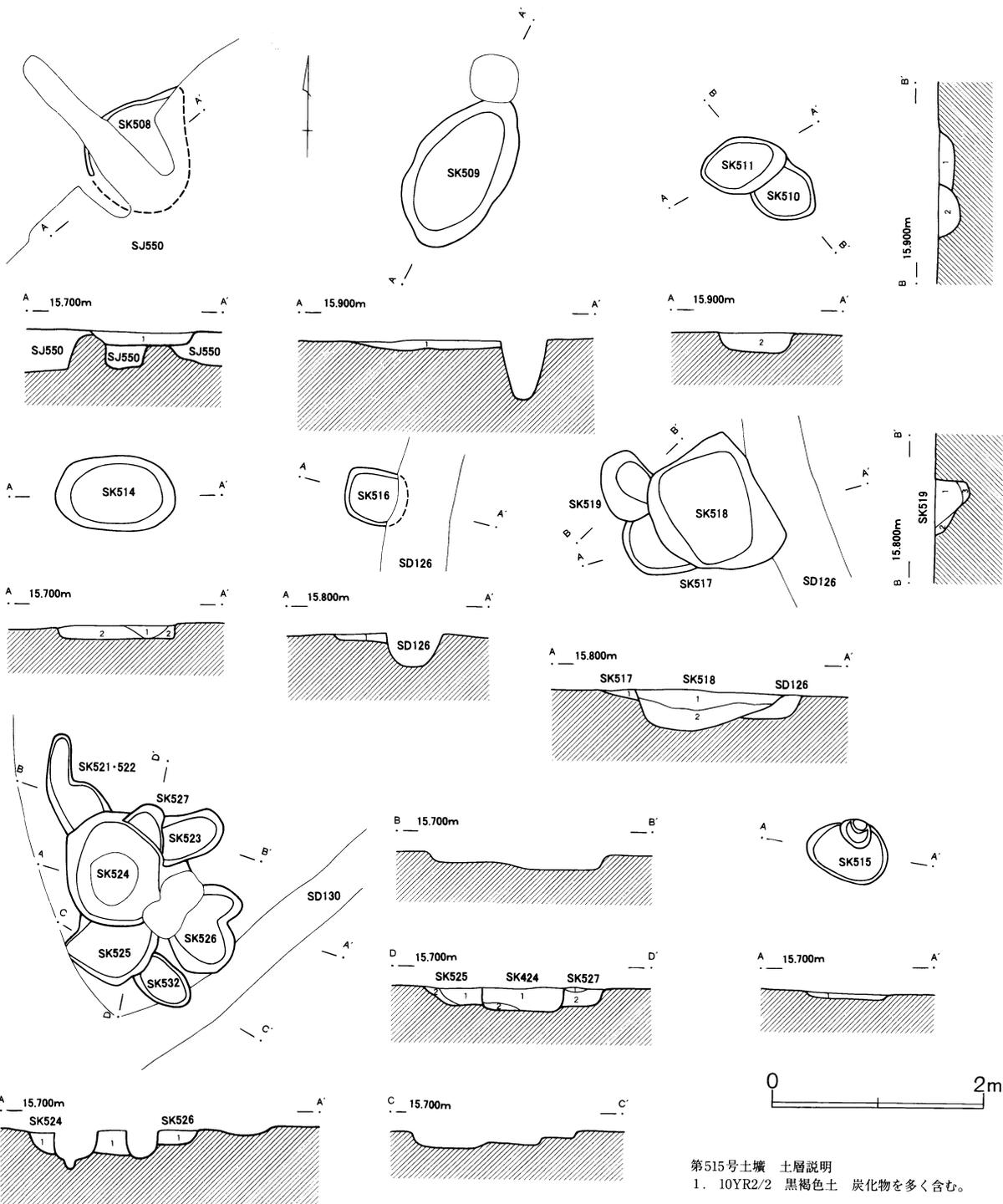
第524号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。第525・527号土壌を掘り抜くが、第522・523・526号土壌との重複関係は明らかにできなかった。平面は径1.11m×0.91mの不整な円形で、深さは24cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

第525号土壌 (第13・362図)

AX-32グリッドに位置する。第524号土壌に切られるが、第532号土壌との重複関係は確認できなかった。全体は不整な楕円形となるようで、深さは約16cmを測る。底面は平坦である。

第362図 土壌 (10)



第508号土壌 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土粒を少量含む。

第509号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒を多く含む。

第510・511号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。人為的埋め戻し。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土少量含む。

第514号土壌 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土
2. 10YR3/4 暗褐色土

第516号土壌 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第517号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を少量含む。

第518号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロックを少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。

第519号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を微量に含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒を多く含む。
3. 10YR4/3 黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第515号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物を多く含む。

第524号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックを微量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。

第525号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを非常に多く含む。

第526号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを少量含む。

第527号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロックを微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。

第526号土壙 (第13・362図)

A X-32グリッドに位置する。重複する第524号土壙との重複関係は、間をピットで切られるため不明である。平面は不整形で、規模は明らかにし得ない。深さは約13cmを測り、底面は平坦である。

第527号土壙 (第13・362図)

A X-32グリッドに位置する。南を第524号土壙に切り取られるが、第523号土壙との重複関係は明らかにできなかった。検出部分は半円形で、深さは約7cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

第528号土壙 (第12・363図)

A U-29グリッドに位置する。埋没後、覆土の上層を第133号溝跡に切られる。平面は径2.06m×0.81mの長方形で、確認面からの深さは54cmを測る。底面はほぼ平坦で、四壁の立ち上がりは急である。

自然堤防の肩部からやや下がった位置にあるためか、覆土は暗灰色のシルトであった。

遺物の出土は認められなかった。

第529号土壙 (第12・363図)

A U-30グリッドに位置する。平面は径0.75mの円形で、深さは30cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状となる。

覆土は地山ブロックを主体としており、故意の埋め戻しと考えられる。

第530号土壙 (第13・363図)

A V-31グリッドに位置する。平面は径0.71m×0.59mの円形で、深さは23cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状となる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

覆土からは土師器の破片2点が出土したものの、微細なため図示できなかった。

第531号土壙 (第13・363図)

A V-32グリッドに位置する。東端部は調査区の壁にかかるが、ほぼ全体を検出し得た。平面は径0.75m×0.43mの楕円形で、深さ32cmを測る。底面はおおよそ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

遺物の出土は見られなかった。

第532号土壙 (第13・362図)

A X-32グリッドに位置する。西端部は第525号土壙と重複するが、その関係は明らかにできなかった。検出部分は0.52m×0.39mで、本来は楕円形であったと思われる。深さ7cmを測り、底面は平坦である。

覆土からは板状の片岩2点が出土している。うち1点(第418図1)は、側縁に打撃痕を有する。

第533号土壙 (第13・364図)

A V-31グリッドに位置する。第127号溝跡の肩部に構築される土壙で、東側を第534号土壙に大きく切られる。このため、規模や形状は明らかでない。確認面からの深さは約14cmである。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと思われる。

遺物の出土は見られなかった。

第534号土壙 (第13・364図)

A V-31グリッドに位置する。西側の第533号土壙を掘り抜くが、南側で重複する第536号土壙との関係は確認できなかった。平面は径1.17m×0.57mの楕円形で、確認面からの深さは35cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状を呈する。

覆土はこれも地山ブロックを主体としており、故意の埋め戻しを窺わせる。

古墳時代後期の土師器(坏)、および須恵器(甕)を数片出土しているが、微細な破片のため図示できなかった。

第535号土壙 (第12・363図)

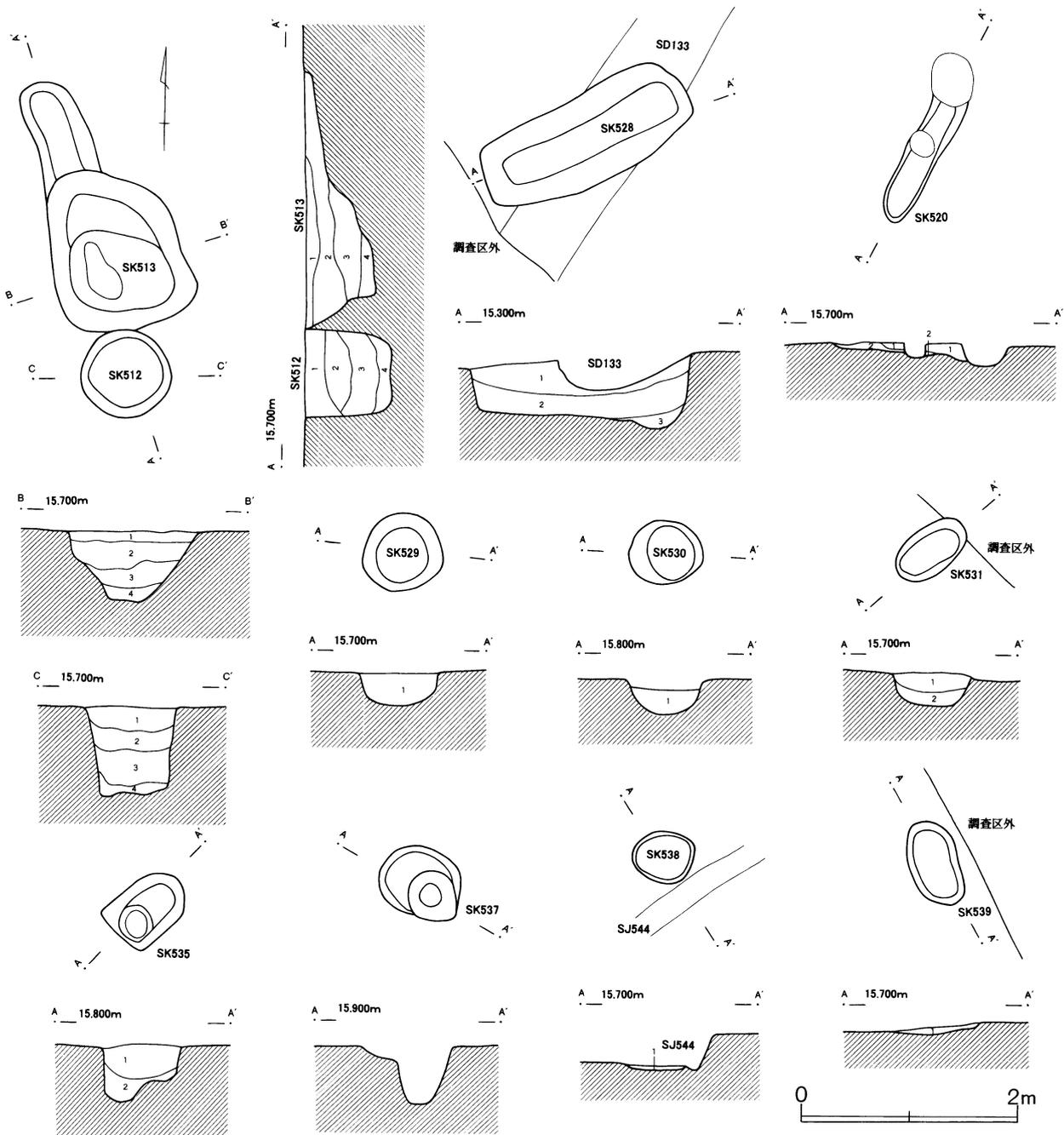
A U-30グリッドに位置する。平面は径0.76m×0.53mの不整な楕円形で、深さは最大で54cmを測る。底面はほぼ平坦で、南西がピット状に一段深くなる。

覆土からは土師器、常滑産の片口鉢と思しき破片が出土したが、極めて微細であるため図示できなかった。

第536号土壙 (第13・364図)

A V-31グリッドに位置する。北側で第534号土壙と重複するが、新旧関係は明らかにし得なかった。平面は径0.79m×0.36mの楕円形で、第127号溝跡壁面

第363図 土壌 (11)



第512号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロックを含む。炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロックを含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。
4. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを多量に含む。

第513号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土のブロック少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土
3. 10YR2/1 黒色土 焼土・炭化物粒少量含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土

第520号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・炭化物少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粒を多く含む。

第528号土壌 土層説明

1. 10YR5/1 褐灰色土 砂粒を多く含む。
2. 10YR4/1 褐灰色土 砂粒を多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘土層。

第529号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック多く、焼土粒・炭化物粒微量含む。

第530号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多量に含む。

第531号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒を微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒多く含む。

第535号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒を少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒を微量に含む。

第538号土壌 土層説明

1. 10YR4/1 褐灰色土 焼土ブロックを多く含む。ベースは灰。

第539号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒少量含む。

からの深さは21cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第537号土壌（第12・363図）

A T-29グリッドに位置する。平面は径0.83 m × 0.64 mの楕円形で、東南の端部は径46cmのピット状となる。その部分の深さは約56cmで、上面は浅い窪み程度である。

遺物の出土は認められなかった。

第538号土壌（第12・363図）

A S-29グリッドに位置する。第545号住居跡埋没後、その覆土と床面を掘り抜く。同住居跡床面上での平面は、径0.59 m × 0.50 mの円形で、同じく床面からの深さは3 cmである。

第545号住居跡床面以下での遺物出土は、見られなかった。

第539号土壌（第12・363図）

A R-29グリッドに位置する。平面は径0.83 m × 0.46 mの楕円形で、確認面からの深さは8 cmを測る。底面はおおよそ平坦ながら、中央部がわずかに窪む。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕)片を少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第540号土壌（第10・364図）

A K-26グリッドに位置する。第451号住居跡の埋没後、その床を掘り抜いて構築される。平面は径1.10 m × 0.98 mの円形で、同住居跡床面からの深さは17cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりも急である。

遺物の出土はごくわずかながら、古墳時代後期の土師器(甕・赤色塗彩の高坏)片が見られる。但し、微細な破片ばかりのため図示はできなかった。

第541号土壌（第11・364図）

A Q-27グリッドに位置する。第563号住居跡の壁を切るが、第558号住居跡との関係は明らかにできな

かった。平面は径0.97 m × 0.76 mの円形で、第563号住居跡床面からの深さは26cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

第542号土壌（第11・364図）

A Q-26グリッドに位置する。東側の円形部分は別遺構とも思われるが、ここでは一つの土壌として処理した。この場合の平面は、長さ0.65~1.57 mの不整形となり、深さは26cmを測る。

覆土からは土師器の小片を3点出土したのみで、図示はできなかった。

第543号土壌（第11・364図）

A Q-27グリッドに位置する。第559号住居跡の床を掘り抜いて構築される。平面は径4.53 m × 1.46 mの不整形で、深さは最大で76cmを測る。底面は凹凸を有し、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土はほとんど単一ながら、埋め戻された様子は窺えなかった。

覆土からは、少量の土師器(甕・赤色塗彩を含む坏)を出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示できたものは1点(第371図58)のみである。

第544号土壌（第12・364図）

A R-28グリッドに位置する。第555号住居跡内に掘り込まれているが、その重複関係は明らかとし得なかった。平面は径1.80 m × 0.61 mの隅丸長方形で、住居跡床面からの深さは27cmを測る。底面はほぼ平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。

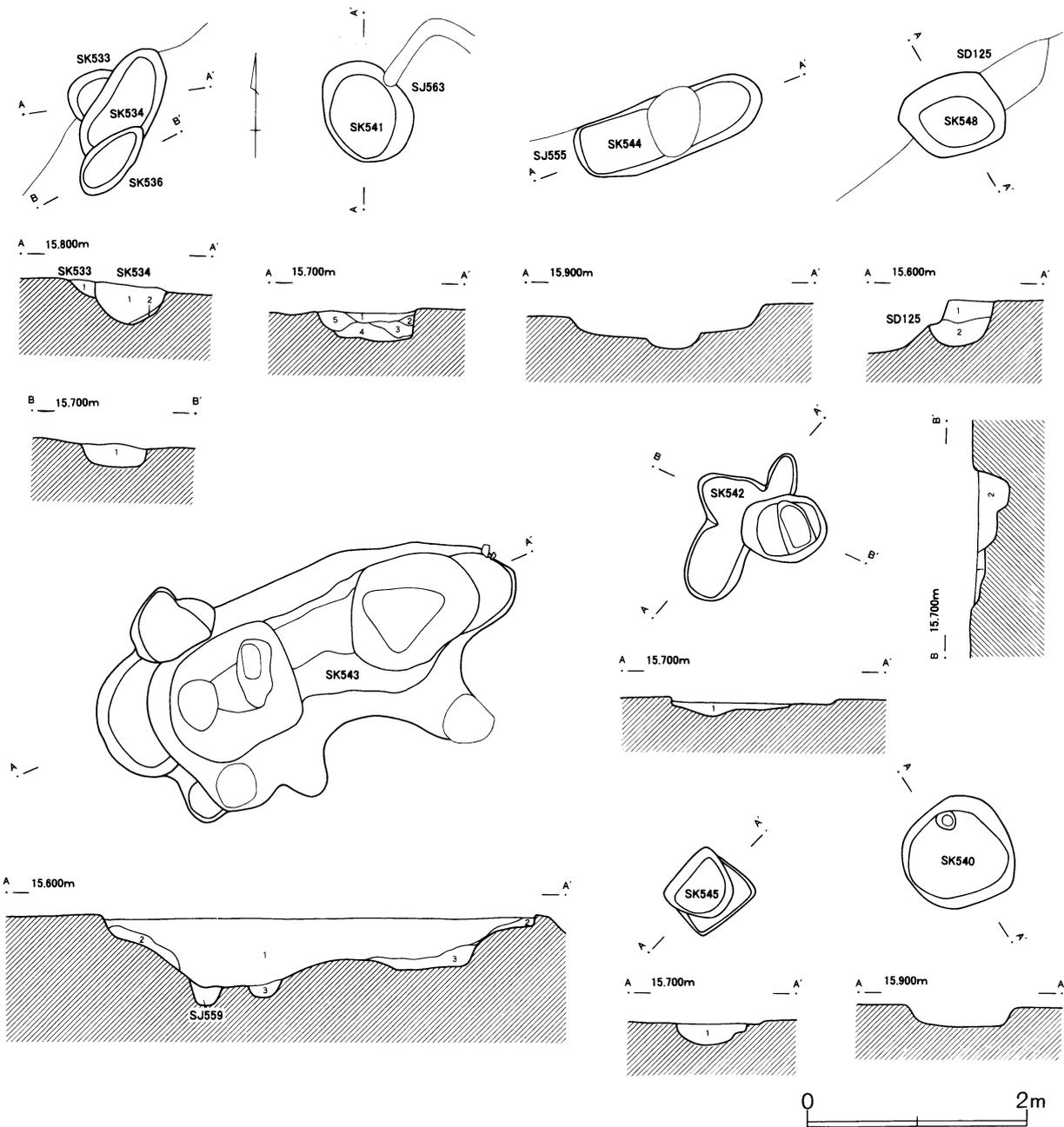
覆土は単一で地山を多く含むものの、人為的に埋め戻された様子は窺えない。

覆土からは微量ながら、土師器の壺・甕・坏を出土している。微細な破片がほとんどで、図示できたのは1点(第371図59)のみである。

第545号土壌（第12・364図）

A R-27グリッドに位置する。第555号住居跡の内部に掘り込まれているが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径0.66 m × 0.61 mの方形で、住居跡床面からの深さは18cmを測る。底面はやや丸みを帯び、南東部は段を有する。

第364図 土壌 (12)



第533号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多く、焼土粒・炭化物粒微量含む。

第534号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを非常に多く含む。

第536号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。焼土粒を微量に含む。

第541号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土
3. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山ブロック。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック・暗褐色土を含む。
5. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土地山小ブロックを多く含む。

第542号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロックを含む。

第543号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山の崩落土。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第545号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。

第548号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土ブロックを少量含む。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第546号土壌（第12・365図）

A S-27グリッドに位置する。南西部は自然堤防の斜面となるため、検出は径1.82m×1.77mの範囲であった。平面は隅丸の長方形を呈したものと思われ、深さは最大で23cmを測る。底面はほぼ平坦である。

出土した遺物は、土師器の甕や甔など数点のみである。微細な破片ばかりで、1点(第372図60)が図示できたにすぎない。

第547号土壌（第10・365図）

A N-25グリッドに位置する。第470号住居跡の埋没後、これを大きく掘り抜く。平面は径2.12m×1.56mの長方形で住居跡床からの深さは28cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

遺物の出土は認められなかった。

第548号土壌（第14・364図）

A X-33グリッドに位置する。北側を第125号溝跡に切られるが、全体は径0.85m×0.73mの方形様で、確認面からの深さは42cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第549号土壌（第7・365図）

X-20グリッドに位置する。これより第576号までと、第579号土壌はC区の北東部、拡張された調査区内より検出されたものである。

東側部分は調査区外になるため、全体の規模や形状は明らかにし得ない。深さは確認面より41cmを測る。壁面は中央部に向かって傾斜しており、横断面は緩やかなV字状となる。

覆土からは須恵器の甕・蓋・坏、土師器の甕・坏がややまとまって出土している。細かい破片が大半であるため、図示し得たのは3点(第372図61~64)のみである。

第550号土壌（第7・365図）

X-19グリッドに位置する。平面は径0.97m×0.49

mの楕円形で、深さは37cmを測る。内部は段を有し、長方形に掘り込まれる。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土している。しかし、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第551号土壌（第7・365図）

X-20グリッドに位置する。西側は第250号井戸跡の覆土を切りこむ。平面は径2.32m×1.45mの楕円形で、深さは39cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに内湾する。

覆土からは土師器の甕・坏などが少量出土している。微細な破片が多く、3点(第372図65~67)が図示できたにすぎない。

第552号土壌（第7・365図）

X-20グリッドに位置する。第573・579号住居跡の埋没後、その床や壁を掘り抜いて構築される。平面は径1.31m×0.61mの隅丸長方形で、確認面からの深さは48cmを測る。底面は平坦で、これより立ち上がる壁は垂直である。

覆土からは、奈良時代の須恵器(甕・坏)を少量出土している。微細な破片ばかりのため、図示するには至らなかった。

第553号土壌（第8・366図）

A A-21グリッドに位置する。西は拡張前に掘削した排水用の側溝によって掘り取り、北側は第137号溝跡に切られる。このため、全体の規模や形状は明らかにできなかった。確認面からの深さは13cmを測り、底面は平坦である。

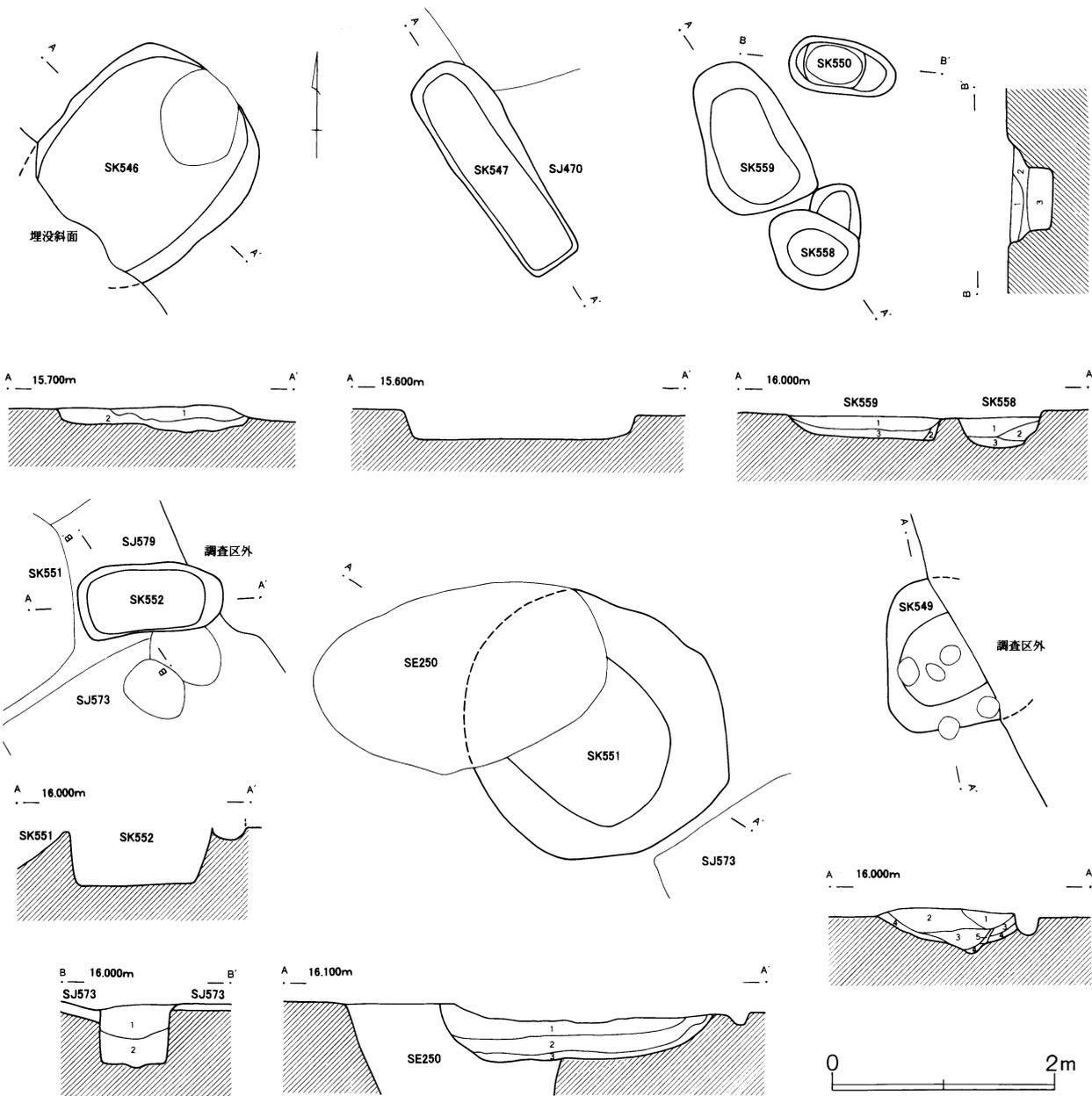
住居跡のようだが規模は小さく、遺物や諸施設は一切検出できなかった。

第554号土壌（第7・366図）

X-19グリッドに位置する。南端部でわずかに第555号土壌を切る。平面は径1.25m×1.09mの円形で、深さは24cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはやや緩やかである。

覆土からは須恵器の甕・蓋・坏、土師器の甕・坏な

第365図 土壌 (13)



第546号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む。

第549号土壌 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 焼土ブロック・炭化物を含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物・褐色土ブロックを含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロックを上層に多く含む。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山崩落土。
5. 10YR2/1 黒色土 攪乱。

第551号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・地山ブロックを含む。
3. 10YR4/4 褐色土 地山ブロックを多く含む。

第552号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 土器片・焼土ブロック・炭化物を含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 土器片・焼土粒・炭化物・褐色土地山ブロックを含む。

第550号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土地山ブロックを少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。

第558号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 大型の焼土ブロックを多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・褐色土ブロックを少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。

第559号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土地山ブロックを含む。

どが出土している。細かい破片が多いため、図示できたものは少ない(第372図68~75)。

第555号土壙 (第7・366図)

X-19グリッドに位置する。北端部を第554号土壙に切られる。平面は径1.28m×1.27mの円形で、深さ11cmを測る。底面は平坦ながら、全体的には皿状の浅い窪みといった印象である。

覆土からは奈良時代の須恵器(蓋・坏)、土師器(甕)を数片出土したが、いずれも微細なため図示できなかった。

第556号土壙 (第7・366図)

X-19グリッドに位置する。第574号住居跡埋没後、その壁を掘り抜く。平面は径0.70m×0.65mの円形で、深さは12cmを測る。底面は平坦である。

覆土から奈良時代の土師器(甕)を少量出土したが、微細な破片のため図示できなかった。

第557号土壙 (第7・366図)

X-19グリッドに位置する。第574号住居跡の南隅部に重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.93m×0.71mの不整な楕円形で、深さは42cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

遺物の出土は見られなかった。

第558号土壙 (第7・365図)

X-19グリッドに位置する。平面は径0.87m×0.66mの不整な楕円形で、深さは27cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面は緩やかなU字状を呈する。

覆土は地山や焼土の大型ブロックを主体とすることから、故意に埋め戻されたものと思われる。

覆土からは甕や坏などの土師器が少量出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第559号土壙 (第7・365図)

X-19グリッドに位置する。平面は径1.39m×0.69mの鶏卵状を呈し、深さは21cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土からは須恵器の長頸瓶や坏、土師器の甕などが少量出土している。細片ばかりであり、図示できたの

は2点(第372図83・84)にすぎない。

第560号土壙 (第7・366図)

X-19グリッドに位置する。第561号土壙と接するが、両者の関係は明らかでない。平面は径0.74m×0.62mの円形で、深さは25cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

覆土からは土師器の破片が数点出土したが、微細なため図示するには至らなかった。

第561号土壙 (第7・366図)

X-20グリッドに位置する。第560号土壙の東に隣接するが、その新旧関係は明らかでない。平面は径0.96m×0.74mの楕円形で、深さは38cmを測る。底面は平坦で、中心部がピット状に深くなる。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、全体的には円筒状の掘り込みとなる。

覆土からは土師器の細片が少量出土したが、図示するには至らなかった。

第562号土壙 (第7・366図)

X-19グリッドを中心に位置する。第12号柵列跡の東端柱穴を切り、東の肩部を第257号井戸跡に切られる。なお、北側に重複する第260号井戸跡との関係は、これを明らかにできなかった。平面は径1.85m×1.56mの隅丸形状で、深さは24cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏・赤色塗彩の坏)片をわずかに出土したが、微細なため図示できなかった。

第563号土壙 (第7・366図)

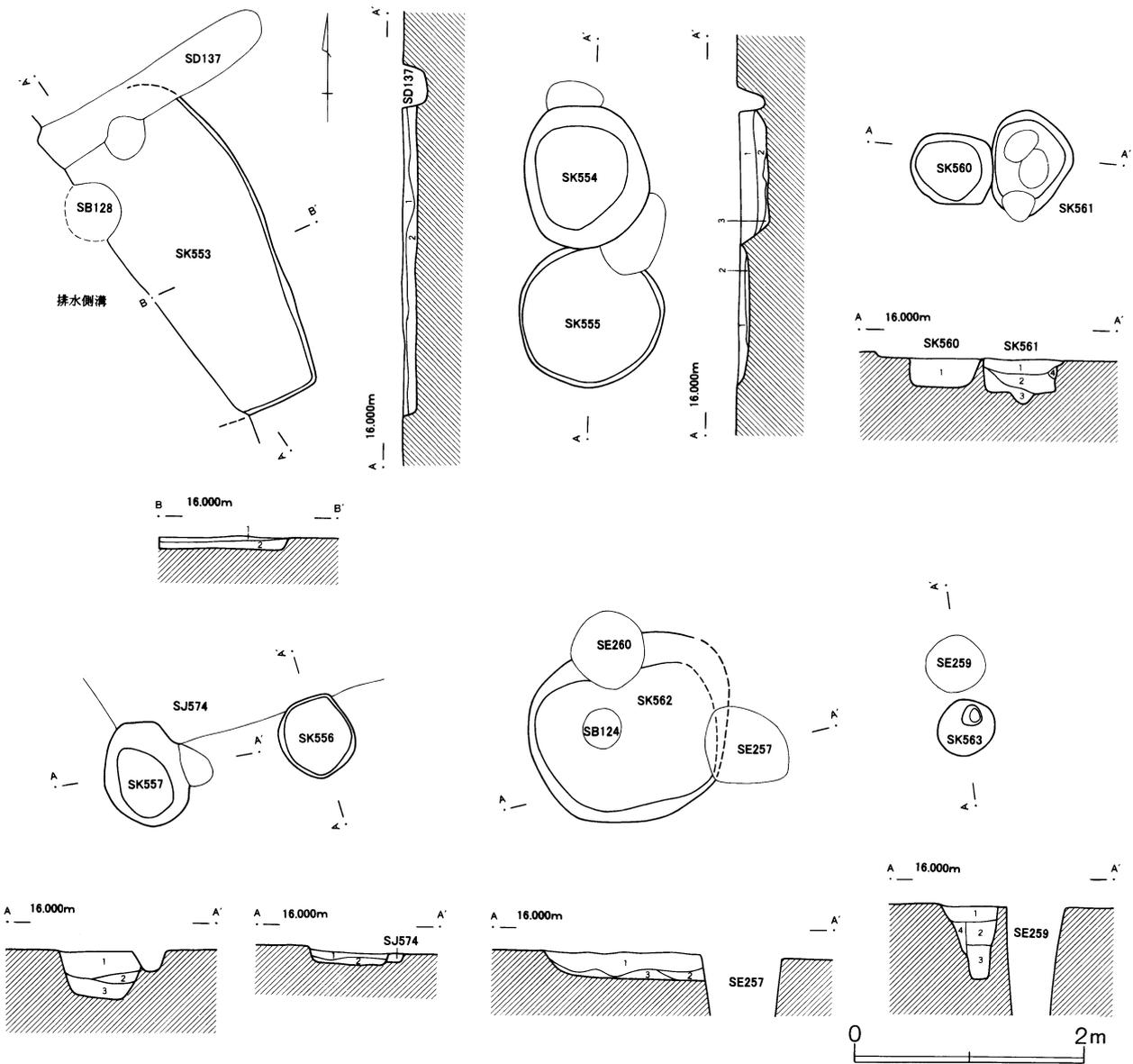
X-19グリッドに位置する。平面は円形を呈し、径0.51m×0.50m、深さ64cmを測る。横断面はV字状を呈し、全体的には柱穴状である。

遺物の出土は微量ながら、土師器の甕や坏(第372図76~78)を図示し得た。

第564号土壙 (第7・367図)

X-19グリッドに位置する。第574号住居跡の内部に掘り込まれるが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径0.56m×0.54mの円形で、住居跡床面か

第366図 土壌 (14)



第553号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。

第554号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第555号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土地山ブロックを含む。炭化物粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第556号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。

第557号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物ブロックを含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 土器片・焼土粒・炭化物粒を少量含む。

第560号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 大型の焼土ブロック多く含む。炭化物粒少量含む。

第561号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 大型の焼土ブロックを含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 大型の焼土ブロック・褐色土ブロックを少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山・暗褐色土の混在層。
4. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック。

第562号土壌 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 土器片・焼土ブロックを含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。

第563号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土地山ブロック・炭化物粒を少量含む。土器片集中出土。
2. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土地山ブロックを含む。炭化物粒を少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

らの深さは12cmを測る。底面は平坦である。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しが考えられる。

遺物の出土は見られなかった。

第565号土壌（第7・367図）

X-19グリッドを中心に位置する。第574号住居跡、第77号溝跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は確認できなかった。北部を溝跡に切り取られるため、全体の規模や形状は明らかとし得ない。深さは住居跡床面より15cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面は緩やかなU字状となる。

覆土からは、土師器の甕や坏を少量出土している。微細な破片が大半で、図示できたのは1点(第372図79)のみである。

第566号土壌（第8・367図）

AB-21グリッドを中心に位置する。西側は拡張前の排水用側溝で切断してしまったため、全体の規模や形状は明らかとし得ない。検出部は2.01m×1.24mの長方形ながら、北西部はやや張り出すようである。深さは9cmと浅く、底面は平坦である。

住居跡の一部かとも思われたが、壁溝などの施設はまったく検出されなかった。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)が少量出土している。しかし、いずれも微細な破片であり、図示するには至らなかった。

第567号土壌（第7・367図）

AA-20グリッドに位置する。複数のピットに切られる他、西側は排水用の側溝で切り取ってしまった。よって、全体の規模や形状は明らかとし得ない。確認面からの深さは7cmを測る。底面は概ね平坦である。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

古墳時代後期の土師器(甕・坏)が少量出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第568号土壌（第7・367図）

Z-20グリッドに位置する。一部が第209号住居跡にかかるが、新旧関係は確認できなかった。平面は径

0.92m×0.75mの隅丸方形で、深さは55cmを測る。底面は中心から北がピット状に深くなる。あるいは2基が重複したものかもしれない。

覆土からは少量、かつ微細な土師器の破片が出土している。いずれも器種は不明なほどで、図示することは叶わなかった。

第569号土壌（第7・367図）

Z-20グリッドに位置する。南東部を第262号井戸跡に切られる。平面は径0.82m×0.70mの円形で、深さは26cmを測る。底面は平坦ながら、北へ向かって傾斜する。

遺物の出土は認められなかった。

第570号土壌（第7・367図）

AA-21グリッドに位置する。第578号住居跡埋没後、床面を掘り抜いて構築される。平面は不整形な方形で、径0.82m×0.66m、深さ23cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面は緩やかなU字状を呈する。

覆土から土師器の甕片を数点出土したが、図示するには至らなかった。

第571号土壌（第7・367図）

AA-21グリッドに位置する。第578号住居跡と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.74m×0.56mの楕円形で、深さは42cmを測る。底面は平坦で、これより立ち上がる壁はほぼ垂直である。

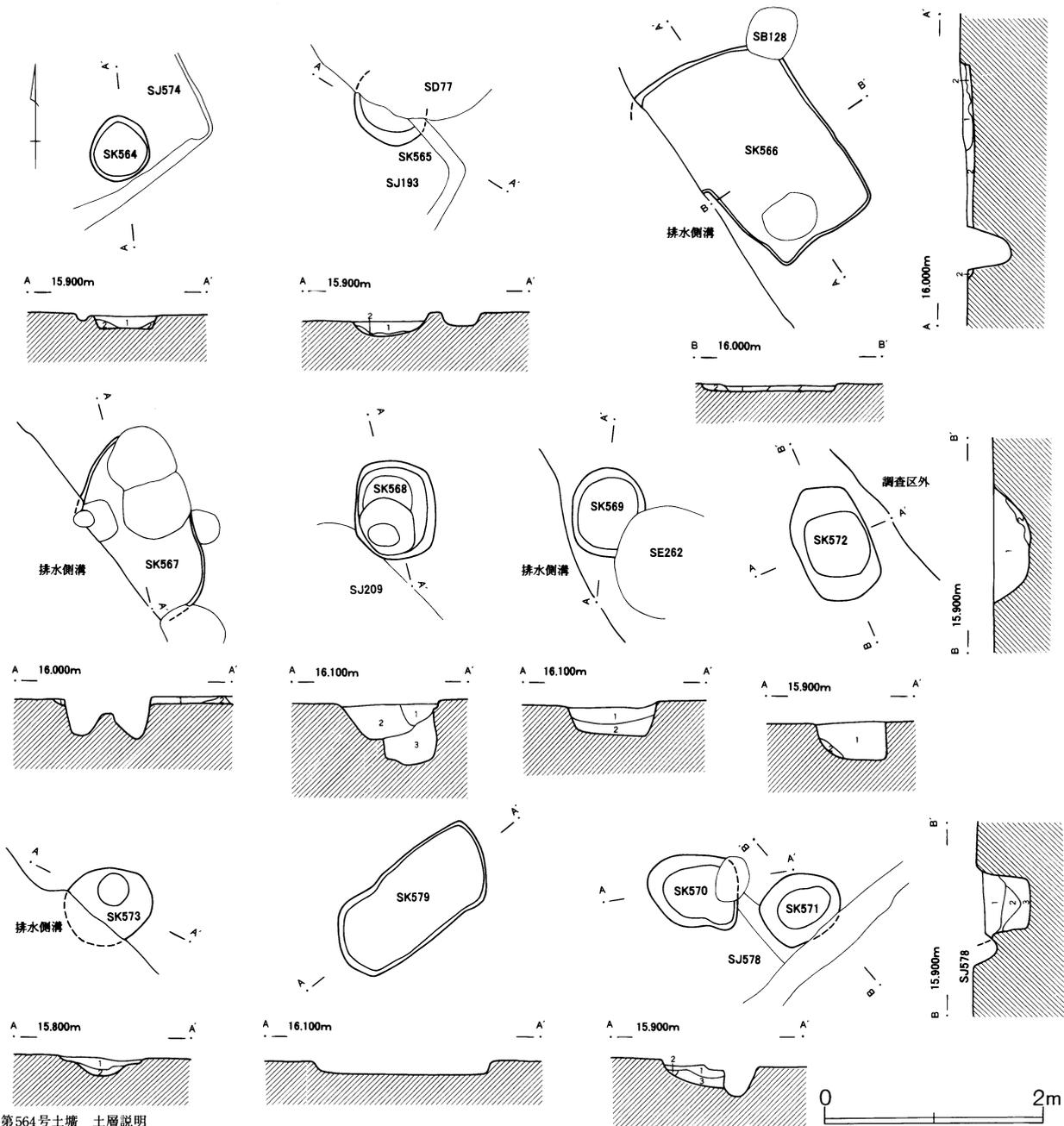
覆土からは図示した土製丸玉(第423図4)のほか、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土している。しかし、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第572号土壌（第6・367図）

W-17グリッドに位置する。平面は両端に丸みを持つ長方形で、径1.11m×0.59m、深さ33cmを測る。底面は平坦で、両端部の壁の立ち上がりは緩やかとなっている。

覆土からは少量、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を出土している。しかし、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第367図 土壌 (15)



第564号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土山ブロック・焼土粒少量。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土山ブロックを多く含む。

第566号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒を含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土山ブロックを多く含む。

第567号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土山ブロックを少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土山ブロックを多く含む。

第568号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロックを多く含む。炭化物粒を少量含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロックを含む。

第565号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を含む。
2. 10YR5/4 におい黄褐色土 砂質。

第569号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

第570号土壌 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

第571号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 上位に褐色土ブロック多く含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロックを含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土

第572号土壌 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロック・焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

第573号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロックを含む。

第573号土壌 (第6・367図)

W-17グリッドに位置する。拡張前に設定した排水側溝により、南西部分は掘り抜いてしまった。検出部分は径0.71m×0.56mだが、平面はおおよそ円形を呈するものと思われる。確認面からの深さは約19cmを測り、横断面は緩やかなU字状となる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第574号土壌 (第7・368図)

X-18グリッドに位置する。第193号住居跡埋没後、その床を掘り抜く。平面は径1.08m×0.96mの円形で、住居跡床面からの深さは34cmを測る。底面はやや丸みを有し、横断面は緩いU字形をなす。

遺物の出土は認められなかった。

第575号土壌 (第7・368図)

X-19グリッドに位置する。第428号土壌と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径1.11m×0.93mの楕円形で、深さは42cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。

遺物の出土は認められなかった。

第576号土壌 (第7・368図)

X-18・19グリッドに位置する。これも第428号土壌と重複するが、新旧関係は確認できなかった。重複部分が不明のため、規模や形状は明らかにし得ない。確認面からの深さは42cmを測り、底面はおおよそ平坦である。

第577号土壌 (第11・368図)

AN-26グリッドに位置する。当初は第464号住居跡の貯蔵穴かとも思われたが、断面観察により、埋没後にその床を掘り抜いていることが確認できた。平面は径0.59m×0.57mの円形で、住居跡床面からの深さは52cmを測る。底面はやや丸みを有し、壁はこれより急角度で立ち上がる。

遺物の出土は見られなかった。

第578号土壌 (第11・368図)

これより、第582号土壌までの5基は調査時の番号

はなく、図面(主に土層断面図)整理の過程で抽出したものである。このため、遺物の出土ははっきりしない。おそらくは、重複する遺構に混在して取り上げてしまったものと思われる。

第578号土壌はAO-27グリッドに位置する。第495・496号住居跡、および第464・465・466号土壌に切られる。平面は径0.97m×0.87mの楕円形で、確認面からの深さは28cmを測る。底面はおおよそ平坦である。

覆土は人為的に埋め戻されたもので、第495・496号住居跡に伴う施設(床下土壌?)とも思われる。

第579号土壌 (第7・367図)

Y-19・20グリッドに位置する。第571号住居跡の内部に掘り込まれるが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径1.64m×0.76mの長方形で、住居跡床面からの深さは12cmを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。

第580号土壌 (第11・368図)

AP-26グリッドに位置する。第529・530号住居跡に上面を削り取られるためか、全体は不整形の浅い窪み程度であった。検出は径1.48m×1.01m、住居跡床面からの深さは最大15cmである。底面は不定で、大きな凹凸を有している。

覆土には焼土ブロックが多く、若干の土師器片を含んでいた。

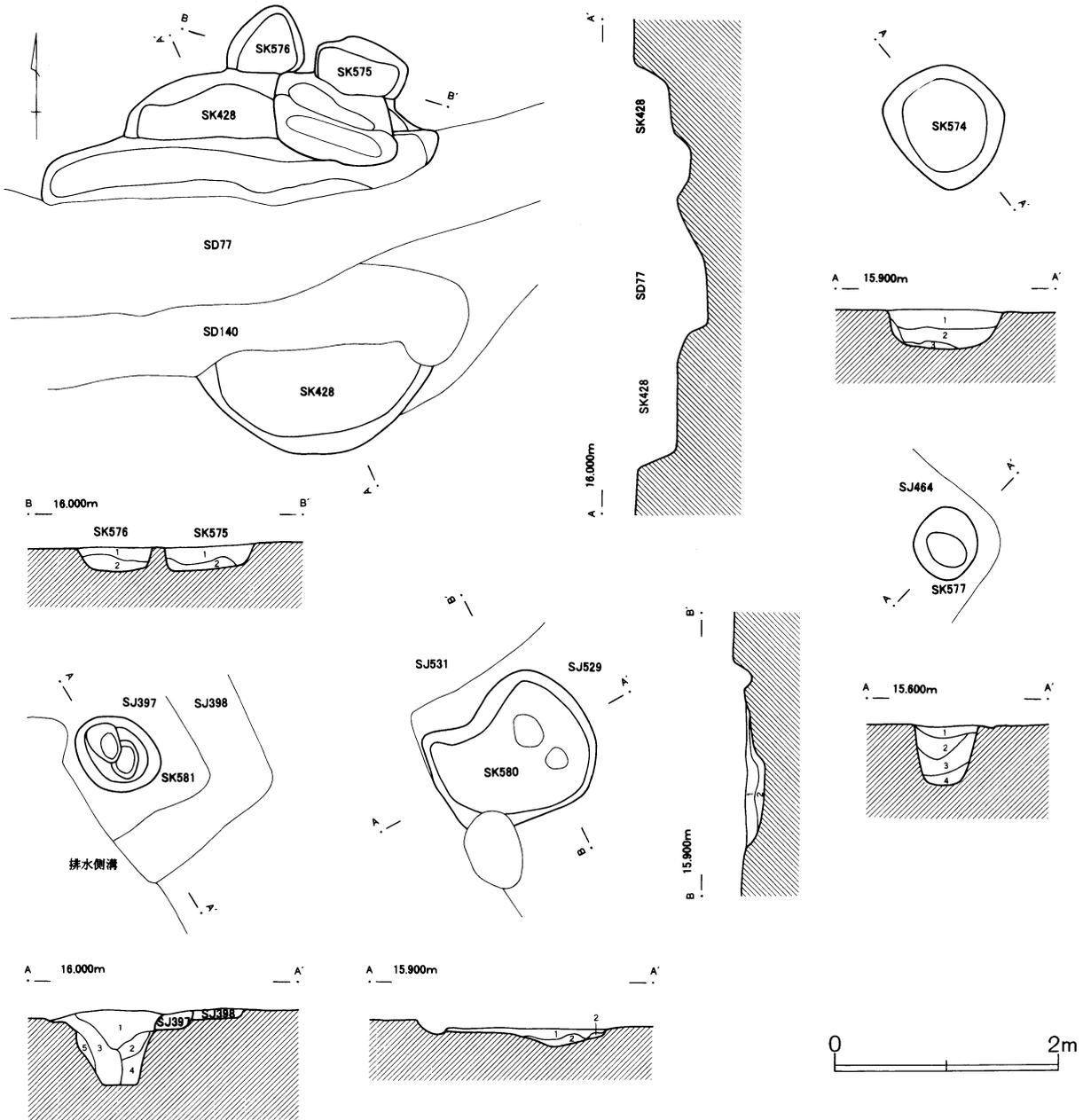
第581号土壌 (第9・368図)

AI-19グリッドに位置する。第397号住居跡の東隅部に検出されたため、貯蔵穴として調査に臨んだが、土層観察により住居跡を切ることが確認された。平面は径0.81m×0.65mの楕円形で、確認面からの深さは68cmを測る。底面は平坦で、これより立ち上がる壁は急である。

第582号土壌 (第9・369図)

AG-19グリッドに位置する。第282号住居跡(『築道下遺跡II』にて報告)を切り、第382号住居跡に切られる。平面は径2.09m×1.41mの楕円形で、確認面からの深さは35cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面は緩いU字状を呈する。

第368図 土壌 (16)



- 第574号土壌 土層説明
1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・褐色土ブロックを少量含む。
 2. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

- 第575号土壌 土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

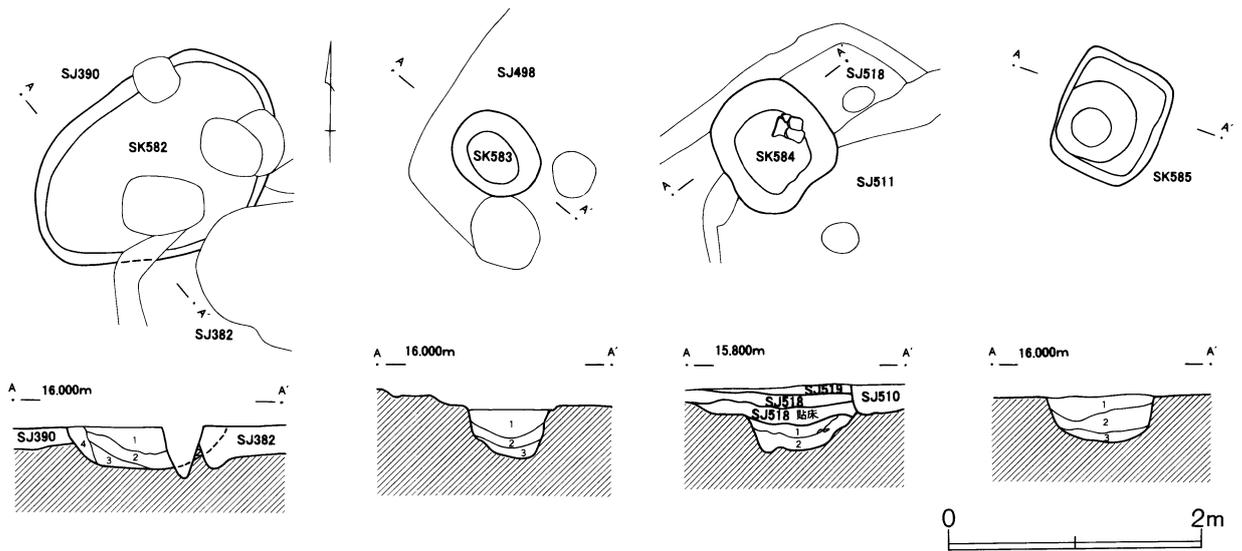
- 第576号土壌 土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。

- 第577号土壌 土層説明
1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を含む。粘質。
 2. 10YR3/2 黒褐色土 ロームブロックを含む。粘質。
 3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を含む。粘質。
 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土ブロックを含む。粘質。

- 第580号土壌 土層説明
1. 10YR3/3 暗褐色土 大型の焼土ブロック・褐色土ブロックを多く含む。
 2. 10YR4/5 にぶい黄褐色土 褐色土をベースに焼土粒を少量含む。

- 第581号土壌 土層説明
1. 10YR4/4 褐色土 地山粒を含む。炭化物を微量に含む。
 2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 しまり・粘性あり。焼土粒を含む。
 3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 2層に近似するが、焼土粒・地山粒を含む。
 4. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒ブロックを含む。
 5. 10YR6/6 明黄褐色土 地山粒を多く含む。

第369図 土壌 (17)



第582号土壌 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化粒を含む。
2. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山粒を含む。しまり、粘性あり。
3. 土層註記なし。
4. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山粒を含む。しまりあり。

第584号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘質地山・砂質地山ブロック多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒多く含む。全体に薄く溶混。

第583号土壌 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 粘質地山小型ブロック少量、焼土粒多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 1層に準ずる。灰を含む。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 粘質地山ブロック主体。壁の崩落土層。

第585号土壌 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・焼土粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒やや多く、地山粒を混入。
3. 10YR3/2 黒褐色土 きめやや細かく、焼土粒・炭化粒を含む。

第583号土壌 (第10・369図)

以下の3基は貯蔵穴など、住居跡に伴う施設として調査を行なったが、図面整理の過程で齟齬を生じたため、土壌として掲載した。

第583号土壌はAK-23グリッドに位置する。第498号住居跡内に掘り込まれているが、その関係は明らかにできなかった。平面は径0.74m×0.62mの円形で、確認面からの深さは38cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状となる。

覆土からは少量の土師器を出土しているが、図示し得たのは2点(第372図80・81)のみである。

第584号土壌 (第10・369図)

AL-22グリッドに位置する。埋め戻された後、上

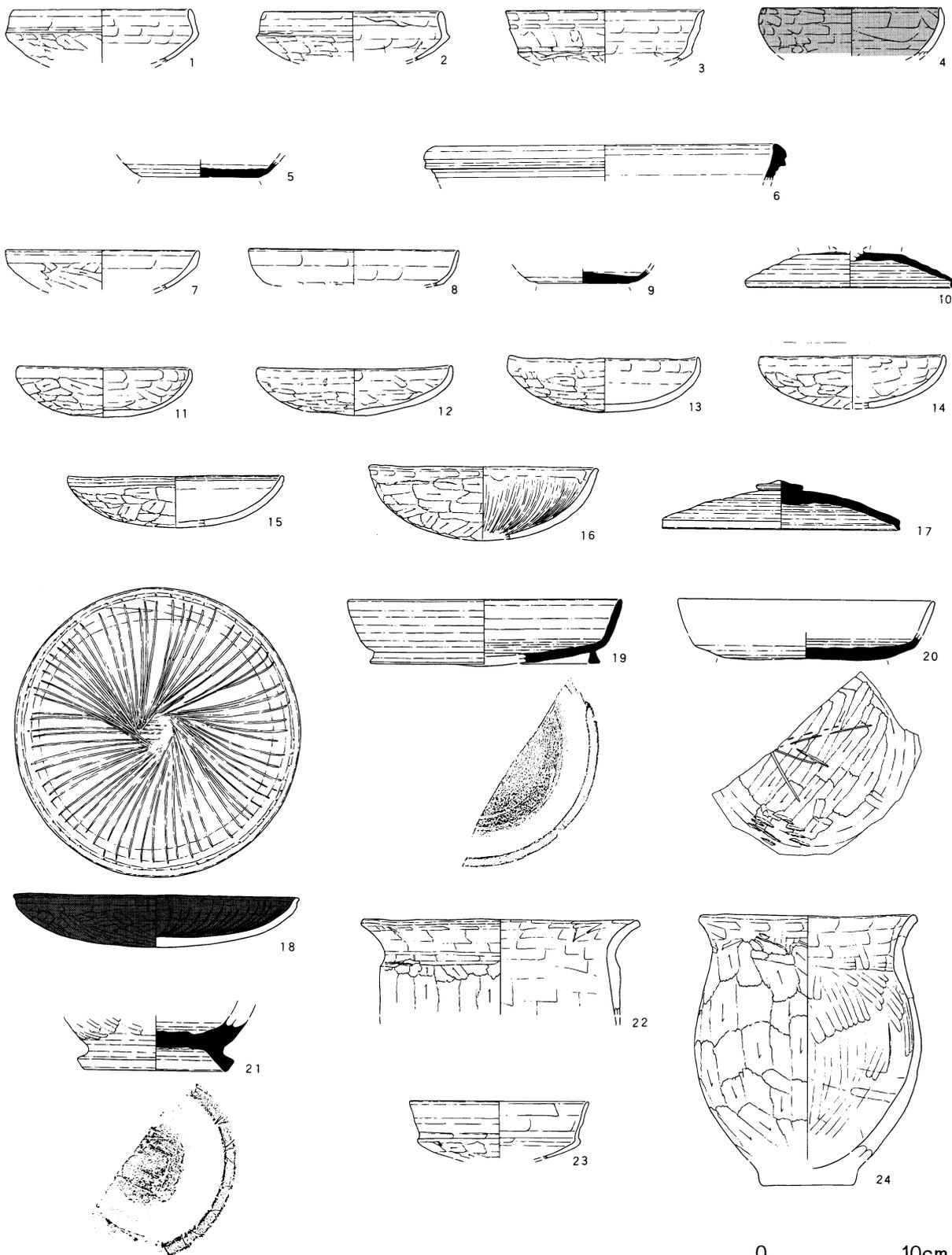
面を第518号住居跡に削り取られる。検出部での平面は径0.98m×0.92mの楕円形で、確認面からの深さは52cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、住居の構築に先立ち、故意に埋め戻されたものと考えられる。

第585号土壌 (第8・369図)

AF-22グリッドに位置する。第348号住居跡内に掘り込まれているが、その関係は明らかにできなかった。平面は径0.98m×0.86mの長方形で、住居跡床面からの深さは38cmを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字状を呈する。

第370図 土壙出土遺物(1)



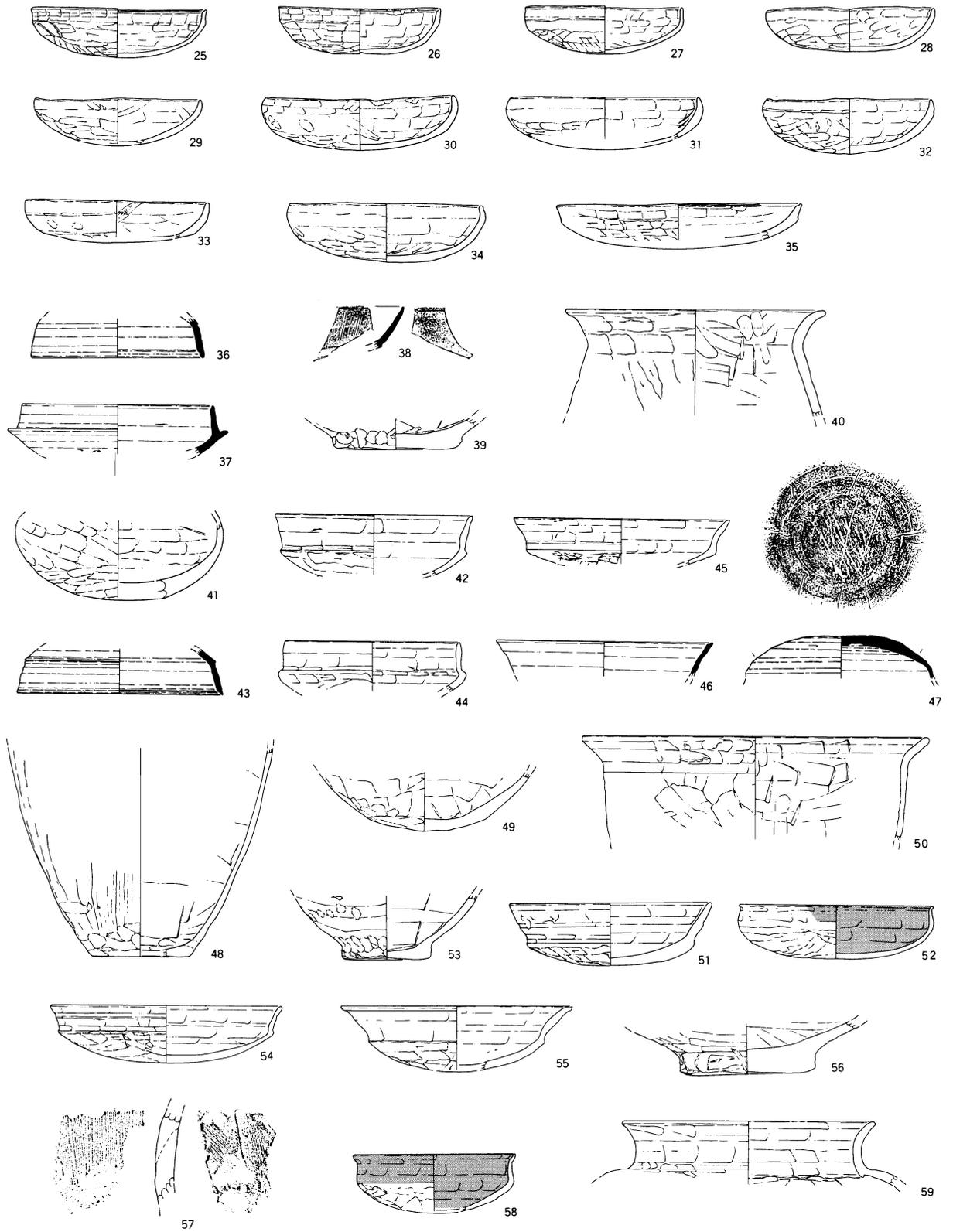
1・2 - SK415
 3 - SK416
 4 - SK427

5・6 - SK431
 7~10 - SK435
 11~22 - K436

23・24 - SK437

0 10cm

第371図 土壙出土遺物(2)



25 ~ 35 - SK442

42 - SK460

48 - SK483

51 · 52 - SK489

57 - SK508

36 ~ 40 - SK454

43 · 44 - SK473

49 - SK485

53 - SK502

58 - SK543

41 - SK455

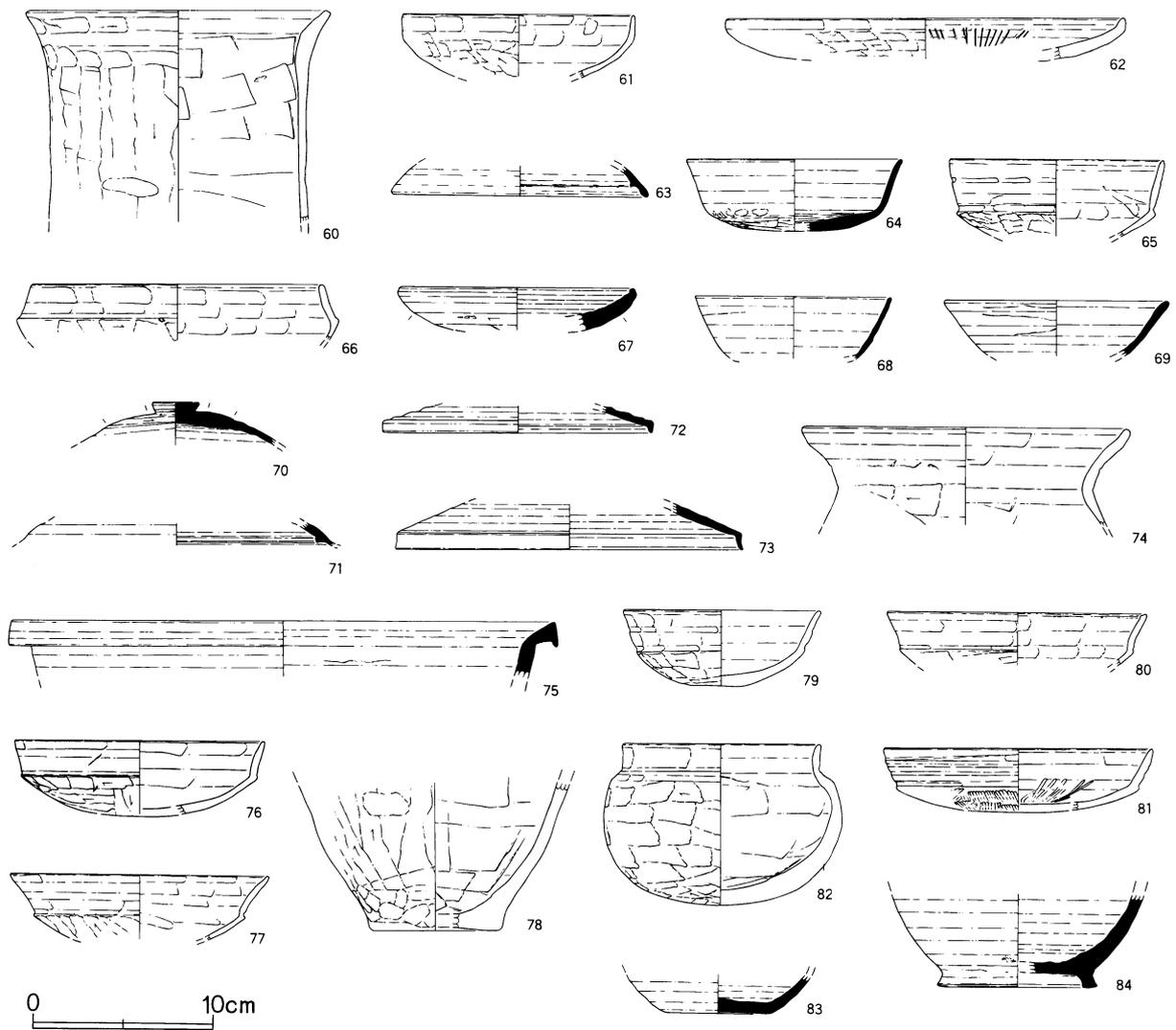
45 ~ 47 - SK479

50 - SK487

54 ~ 56 - SK504

59 - SK544

第372図 土壌出土遺物(3)



- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| 60 - SK546 | 68~75 - SK554 | 80・81 - SK583 |
| 61~64 - SK519 | 76~78 - SK563 | 82 - SK584 |
| 65~67 - SK551 | 79 - SK565 | 83・84 - SK559 |

第150表 土壌出土遺物観察表(1)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SK 415	坏	(12.0)	(3.6)		細 (W, B, R)	普	にぶい黄橙	破片	
2	SK 415	坏	(11.9)	(3.4)		粗 (W, B, R)	良	にぶい橙	20	
3	SK 416	坏	(13.4)	(3.5)		粗 (B, R)	良	にぶい橙	破片	黒色付着物
4	SK 427	坏	(12.0)	(3.3)		細 (B, R)	良	灰 褐	20	
5	SK 431	須恵器坏		(1.2)	(7.9)	粗 (W, F, 針)	良	黄 灰	破片	南比企
6	SK 431	須恵器甕	(23.1)	(2.5)		細 (B, R)	良	灰 褐	20	
7	SK 435	坏	(13.0)	(2.7)		細 (W, R)	良	にぶい黄橙	破片	
8	SK 435	坏	(14.1)	(2.5)		細 (B, R)	良	橙	破片	
9	SK 435	須恵器坏		(1.0)	(6.1)	粗 (W, F, 針)	良	灰	破片	南比企
10	SK 435	須恵器蓋	(13.8)	(2.5)		細 (F)	良	灰 白	25	
11	SK 436	坏	(11.8)	3.3		微 (W, B)	普	橙	60	
12	SK 436	坏	(13.6)	(3.1)		礫 (C)	普	にぶい橙	50	
13	SK 436	坏	12.9	3.8		微 (W, B)	普	橙	80	

第151表 土壌出土遺物観察表(2)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
14	SK 436	坏	(12.6)	(3.6)		微(W, B)	普	橙	35	
15	SK 436	坏	(14.6)	(3.5)		微(W, B)	普	橙	25	
16	SK 436	坏	(15.6)	(4.9)		微(W, B)	良	橙	40	暗文
17	SK 436	須恵器蓋	(16.1)	3.4		(F)	良	灰 白	55	湖西 表面自然釉
18	SK 436	坏	19.5	3.5		微(W, B)	良	褐 灰	100	内外黒色処理 暗文
19	SK 436	須恵器高台付坏	(18.7)	4.4	(15.6)	粗(C)	良	灰	25	湖西
20	SK 436	須恵器坏		(1.7)		粗(W, C, F)	良	灰	破片	末野
21	SK 436	須恵器壺		(3.6)	(9.7)	粗(W, C)	良	灰 白	破片	藤岡
22	SK 436	甕	(19.0)	(6.4)		細(W)	良	浅 黄 橙	破片	
23	SK 437	坏	(12.2)	(3.9)		粗(W, B)	良	橙	20	
24	SK 437	甕	(14.8)	(16.6)		微(W)	良	明 赤 褐	25	
25	SK 442	坏	12.1	3.4		粗(W, C)	良	橙	85	
26	SK 442	坏	(11.4)	3.1		微(W, B)	良	橙	55	
27	SK 442	坏	10.9	(3.3)		微(W, B)	普	橙	100	
28	SK 442	坏	11.5	3.0		微(W, B)	普	橙	95	
29	SK 442	坏	(11.4)	(3.1)		微(W, B)	普	橙	60	
30	SK 442	坏	(13.0)	3.6		微(W, B)	普	橙	45	
31	SK 442	坏	(13.0)	(2.8)		微(W, B)	普	橙	20	
32	SK 442	坏	(11.3)	(3.8)		微(W, B)	普	橙	90	
33	SK 442	坏	(12.6)	(2.5)		微(W, B)	普	橙	破片	
34	SK 442	坏	13.2	3.9		細(W, B)	普	橙	95	
35	SK 442	坏	(17.0)	(2.4)		粗(W, C)	良	橙	破片	
36	SK 454	須恵器蓋	(11.8)	(2.7)		細(W, F)	良	灰	破片	群馬
37	SK 454	須恵器坏	(13.1)	(3.5)		細(W, F, 針)	良	灰	破片	南比企
38	SK 454	須恵器坏?				微(F)	良	灰	破片	東海以西
39	SK 454	甕		(2.2)	(8.9)	粗(W, R, 片)	普	橙	破片	
40	SK 454	甕	(17.9)	(7.3)		礫(W, R)	良	にぶい 橙	破片	
41	SK 455	壺(埴)		(5.3)		微(W, B)	普	橙	20	
42	SK 460	坏	(13.5)	(4.1)		粗(W, R)	良	にぶい 橙	20	
43	SK 473	須恵器蓋	(14.7)	(3.2)		細(F, 針)	良	灰	破片	南比企
44	SK 473	坏	(11.9)	(3.5)		細(W, B, R)	普	にぶい 黄 橙	破片	
45	SK 479	坏	(14.9)	(3.1)		細(W, R)	普	黒 褐	破片	黒色付着物
46	SK 479	須恵器坏	(15.0)	(2.4)		粗(W, F)	良	灰	破片	群馬
47	SK 479	須恵器蓋		(3.0)		粗(W, F)	良	灰	60	群馬
48	SK 483	甕		(14.4)	(6.7)	礫(W, B, R, 片)	普	にぶい 褐	破片	
49	SK 485	甕		(4.1)		細(B, R)	普	にぶい 橙	破片	
50	SK 487	甕	(23.9)	(7.1)		粗(W, R)	良	にぶい 橙	破片	
51	SK 489	坏	13.9	4.3		礫(W, B, R)	良	灰 黄 褐	70	
52	SK 489	坏	(13.3)	3.7		粗(R)	良	橙	40	赤彩
53	SK 502	甕		(4.4)	6.0	礫(W, B, R, 片)	良	浅 黄 褐	破片	
54	SK 504	坏	(15.9)	4.0		粗(W, B, R)	普	黒 褐	40	
55	SK 504	坏	(15.9)	(4.9)		細(B, R)	普	橙	20	
56	SK 504	甕		(3.5)	(9.3)	粗(W, B, R)	良	にぶい 黄 橙	破片	
57	SK 508	埴輪				細(W, B, R)	良	にぶい 橙	破片	
58	SK 543	坏	11.1	(4.0)		礫(W, R)	良	浅 黄 橙	60	赤彩
59	SK 544	壺	(17.1)	(4.5)		粗(W, B, R)	良	にぶい 黄 橙	破片	
60	SK 546	甗	(16.9)	(11.7)		細(R)	普	橙	破片	
61	SK 549	坏	(12.8)	(3.5)		細(W, B, R)	良	にぶい 黄 橙	破片	
62	SK 549	坏	(22.0)	(2.3)		粗(B)	普	褐	破片	暗文
63	SK 549	須恵器蓋	(14.1)	(1.7)		微(F)	良	灰	破片	群馬
64	SK 549	須恵器坏	(12.0)	4.0		礫(W, F, 片)	良	灰 白	30	末野
65	SK 551	坏	(11.8)	(4.3)		細(B, R)	良	にぶい 橙	20	
66	SK 551	坏	(16.1)	(3.1)		細(W, B, R)	良	にぶい 橙	破片	

第152表 土壌出土遺物観察表(3)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
67	SK 551	須恵器坏	(12.9)	(2.3)		粗(W)	良	灰	破片	末野
68	SK 554	須恵器坏	(10.9)	(3.5)		粗(W, 針)	良	灰	30	南比企
69	SK 554	須恵器坏	(12.5)	(3.1)		粗(W, R)	良	灰 黄	破片	南比企
70	SK 554	須恵器蓋		(2.5)		粗(W, F, 針)	良	灰	30	南比企
71	SK 554	須恵器蓋		(1.3)		細(R, F)	良	灰	破片	南比企
72	SK 554	須恵器蓋	(14.9)	(1.5)		細(W, F)	良	灰 白	破片	湖西
73	SK 554	須恵器蓋	(19.8)	(2.6)		細(R, F, 針)	良	灰	破片	南比企
74	SK 554	甕	(18.0)	(5.5)		細(W, B, R)	良	にぶい黄橙	破片	
75	SK 554	須恵器甕	(30.0)	(3.1)		細(W, R, 針)	良	灰	破片	南比企
76	SK 563	坏	(13.9)	(4.1)		細(B, R)	良	橙	30	
77	SK 563	坏	(14.3)	(3.6)		細(W, B, R)	良	橙	20	
78	SK 563	甕		(8.2)	(7.0)	粗(W, R)	普	にぶい橙	破片	
79	SK 565	坏	10.9	4.2		細(B)	良	浅黄橙	80	
80	SK 583	坏	(14.3)	(3.0)		微(R)	普	にぶい橙	破片	
81	SK 583	坏	(14.8)	(3.5)		細(B, R)	普	黒 褐	破片	暗文
82	SK 584	小型壺	11.1	9.0		細(B, R)	普	にぶい橙	80	
83	SK 559	須恵器坏		(2.2)	(5.8)	粗(W, R)	良	橙	25	
84	SK 559	須恵器壺		(5.2)	(8.8)	粗(W)	良	灰	破片	末野

第153表 土壌一覽表(1)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考	番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
414	AF-22	不整円形	1.05	0.94	0.21		447	AF-20	楕円形	1.44	1.19	0.30	
415	AF-22	円形	(1.22)	1.18	0.27		448	前年度調査					
416	AF-22	円形	1.01	0.90	0.31	SE 143より古	449	AM-26	不整形	(1.44)	1.16	0.17	SJ 459より古
417	AF-23	不整長方形	2.32	0.94	0.13	SK 418より新	450	AL-24	不整形	(4.30)	(0.89)	0.24	SJ 457・461・SX 14より古
418	AF-23	不整楕円形	1.14	0.76	0.16	SK 417・SE 143・144より古	451	AM-27	不整形	0.94	0.92	0.39	
419	AF-22	円形	1.31	1.23	0.32	SJ 357より新	452	AM-24	不整形	1.41	1.09	0.23	
420	AF-22	不整円形	1.25	1.05	0.14		453	AM-24	円形	1.66	1.64	0.15	
421	AF-21	不整形	0.80	0.66	0.36		454	AM-25	円形	1.68	1.52	0.40	
422	前年度調査						455	AO-24	楕円形	(1.85)	1.38	0.09	SJ 483より新
423	AF-21	長方形	1.38	0.62	0.05		456	AO-24	楕円形	1.46	0.76	0.13	SJ 485より新 SJ 482より古
424	AH-24	円形	0.86	0.58	0.45	SK 425より新	457	AM-26	長楕円形	(2.94)	0.67	0.46	SE 203より古
425	AH-24	不整形	2.01	1.76	0.25	SK 424より古	458	欠番					
426	AG-20	円形	(1.36)	1.35	0.56	SJ 382より新 SB 104より古	459	欠番					
427	AI-19	長方形	2.12	1.33	0.14		460	AO-27	円形	0.74	(0.64)	0.19	SJ 492より新
428	X-19	不整形	(3.76)	(3.41)	0.37		461	AO-25	不整円形	0.87	0.74	0.21	SK 462より新
429	AH-19	楕円形	1.69	(1.24)	0.60	SD 110より古	462	AO-25	不整形	0.48	(0.39)	0.11	SK 461より古
430	AI-20	長楕円形	2.19	0.56	0.44	SJ 387より古	463	AP-26	隅丸方形	0.66	0.48	0.46	SJ 495~497より新
431	AI-24	不整方形	1.86	1.13	0.17		464	AO-27	円形	1.39	(1.05)	0.27	SJ 495・496・SK 578より新
432	AI-24	楕円形	1.96	1.23	0.33		465	AO-27	楕円形	1.66	1.06	0.31	SJ 495・496・SK 578より新
433	AI-21	長方形	(2.88)	1.05	0.05	SJ 410より新	466	AO-27	円形	1.09	1.06	0.24	SJ 495・496・SK 578より新
434	AI-22	不整円形	(0.43)	0.38	0.57		467	AO-27	不整形	(0.52)	0.44	0.18	SK 468より古
435	AI-22	不整形	1.57	(1.07)	0.13		468	AO-27	不整形	1.08	0.64	0.26	SK 467・469より新
436	AI-24	不整形	2.22	1.92	0.22	SJ 419・SE 163より新	469	AO-27	円形	0.68	0.62	0.12	SK 468より古
437	AJ-23	楕円形	1.04	0.45	0.14	SJ 430より新	470	AP-25	楕円形	0.71	0.47	0.23	SJ 534より新
438	AH-21	円形	1.31	1.30	0.11		471	AH-21	長方形	(1.75)	0.92	0.19	SJ 385より新
439	AI-23	楕円形	1.71	1.37	0.23		472	AQ-28	楕円形	1.31	0.94	0.19	
440	AI-23	不整長方形	1.97	1.41	0.16	SJ 425より新	473	AP-28	円形	1.29	1.24	0.24	
441	AI-23	長方形	1.97	1.14	0.09	SJ 426より新	474	AM-27	円形	0.54	0.45	0.24	
442	AJ-24	不整長方形	(1.46)	1.05	0.13	SJ 436より新	475	AM-27	楕円形	(1.27)	1.07	0.15	
443	前年度調査						476	AL-23	不整楕円形	0.86	0.82	0.53	SJ 502・506・510より新
444	AK-21	長方形	0.99	0.91	0.50		477	AK-23	円形	1.09	1.01	0.31	SJ 498・499より古
445	AK-21	円形	0.87	0.84	0.95		478	AL-23	円形	0.85	0.80	0.27	SJ 501より新
446	AK-26	円形	0.65	0.61	0.21		479	AL-23	不整形	(1.52)	1.23	0.72	SJ 501・506・510より新

第154表 土壌一覽表 (2)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考	番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
480	AL-23	長方形	2.01	0.94	0.29	SJ501・506・510より新	533	AV-31	不明	-	-	0.14	SK 534より古
481	AL-23	楕円形	1.64	1.32	0.13	SJ 501・506より新	534	AV-31	楕円形	(1.17)	0.57	0.35	SK 533より新
482	AL-22	楕円形	1.44	1.28	0.09	SJ 519より新	535	AU-30	不整楕円形	0.76	0.53	0.54	
483	AM-22	円形	0.76	0.70	0.32		536	AV-31	楕円形	0.79	0.36	0.21	
484	AK-21	長方形	0.99	0.69	0.38		537	AT-29	楕円形	0.83	0.64	0.56	
485	AL-21	不整形	1.32	(0.87)	0.21		538	AS-29	円形	0.59	0.50	0.03	SJ 545より新
486	AK-21	楕円形	0.75	0.62	0.21		539	AR-29	楕円形	0.83	0.46	0.08	
487	AS-29	長方形	4.48	0.99	0.56	SJ 544より新	540	AK-26	円形	1.10	0.98	0.17	SJ 451より新
488	AL-21	不整形	1.29	(0.49)	0.65	SJ 548より新	541	AQ-27	円形	0.97	0.76	0.26	SJ 563より新
489	AS-29	円形	0.83	0.64	0.14		542	AQ-26	不整形	1.57	0.65	0.26	
490	AM-22	不整形	0.68	(0.34)	0.12		543	AQ-27	不整形	4.53	1.46	0.76	SJ 559より新
491	AT-30	半円形	0.59	(0.42)	0.08		544	AR-28	隅丸長方形	1.80	0.61	0.27	
492	AT-30	不整形	-	-	0.12	SK 493より新 SJ549・SD122より古	545	AR-27	方形	0.66	0.61	0.18	
493	AT-30	不明	-	-	0.20	SJ 549・SK 492より古	546	AS-27	隅丸長方形	(1.82)	1.77	0.23	
494	AQ-27	楕円形	(1.18)	0.71	0.65	SK 495より新	547	AN-25	長方形	2.12	1.56	0.28	SJ 470より新
495	AQ-27	不整形	(0.59)	0.41	0.48	SK 494より古	548	AX-33	方形	0.85	0.73	0.42	SD 125より古
496	AP-27	円形	0.84	0.74	0.06		549	X-20	不明	-	-	0.41	
497	AP-27	楕円形	0.68	0.45	0.26		550	X-19	楕円形	0.97	0.49	0.37	
498	AP-28	円形	0.58	0.51	0.22		551	X-20	楕円形	2.32	(1.45)	0.39	SE 250より新
499	AL-24	方形	0.64	0.57	0.18		552	X-20	隅丸長方形	1.31	0.61	0.48	SJ 573・579より新
500	AM-24	不整方形	(0.80)	0.64	0.20		553	AA-21	不整長方形	-	-	0.13	SD 137より古
501	AM-24	円形	0.46	0.46	0.34		554	X-19	円形	1.25	1.09	0.24	SK 555より新
502	AM-23	不整形	0.81	0.34	0.24		555	X-19	円形	1.28	1.27	0.11	SK 554より古
503	AN-23	隅丸長方形	0.76	0.54	0.39		556	X-19	円形	0.70	0.65	0.12	SJ 574より新
504	AN-23	隅丸長方形	0.76	0.64	0.50	SJ 477より新	557	X-19	不整楕円形	0.93	0.71	0.42	
505	AN-24	円形	0.60	0.60	0.11		558	X-19	不整楕円形	0.87	0.66	0.27	
506	AO-24	円形	0.64	0.64	0.24		559	X-19	不整楕円形	1.39	0.69	0.21	
507	AO-24	隅丸方形	0.78	0.71	0.42		560	X-19	円形	0.74	0.62	0.25	
508	AX-32	不整円形	(1.00)	(1.00)	0.13	SJ 550より新	561	X-20	楕円形	0.96	0.74	0.38	
509	AS-29	楕円形	(1.50)	0.85	0.09		562	X-19	隅丸方形	(1.85)	1.56	0.24	SA 12より新 SE 257より古
510	AS-29	不整形	(0.51)	0.49	0.15	SJ 511より古	563	X-19	円形	0.51	0.50	0.64	
511	AS-29	楕円形	0.83	0.54	0.21	SK 510より新	564	X-19	円形	0.56	0.54	0.12	
512	AW-31	円形	2.50	2.50	0.66		565	X-19	不明	-	-	0.15	
513	AW-31	不整楕円形	0.86	0.82	0.82		566	AB-21	不整長方形	2.01	1.24	0.09	
514	AW-31	楕円形	1.14	0.72	0.13		567	AA-20	不明	-	-	0.07	
515	AX-33	楕円形	0.76	0.60	0.05		568	Z-20	隅丸方形	0.92	0.75	0.55	
516	AW-32	不整形	(0.51)	0.49	0.09	SD 126より古	569	Z-20	円形	0.82	0.70	0.26	SE 262より古
517	AX-32	不明	-	-	0.09	SK 518より古	570	AA-21	不整方形	(0.82)	0.66	0.23	SJ 578より新
518	AX-32	不整長方形	1.31	1.06	0.38	SK 517・SD 126より新	571	AA-21	楕円形	0.74	0.56	0.42	
519	AX-32	楕円形	0.66	0.49	0.33		572	W-17	隅丸長方形	1.11	0.59	0.33	
520	AW-32	長楕円形	1.23	0.31	0.15		573	W-17	円形	0.71	(0.56)	0.19	
521	AW-32	不明	-	-	0.09		574	X-18	円形	1.08	0.96	0.34	SJ 193より新
522	AW-32	不明	-	-	0.12		575	X-19	楕円形	1.11	0.93	0.42	
523	AX-32	不整長方形	(0.63)	0.41	0.14		576	X-18	不明	-	0.60	0.21	
524	AX-32	不整円形	(1.11)	0.91	0.24	SK 525・527より新	577	AN-26	円形	0.59	0.57	0.52	SJ 464より新
525	AX-32	不整楕円形	-	0.68	0.16	SK 524より古	578	AO-27	楕円形	(0.97)	0.87	0.28	SJ 495・496・SK 464・466より古
526	AX-32	不整形	-	-	0.13		579	Y-20	長方形	1.64	0.76	0.12	
527	AX-32	半円形	-	-	0.07	SK 524より古	580	AP-26	不整形	1.48	1.01	0.08	SJ 529・530より古
528	AU-29	長方形	2.06	0.81	0.54	SD 133より古	581	AI-19	楕円形	0.81	0.65	0.68	SJ 397より新
529	AU-30	円形	0.75	0.75	0.30		582	AG-19	楕円形	2.09	1.41	0.35	SJ 282より新 SJ 382より古
530	AV-31	円形	0.71	0.59	0.23		583	AK-23	円形	0.74	0.62	0.38	
531	AV-32	楕円形	0.75	0.43	0.32		584	AL-22	楕円形	0.98	0.92	0.52	SJ 518より古
532	AX-32	楕円形	0.52	0.39	0.07		585	AF-22	長方形	0.98	0.86	0.38	

5. 井戸跡

本書で報告の対象となる井戸跡は、第143号から第270号までである。このうち、第173号、第183～190号、第192～196号、および第249号の15基は、既に『築道下遺跡Ⅱ』において報告を行なっている。また、第229号、第247号の2基は欠番であるため、以下に掲載する井戸跡は111基となる。

井戸跡も他の遺構と同様、遺跡内の特定部分に集中するような傾向は看取されない。

規模的に大別するならば、おおよそ三つのタイプが挙げられる。第一は、直径が2 m以上、深さも2 mを超えるような大型のものである。横断面は緩い漏斗状となる。第二は、直径1.5 m前後で、深さは2 m程度のものである。横断面は急角度の漏斗状から、円筒状を呈する。第三は、直径0.6 m前後で、深さは1.5 m程度の小型のものである。壁はほぼ垂直で、横断面は円筒状を呈する。

いずれも素掘りの井戸で、土層での遺存も含め、杵組みなどは検出されていない。また、修復されたり、浚渫されたりした様子も窺えなかった。冬季に出水することはほとんどなかったが、梅雨時から秋の台風シーズンまでは地下水位が高く、排水しながらの調査となった。

遺物の出土は少ないが、土師器や須恵器などのほか、青磁や常滑などの中世陶磁器、木製の曲物、鉄器、側縁を加工した緑泥片岩などが見出されている。古墳時代から古代にかけての遺物は小型から中型の井戸跡に、中世の遺物は中型から大型の井戸跡に多く見られるようである。

覆土の傾向としては、小型のものは腐植土を主体とした自然堆積、中型から大型のものは地山ブロックを主体とした人為的な埋め戻しを窺うことができる。

第143号井戸跡（第9・373図）

A F-23グリッドを中心に位置する。第416・418号土壌を切るが、第361・362号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.84 m×0.75 mの楕円

形で、確認面からの深さは1.78 mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。上半はやや崩落するが、全体は円筒形の掘り込みである。

覆土からは図示した須恵器の坏(第388図1)のほか、少量の土師器破片が出土している。

第144号井戸跡（第9・373図）

A F-23グリッドに位置する。第418号土壌を切る。平面は径0.46 m×0.45 mの円形で、確認面からの深さは1.51 mを測る。壁は崩落の様子は見られず垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、横断面は円筒状となる。

覆土からは図示した須恵器の蓋(第388図2)のほかには、土師器の細片がわずかに出土しているのみである。

第145号井戸跡（第9・373図）

A F-23グリッドに位置する。第362号住居跡の床と柱穴を掘り抜く。平面は径0.78 m×0.76 mの円形で、住居跡床面からの深さは1.55 mを測る。底面は平坦で、壁は柱穴との重複部が崩落しているものの、立ち上がりはほぼ垂直である。底面は平坦で、横断面はわずかに漏斗状となる。

遺物は図示した土師器の坏(第388図3)のほか、少量の土師器や須恵器破片が出土している。

第146号井戸跡（第9・373図）

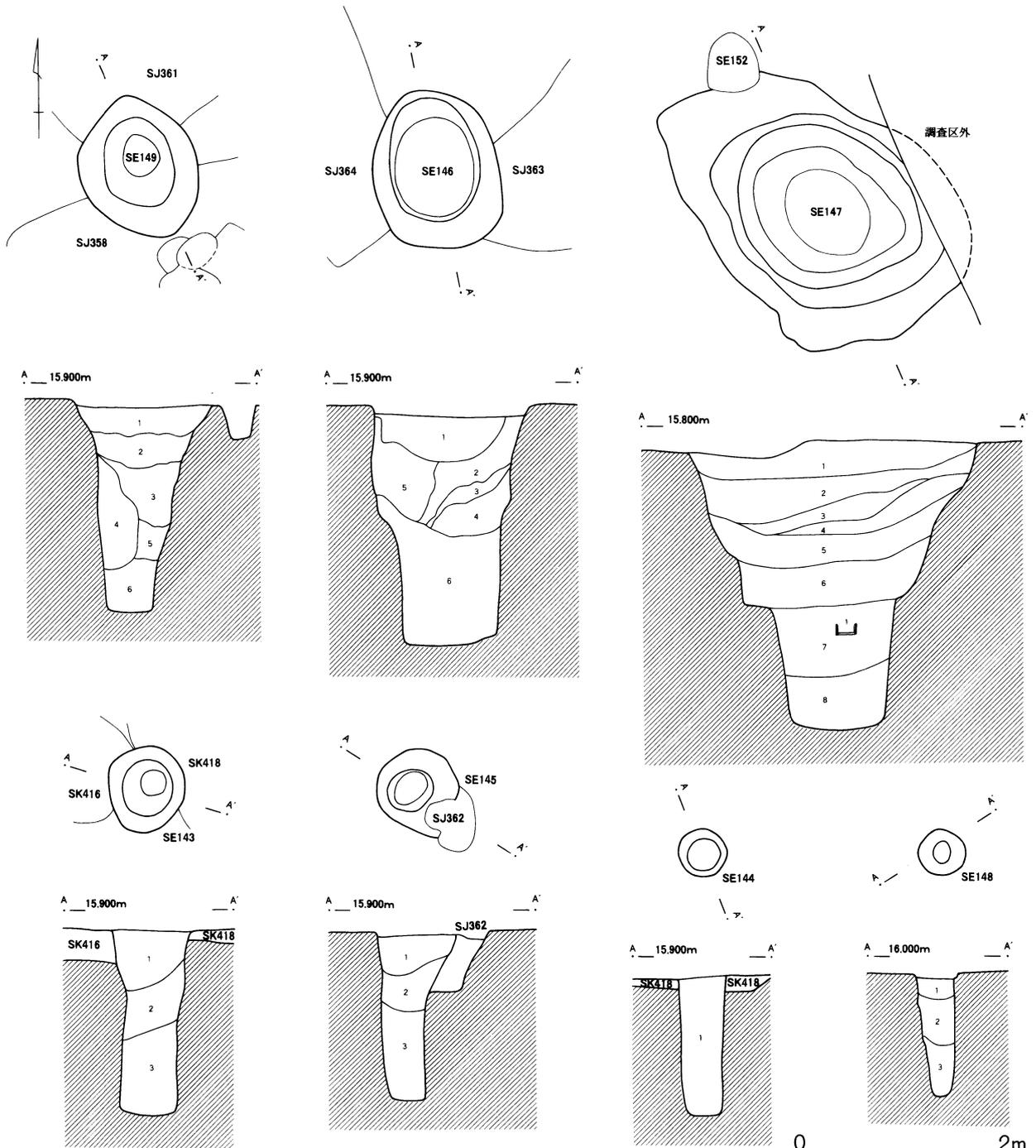
A F-23グリッドに位置する。第363・364号住居跡と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径1.52 m×1.22 mの楕円形で、確認面からの深さは2.21 mを測る。底面は平坦で、横断面はほぼ円筒形となる。

遺物の出土は少ないが、常滑産の甕(第388図4)、青磁の碗(第390図66)、砥石(第420図14)、鉄器(第427図15)などが出土している。

第147号井戸跡（第9・373図）

A F-23グリッドに位置する。第152号井戸跡を切ったの構築であるが、第363・364号住居跡との重複

第373図 井戸跡 (1)



第143号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・炭化物粒・粘土ブロックを含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・粘土ブロックを含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・粘土ブロックを含む。しまりあり。

第144号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒を含み、粘土ブロックを混入。

第147号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・粘土ブロックを含む。
2. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒・地山ブロックを多く含む。しまりあり。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・地山ブロックを含む。しまりあり。
4. 10YR4/6 褐色土 地山粒・地山ブロックを多く含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 粘土ブロック・地山粒を含む。しまりあり。
6. 10YR2/2 黒褐色土 粘土ブロックを含む。粘性強い。
7. 10YR3/1 黒褐色土 粘性ブロックを含む。粘性あり。
8. 10YR3/1 黒褐色土 粘土ブロックを含む。粘性あり。

第145号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒を含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒を含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・粘土ブロックを含む。

第146号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/3 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物粒・地山粒を含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 腐食土でビート状。炭化物粒・焼土粒を混入。
3. 10YR4/4 褐色土 地山粒を含む。しまりあり。
4. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒を含む。しまり弱いビート状。
5. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒・地山粒を含む。
6. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒を含む。しまり弱い。腐食土層。

第148号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 炭化物を多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・地山粒を含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・地山粒を含む。粘性あり。

関係は確認できなかった。東端部は調査区外となるものの、平面は径2.78m×2.01mの不整な楕円形を呈し、住居跡床面からの深さは2.78mを測る。壁の上半は崩落でなだらかとなるが、下半はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、横断面は漏斗状を呈する。

覆土からは常滑産の甕、青磁の碗(第390図67)、鉄器(第428図17)、木製容器(第374図1)のほか、古墳時代から奈良時代の土師器や須恵器(第388図5～13)が出土している。

木製容器は底板が2枚で、内面中央部に「×」印が墨書される。直径22cm、高さ12cm、底板の厚さはともに0.9cm程である。曲物部分は厚さ0.3cmの板を2～3重に巻き、端部を木皮で編みとめている。取り上げ後に実施した木材の同定分析では、ヒノキであるとの結果を得ている。

土師器や須恵器は上層に見出されていることから、第363・364号住居跡覆土からの流れ込みと判断される。

第148号井戸跡 (第9・373図)

AF-22グリッドに位置する。第359号住居跡の内部に掘り込まれるが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.45m×0.44mの円形で、確認面からの深さは1.13mを測る。底面は丸みを帯び、横断面はほぼ円筒形を呈する。

覆土からは土師器を少量出土しているが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第149号井戸跡 (第9・373図)

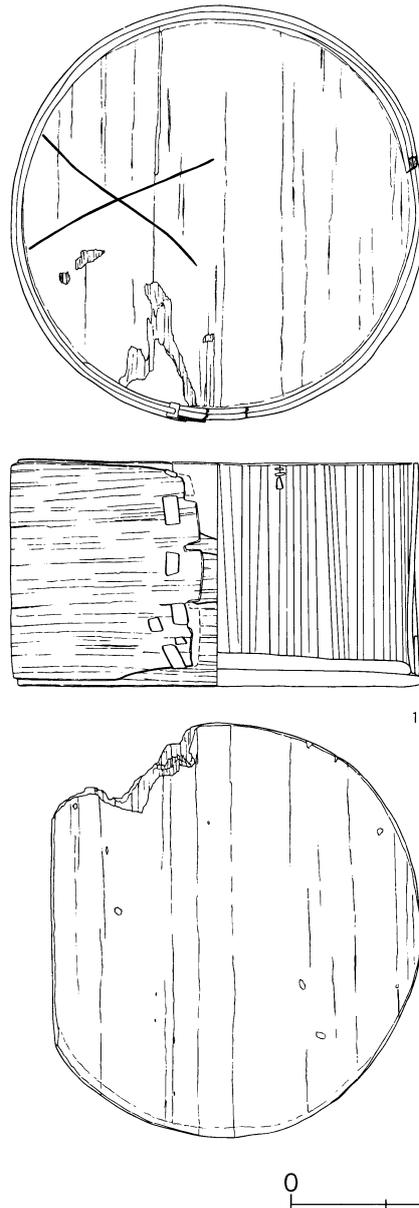
AF-22グリッドに位置する。第358・361号住居跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかにできなかった。平面は径1.39m×1.14mの楕円形で、住居跡床面からの深さは1.97mを測る。底面は平坦で、横断面は漏斗状を呈する。

図示できた遺物は少ないが、須恵器・土師器の坏や甕(第388図14～19)が出土している。

第150号井戸跡 (第9・375図)

AG-22グリッドに位置する。第368号住居跡の床に掘り込まれるが、その関係は明らかにできなかった。平面は径0.97m×0.95mの円形で、確認面(=住

第374図 第147号井戸跡出土遺物



居跡床面)からの深さは1.97mを測る。底面は平坦で、横断面は円筒形を呈する。

遺物の出土は見られなかった。

第151号井戸跡 (第9・375図)

AG-23グリッドに位置する。第367号住居跡の内部に掘り込まれているが、重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.83m×0.71mの楕円形で、住居跡床面からの深さは1.52mを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直に掘り込まれている。このため、横断面は円筒状となる。

覆土からは古墳時代後期の土師器が少量出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第152号井戸跡（第9・375図）

A E・A F-23グリッドに位置する。南端部を第147号井戸跡に切られるが、第363号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.56m×0.46mの不整な円形で、住居跡床面からの深さは1.61mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、横断面は円筒状となる。

遺物の出土は認められなかった。

第153号井戸跡（第9・375図）

A I-20グリッドに位置する。第355号住居跡の床面から検出されたが、新旧関係は確認できなかった。平面は径0.77m×0.68mの円形で、住居跡床面からの深さは0.95mを測る。底面はほぼ平坦で、横断面は円筒状を呈する。

遺物の出土は見られなかった。

第154号井戸跡（第9・375図）

A G-20グリッドに位置する。第382号住居跡、第104号掘立柱建物跡、および第110号溝跡と重複するが、それぞれとの関係は明らかにできなかった。平面は径2.52m×1.76mの不整な円形で、確認面からの深さは2.18mを測る。壁の立ち上がりは急であるものの、南西側には崩落の痕が見られる。底面は丸みを帯び、横断面は漏斗状となる。

覆土には地山や腐植土のブロックが不規則に詰まっていることから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

覆土からは奈良時代の須恵器や土師器の甕・坏が少量出土している。

第155号井戸跡（第9・375図）

A G-21・22グリッドに位置する。平面は径1.41m×1.01mの円形で、確認面からの深さは2.17mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、横断面はきれいな円筒形を呈する。底面は平坦である。

覆土からは土師器や、底部に回転糸切り痕のある須恵器の坏などがわずかに出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第156号井戸跡（第9・375図）

A G-23グリッドに位置する。平面は径0.62m×0.53mの円形で、確認面からの深さは1.55mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底面が平坦なため、横断面は円筒形となる。

遺物の出土は認められなかった。

第157号井戸跡（第9・375図）

A H-22グリッドに位置する。平面は径1.05m×1.04mの円形で、確認面からの深さは1.35mを測る。平坦な底面から立ち上がる壁は急で、横断面は漏斗状となる。

遺物の出土は見られなかった。

第158号井戸跡（第9・376図）

A I-24グリッドに位置する。第400・414号住居跡と重複するが、それぞれとの関係は明らかにできなかった。平面は径1.21m×1.08mの円形で、確認面からの深さは1.56mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。このため、横断面は円筒形を呈する。

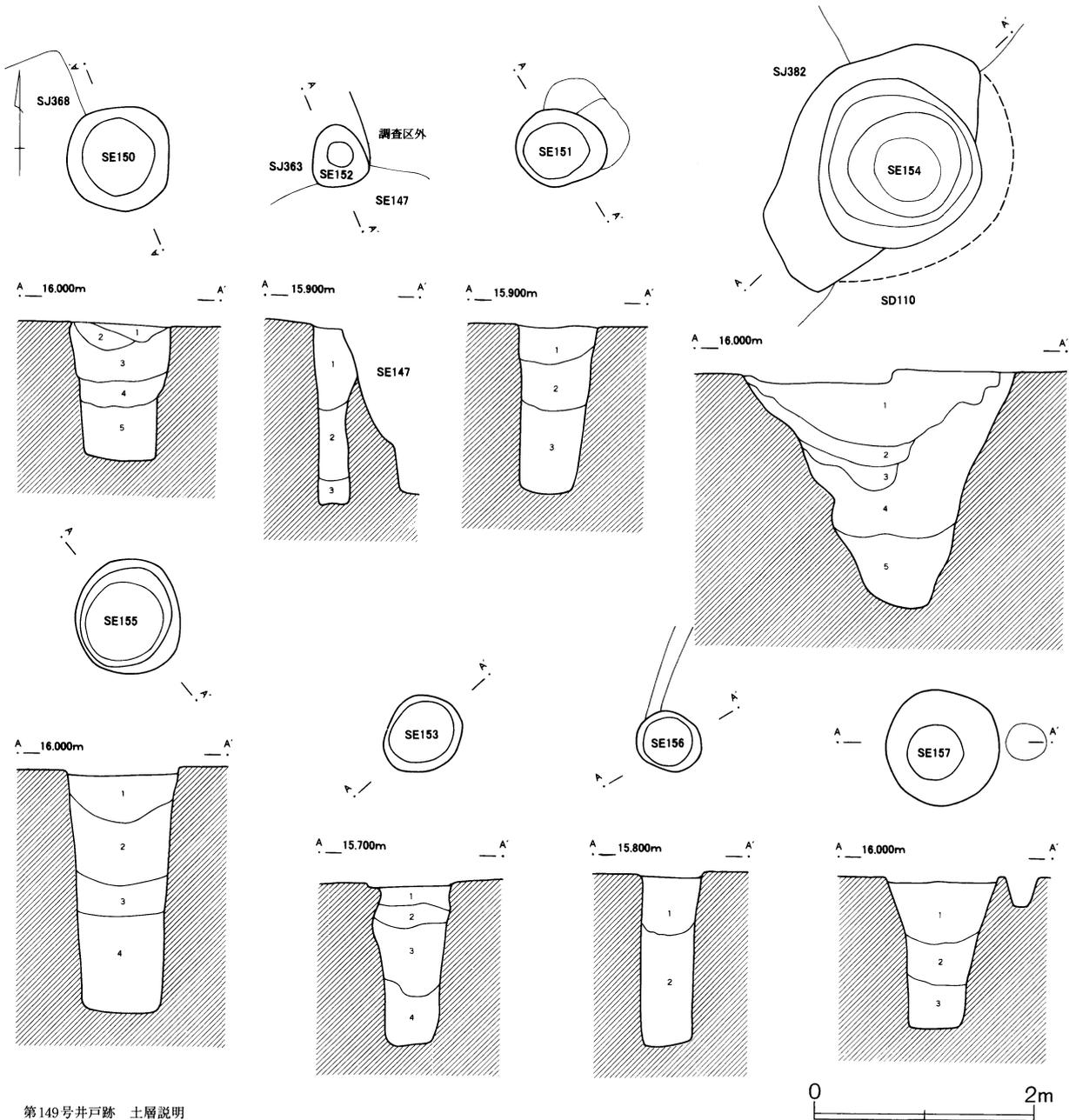
覆土からは図示した須恵器(蓋・坏・高台付坏)(第388図21~27)のほか、土師器の細片が少量出土している。

第159号井戸跡（第9・376図）

A I-24グリッドに位置する。第400号住居跡の内部に掘り込まれるが、同住居跡がほぼ床面での検出であったため、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.79m×0.69mの円形で、第400号住居跡の床面、すなわち確認面からの深さは1.42mを測る。壁はやや丸みを帯びた底面より垂直に立ち上がり、横断面は円筒状となる。

遺物は図示した須恵器の蓋(第389図28)のほか、土師器や須恵器の細片が少量出土している。

第375図 井戸跡 (2)



第149号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を含む。
2. 10YR3/2 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒・地山粒を多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を多く含む。粘性あり。
4. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
5. 10YR3/2 暗褐色土 粘性あり。地山粒を含む。
6. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。地山粒・粘土ブロックを含む。

第151号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・粘土粒を多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。粘性あり。

第152号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。粘性あり。
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。地山粒を微量に含む。

第153号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 茶褐色土 地山粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。
2. 10YR3/4 茶褐色土 1層より地山粒大きく、風化弱い。
3. 10YR3/4 茶褐色土 1層より更に地山粒大きく、風化弱い。
4. 10YR3/4 茶褐色土 1層より地山粒少なく、粘性強い。

第156号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・地山ブロックを含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘土粒・地山ブロックを含む。

第150号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土ブロックを含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 焼土ブロック・灰を多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。
4. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。地山ブロックを多く含む。

第154号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・地山粒を含む。しまりあり。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・大型ブロックを混入。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を含む。しまりあり。
4. 10YR6/6 明黄褐色土 焼土粒・地山粒を含む層と地山が交互に堆積する。
5. 10YR5/2 灰黄褐色土 粘土層。

第155号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・炭化物を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。
4. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。しまりなし。地山粒を含む。

第157号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。地山粒を多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり。地山ブロックを含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。

第160号井戸跡（第9・376図）

A I - 23グリッドに位置する。第268号井戸跡を切り、第161号井戸跡に切られる。なお、第400号住居跡との重複関係は、これを明らかにできなかった。平面は径1.88 m × 1.10 mの円形で、確認面からの深さは1.53 mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。よって、横断面は円筒形となる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的に埋め戻されたものと考えられる。

覆土からは、古代の須恵器や土師器の破片を少量出土したが、図示するには至らなかった。

第161号井戸跡（第9・376図）

A I - 24グリッドに位置する。第160号井戸跡を切るが、第268号井戸跡および第400号住居跡との重複関係は、これを明らかにできなかった。平面は径1.11 m × 1.10 mの円形で、確認面からの深さは1.35 mを測る。平坦な底面から立ち上がる壁はやや開き、横断面は漏斗状となる。

覆土は地山を主体にボソボソであることから、人為的な埋め戻しと判断される。

少量の須恵器や土師器を出土しているが、いずれも微細で図示できなかった。ともに古代のものと思われる。

第162号井戸跡（第9・376図）

A H - 23グリッドに位置する。第393・394・399号住居跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかにし得なかった。平面は径2.13 m × 2.08 mの円形で、確認面からの深さは1.82 mを測る。底面はやや丸みを帯び、壁は上方に向かって大きく開く。このため、横断面は漏斗状となる。

覆土の上層は自然堆積のようだが、下層は故意に埋め戻されたものと思われる。

遺物は図示した常滑産の壺や甕、山茶碗系の片口鉢（第389図29～32）、砥石（第420図9）のほか、須恵器や土師器の破片が少量出土している。

第163号井戸跡（第9・376図）

A I - 24グリッドに位置する。埋め戻された後、上

面に第436号土壙が構築されるが、第419号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.97 m × 0.95 mの楕円形で、住居跡床面からの深さは1.21 mを測る。底面はほぼ平坦だが、壁は東側に大きな崩落の痕が見られる。残存部分から推せば、断面はほぼ円筒形となる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと判断される。

覆土からは古墳時代後期の土師器が少量出土したが、いずれも微細な破片であるため、図示できなかった。

第164号井戸跡（第9・376図）

A I - 24グリッドに位置する。第400号住居跡の床から検出されたが、その重複関係は明らかとし得なかった。平面は径0.67 m × 0.64 mの円形で、住居跡床面からの深さは1.53 mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。よって、横断面は円筒状となる。

遺物は図示した土師器や須恵器の坏（第389図33・34）のほか、土師器の甕や坏、須恵器の甕や蓋などの細片がわずかながら出土している。

第165号井戸跡（第9・376図）

A I - 24グリッドに位置する。第414号住居跡の内部に掘り込まれるが、両者の重複関係は明らかにできなかった。平面は径0.86 m × 0.81 mの円形で、住居跡床面からの深さは1.13 mを測る。底面は丸みを帯び、壁はやや開くため、横断面は漏斗状を呈する。

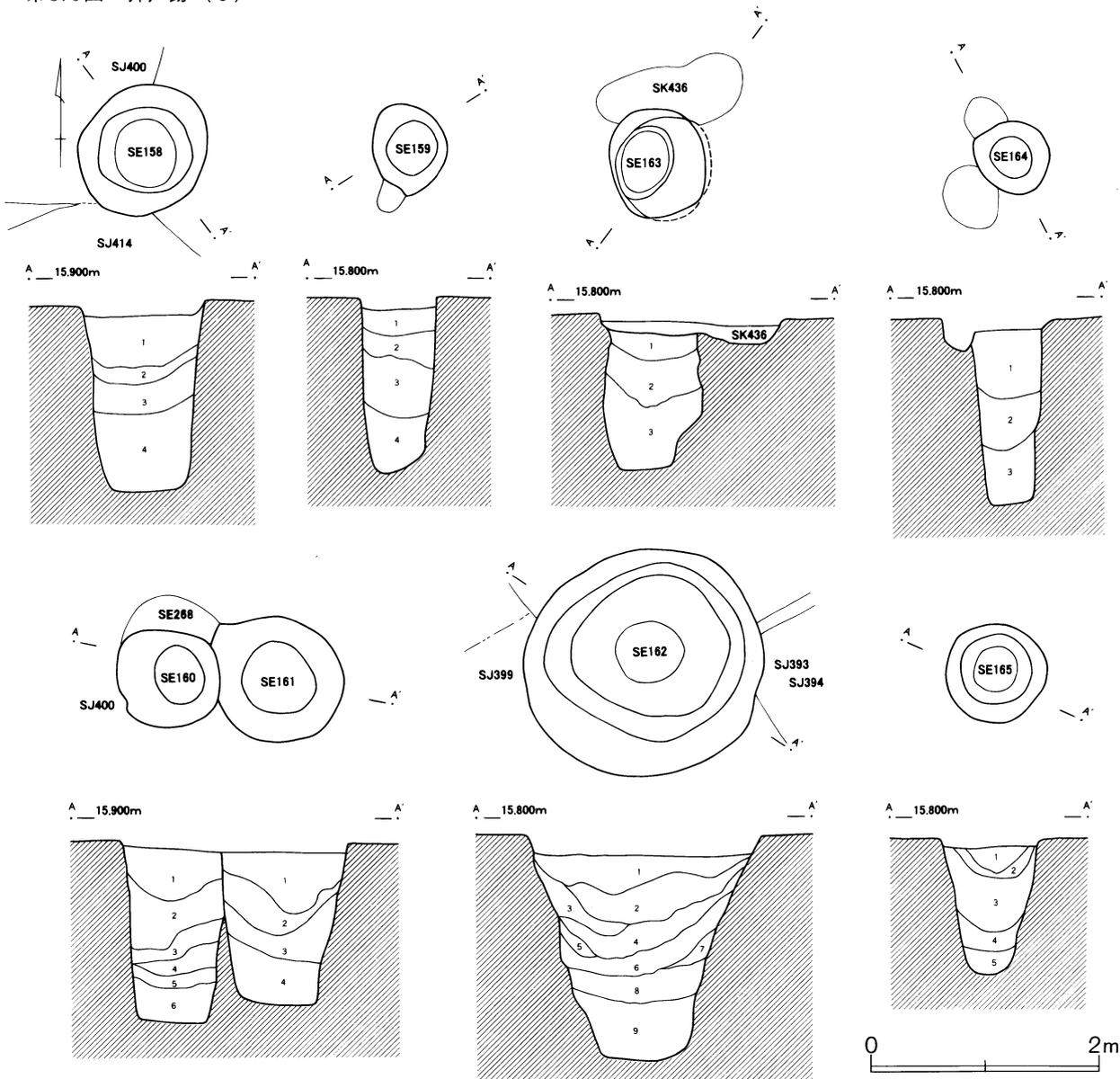
覆土からは古代の須恵器（甕・坏）、土師器（甕）を数点出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第166号井戸跡（第9・377図）

A I - 21グリッドに位置する。第111号掘立柱建物跡の柱穴と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径0.30 m程の円形で、確認面からの深さは1.94 mを測る。横断面は細い円柱状で、井戸跡としてやや疑問ではある。

遺物の出土は認められなかった。

第376図 井戸跡 (3)



第158号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土・灰・土器片を多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を多く含む。粘性あり。
4. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。褐灰色シルトブロックを多く含む。

第159号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 砂質地山粒・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を微量に含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。
4. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。地山ブロックを含む。

第160号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・炭化物を含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。大型の地山ブロックを含む。
3. 10YR4/4 褐色土 地山ブロックを多く含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。地山ブロックを少量含む。
5. 10YR4/6 褐色土 地山ブロックを多く含む。
6. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。

第165号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
2. 10YR4/6 褐色土 地山ブロックを多く含む。
3. 10YR1/3 黒褐色土 焼土粒を含む。地山粒を微量に含む。
4. 10YR1/3 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。
5. 10YR3/3 暗褐色土 小石を含む。粘性あり。

第161号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック・粒を多く含む。わら状の灰を多く含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック・黒褐色土ブロックを含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。
4. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。

第162号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・炭化物粒・地山ブロックを含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 炭化物粒・地山粒を含む。しまり・粘性弱い。
3. 10YR4/4 褐色土 第1層に近似。やや明るい。
4. 10YR3/3 暗褐色土 第2層に近似。しまり弱い。粘性あり。
5. 10YR4/4 褐色土 第1層に近似。壁崩落の地山ブロック含む。
6. 10YR2/1 黒色土 地山粒を含む。粘性・しまり強い。
7. 5Y3/2 オリーブ黒色土 粘土ブロックを含む。しまり強い。
8. 5Y2/2 オリーブ黒色土 粘性強い。きめやや粗い。第6層より暗い。
9. 5Y3/1 オリーブ黒色土 粘性強い。しまりあり。

第163号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック・地山粒を多く含む。粘性あり。

第164号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒を多く含む。粘性あり。
2. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒を微量に含む。粘性あり。
3. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。地山ブロックを含む。土器片集中。

第167号井戸跡（第10・377図）

A J-25グリッドに位置する。平面は径2.08m×1.92mの円形で、確認面からの深さは1.77mを測る。壁は大きく広がり、横断面は漏斗状を呈する。底面の最深部は南側に偏る。

覆土は地山を主体とし、締まりが弱くボツつく。人為的な埋め戻しであろう。

遺物は少量の須恵器、土師器、片岩などが出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第168号井戸跡（第10・377図）

A I-25グリッドに位置する。平面は径0.79m×0.71mの円形で、確認面からの深さは1.64mを測る。平坦な底面から立ち上がる壁には崩落の痕が窺えるものの、横断面はおおよそ漏斗状となる。

覆土は地山を主体とすることから、故意に埋め戻されたものと判断される。

遺物の出土は見られなかった。

第169号井戸跡（第10・377図）

A J-24グリッドに位置する。第436号住居跡埋没後、その床を掘り抜いて構築される。平面は径0.69m×0.47mの楕円形で、確認面からの深さは1.61mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。このため、横断面は円筒形を呈している。

遺物は図示した須恵器の蓋や坏(第389図35・36)のほか、土師器の微細な破片が少量出土している。

第170号井戸跡（第9・377図）

A H-24グリッドに位置する。平面は径0.34m×0.33mの円形で、確認面からの深さは1.53mを測る。底面はやや丸みを帯び、最深部は南側に偏る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、横断面は円筒形となる。

覆土からは図示した土師器の壺(第389図37)のほか、古墳時代後期の土師器破片を数点出土している。

第171号井戸跡（第10・377図）

A J-24グリッドに位置する。平面は径0.49m×0.47mの円形で、確認面からの深さは1.58mを測る。横断面は円筒形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれて

いる。

遺物の出土は認められなかった。

第172号井戸跡（第9・377図）

A K-21グリッドに位置する。第402号住居跡の床から検出されたが、その重複関係は明らかとし得なかった。平面は径1.03m×1.02mの円形で、住居跡床面からの深さは2.77mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。よって、横断面は円筒形を呈する。

覆土からは、煤けた砂岩の破砕礫が1点出土したのみである。特に加工された痕跡は認められないため、図示しなかった。

第173号井戸跡 『築道下遺跡Ⅱ』で既報告。

第174号井戸跡（第10・377図）

A K-23グリッドに位置する。第431号住居跡埋没後、その貯蔵穴や柱穴を掘り抜いて構築される。平面は径0.72m×0.67mの円形で、住居跡床面からの深さは1.86mを測る。底面は丸みが強く、壁には崩落のあったことが窺える。

覆土からは古墳時代後期の土師器が数片出土したが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第175号井戸跡（第10・378図）

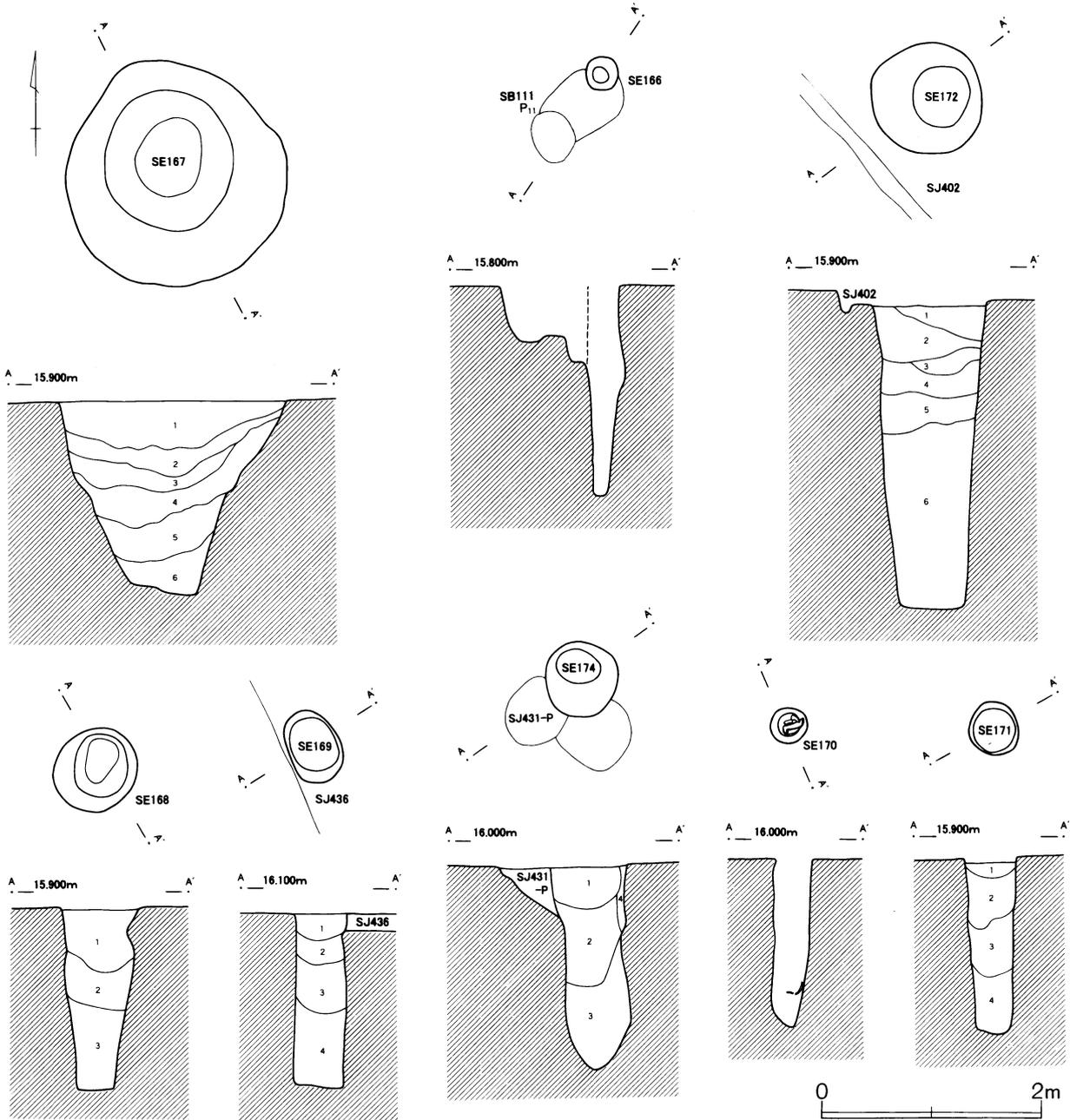
A J-23グリッドに位置する。埋没後、第412号住居跡に切られる。平面は径0.53m×0.51mの不整な円形で、確認面からの深さは1.72mを測る。底面はやや丸みを帯び、これより立ち上がる壁はほぼ垂直である。このため、横断面は細い円筒形となる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器を少量出土しているが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第176号井戸跡（第10・378図）

A J-25グリッドに位置する。第447・448・449号住居跡と重複するが、それぞれとの関係は明らかでできなかった。平面は径1.47m×1.45mの円形で、住居跡床面からの深さは1.33mを測る。底面は平坦で、これより立ち上がる壁は垂直である。但し、中位以上は崩落のためか、大きく開いている。よって、横断面は漏斗状となる。

第377図 井戸跡(4)



第171号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・地山粒を含む。しまり弱い。
2. 10YR2/3 黒褐色土 砂粒・焼土粒を含む。地山を混入。
3. 10YR4/6 褐色土 地山を混入。しまり弱い。
4. 10YR3/4 暗褐色土 地山を含む。しまり・粘性あり。

第172号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロックを含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロック多く含む。焼土粒少量含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山少なく、粘性強い。
4. 10YR3/1 黒褐色土 1層より更に地山少なく、更に粘性強い。
5. 10YR3/1 黒褐色土 2層より更に地山多く、更に粘性強い。
6. 以下土層観察欠落。

第174号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を含む。しまりあり。
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘質ブロックを混入。
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性あり。焼土粒を微量に含む。
4. 10Y1/2 黒色土 粘質土主体。地山粒を微量に含む。

第167号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・地山ブロックを多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり。焼土粒・炭化物を少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性弱い。地山ブロックを多く含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。
5. 10YR4/1 褐灰色土 地山ブロックを多く含む。粘性あり。ポロポロ。
6. 10YR5/1 褐灰色土 粘性強い。砂粒を含む。

第168号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒を少量含む。地山ブロックを多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 粘性あり。地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘性あり。地山ブロックを含む。

第169号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・炭化物を多く含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。やヤシル土質。
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性あり。地山ブロックを含む。土器片を多く含む。

覆土からは図示した砥石(第420図5)、側縁に打撃痕を有する片岩(第418図3・4)のほか、古代の須恵器や土師器が少量出土している。

第177号井戸跡 (第10・378図)

AJ-25グリッドに位置する。第447・448・449号住居跡と重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.87m×0.84mの円形で、住居跡床面からの深さは1.52mを測る。平坦な底面から立ち上がる壁はほぼ垂直で、横断面は円筒形を呈する。

覆土からは図示した須恵器の坏(第389図38)のほか、土師器の甕破片3点が出土している。また、板状の木切れが検出されたが、加工の痕跡などは確認できなかった。

第178号井戸跡 (第10・378図)

AJ-25グリッドに位置する。第444・445号住居跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.57m×0.56mの円形で、確認面からの深さは1.23mを測る。壁は中程より下位はほぼ垂直で、底面は平坦である。横断面はわずかに漏斗状となる。

遺物の出土は見られなかった。

第179号井戸跡 (第9・378図)

AI-22グリッドに位置する。第425号住居跡の床より検出されたが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径0.54m×0.53mの円形で、住居跡床面からの深さは1.82mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりも急ではあるが、横断面は細長い漏斗状となる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器が少量出土したが、図示するには至らなかった。

第180号井戸跡 (第9・378図)

AI-22グリッドに位置する。第425号住居跡の床より検出されたが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.55m×0.48mの不整な円形で、住居跡床面からの深さは2.18mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、横断面は円筒形を呈する。

覆土からは、古墳時代後期の土師器が少量出土したが、図示するには至らなかった。

第181号井戸跡 (第10・378図)

AJ-23グリッドに位置する。第430号住居跡の埋没後、その床を大きく掘り抜く。平面は径2.43m×2.33mの円形で、確認面からの深さは2.24mを測る。壁の立ち上がりは急ながら、上面はかなり広がる。底面はやや丸みを帯び、横断面は漏斗状を呈する。

覆土からは青磁の碗(第390図68)、在地産の壺、須恵器のすり鉢(第389図39・40)のほか、須恵器や土師器、常滑産の甕などの破片が少量出土している。

第182号井戸跡 (第10・378図)

AK-24グリッドに位置する。第452号住居跡の床から検出されたが、両者の新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.71m×0.66mの円形で、住居跡床面からの深さは1.45mを測る。一部に崩落はあるものの、壁の立ち上がりはおおよそ垂直である。底面はわずかに丸みを帯び、横断面はほぼ円筒形を呈する。

覆土からは、古墳時代後期の土師器を少量出土しているが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第183～190号井戸跡 『築道下遺跡II』で既報告。

第191号井戸跡 (第9・379図)

AJ-23グリッドに位置する。第427～429号住居跡の埋没後、その床を掘り抜いて構築される。平面は径1.31m×1.22mの円形で、住居跡床面からの深さは2.79mを測る。底面は狭く、丸みを帯びている。壁の立ち上がりは急で、横断面は細長いU字形を呈する。

覆土からは須恵器、土師器を少量出土したが、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

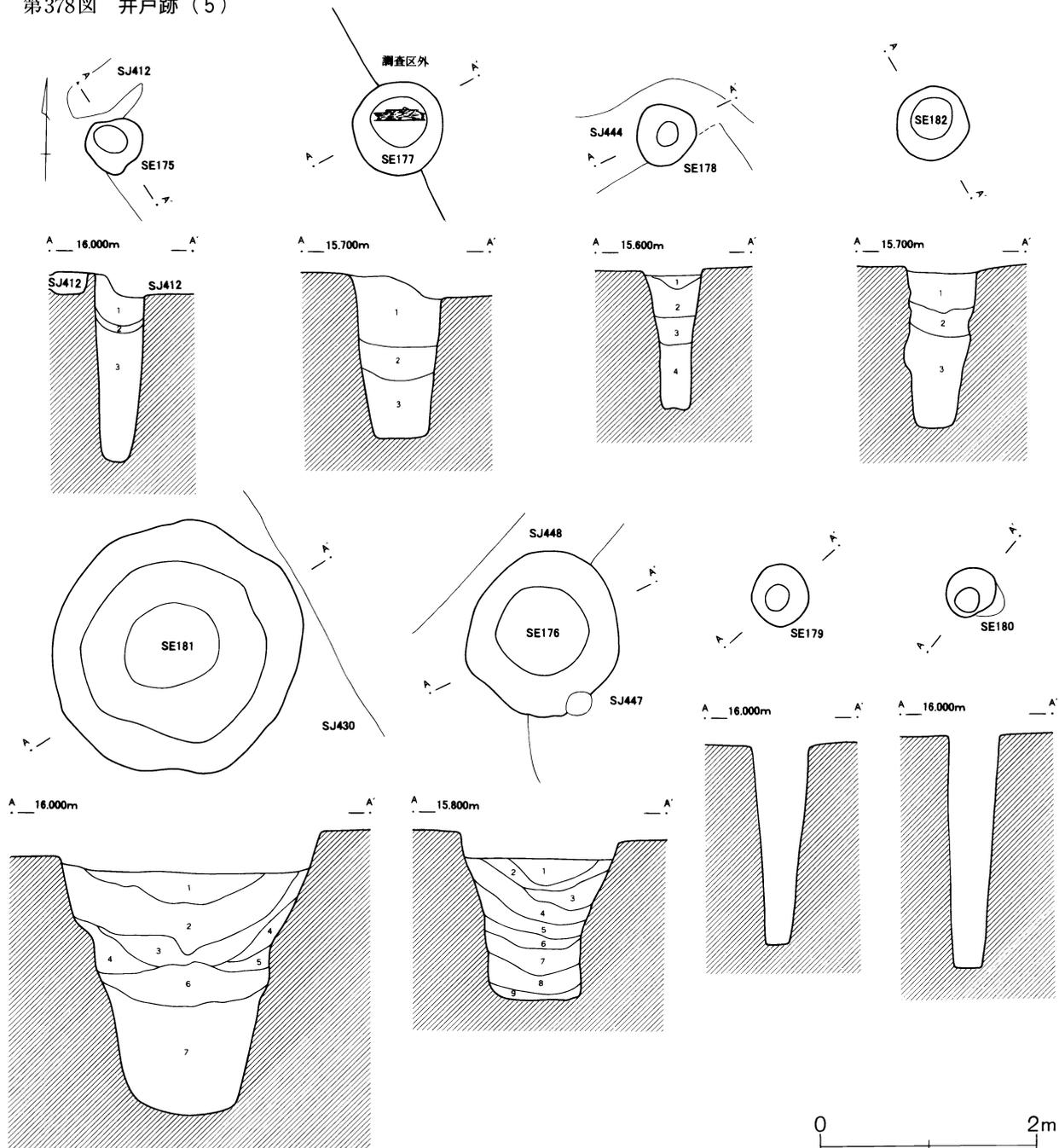
第192～196号井戸跡 『築道下遺跡II』で既報告。

第197号井戸跡 (第9・379図)

AJ-23グリッドに位置する。第428・429号住居跡の床から検出されたが、それぞれとの新旧関係は確認できなかった。平面は径0.51m×0.45mの円形で、住居跡床面からの深さは1.58mを測る。底面は平坦で、壁は垂直に掘り込まれている。このため、横断面は細い円筒形を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第378図 井戸跡 (5)



第175号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック・焼土粒を多く含む。
2. 10YR4/4 褐色土 焼土粒・灰を含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を多く含む。

第177号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を多く含む。焼土粒・炭化物粒を少量含む。
3. 10YR4/1 褐色土 地山ブロック・暗灰黄褐色砂質土ブロックを含む。

第178号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒・ブロックを多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 1層より大きい地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山粒・焼土粒を少量含む。
4. 10YR3/1 黒褐色土 3層より粘性強い。粒ブロック・焼土粒を含む。

第182号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行した地山粒多量、焼土・炭化物少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 1層に準ずる。1層より地山粒多量、地山ブロック含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 混入物はほとんど見られず単一的。粘質土化。

第176号井戸跡 土層説明 (土色観察欠落)

1. 黒褐色土 地山粒・焼土粒・白色砂質粒を含む。
2. 黒褐色土 1層より地山多い。粘性強い。
3. 黒褐色土 1層より更に地山多く、更に粘性強い。
4. 黒褐色土 地山粒・焼土粒を少量含む。粘性強い。
5. 黒褐色土 地山ブロックを多く含む。粘性強い。
6. 黒褐色土 地山粒を含む。やや砂質。
7. 黒褐色土 5層に似るが、地山粒少量含む。
8. 緑灰色土 緑灰色グライ土化した粘土と砂の混合層。
9. 黒褐色土 7層に同じ。

第181号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒を混入。
2. 10YR3/1 黒褐色土 第1層に比べ、地山粒・焼土粒大きい。
3. 5YR3/6 暗赤褐色土 酸化鉄分を混在。焼土粒・炭化物粒を含む。
4. 10YR4/6 褐色土 地山ブロックを多く含む。しまりあり。
5. 5YR4/1 灰色土 第4層に比べ、粘土質強い。
6. 5YR3/1 オリーブ黒色土 粘土質層。しまり・粘性強い。
7. 5YR4/1 灰色土 粘性強い。

第198号井戸跡 (第9・379図)

AH-20グリッドに位置する。第386号住居跡の床から検出されたが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.42m×0.40mの円形で、住居跡床面からの深さは1.19mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは垂直である。このため、横断面は細長い円筒形となる。

第199号井戸跡 (第8・379図)

AF-22グリッドに位置する。第348号住居跡と重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.59m×0.58mの円形で、確認面からの深さは1.52mを測る。壁は崩落の痕が見られるものの、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、横断面はおおよそ円筒形を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第200号井戸跡 (第10・379図)

AL-25グリッドを中心に位置する。第457号住居跡に上部を削り取られる。平面は径1.16m×0.94mの楕円形で、住居跡床面からの深さは1.73mを測る。西側に崩落が見られるが、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、横断面は円筒状となる。

覆土は基本的に自然堆積だが、上層は第457号住居跡構築の際の埋め戻しと思われる。

遺物の出土は見られなかった。

第201号井戸跡 (第10・379図)

AM-25グリッドに位置する。第116号掘立柱建物跡の柱穴(P₁)と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径1.31m×1.29mの円形で、確認面からの深さは1.61mを測る。壁は部分的な崩落が見られるものの、概ね垂直に立ち上がる。底面は丸みを帯び、断面はほぼ円筒形を呈す。

覆土は地山の大型ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと判断される。

覆土からは須恵器や土師器、中世の土師質土器(カワラケ)、側縁に打撃痕を有する片岩(第418図5~7)などが少量出土している。

第202号井戸跡 (第11・379図)

AN-26グリッドに位置する。第122号掘立柱建物跡の柱穴(P₁)と重複するが、設定した土層断面が崩落してしまったため、両者の新旧関係は確認できなかった。平面は径1.48m×1.32mの円形で、確認面からの深さは1.88mを測る。上面には崩落が見られるものの、壁は概ね垂直に立ち上がる。底面はわずかに丸みを帯び、横断面は円筒状となる。

遺物は図示した山茶碗系の片口鉢(第389図41)、側縁に打撃痕のある片岩(第418図8・9)のほか、安山岩1点、加工痕のない片岩4点、土師器破片5点などが出土している。

第203号井戸跡 (第10・380図)

AM-26グリッドに位置する。第457号土壌の埋没後、その北東部を掘り抜く。平面は径3.21m×3.16mの円形で、確認面からの深さは1.96mを測る。壁は大きく広がるため、横断面は漏斗状を呈する。

覆土は人為的な埋め戻しと考えられるものの、下層は出水と崩落のため、観察することが叶わなかった。

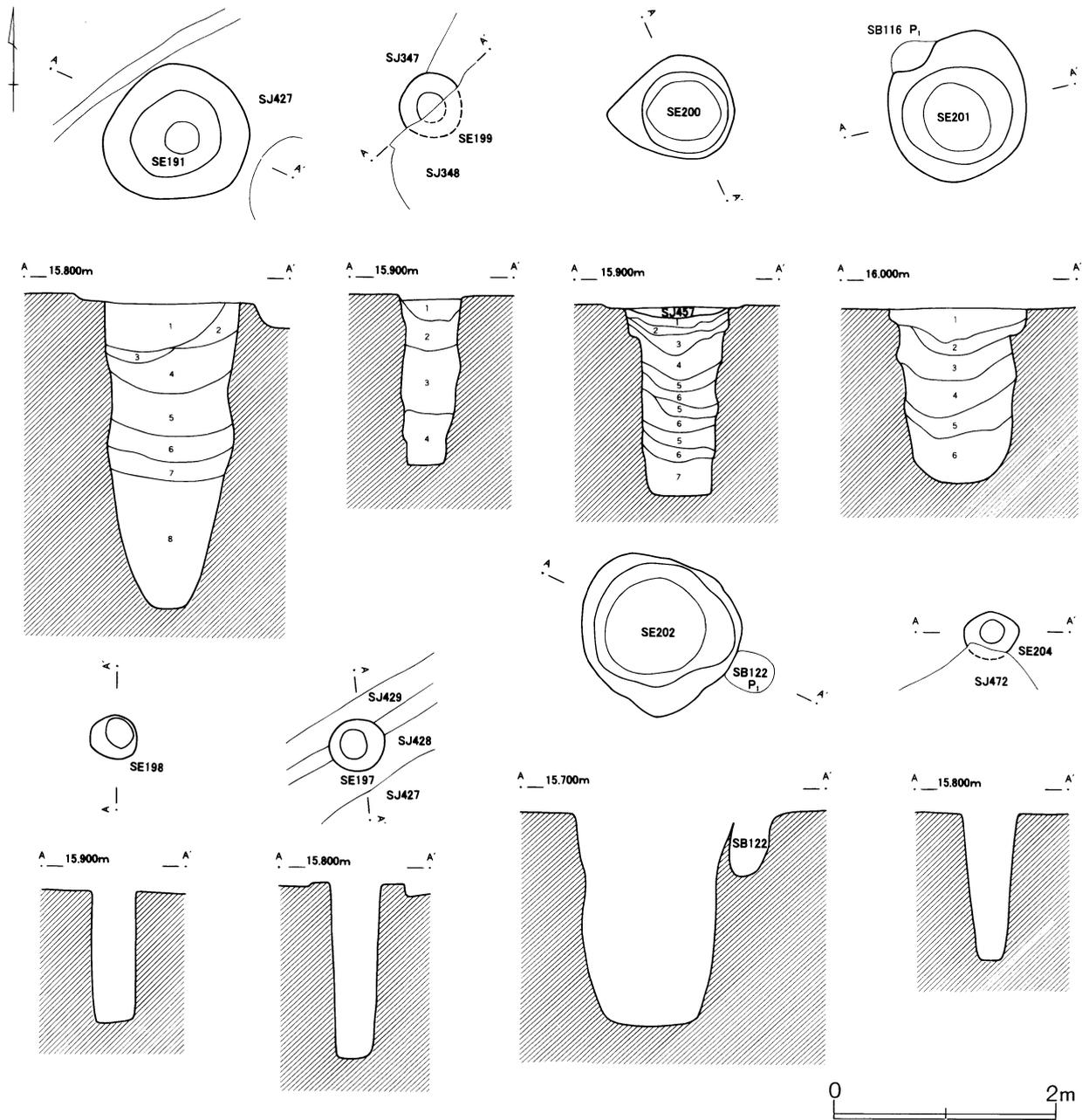
覆土からは図示した須恵器の坏や高台付きの坏、常滑産の鉢(第389図42~44)のほか、土師器や須恵器、縄文時代の凹石や磨り石?(第417図6・7)、側縁に打撃痕のある片岩(第418図10)などが出土している。また、中層からは木材と思しき板が検出されたが、取り上げ後に観察したところ、加工の痕跡などはなかった。

第204号井戸跡 (第10・379図)

AM-26グリッドに位置する。第472号住居跡の北隅部に重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.51m×0.32mの円形で、確認面からの深さは1.33mを測る。壁はやや開き気味の立ち上がりながら、横断面はおおよそ円筒状となる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕)片を数点出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第379図 井戸跡 (6)



第191号井戸跡 土層説明

1. 10YR6/6 明黄褐色土 地山ブロックを多く含む。しまりあり。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性・しまりあり。
3. 10YR3/2 黒褐色土 第2層に比べ、色調暗い。
4. 10YR4/4 褐色土 褐色土をブロック状に含む。しまりあり。
5. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒を含む。しまりあり。
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色土 粘性・しまりあり。砂質土と粘土ブロックを含む。
7. 2.5Y4/1 黄灰色土 地山粒を含む。粘土質土。しまりあり。
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色土 粘土質土。しまりあり。

第200号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山による貼床。しまり強い。
2. 10YR3/3 暗褐色土 黒色粘質土。きめ細かく締密。住居床形成時の充填土。
3. 10YR3/4 暗褐色土 溶化未進行の地山ブロックを多く含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黄色粘質・茶色砂質地山の大型ブロック主体。
5. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。ほとんど単一的、締密。
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山。
7. 10YR2/1 黒色土 灰色粘質土化。しまり弱くボソつく。

第199号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・地山粒・炭化物粒を含み、しまりあり。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒を微量に含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 第2層に比べ、やや暗く、地山ブロックを含む。
4. 10YR3/2 黒褐色土 粘性・しまりあり。地山粒・ブロックを含む。

第201号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 溶化進行した地山粒を多く含む。粘性なくボソつく。若干の焼土粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 未溶化地山粒・ブロックを多く含む。粘性優れ1層との境界明瞭。
3. 10YR2/3 黒褐色土 基本は2層。大型の地山ブロックを多く含む。微量の焼土含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 全体が溶化した地山(均一化する)よりなる。しまり強い。
5. 10YR3/2 黒褐色土 大型地山ブロックを含む。しまりなくボロボロ。
6. 10YR4/1 褐灰色土 暗灰色粘質土化。しまり劣るが、粘性極めて強い。

第205号井戸跡（第10・380図）

AL-24グリッドに位置する。第461号住居跡の床から検出されたが、その新旧関係は確認できなかった。平面は径0.76m×0.64mの円形で、住居跡床面からの深さは1.22mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。このため、横断面は円筒形を呈する。

覆土からは少量ながら、古墳時代後期～古代の須恵器や土師器が出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第206号井戸跡（第10・380図）

AL-24グリッドに位置する。第457号住居跡の北西壁と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.54m×0.53mの円形で、確認面からの深さは1.62mを測る。壁には崩落の痕が見られるものの、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は丸みを帯び、横断面は円筒形を呈する。

図示するには至らなかったが、覆土からは古墳時代後期～古代の須恵器、土師器が少量出土している。

第207号井戸跡（第12・380図）

AR-28グリッドに位置する。第537・538号住居跡埋没後、その壁や床の一部を掘り抜く。平面は径1.73m×1.53mの楕円形で、確認面からの深さは2.16mを測る。壁の立ち上がりは急ながら、上面に向かって徐々に開いていく。底面は平坦であるため、横断面は漏斗状を呈する。

覆土からは、図示した側縁に打撃痕のある片岩(第418図11)のほか、古墳時代後期～古代の須恵器、土師器、表面の煤けた大小の片岩が少量出土している。

第208号井戸跡（第12・380図）

AQ-29グリッドに位置する。平面は径1.05m×0.99mの円形で、確認面からの深さは1.11mを測る。底面は西側へ向かって傾き、壁はこれより垂直に立ち上がる。よって、横断面は概ね円筒形となる。

覆土は2層が自然堆積で、1層が人為的な埋め戻しと判断される。底面が埋まってきたため、放棄されたのではなからうか。

図示するには至らなかったが、覆土からは古墳時代後期～古代の須恵器、土師器が少量出土している。

第209号井戸跡（第10・380図）

AK-23グリッドに位置する。第210号井戸跡の覆土を切り込むが、第503号住居跡との新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.55m×0.51mの円形で、確認面からの深さは1.25mを測る。壁は一部に崩落の痕が見られるものの、ほぼ垂直に立ち上がる。底面にはやや凹凸を生じ、横断面は円筒形となる。

図示した土師器の壺(第389図45)のほかは、甕の細片が数点出土したにすぎない。

第210号井戸跡（第10・380図）

AK-23グリッドに位置する。上部を第503号住居跡に削り取られるほか、東側の肩を第209号井戸跡に切られる。平面は径0.93m×0.62mの楕円形で、確認面からの深さは1.45mを測る。壁の南東部に崩落の痕が見られるものの、立ち上がりは垂直を保つ。底面はいくぶん丸みを帯び、横断面はほぼ円筒形となる。

覆土は全体に締まりが強く、主に地山ブロックで構成されることから、故意の埋め戻しと考えられる。

覆土中からは図示した土師器の甕(第389図46)のほか、細片が少量出土している。

第211号井戸跡（第12・381図）

AT-29グリッドに位置する。平面は径0.55m×0.52mの円形で、確認面からの深さは1.65mを測る。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりも垂直である。このため、横断面は細長い円筒状となる。

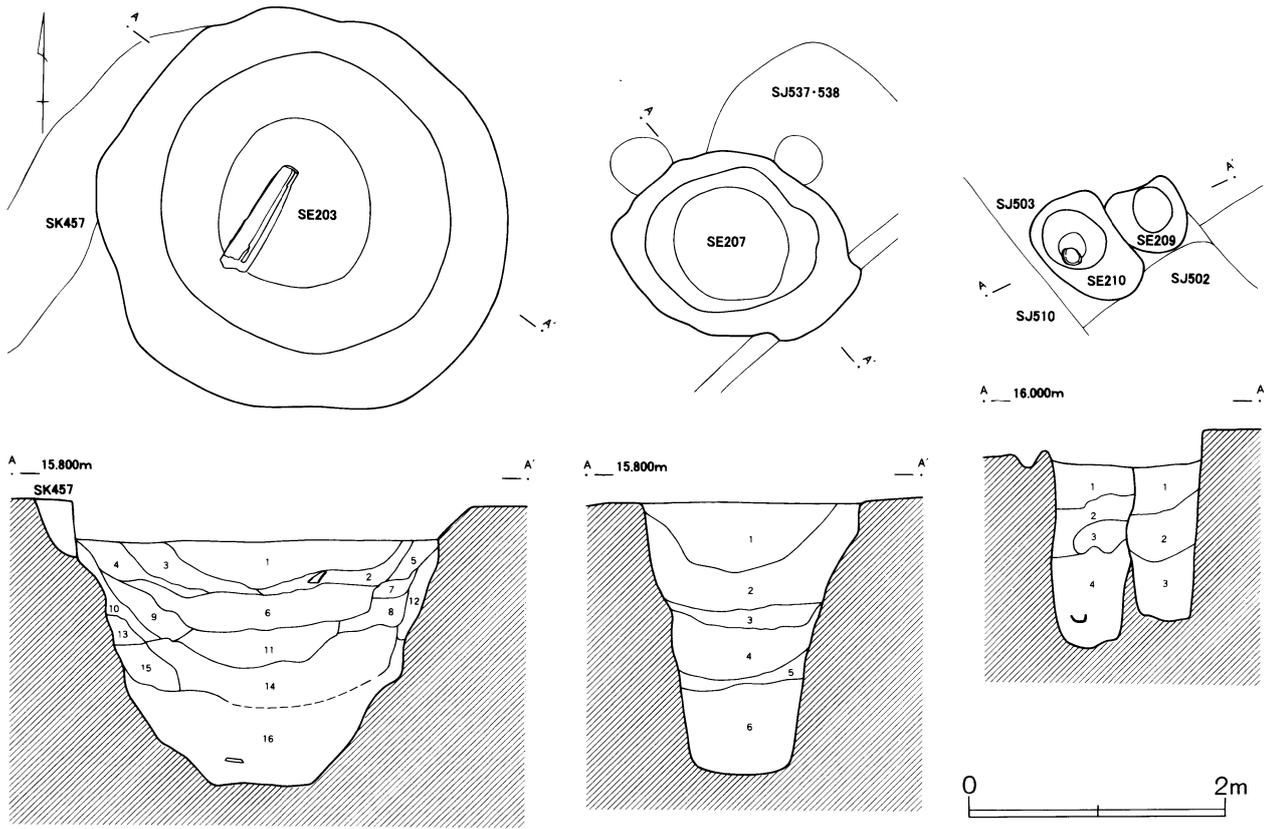
古墳時代後期の土師器(甗)片を1点出土したが、図示するには至らなかった。

第212号井戸跡（第12・381図）

AR-29グリッドに位置する。第543号住居跡の貯蔵穴と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.49m×0.39mの楕円形で、住居跡床面からの深さは1.46mを測る。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は丸みを帯びる。横断面は細長い円筒形、あるいは試験管のようである。

遺物の出土は認められなかった。

第380図 井戸跡(7)



第205号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土との混合層。
2. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロック・焼土ブロックを含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
4. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。しまり強い。
5. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強い。
6. 10YR2/3 黒褐色土 しまり強い。
7. 10YR4/4 褐色土 しまり弱い。暗褐色土混入。
8. 10YR2/2 黒褐色土 混入物は見られない。
9. 10YR4/6 褐色土 水分を多く含む。しまり弱い。

第206号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 1層との混合層。崩落に伴う堆積。
3. 10YR2/3 黒褐色土 粘性強い。
4. 10YR3/4 暗褐色土 粘性強い。
5. 10YR2/2 黒褐色土 しまり弱い。

第207号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
3. N5/ 灰色土 褐色土ブロック・大型の炭化物を含む。
4. N4/ 灰色土
5. N2/ 黒色土 粘土層。
6. N5/ 灰色土 砂質・粘土層。

第208号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・暗褐色土ブロックを多く含む。人為的埋め戻し。焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘質土。井戸使用中に埋まった土と思われる。

第209号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 溶化進行した地山粒・焼土粒を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 しまり・粘性強い。砂質地山ブロック多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 均一的な土層。

第210号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い。地山・焼土粒を多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 基本は1層。地山ブロックを多く含む。
3. 10YR4/6 褐色土 大型の粘質地山塊。
4. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロック・炭化物多量、遺物を含む。

第203号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロック・炭化物・土器片混入。
2. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土1層より多く混入。土器片・炭化物粒混入。
3. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土粒が多く混入。
4. 10YR3/3 暗褐色土 土器片混入。
5. 10YR2/3 黒褐色土 2層より褐色土が多く混入。
6. 10YR3/1 黒褐色土 鉄分多く混入。炭化物ブロック混入。
7. 10YR4/4 黒褐色土 5層と黄褐色地山の混合層。
8. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 6層と黄褐色地山が交互に重なる。
9. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 6層と黄褐色地山が交互に重なる。
10. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 9層より黄褐色地山の混入が多い。
11. 2.5Y3/1 黒褐色土 炭化物粒混入。
12. 10YR5/8 黄褐色土 地山。
13. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 10層より色調暗い。
14. 10Y4/1 灰色土 11層と16層混合層。埋め戻し?
15. 10Y5/2 オリブ灰色土 地山崩落土
16. 10Y5/2 オリブ灰色土 地山。

第213号井戸跡 (第10・381図)

AL-26グリッドを中心に位置する。平面は径0.71m×0.59mの楕円形で、確認面からの深さは1.79mを測る。壁の立ち上がりは垂直で、底面は丸みを帯びる。横断面はほぼ円筒形を呈する。

覆土は大型の地山ブロックを主体とすることから、人為的な埋め戻しと判断される。

図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器片が数点出土している。

第214号井戸跡 (第10・381図)

AL-26グリッドに位置する。平面は径0.46m×0.42mの円形で、確認面からの深さは1.68mを測る。底面はわずかに丸みを帯び、これより壁は垂直に立ち上がる。横断面は細長い円筒形を呈する。

遺物の出土は見られなかった。

第215号井戸跡 (第10・381図)

AL-26グリッドに位置する。平面は、径0.38m×0.34mの円形で、確認面からの深さは1.09mを測る。底面は狭く丸みを帯びるが、壁は垂直に立ち上がる。横断面はわずかに漏斗状となる。

覆土は地山と腐植土のブロックが混在しており、故意の埋め戻しを窺わせる。

覆土からは土師器の細片を数点出土したのみで、図示するには至らなかった。

第216号井戸跡 (第10・381図)

AL-26グリッドに位置する。平面は径0.47m×0.46mの円形で、確認面からの深さは1.49mを測る。壁にはわずかに崩落の痕が見られるものの、ほぼ垂直を保つ。底面は丸みを帯び、横断面は円筒形、あるいは試験管様となる。

覆土最下層は井戸が開口中の堆積で、これより上層は埋め戻しの可能性が高い。

図示することはできなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)が数片出土している。

第217号井戸跡 (第10・381図)

AM-25グリッドに位置する。第113号溝跡の北岸に重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかつ

た。平面は径0.41m×0.36mの円形で、確認面からの深さは1.79mを測る。壁は崩落のため、中央部が膨らむ。底面は丸みを帯び、横断面は円筒状となる。

覆土からは土師器の甕破片を少量出土したが、図示するには至らなかった。

第218号井戸跡 (第10・381図)

AM-24グリッドに位置する。平面は径0.40m×0.39mの円形で、確認面からの深さは1.58mを測る。壁にはわずかに崩落の痕が見られるものの、立ち上がりはおおよそ垂直である。底面はわずかに西へ傾くが、横断面はほぼ円筒形となる。

遺物の出土は認められなかった。

第219号井戸跡 (第11・381図)

AN-25グリッドに位置する。平面は径0.47m×0.45mの円形で、確認面からの深さは1.22mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、わずかに崩落の痕が見られる。底面はほぼ平坦で、横断面は円筒形を呈する。

覆土からは土師器の甕破片を数点出土したが、図示するには至らなかった。

第220号井戸跡 (第11・381図)

AN-25グリッドに位置する。平面は径0.43m×0.42mの円形で、確認面からの深さは1.66mを測る。壁面は崩落のためやや乱れるが、概ね垂直に立ち上がる。底面は丸みを帯び、横断面は円筒状、ないしは試験管様となる。

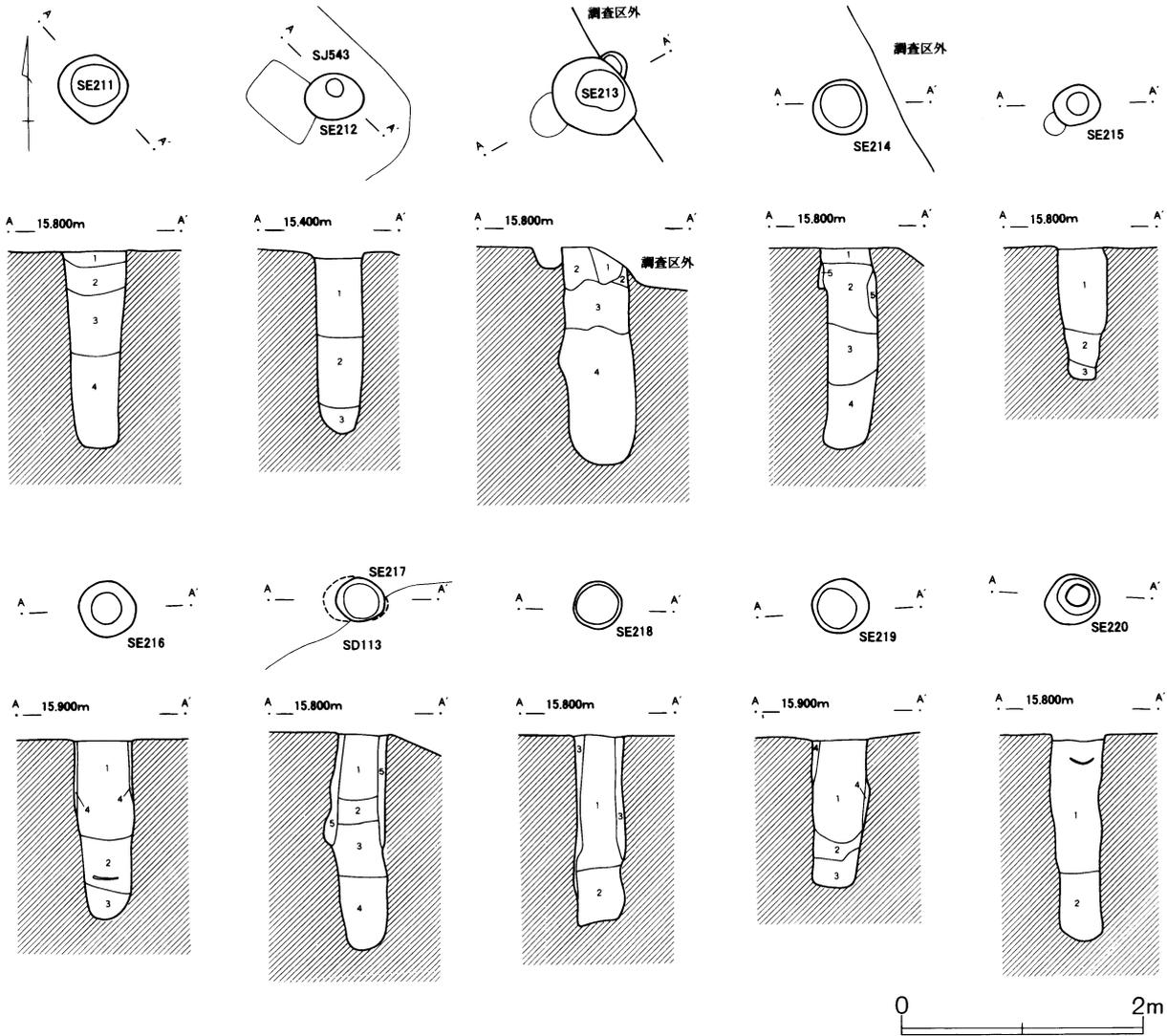
図示した土師器の壺(第390図49)のほかは、古墳時代後期の土師器が数片、覆土上層より出土したのみである。

第221号井戸跡 (第11・382図)

AN-25グリッドに位置する。平面は径0.53m×0.48mの円形で、確認面からの深さは1.88mを測る。立ち上がりは垂直を保つものの、壁面にはわずかに崩落の痕が見られる。底面は平坦で、横断面は円筒形を呈する。

図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器が数片出土している。

第381図 井戸跡 (8)



第211号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を微量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・地山粒・炭化物粒を多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・ブロックを含む。
4. 5Y3/1 オリーブ黒色土 地山ブロックを微量に含む。粘性強い。

第212号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒を少量含む。
2. 5Y3/1 オリーブ黒色土 地山粒を微量に含む。
3. 5Y4/1 灰色土 灰色土ブロックを多く含む。

第213号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 焼土粒を少量含む。埋め戻し土。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを含む。埋め戻し土。
3. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒を含む。埋め戻し。
4. N2/ 黒色土 粘質土。

第214号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
5. 10YR4/4 褐色土 地山ベースに、黒褐色土ブロックを多く含む。壁の崩落土。

第215号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土のブロックを含む。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土とにぶい黄褐色土の互層。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。

第216号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 褐色土のブロックを多く含む。炭化物を少量含む。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
4. 10YR4/4 褐色土 地山土ベース。黒褐色土ブロックを含む。壁の崩落土。

第217号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒を少量含む。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロックが層をなしている。壁の崩落土。
3. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土のブロックを含む。
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
5. 10YR4/4 褐色土 地山の土ベースに、黒褐色土のブロックを含む。

第218号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土のブロックを少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第219号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第220号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロック・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。

第222号井戸跡 (第10・382図)

AK-23グリッドに位置する。第431号住居跡の壁と重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.49m×0.42mの円形で、確認面からの深さは1.21mを測る。壁の立ち上がりは直線的だが、掘り込み自体がやや傾斜している。底面は平坦で、横断面は斜傾した円筒形となる。

覆土中からは図示した土師器(第390図50~52)のほかは、微細な破片が少量出土したのみである。このうち、甌は底面に潰れた状態で見出されている。

第223号井戸跡 (第10・382図)

AK-23グリッドに位置する。第431号住居跡の床から検出されたが、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.37m×0.36mの円形を呈し、住居跡床面からの深さは1.71mを測る。壁面には崩落の痕が見られるものの、その立ち上がりはおおよそ垂直となっている。底面は平坦であり、横断面は細長い円筒状となる。

覆土は地山を主体とするボソボソのものであることから、人為的な埋め戻しと判断される。

覆土からは、土師器の甕・甌・坏などが数点出土している。しかし微細な破片ばかりのため、図示できたものは1点(第389図47)にすぎない。

第224号井戸跡 (第10・382図)

AN-25グリッドに位置する。平面は径0.38m×0.32mの円形で、確認面からの深さは1.74mを測る。壁にはわずかに崩落の痕が見られるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦で、横断面は円筒形を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第225号井戸跡 (第10・382図)

AM-26グリッドを中心に位置する。埋没後、上部を第472号住居跡に削り取られる。平面は径0.47m×0.36mの楕円形で、住居跡床面からの深さは1.03mを測る。壁面下半は崩落のためやや膨らむが、その立ち上がりは垂直を保つ。底面はやや丸みを帯び、横断面

はほぼ円筒形となる。

図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(坏)破片を数点出土している。

第226号井戸跡 (第10・382図)

AN-26グリッドに位置する。第472号住居跡の床より検出されたが、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.46m×0.43mの円形で、住居跡床面からの深さは1.34mを測る。壁にはわずかに崩落の痕が見られるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面はわずかに丸みを帯び、横断面は円筒状となる。

図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕・坏)破片が少量出土している。

第227号井戸跡 (第10・382図)

AM-24グリッドに位置する。平面は径0.39m×0.34mの円形で、確認面からの深さは1.18mを測る。壁面には崩落の痕が見られるが、その立ち上がりは垂直を保っている。底面は平坦であり、横断面は円筒形を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第228号井戸跡 (第11・382図)

AM-27グリッドに位置する。平面は径0.38m×0.37mの円形で、確認面からの深さは1.81mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。このため、横断面は細長い円筒形と言うより、円柱状となる。

覆土には地山を多く含むものの、人為的に埋め戻された様子は窺えない。

遺物の出土は認められなかった。

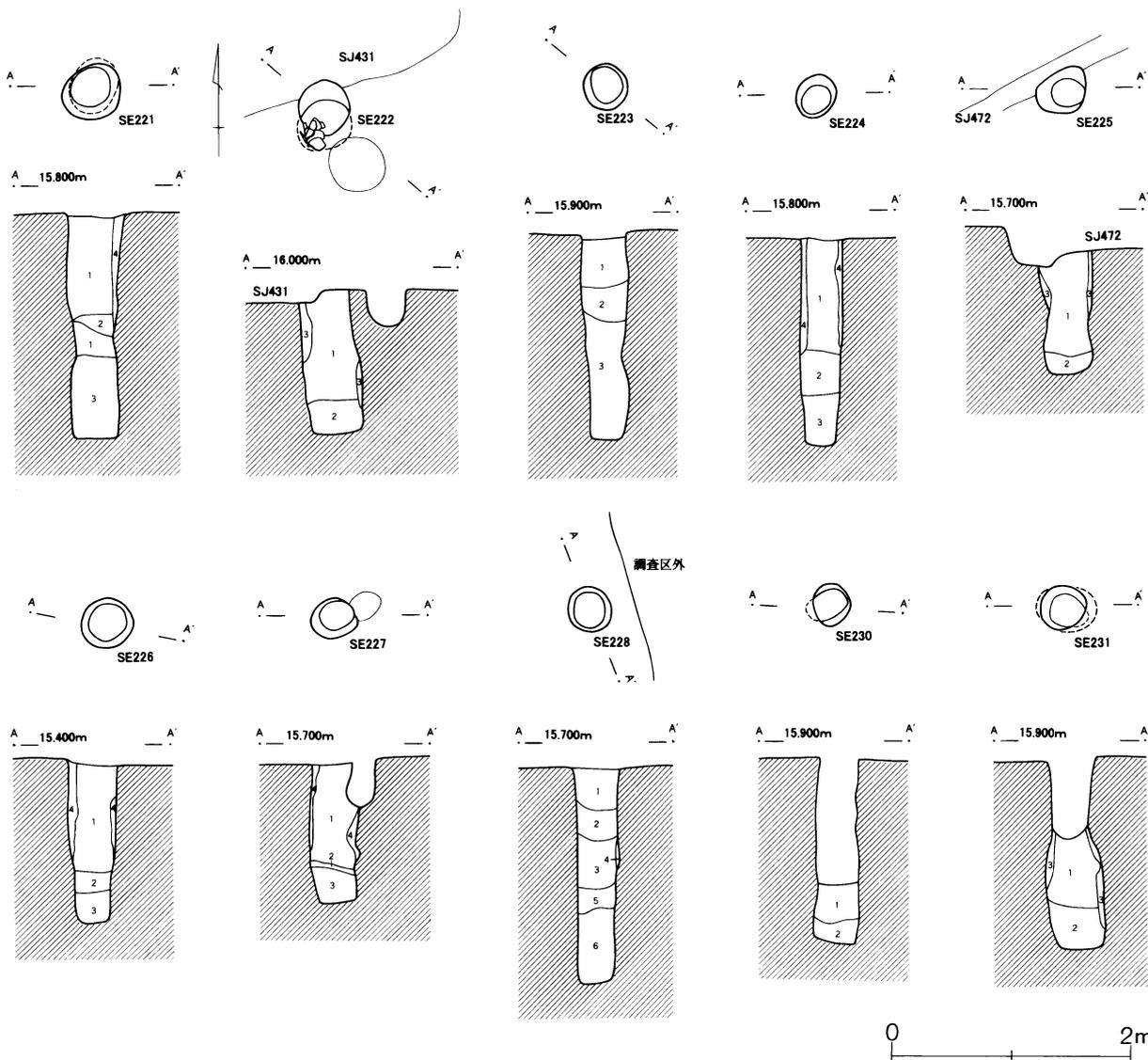
第229号井戸跡 欠番

第230号井戸跡 (第10・382図)

AL-25グリッドに位置する。平面は径0.38m×0.34mの円形で、確認面からの深さは1.58mを測る。壁面にはやや剥落が見られるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。東へ傾く底面は平らなため、横断面は円筒形となる。

細片のため図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(坏)3点が出土している。

第382図 井戸跡 (9)



第221号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 壁の崩落土がブロック状で混入。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第222号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
3. 10YR5/4 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第223号井戸跡 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 炭化物混入。
2. 10YR2/1 黒色土 炭化物層と思われる。粘土混入。投棄したものか。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 暗褐色土の混入層。埋め戻し層。

第224号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロック・焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒を少量含む。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第227号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 壁の崩落土。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第225号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第226号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。下部に土器片混入。
2. 10YR5/4 におい黄褐色土 壁の崩落土。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
4. 10YR5/4 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第228号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・ブロックを少量含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒を少量含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロックを多く含む。崩落と考える。
5. 5Y3/1 オリーブ黒色土 地山粒を少量含む。
6. 5Y3/1 オリーブ黒色土 地山粒等をほとんど含まない。

第230号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。

第231号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土
2. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。
3. 10YR5/4 におい黄褐色土 壁の崩落土。

第231号井戸跡 (第10・382図)

AL・AM-25グリッドに位置する。平面は径0.39m×0.36mの円形で、確認面からの深さは1.62mを測る。壁の下半は大きく崩落し、オーバー・ハングしている。底面は平坦であるが、横断面は徳利状を呈する。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)が数点出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第232号井戸跡 (第10・383図)

AK-23グリッドに位置する。上部を第500・501号住居跡に切り取られる。平面は径0.54m×0.48mの円形で、住居跡床面からの深さは1.83mを測る。壁面はわずかに剥落が見られるものの、その立ち上がりはほぼ垂直である。底面はやや丸みを帯び、横断面は円筒形となる。

覆土は地山と腐植土の大型ブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻されたものと判断される。

遺物は数点出土しているものの、図示した土師器の坏(第389図48)のほかは、いずれも微細な破片であった。

第233号井戸跡 (第11・383図)

AN-27グリッドに位置する。平面は径0.52m×0.51mの方形様で、確認面からの深さは1.81mを測る。壁の立ち上がりは急であるが、やや状面が広がる。このため底面は平坦ながらも、横断面は漏斗状気味となる。

覆土は地山を多く溶化混入するものの、故意の埋め戻しではないようである。

微細な破片のため図示し得なかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)を数点出土している。

第234号井戸跡 (第11・383図)

AP-28グリッドに位置する。平面は径0.39m×0.36mの円形で、確認面からの深さは1.59mを測る。壁面はやや凹凸を生じているが、その立ち上がりは垂直である。底面は丸みが強く、横断面は試験管のようである。

覆土は地山のブロックを主体とすることから、人為

的な埋め戻しと考えられる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・高坏)を少量出土している。しかし、いずれも微細な破片であり、図示するには至らなかった。

第235号井戸跡 (第11・383図)

AP-28グリッドに位置する。平面は径0.44m×0.43mの円形で、確認面からの深さは1.16mを測る。壁面は崩落が著しく、下半部は袋状に膨らんでいる。底面も丸みが強いいため、横断面はフラスコ状となる。

遺物の出土は認められなかった。

第236号井戸跡 (第11・383図)

AO-28グリッドに位置する。平面は径0.61m×0.54mの楕円形で、確認面からの深さは1.68mを測る。壁は崩落が著しく、細かい起伏を生じている。特に下半部はオーバー・ハングし、底面が平坦なために、横断面は徳利状となっている。

微細な破片であるため図示できなかったが、覆土からは土師器の甕が2点のみ出土している。また、桃の核も1点見出された。

第237号井戸跡 (第11・383図)

AP-27グリッドに位置する。第532号住居跡の床より検出されたが、両者の新旧関係は確認できなかった。平面は径0.41m×0.39mの円形で、住居跡床面からの深さは1.78mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、崩落の様子も窺えなかった。底面はほぼ平坦であり、横断面はきれいな円筒形を呈する。

覆土は主に地山で構成されることから、人為的な埋め戻しと判断される。

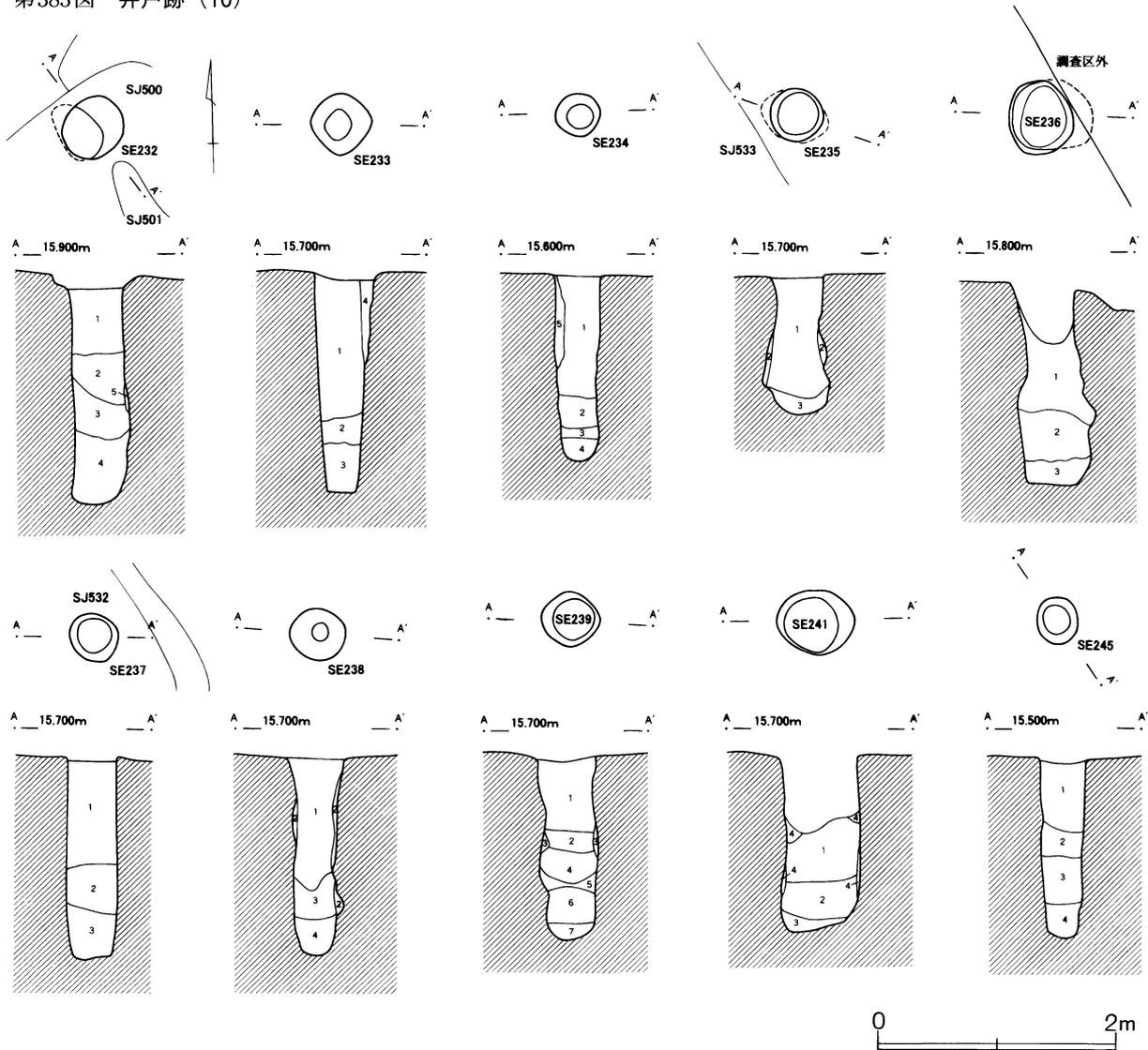
覆土からは土師器や須恵器が出土したが、図示したもの(第390図53・54)のほかは、微細な破片ばかりであった。

第238号井戸跡 (第11・383図)

AQ-28グリッドに位置する。平面は径0.47m×0.43mの円形で、確認面からの深さは1.66mを測る。壁面には剥落が見られ、上部がわずかに開く。底面は丸みを帯び、横断面は試験管様となる。

覆土は地山ブロックを主体とすることから、人為的

第383図 井戸跡 (10)



第232号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物粒を多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 粘性強い。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土を混入。埋め戻しか？
4. 10YR2/1 黒色土 粘土混入。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第233号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。
2. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土ブロックを少量含む。粘性強い。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性強い。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土が少し混入。壁の崩落土？

第234号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土が微量に混入。
3. 10YR2/1 黒色土 焼土粒を多く含む。粘性強い。
4. 5G3/1 暗緑灰色土 粘性強い。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土と考えられる。

第235号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒を少量含む。上部部に炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 壁の崩落土。黄褐色土粒を多く含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 第1次的な崩落による埋没。地山ブロックを少量含む。

第238号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を少量含む。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 崩落土。地山ブロックを非常に多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを多量含む。
4. 5Y2/2 オリーブ黒色土 非常に粘性強い。灰色土ブロックを少量含む。

第236号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 黄褐色土ブロック・焼土粒を多く含む。粘性強い。
3. 5BG3/1 暗青灰色土 黄褐色土ブロックを少量含む。粘性強い。

第237号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。埋め戻し土。
2. 5BG3/1 青黒色土 黄褐色土ブロック多く含む。焼土粒を少量含む。
3. 5BG3/1 暗青灰色土 粘性強い。

第239号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒を少量含む。
3. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを非常に多く含む。崩落土。
4. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。
5. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 3層と同じ。
6. 5Y3/1 オリーブ黒色土 地山粒を少量含む。粘性強い。
7. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色土 粘性強い。

第241号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロックを多く含む。焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 土粒多く含む。黄褐色土ブロックを少量含む。
3. 5B3/1 暗青灰色土 粘性強い。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黒褐色土の混入が全面的に見られる。壁の崩落。

第245号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。
3. 7.5Y3/1 オリーブ黒色土 地山ブロックを少量含む。
4. 7.5Y4/2 灰オリーブ色土 灰色の粘質ブロックを多く含む。

な埋め戻しと考えられる。

いずれも微細な破片で図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)が少量出土している。

第239号井戸跡 (第11・383図)

AQ-28グリッドに位置する。平面は径0.48m×0.45mの方形様で、確認面からの深さは1.51mを測る。壁面は崩落のため凹凸を生じるが、その立ち上がりは垂直を保っている。底面は丸みを帯び、横断面は円筒状となる。

覆土には多くの地山ブロックを含むものの、故意に埋められた様子は窺えなかった。

覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)が数片出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第240号井戸跡 (第14・384図)

AX-33グリッドに位置する。平面は径1.61m×1.60mの円形で、確認面からの深さは2.13mを測る。壁の立ち上がりは急ながら、上方へ向かっていくぶん広がっている。底面がほぼ平坦であるため、横断面はやや漏斗状となる。

覆土の最上層より円礫と炭化材がまとまって見出された以外、遺物の出土は認められなかった。

第241号井戸跡 (第11・383図)

AO-27グリッドに位置する。平面は径0.66m×0.53mの楕円形で、確認面からの深さは1.48mを測る。壁面にわずかながら剥落は見られるものの、その立ち上がりはほぼ垂直である。底面が平らであるため、横断面は円筒形となる。

覆土からは、古墳時代後期の土師器が少量見出されたが、微細な破片ばかりで図示できなかった。

第242号井戸跡 (第13・384図)

AV-30グリッドに位置する。平面は径1.84m×1.74mの円形で、深さは確認面から2.44mを測る。壁の立ち上がりは垂直で、上端部がやや開く。底面は平坦で、横断面は太い円筒状となる。

出水と崩落のため、覆土下層は断面の観察を行なえなかったが、褐灰色の粘土層と崩落土が互層となつて

いた。

覆土からは須恵器の甕が1片見出されたが、細片のため図示できなかった。

第243号井戸跡 (第13・384図)

AU-30グリッドに位置する。埋没後、第124号溝跡に上端の一部を切られる。平面は径0.82m×0.82mの円形で、深さは確認面から2.19mを測る。壁は平坦な底面から、開き気味に立ち上がるため、横断面はいくぶん漏斗状となる。

出水と崩落のため、覆土下層は断面の観察を行なえなかった。

覆土からは須恵器の長頸瓶、片岩を各1点出土したが、微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第244号井戸跡 (第12・384図)

AT-29グリッドに位置する。埋没後の第549号住居跡床面、同じく第122号溝跡の肩部を掘り抜く。平面は径0.71m×0.66mの円形で、住居跡床面からの深さは0.41mを測る(確認面からとすれば約1.50mである)。底面はおおよそ平坦で、横断面は円筒状となる。

覆土からは、側縁に打撃痕のある片岩が2点(第418図12・13)出土している。

第245号井戸跡 (第12・383図)

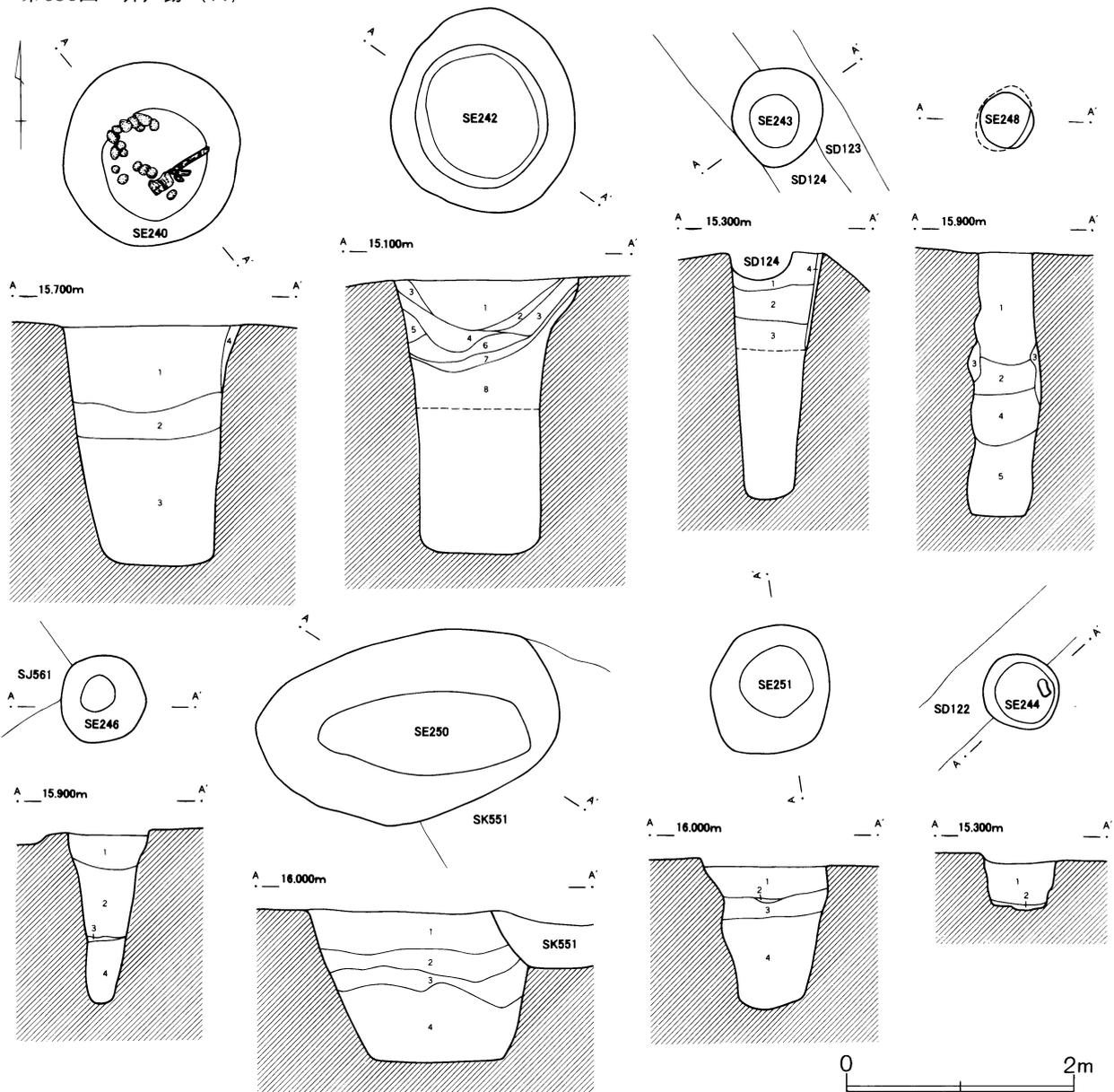
AR-29グリッドに位置する。第543号住居跡の床より検出されたが、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.40m×0.36mの円形で、住居跡床面からの深さは1.48mを測る。壁はいくぶん開き気味なものの、ほぼ垂直に立ち上がる。底面は丸みを帯びるため、横断面は試験管のようである。

微細な破片のため図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)を数点出土している。

第246号井戸跡 (第11・384図)

AQ-27グリッドに位置する。第561号住居跡の東隅部に重複するが、その新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.78m×0.75mの円形で、確認面からの深さは1.45mを測る。底部は狭く丸みを帯び、壁の立ち上がりは上方へ次第に開く。このため、横断面

第384図 井戸跡 (11)



第242号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土
2. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。
3. 10YR4/4 褐色土 壁の崩落土。
4. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。
5. 10YR4/4 褐色土 壁の崩落土。
6. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。
7. 10YR2/1 黒色土 炭化物の層。
8. 10YR5/1 褐灰色土 粘土層。

第240号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 褐灰色の粘土を含む。
3. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。使用中の堆積と思われる。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第244号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック多量、焼土粒・炭化物粒微量含む。
2. 10YR4/1 褐灰色土 地山粒を少量含む。

第243号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロックを少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘土層。
3. 10YR2/1 黒色土 粘土層。3層と比べ、灰色の粘土を含む。
4. 10YR4/4 褐色土 壁の剥離部分。

第246号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を微量に含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山を多く含む。粘性強い。

第248号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・炭化物粒・焼土粒を微量に含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒を少量含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 崩落土。地山ブロックを非常に多く含む。
4. 10G2/1 緑黒色土 緑灰色土ブロックを少量含む。粘性非常に強い。
5. 10G4/1 暗緑灰色土 緑灰色土ブロックを非常に多く含む。粘性非常に強い。

第250号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土・地山ブロックを少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山のブロックを多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・褐色土ブロックを少量含む。
4. 10YR3/4 暗褐色土 暗褐色土と褐色土のブロック混入。

第251号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土・褐色土ブロック・炭化物を含む。
2. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロックを含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロックを少量含む。
4. 10YR2/1 黒色土 粘性あり。オリーブ黒色粘土を含む。

はV字状となる。

覆土全体には地山を混入するものの、溶化が進行し均一化している。おそらく、自然堆積を示すものであろう。

微細な破片のため図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)が1点出土している。

第247号井戸跡 欠番

第248号井戸跡 (第11・384図)

AR-28グリッドに位置する。平面は径0.49m×0.48mの円形で、確認面からの深さは2.33mを測る。壁にはわずかに崩落の痕が見られるが、ほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦であるため、横断面は円筒形を呈する。

覆土には地山ブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しと考えられる。

遺物の出土は認められなかった。

第249号井戸跡 『築道下遺跡Ⅱ』で既報告。

第250号井戸跡 (第7・384図)

これより第267号までの18基は、C区の北東部、拡張された調査区に検出された井戸跡である。

第250号井戸跡は、X-19・20グリッドに位置する。埋没後、東側を第551号土壌に切られる。平面は径2.68m×1.66mの楕円形で、確認面からの深さは1.33mを測る。壁は大きく崩落しているようで、立ち上がりは他のものに比べ緩やかである。また、底面が平坦であるため、横断面は逆台形となる。

覆土からは須恵器の長頸瓶や坏、土師器の甕、常滑産の甕(第390図55~59)などが出土している。須恵器は上層から見出されており、他遺構からの流れ込みと思われる。

第251号井戸跡 (第7・384図)

X-20グリッドに位置する。平面は径1.14m×1.06mの円形で、確認面からの深さは1.27mを測る。壁の立ち上がりは急なものの、崩落のため上部が開いている。底面は丸みを帯び、横断面は漏斗状となる。

覆土からは古墳時代後期~古代の須恵器、および土師器を少量出土している。いずれも微細な破片である

ため、図示するには至らなかった。

第252号井戸跡 (第7・385図)

X-19グリッドに位置する。第572号住居跡の内部に検出されたが、住居跡は壁溝での確認であったため、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.65m×0.64mの円形で、確認面からの深さは1.22mを測る。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。このため、横断面はきれいな円筒形を呈する。

いずれも微細な破片で図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器が少量出土している。

第253号井戸跡 (第7・385図)

X-19グリッドに位置する。これも第572号住居跡の内部に検出されているが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径1.31m×1.18mの不整な円形で、確認面からの深さは1.03mを測る。壁の立ち上がりは上方へ向かって開いていくため、横断面は漏斗状となる。

覆土からは須恵器(甕・長頸瓶・碗)、土師器(甕・鉢・坏)などが少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示し得たものは1点のみ(第390図60)である。

第254号井戸跡 (第7・385図)

X-19グリッドに位置する。平面は径1.28m×1.05mの不整な円形で、確認面からの深さは1.48mを測る。壁の立ち上がりは急であるが、崩落が激しく壁面は乱れている。底面は丸みを帯び、横断面は崩れた漏斗状を呈する。

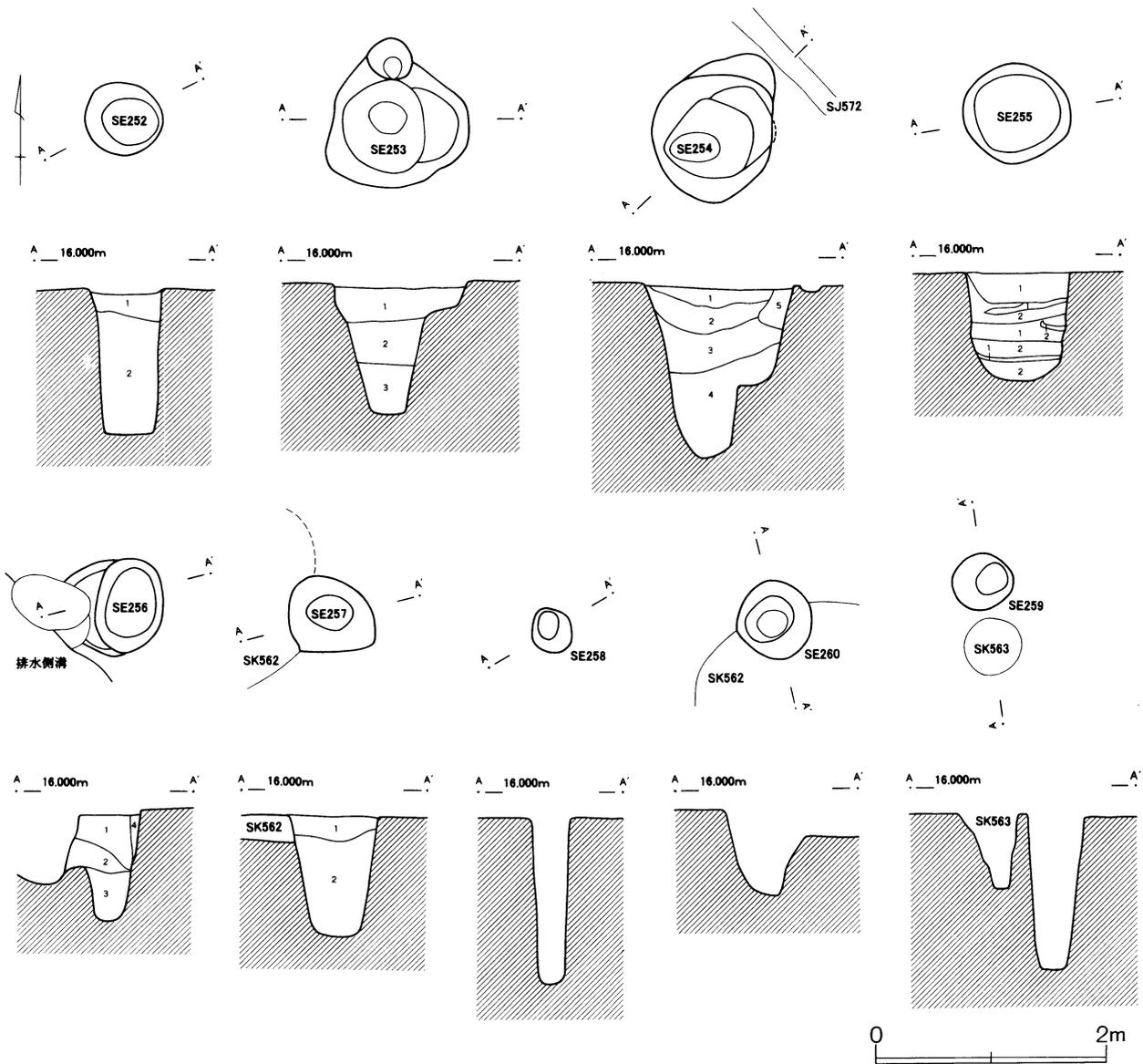
覆土下層は崩落に伴う地山ブロックからなり、上層もこれを主体としている。崩落により使用不可能となったものを、埋め戻したのではなかろうか。

覆土からは古墳時代後期の土師器(甕・坏)が少量出土したが、微細な破片ばかりであるため、図示できたものは2点のみ(第390図61・62)である。

第255号井戸跡 (第7・385図)

Y-19グリッドに位置する。平面は径0.93m×0.87mの円形で、確認面からの深さは0.92mを測る。底面は丸みを帯び、壁はほぼ垂直に立ち上がる。よって、

第385図 井戸跡 (12)



第252号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物を少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり。

第253号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 上層に焼土ブロック少量含む。褐色土ブロック少量含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土 粘性あり。褐色土ブロックを含む。

第254号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロックを少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 焼土ブロックを含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土地山ブロックを含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。
5. 10YR4/4 褐色土 地山ブロックを含む。壁の崩落土。

第255号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土・地山ブロックを多く含む。

第256号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土地山ブロックを少量含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第257号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒、褐色土地山ブロック少量含む。

横断面はU字状となる。

覆土は、地山と腐植土が互層となって堆積している。おそらく、人為的に一気に埋め戻されたのであろう。

覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕)が1片のみ出土したが、微細なため図示するには至らなかった。

第256号井戸跡 (第7・385図)

Y-19グリッドに位置する。平面は径0.82m×0.58mの楕円形で、確認面からの深さは0.93mを測る。壁の立ち上がりは急で、西側は大きく崩落している。底面は丸みを帯び、横断面は漏斗状を呈する。

覆土は地山を主体とすることから、人為的な埋め戻しと判断される。

微細な破片のため図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕)が数片出土している。

第257号井戸跡 (第7・385図)

X-19・Y-19グリッドに位置する。第562号土壇埋没後、その東端部を切る。平面は径0.71m×0.63mの楕円形で、確認面からの深さは1.05mを測る。壁の立ち上がりは急なものの、上方へ向かって開いていく。底面がわずかに丸みを帯びることもあり、横断面は漏斗状となる。

覆土からは古墳時代後期～古代の須恵器(坏)、土師器(甕・坏)を少量出土している。いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第258号井戸跡 (第7・385図)

X-19グリッドに位置する。第572号住居跡の内部に検出されたが、住居跡は壁溝での確認であったため、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.41m×0.36mの円形で、確認面からの深さは1.46mを測る。底面はわずかに丸みを帯び、壁はこれより垂直に立ち上がる。よって、横断面は細長い円柱状、ないしは試験管様となる。

覆土からは古墳時代後期～古代の須恵器、土師器を少量出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第259号井戸跡 (第7・385図)

X-19グリッドに位置する。平面は径0.51m×0.49mの円形で、確認面からの深さは1.34mを測る。壁の立ち上がりは急なものの、上方へ向かって開き気味となる。底面が狭く平らなため、横断面は漏斗状に近いものとなる。

覆土からは古代の土師器(坏)や、須恵器(蓋・坏)が少量出土している。いずれも微細な破片であるため、2点(第390図63・64)が図示できたにすぎない。

第260号井戸跡 (第7・385図)

X-19グリッドに位置する。第562号土壇の北側肩部に重複するが、両者の新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.68m×0.66mの円形で、確認面からの深さは0.78mを測る。壁の立ち上がりは崩落のためか、緩やかなものとなっている。底面は丸みを帯び、横断面は漏斗状となる。

遺物の出土は認められなかった。

第261号井戸跡 (第7・386図)

Z-20グリッドに位置する。第209号住居跡の東隅部に重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径1.54m×1.46mの円形で、確認面からの深さは2.64mを測る。壁の立ち上がりは直線的、かつ急ではあるが、上方へ向かって開いていく。底面が丸みを帯びることもあり、横断面は漏斗状となる。

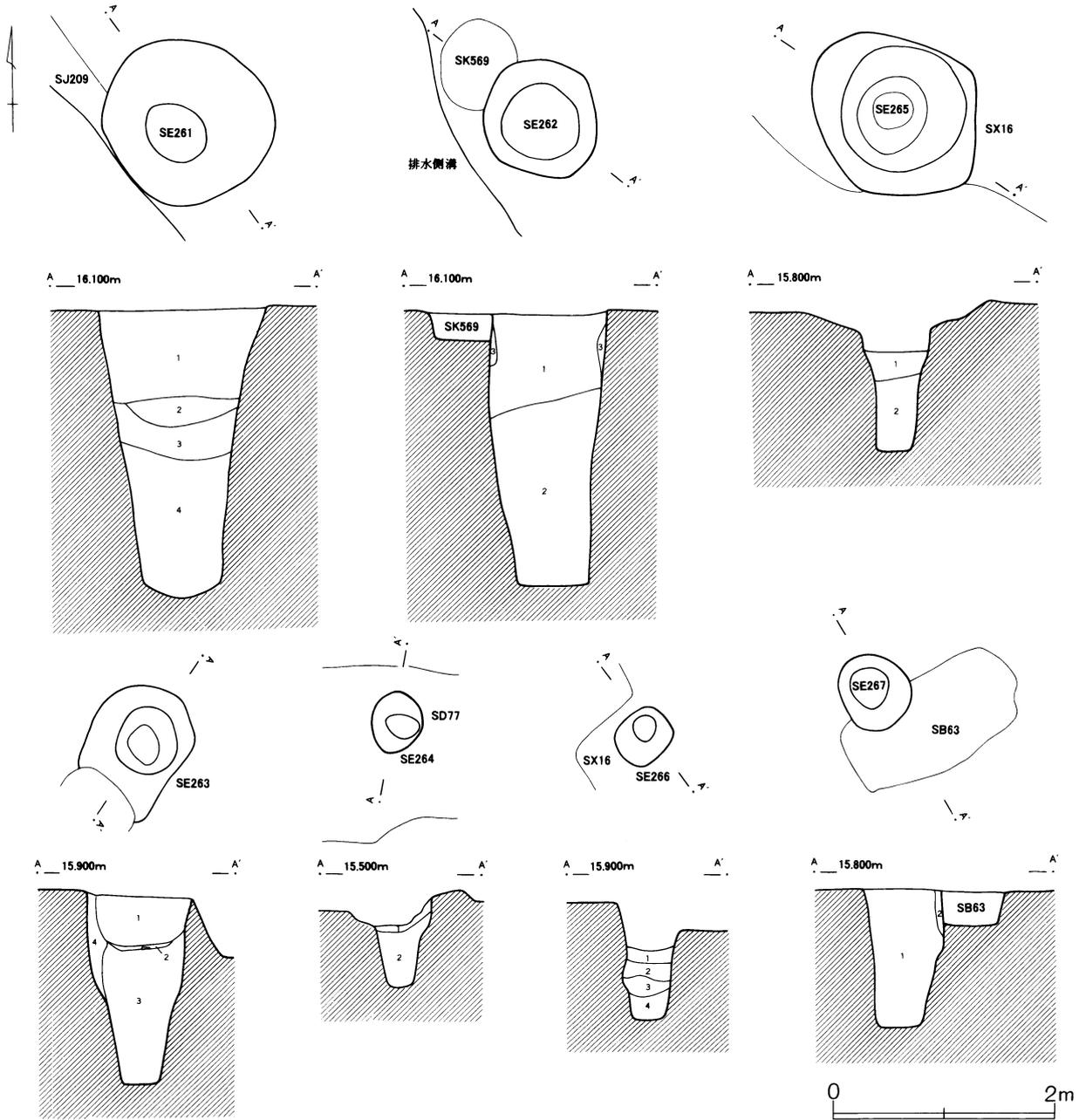
覆土からは古墳時代後期～古代の須恵器、土師器を少量出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。

第262号井戸跡 (第7・386図)

Z-20グリッドに位置する。第569号土壇埋没後、その南側肩部を掘り抜く。平面は径1.08m×1.04mの円形で、確認面からの深さは2.48mを測る。壁にはわずかに崩落の痕が見られるものの、垂直を保っている。底面は平坦であるため、断面は円筒形を呈する。

覆土からは、古墳時代後期～古代の須恵器や土師器のほか、表面の煤けた片岩を少量出土している。但し、土器は微細な破片であるため、片岩は加工痕が見られないため、図示するには至らなかった。

第386図 井戸跡 (13)



第261号井戸跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロックを多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 粘土層。4層の方が柔らかい。
4. 10YR4/1 褐灰色土 粘土層。

第262号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性強い。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロックを多く含む。壁の崩落土。

第264号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロックを含む。
2. 10YR2/1 黒色土 粘性強い。

第265号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR4/1 褐灰色土 粘性強い。

第263号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 炭化物の層。馬の糞を含む。
3. 10YR2/2 黒褐色土
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第266号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 灰色粘土が薄い層になって混入。焼土・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 焼土粒を少量含む。
3. 10YR4/1 褐灰色土 灰色粘土ブロックを多く含む。
4. 10YR2/1 黒色土

第267号井戸跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 壁の崩落土。SB63の埋土が崩れこんでいる。

第263号井戸跡 (第7・386図)

X-19グリッドに位置する。第572号住居跡と重複するようであるが、住居跡が壁溝での検出であったため、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径1.03m×0.91mの不整な楕円形で、確認面からの深さは1.73mを測る。壁の立ち上がりは急なものの、上部は崩落のため広がっている。底面は平坦で、横断面は漏斗状となる。

覆土からは古墳時代後期～古代の須恵器、土師器が少量出土している。但し、いずれも微細な破片であるため、図示するには至らなかった。また、馬のものと思われる数本の歯が見出されている。

第264号井戸跡 (第7・386図)

X-18グリッドに位置する。埋没後、上部を第77号溝跡に切り取られる。検出部での平面は径0.55m×0.44mの円形で、溝跡壁面からの深さは0.58mを測る。底面はほぼ平坦で、横断面は漏斗状を呈する。

遺物の出土は認められなかった。

第265号井戸跡 (第7・386図)

W-18グリッドに位置する。第16号性格不明遺構の南側肩部に重複するが、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径1.46m×1.41mの不整な円形で、確認面からの深さは0.91mを測る。壁の立ち上が

りは急なものの、崩落のためか上部は広がっている。底面はほぼ平坦で、横断面は円筒状となる。

微細な破片のため図示できなかったが、覆土からは古墳時代後期の土師器(甕・高坏)を数片、出土している。

第266号井戸跡 (第6・386図)

W-18グリッドに位置する。これも第16号性格不明遺構と重複するが、その新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.51m×0.45mの不整な円形で、確認面からの深さは1.08mを測る。壁には一部崩落の痕が見られるものの、立ち上がりはおおよそ垂直である。底面が平坦であるため、横断面は円筒状となる。

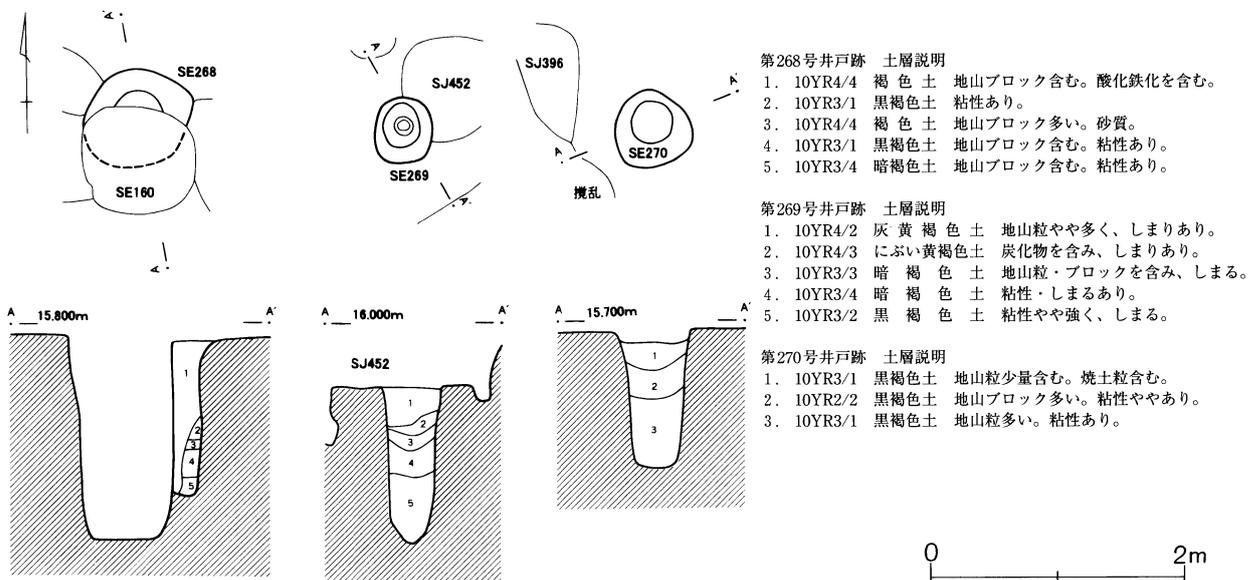
覆土からは、古墳時代後期の土師器(甕・坏)を数片出土している。いずれも微細な破片のため、図示するには至らなかった。

第267号井戸跡 (第6・386図)

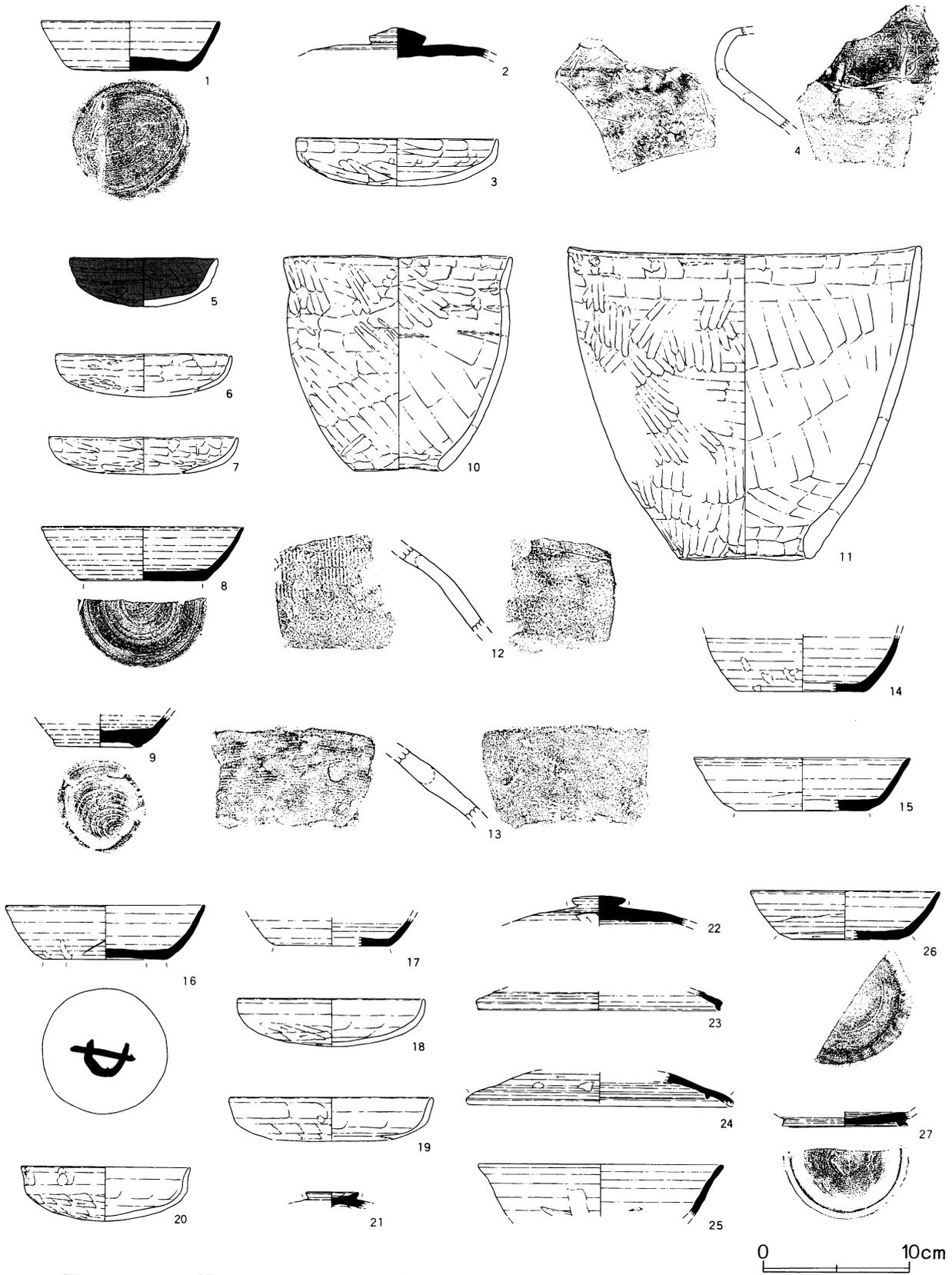
W-18グリッドに位置する。第63号掘立柱建物跡の柱穴(P₂₁)を掘り抜く。平面は径0.68m×0.62mの円形で、確認面からの深さは1.26mを測る。壁は上部が崩落し、開き気味の立ち上がりとなる。底面が平坦であるため、横断面はやや漏斗状となる。

遺物の出土は認められなかった。

第387図 井戸跡 (14)

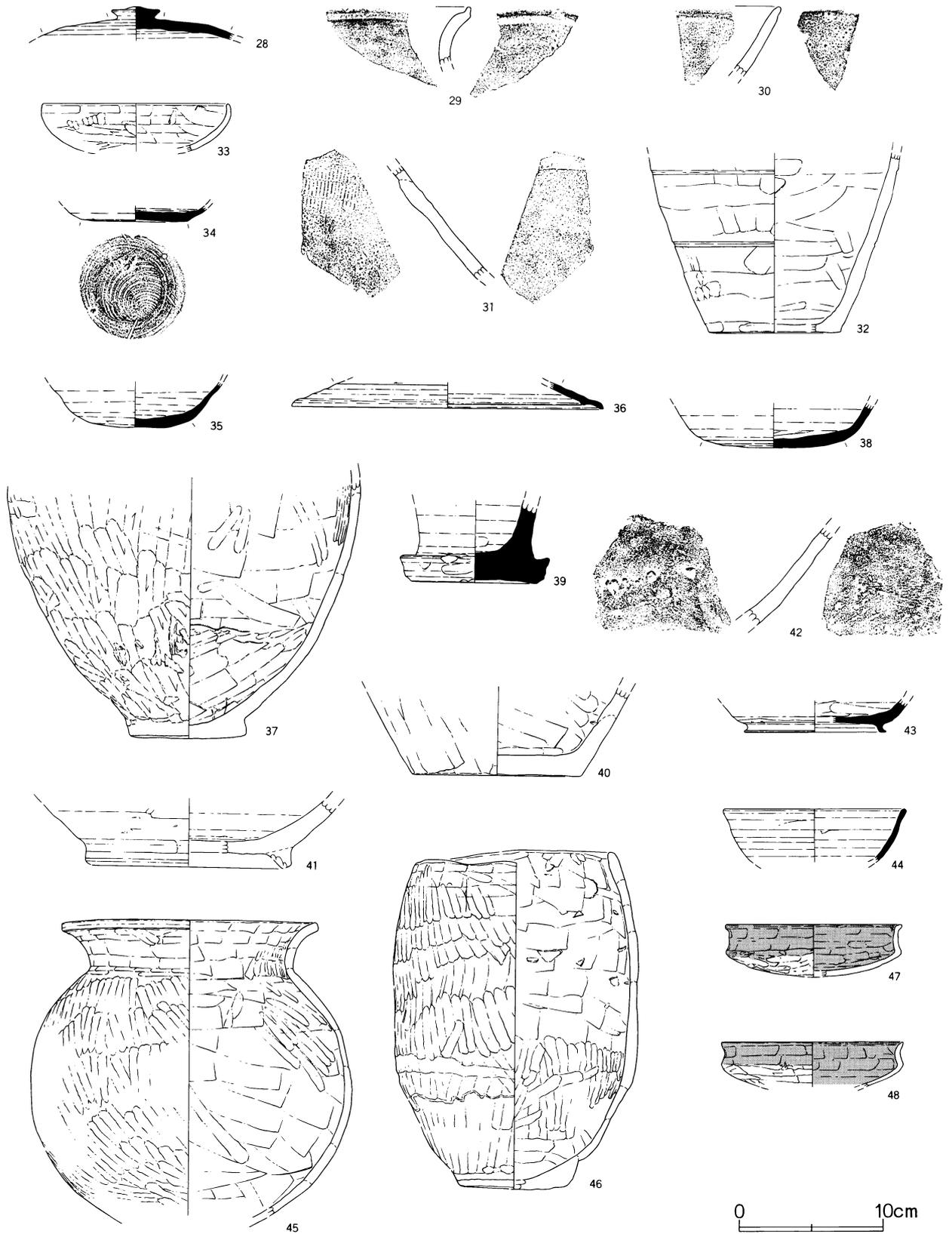


第388図 井戸跡出土遺物 (1)



- | | | |
|-----------|-----------------|-----------------|
| 1 - SE143 | 4 - SE146 | 20 - SE152 |
| 2 - SE144 | 5 ~ 13 - SE147 | 21 ~ 27 - SE158 |
| 3 - SE145 | 14 ~ 19 - SE149 | |

第389図 井戸跡出土遺物(2)



28 - SE159

29 ~ 32 - SE162

33 · 34 - SE164

35 · 36 - SE169

37 - SE170

38 - SE177

39 · 40 - SE181

41 - SE202

42 ~ 44 - SE203

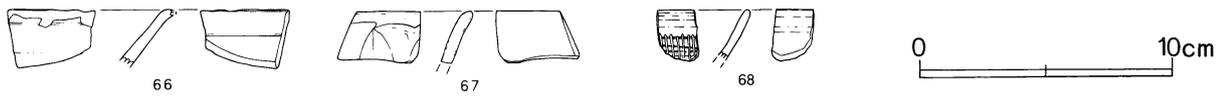
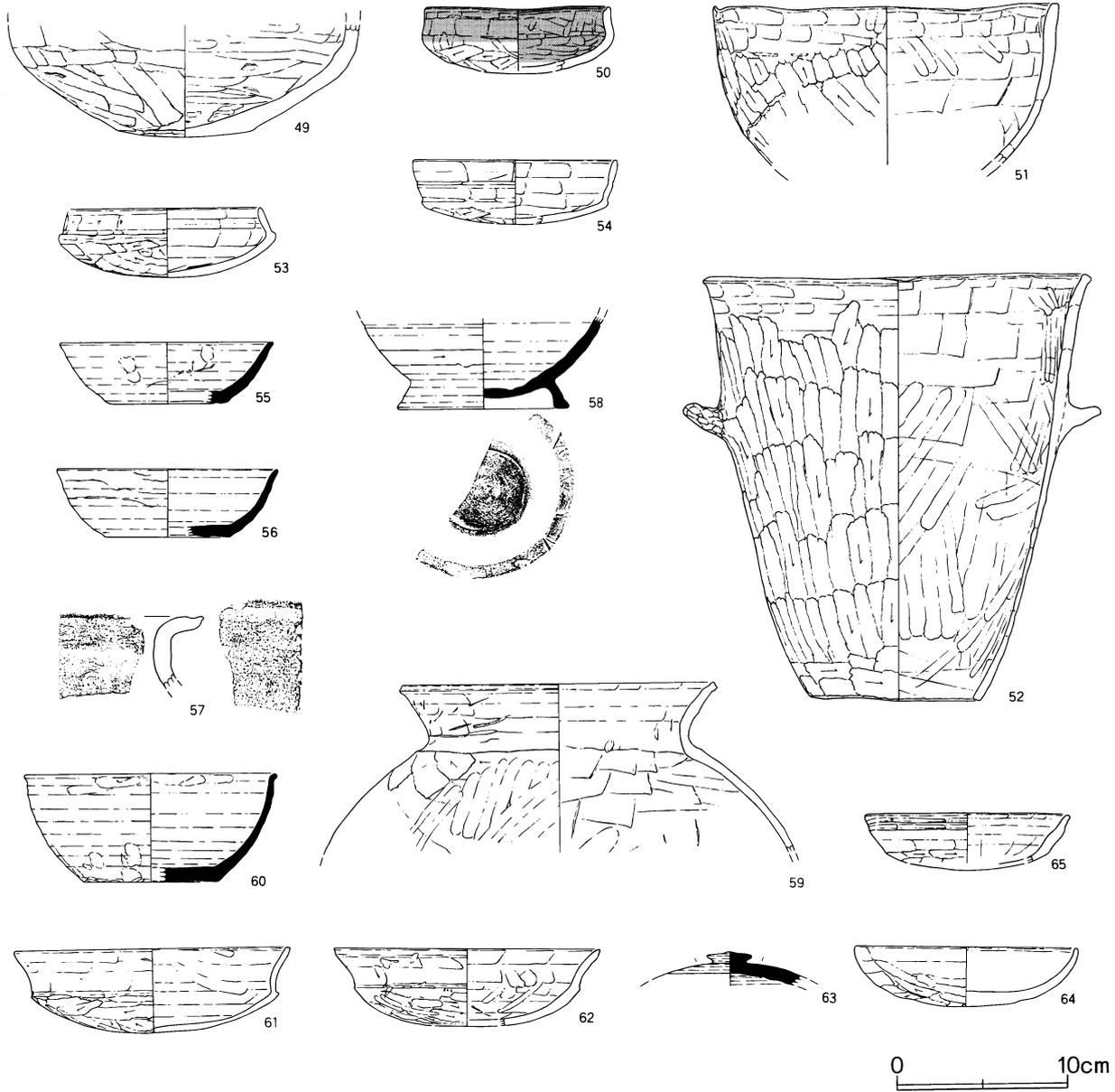
45 - SE209

46 - SE210

47 - SE223

48 - SE232

第390図 井戸跡出土遺物(3)



- | | | | |
|-----------------|-----------------|-----------------|------------|
| 49 - SE220 | 55 ~ 59 - SE250 | 63 · 64 - SE259 | 66 - SE146 |
| 50 ~ 52 - SE222 | 60 - SE253 | 65 - SE268 | 67 - SE147 |
| 53 · 54 - SE237 | 61 · 62 - SE254 | | 68 - SE181 |

第155表 井戸跡出土遺物観察表(1)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SE 143	須恵器 坏	(12.2)	3.4	7.9	細 (W, 針)	良	灰 白	50	南比企
2	SE 144	須恵器 蓋		(2.2)		細 (F)	良	灰 白	50	末野
3	SE 145	坏	(13.7)	3.3		細 (B, R)	良	にぶい 橙	30	
4	SE 146	常滑 甕				粗 (W)	良	にぶい 褐	破片	
5	SE 147	坏	(10.2)	(3.4)		微 (W, B)	普	灰 白	50	内外黒色処理
6	SE 147	坏	(12.1)	(2.7)		細 (W, B)	普	にぶい 橙	20	
7	SE 147	坏	(13.1)	(2.5)		微 (W, B)	普	にぶい 橙	破片	
8	SE 147	須恵器 坏	(14.0)	3.7	(8.6)	(針)	普	灰 白	40	南比企
9	SE 147	須恵器高台付坏		(2.3)	5.4	粗 (W)	普	灰 白	破片	末野
10	SE 147	甕	(15.7)	(14.7)	(6.0)	粗 (W, C)	良	にぶい 橙	30	
11	SE 147	甕	(24.0)	21.4	(9.6)	粗 (W)	普	橙	40	
12	SE 147	常滑 甕				細 (W)	良	灰 褐	破片	
13	SE 147	常滑 甕				粗 (W, F)	普	黄 灰	破片	
14	SE 149	須恵器 坏		(4.0)	(8.6)	細 (W, F, 針)	良	灰	50	南比企
15	SE 149	須恵器 坏	(14.9)	(3.7)	(9.2)	粗 (W, F, 針)	良	灰 白	破片	南比企
16	SE 149	須恵器 坏	(13.7)	3.7	8.5	細 (W, F, 針)	良	灰 白	60	南比企
17	SE 149	須恵器 坏		(2.0)	(7.8)	細 (W, F, 針)	良	灰 白	破片	南比企
18	SE 149	坏	(12.7)	3.3		細 (W, B)	良	にぶい 橙	25	
19	SE 149	坏	(13.8)	(2.9)		細 (W, B)	普	にぶい 橙	破片	
20	SE 152	坏	11.6	3.8		細 (B)	良	にぶい 橙	75	
21	SE 158	須恵器 蓋		(1.1)		細 (W, F)	良	灰	破片	藤岡
22	SE 158	須恵器 蓋		(2.1)		粗 (W, F)	良	灰	30	末野
23	SE 158	須恵器 蓋	(16.6)	(1.4)		微 (F)	普	灰 白	破片	東海
24	SE 158	須恵器 蓋		(2.2)		粗 (W, F)	良	灰	破片	群馬
25	SE 158	須恵器 坏	(16.9)	(3.7)		粗 (W, F)	良	灰	破片	末野
26	SE 158	須恵器 坏	(13.0)	3.4	7.4	(針)	良	灰	40	南比企
27	SE 158	須恵器高台付坏		(1.0)	8.6	微 (F)	良	黄 灰	破片	湖西
28	SE 159	須恵器 蓋		(2.4)		細 (W, B, 片)	普	灰 白	破片	末野
29	SE 162	常滑 甕				細 (W)	良	灰 黄 褐	破片	
30	SE 162	山茶碗系片口鉢				細 (W, F)	良	灰 白 褐	破片	
31	SE 162	常滑 甕				細 (W, R)	良	灰 黄 褐	破片	
32	SE 162	常滑 壺				粗 (W, F)	良	褐 灰	破片	
33	SE 164	坏	(12.9)	(3.4)		細 (W, B)	良	にぶい 橙	破片	
34	SE 164	須恵器 坏		(1.1)	(7.4)	(針)	良	灰	20	南比企
35	SE 169	須恵器 坏		(3.2)		微 (F)	普	灰	40	湖西
36	SE 169	須恵器 蓋	(21.8)	(1.9)		細 (W, R)	悪	にぶい 黄 橙	破片	末野
37	SE 170	壺		(18.3)	8.0	礫 (C)	良	橙	40	
38	SE 177	須恵器 坏		(3.2)		細 (W, F)	良	灰	破片	群馬
39	SE 181	須恵器すり鉢		(5.8)	(8.9)	細 (F)	良	灰	破片	内外自然釉付着
40	SE 181	在地系 壺		(6.3)	(11.9)	細 (B, R)	普	灰 黄 褐	破片	
41	SE 202	山茶碗系片口鉢		(4.8)	(14.4)	細 (F)	良	灰	破片	
42	SE 203	常滑片口鉢				粗 (W, R)	良	褐 灰	破片	
43	SE 203	須恵器高台付坏		(2.3)	(10.0)	細 (F)	良	灰	破片	
44	SE 203	須恵器 坏	(12.8)	(3.8)		細 (F, 針)	良	灰	破片	南比企
45	SE 209	壺	18.0	(20.6)		礫 (W)	良	橙	80	
46	SE 210	甕	14.1	23.4	7.5	粗 (W, 片)	良	にぶい 橙	85	
47	SE 223	坏	(12.5)	(3.7)		礫 (W, C, R)	良	灰 褐	40	赤彩
48	SE 232	坏	(12.8)	(3.2)		礫 (W, R)	良	黒 褐	30	赤彩
49	SE 220	壺		(6.7)	7.9	細 (B, R)	普	浅 黄 橙	25	
50	SE 222	坏	(11.0)	(3.8)		粗 (W, C)	良	赤	45	比企型 赤彩
51	SE 222	甕?	(20.4)	(9.5)		粗 (R)	普	にぶい 橙	破片	
52	SE 222	甕	22.9	25.1	10.1	細 (W, C)	普	にぶい 黄 橙	85	
53	SE 237	坏	11.1	4.1		細 (W, B, R)	良	明 褐 灰	70	

第156表 井戸跡出土遺物観察表(2)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
54	SE 237	坏	(11.8)	(3.8)		微(B, R)	良	にぶい 橙	30	黒色付着物
55	SE 250	須恵器坏	(12.5)	3.6	(6.8)	(針)	良	灰	20	南比企 SK 551 と接合
56	SE 250	須恵器坏	(12.9)	4.0	(7.2)	粗(W, F, 針)	良	灰	25	南比企 SK 551 と接合
57	SE 250	常滑甕				細(W)	良	にぶい 褐	破片	
58	SE 250	須恵器壺		(5.4)	(10.1)	細(F)	良	黄 灰	破片	湖西 自然釉付着
59	SE 250	甕	(18.3)	(10.0)		粗(W, B, R)	良	にぶい 黄橙	破片	
60	SE 253	須恵器碗	(14.7)	6.4	(7.8)	礫(W, R, F, 針)	良	灰	50	南比企 黒色付着物
61	SE 254	坏	16.2	4.9		細(B, R)	良	橙	75	
62	SE 254	坏	(15.6)	(4.5)		細(W, B, R)	良	橙	20	
63	SE 259	須恵器蓋		(2.0)		礫(W, F)	良	灰 白	破片	
64	SE 259	坏	(12.9)	3.5		細(B)	普	褐 灰	40	黒色付着物
65	SE 268	坏	(12.1)	(2.9)		微(W, B)	普	褐 灰	破片	
66	SE 146	青磁碗				微	良	灰 白	破片	
67	SE 147	青磁碗				微	良	明 緑 灰	破片	
68	SE 181	青磁碗				微	良	灰 白	破片	

第268号井戸跡(第9・387図)

以下の3基はピットとして調査したが、図面や写真を検討し、井戸跡に変更したものである。

第268号井戸跡は、A I-23グリッドに位置する。南側を第160号井戸跡に大きく切られるが、第161号井戸跡との新旧関係は明らかにできなかった。平面は径0.70m×0.60m程の円形になるものと思われ、確認面からの深さは1.22mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

覆土からは土師器の坏1点(第390図65)が出土したのみである。

第269号井戸跡(第10・387図)

A K-24グリッドに位置する。埋没後、上部を第

452号住居跡に切り取られる。平面は径0.53m×0.45mの円形で、住居跡床面からの深さは1.23mを測る。壁は垂直に掘り込まれ、底面は丸みを帯びる。このため、横断面は試験管のようになっている。

遺物の出土は認められなかった。

第270号井戸跡(第9・387図)

A H-23グリッドに位置する。第392号住居跡と重複するようであるが、住居跡が壁溝での検出であったため、両者の新旧関係は明らかとし得なかった。平面は径0.60m×0.59mの円形で、確認面からの深さは1.01mを測る。底面は平坦で、壁の立ち上がりは急である。よって、横断面は円筒形となる。

遺物の出土は認められなかった。

第157表 井戸跡一覧表(1)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考	番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
143	AF-23	楕円形	0.84	0.75	1.78	SK 416・418より新	158	AI-24	円形	1.21	1.08	1.56	
144	AF-23	円形	0.46	0.45	1.51	SK 418より新	159	AI-24	円形	0.79	0.69	1.42	
145	AF-23	円形	(0.78)	0.76	1.55	SJ 362より新	160	AI-23	円形	(1.88)	(1.10)	1.53	SE 268より新 SE 161より古
146	AF-23	楕円形	1.52	1.22	2.21		161	AI-24	円形	(1.11)	1.10	1.35	SE 160より新
147	AF-23	不整楕円形	2.78	(2.01)	2.78	SE 152より新	162	AH-23	円形	2.13	2.08	1.82	
148	AF-22	円形	0.45	0.44	1.13		163	AI-24	楕円形	0.97	0.95	1.21	SK 436より古
149	AF-22	楕円形	1.39	1.14	1.97		164	AI-24	円形	(0.67)	0.64	1.53	
150	AG-22	円形	0.97	0.95	1.25		165	AI-24	円形	0.86	0.81	1.13	
151	AG-23	楕円形	0.83	0.71	1.52		166	AI-21	円形	0.30	0.30	1.94	
152	AE-23	不整円形	0.56	0.46	1.61	SE 147より古	167	AJ-25	円形	2.08	1.92	1.77	
153	AI-20	円形	0.77	0.68	0.95		168	AI-25	円形	0.79	0.71	1.64	
154	AG-20	不整円形	2.52	1.76	2.18		169	AJ-24	楕円形	0.69	0.47	1.61	SJ 436より新
155	AG-22	円形	1.41	1.01	2.17		170	AH-24	円形	0.34	0.33	1.53	
156	AG-23	円形	0.6	0.53	1.55		171	AJ-24	円形	0.49	0.47	1.58	
157	AH-22	円形	1.05	1.04	1.35		172	AK-21	円形	1.03	1.02	2.77	

第 158 表 井戸跡一覧表 (2)

番号	位置	形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考	番号	位置	形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
173	前年度調査						228	AM-27	円形	0.38	0.37	1.81	
174	AK-23	円形	0.72	0.67	1.86	SJ 431 より新	229	欠番					
175	AJ-23	不整円形	0.53	0.51	1.72	SJ 412 より古	230	AL-25	円形	0.38	0.34	1.58	
176	AJ-25	円形	1.47	1.45	1.33		231	AL-25	円形	0.39	0.36	1.62	
177	AJ-25	円形	0.87	0.84	1.52		232	AK-23	円形	0.54	0.48	1.83	SJ 500・501 より古
178	AJ-25	円形	0.57	0.56	1.23		233	AN-27	方形	0.52	0.51	1.81	
179	AI-22	円形	0.54	0.53	1.82		234	AP-28	円形	0.39	0.36	1.59	
180	AI-22	不整円形	0.55	0.48	2.18		235	AP-28	円形	0.44	0.43	1.16	
181	AJ-23	円形	2.43	2.33	2.24	SJ 430 より新	236	AO-28	楕円形	0.61	0.54	1.68	
182	AK-24	円形	0.71	0.66	1.45		237	AP-27	円形	0.41	0.39	1.78	
183-190	前年度調査						238	AQ-28	円形	0.47	0.43	1.66	
191	AJ-23	円形	1.31	1.22	2.79	SJ 427~429 より新	239	AQ-28	方形	0.48	0.45	1.51	
190-196	前年度調査						240	AX-33	円形	1.61	1.60	2.13	
197	AJ-23	円形	0.51	0.45	1.58		241	AO-27	楕円形	0.66	0.53	1.48	
198	AH-20	円形	0.42	0.40	1.19		242	AV-30	円形	1.84	1.74	2.44	
199	AF-22	円形	0.59	0.58	1.52		243	AU-30	円形	0.82	0.82	2.19	
200	AL-25	楕円形	1.16	0.94	1.73	SJ 457 より古	244	AT-29	円形	0.71	0.66	0.41	SJ 549・SD 122 より新
201	AM-25	円形	1.31	1.29	1.61		245	AR-29	円形	0.40	0.36	1.48	
202	AN-26	円形	1.48	1.32	1.88		246	AQ-27	円形	0.78	0.75	1.45	
203	AM-26	円形	3.21	3.16	1.96	SK 457 より新	247	欠番					
204	AM-26	円形	0.51	(0.32)	1.33		248	AR-28	円形	0.49	0.48	2.33	
205	AL-24	円形	0.76	0.64	1.22		249	前年度調査					
206	AL-24	円形	0.54	0.53	1.62		250	X-19	楕円形	2.68	1.66	1.33	SK 551 より古
207	AR-28	楕円形	1.73	1.53	2.16	SJ 537・538 より新	251	X-20	円形	1.14	1.06	1.27	
208	AQ-29	円形	1.05	0.99	1.11		252	X-19	円形	0.65	0.64	1.22	
209	AK-23	円形	0.55	0.51	1.25	SE 210 より新	253	X-19	不整形	1.31	1.18	1.03	
210	AK-23	楕円形	0.93	0.62	1.45	SJ 503・SE 209 より古	254	X-19	不整円形	1.28	1.05	1.48	
211	AT-29	円形	0.55	0.52	1.65		255	Y-19	円形	0.93	0.87	0.92	
212	AR-29	楕円形	0.49	0.39	1.46		256	Y-19	楕円形	0.82	0.58	0.93	
213	AL-26	楕円形	0.71	0.59	1.79		257	X-19	楕円形	0.71	0.63	1.05	SK 562 より新
214	AL-26	円形	0.46	0.42	1.68		258	X-19	円形	0.41	0.36	1.46	
215	AL-26	円形	0.38	0.34	1.09		259	X-19	円形	0.51	0.49	1.34	
216	AL-26	円形	0.47	0.46	1.49		260	X-19	円形	0.68	0.66	0.78	
217	AM-25	円形	0.41	0.36	1.79		261	Z-20	円形	1.54	1.46	2.64	
218	AM-24	円形	0.40	0.39	1.58		262	Z-20	円形	1.08	1.04	2.48	SK 569 より新
219	AN-25	円形	0.47	0.45	1.22		263	X-19	不整楕円形	(1.03)	0.91	1.73	
220	AN-25	円形	0.43	0.42	1.66		264	X-18	円形	0.55	0.44	0.58	SD 77 より古
221	AN-25	円形	0.53	0.48	1.88		265	W-18	不整円形	1.46	1.41	0.91	
222	AK-23	円形	0.49	0.42	1.21		266	W-18	不整円形	0.51	0.45	1.08	
223	AK-23	円形	0.37	0.36	1.71		267	W-18	円形	0.68	0.62	1.26	SB 63 より新
224	AN-25	円形	0.38	0.32	1.74		268	AI-23	円形	0.70	0.60	1.22	SE 160 より古
225	AM-26	楕円形	0.47	0.36	1.03	SJ 472 より古	269	AK-24	円形	0.53	0.45	1.23	SJ 452 より古
226	AN-26	円形	0.46	0.43	1.34		270	AH-23	円形	0.60	0.59	1.01	
227	AM-24	円形	0.39	0.34	1.18								

6. 溝跡

本書で報告の対象となる溝跡は、第106～140号までの35条である。但し、調査区の拡張があったため、既に『築道下遺跡Ⅱ』において報告した第77号溝跡についても、その新規検出分を補った。

溝跡の分布もこれまでの遺構同様、特に集中したり、偏在するような傾向は看取されない。大きく分ければ、

- ①自然堤防の肩部に沿うもの。第123・124号溝跡などのように、並行して重複する。
 - ②これとは逆に、自然堤防に直交するもの。大半の溝跡がこれに属する。この場合、溝と溝とは近接せず、ある程度の間隔を空けている。また、その方向も概ね一致し、掘立柱建物跡もこれに倣うものが多いようである。
 - ③鉤の手状の「堀」とも言うべきもの。第106・125号溝跡のみ。方向的には前者と共通する。
- ということになる。

いずれの溝跡からも人為的な埋め戻しや、通水の様子は窺えず、護岸なども行なわれていない。②と③の溝跡はこうした点から見て、何らかの区画を意図して開鑿されたものと判断される。

遺物の出土がわずかであるため、時期の特定は難しいが、大部分は中世のものと考えられる。

第77号溝跡（第7・391図）

X-18～20グリッドに位置する。既に『築道下遺跡Ⅱ』で報告しているが、拡張した調査区から連続する部分を検出したため、これを補う。

東側は更に調査区外へと展開しており、ほぼ自然堤防を横断するものと考えられる。検出総長は55.10mとなり、最大幅3.63m、深さ約0.67mを測る。横断面は逆台形、ないしはV字形を呈する。新規検出部分では、並走する第140号溝跡に切られ、第193号住居跡を切る。

覆土からは古代の須恵器(甕・高台付坏・坏)、土師器(甕)、中世の常滑製品(甕・鉢)、在地産の片口鉢な

ど(第395図1～16)が出土している。また、側縁に打撃痕のある片岩(第419図14～16)や、凝灰岩の破片なども見られる。古代の土器は、周囲の遺構から流入したものと判断される。

第106号溝跡（第9・391図）

A E-22～A H-22グリッドに位置する。第346・348・349・359・370・372・373・409・410・415号住居跡を切った開鑿だが、北側に並走する第107号溝跡との関連性は、これを明確にできなかった。検出長は北東-南西が約30m、北西-南東が約21mである。最大幅1.94m、深さ約1.10mをそれぞれ測る。横断面は逆台形、ないしはV字形を呈する。

全体の形状は明らかとし得ないが、調査区内はL字状に掘削されている。幅や深さは卓越しており、区画性も強い。内部には井戸跡や、方向の一致する掘立柱建物跡も多く分布する。また、建物跡と認定はできなかったが、ピットが集中的に見出されている。このことから、第106号溝跡は屋敷、または居住域を囲む「堀」と捉えられるのではなかろうか。

覆土からは在地産の鉢(第395図17・18)のほか、須恵器や土師器の破片が少量出土している。後者は、いずれも周囲の遺構からの混入と思われる。

第107号溝跡（第9・391図）

A E-22～A G-21グリッドに位置する。第106号溝跡の北西辺に並走し、第346・348・349号住居跡を切る。検出長27.48mで、ほぼ第106号溝跡のコーナー部で収束する。最大幅0.86m、深さ約0.40mを測る。底面は丸みを帯び、横断面はU字形を呈する。

遺物の出土は見られなかった。

第108号溝跡（第9・391図）

A F-20～A G-20グリッドに位置する。溝というより、細長い土壌状である。あるいは、住居跡の壁溝が残存したものかもしれない。検出長は2.86mで、最大幅0.45m、深さ約0.13mを測る。断面はU字形を呈する。

覆土からは土師器の破片を少量出土したが、微細なため図示できなかった。

第109号溝跡（第9・391図）

AG-20・21グリッドに位置する。検出長23.6m、最大幅1.09m、深さ約0.27mを測る。横断面は逆台形を呈する。第106号溝跡のコーナー部から、南西へ延びる。第106号溝跡との重複は認められないものの、先行する遺構ではないかと考えられる。住居跡を掘り抜く南西部では、第110号溝跡と同一方向に重複するが、両者の区分や新旧関係は明瞭でない。いずれかが掘り直されたものかもしれない。

遺物は第110号溝跡と一括して取り上げた。

第110号溝跡（第9・391図）

AG-20～AI-19グリッドに位置する。上述のように、第109号溝跡との区分、重複関係は定かでない。最大幅0.72m、深さ約0.43mで、横断面はV字形を呈する。また、第378・382・383・388号住居跡、第429号土壇を切るが、第154号井戸跡との新旧関係は明らかにできなかった。

微細な破片のため図示し得なかったが、覆土からは青磁の碗が2点出土している。また、土師器や須恵器の坏など(第396図20～28)も見られるが、いずれも混入したものと思われる。

第111号溝跡（第10・392図）

AJ-22～AK-22グリッドに位置する。第402・406・416・417・441号住居跡を切る。検出長19.12m、最大幅0.92m、深さ約0.38mを測る。横断面は逆台形を呈する。北東から南西調査区外へ向けて傾斜し、南西端で第112号溝跡と重複する。重複関係は明らかとし得なかった。

覆土からは土製支脚、在地産の片口鉢(第396図29・30)、砥石(第420図4)のほか、少量の土師器片が出土している。

第112号溝跡（第10・392図）

AK-21・AL-21グリッドに位置する。自然堤防の肩部に並行し、第111号溝跡と交差する。第113・118号溝跡と同一のものと思われる。検出長は4.46m

で、最大幅0.63m、深さ約0.17mを測る。断面はU字形を呈する。

覆土からは若干の土師器片を出土したが、図示するには至らなかった。

第113号溝跡（第10・392図）

AM-25～AN-25グリッドに位置する。検出長は約38.50mで、最大幅0.96m、深さ約0.32mを測る。横断面は逆台形を呈する。自然堤防に直交する溝跡で、北東から南西へ向けて第114・119号溝跡と並走する。第114号溝跡に先行することは確認できたが、第119号溝跡との関係は明らかにできなかった。また、第459・460・477号住居跡を切断することも観察された。

図示することはできなかったが、覆土からは土師器のほか、軽石や片岩などが出土している。但し、第113・119号溝跡と一括して取り上げたため、その帰属は明らかでない。

第114号溝跡（第10・392図）

AM-25～AN-25グリッドに位置する。検出長は32.16mで、最大幅0.94m、深さ約0.22mを測る。横断面はU字形を呈する。北東から南西へ向け、第113・119号溝跡と並走する。両溝跡のほか、第459・479・489号住居跡を切る。

遺物は第113・119号溝跡と一括して取り上げた。

第115号溝跡（第10・392図）

AN-24グリッドに位置する。検出長3.54m、最大幅1.07m、深さ約0.10mで、横断面は船底形を呈する。第114号溝跡南西端から、ほぼ南東へ向けて走る。両溝、および第485号住居跡との重複関係は明らかにできなかった。西側には、第116号溝跡が並走する。

覆土からは、側縁に打撃痕のある片岩(第419図17～19)が出土している。

第116号溝跡（第10・392図）

AN-24グリッドに位置する。検出長は3.70mで、最大幅0.35m、深さ約0.11mを測る。横断面は箱形を呈し、北西から南東へ向けて第115号溝跡と並走する。これも第485号住居跡と重複するが、その関係は明らかにできなかった。

微細な破片のため図示できなかったが、覆土からは在産の鉢、片岩が数点出土している。

第117号溝跡（第11・392図）

AN-24～AP-25グリッドに位置する。検出長は14.80mで、最大幅0.73m、深さ約0.18mを測る。横断面は船底形を呈する。北西から南東へ向けて走り、両端部で重複する第468・469・535・536号住居跡を切る。

覆土からは五輪塔の空・風輪(第395図19)が出土している。灰白色の凝灰岩製で、表面は著しく風化している。高さ19.3cm、空輪部の最大径16.4cm、風輪部の底径8.3cmをそれぞれ測る。

第118号溝跡（第10・392図）

AL-21～AM-22グリッドに位置する。北西から南東へ向けて延び、第516・522・525・526・540・541・542号住居跡、および第120号掘立柱建物跡を切る。検出長は約13.74mで、最大幅0.66m、深さ約0.26mを測る。横断面は箱形を呈する。第112・113号溝跡の延長にあり、規模や計上も一致する。このことから、3条は同一の溝跡と判断される。

覆土からは常滑産の甕のほか、土師器の甕や坏(第396図31・32)を出土している。後者は重複する住居跡からの流入と思われる。

第119号溝跡（第10・392図）

AM-25・26グリッドに位置する。検出長は14.64mで、最大幅0.59m、深さ約0.23mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、横断面は船底状となる。北西から南東へ向けて第113・114号溝跡と並走するが、第114号溝跡に切られる。

遺物は第113・114号溝と一括で取り上げたため、その帰属は明らかでない。

第120号溝跡（第12・392図）

AR-29グリッドに位置する。検出長は2.90mで、最大幅0.47m、深さ約0.07mを測る。横断面は皿形を呈する。第543号住居跡北東壁に沿うように、南東調査区外へ向けて走る。しかし、両者の新旧関係は明らかにできなかった。

遺物の出土は見られなかった。

第121号溝跡（第12・392図）

AT-30グリッドに位置する。検出長は6.35mで、最大幅0.66m、深さ約0.40mを測る。横断面はU字形を呈する。北西調査区外から南東へ向け、第122号溝跡と並走する。第122号溝跡には切られるが、第549号住居跡との関係は明らかにできなかった。なお、延長線上には第134号溝跡が存在するが、同一のものではないようである。

覆土からは土師器、片岩を少量出土したが、図示するには至らなかった。

第122号溝跡（第12・392図）

AT-29～AU-29グリッドに位置する。検出長は16.80mで、最大幅1.23m、深さ約0.74mを測る。横断面はV字形を呈する。北西から南東へ第121号溝跡と並走し、第549号住居跡を切断する。端部は第123・124号溝跡と重複し、延長上には第133号溝跡が存在する。しかし、その関係はいずれも明らかにできなかった。

覆土からは常滑産の甕、片岩、土師器、須恵器の破片が少量出土している。いずれも微細であるため、図示するには至らなかった。

第123号溝跡（第11・12・13・393図）

AP-25～AY-32グリッドに位置する。検出長は約117.00mで、最大幅2.19m、深さ約1.21mを測る。断面は逆台形を呈する。自然堤防の肩部を巡るように、第124号溝跡と並走する。第124号溝跡は本溝跡の埋没により、掘り直されたものようである。第536・549・551・556号住居跡を切り、第131・134・135号溝跡に切られる。第127・132号溝跡との重複関係は明らかにできなかった。

覆土からは縄文時代の打製石斧(第417図4)、石匙(第417図3)、中世の常滑製品や青磁碗、瓦(第396図33～37・41)、砥石(第420図3)、側縁に打撃痕のある片岩(第419図20)などが出土している。

第124号溝跡（第11・12・13・393図）

AQ-25～AW-30グリッドに位置する。検出長は約69.60mで、最大幅0.69m、深さ約0.23mを測る。横断面はU字形を呈する。自然堤防の肩部を、第123号溝跡と並走する。第123号溝跡の埋没に伴い、同一の場所を掘りなおしたものと思われる。第136号溝跡に切られるが、第127・131・132・134・135号溝跡との重複関係は明らかにできなかった。

覆土からは青磁の碗(第396図42・43)、常滑産の甕(第396図38)、側縁に打撃痕のある片岩(第419図21・22)などが数点出土している。

第125号溝跡（第13・14・394図）

AX-32～AY-33グリッドに位置する。C区からF区にかけてコ字状に巡る溝跡で、C区においてはその北辺を検出した。検出長は25.28mで、最大幅2.51m、深さ約0.58mを測る。横断面はU字形を呈する。第126号溝跡、第15号性格不明遺構に切られる。

全体的には崩れた方形となるが、区画を意図していることは明らかである。

遺物の出土は見られなかった。但しF区内では、古代の須恵器や土師器が出土している。

第126号溝跡（第13・14・394図）

AW-32～AY-33グリッドに位置する。検出長は20.70mで、最大幅0.88m、深さ約0.44mを測る。横断面はU字形、ないし箱形を呈する。第129号溝跡と重複する南東端から西へ延び、大きく湾曲して南へ走る。第129号溝跡との重複関係は不明である。第550号住居跡、第125・128号溝跡、第516号土塋を切り、第130号溝跡、第518号土塋に切られる。

微細な破片で図示できなかったが、覆土からは常滑産の甕のほか、土師器が少量出土している。また、加工の痕は観察できなかったが、水晶の結晶が見出された。

第127号溝跡（第13・393図）

AV-30～AX-31グリッドに位置する。検出長は約27.80mで、最大幅2.54m、深さ約0.88mを測る。横断面はV字形を呈する。北東調査区外から南西へ延

び、第124号溝跡と接する部分で直角に折れる。これより南東方向へは、第124号溝跡の延長上を、第123号溝跡と並走する。第554号住居跡を切るが、第123・124号溝跡と重複関係は明らかにできなかった。

覆土からは常滑産の甕、在産の壺(第396図39・40)、側縁に打撃痕を有する片岩(第419図23～26)などが出土している。

第128号溝跡（第13・394図）

AW-32グリッドに位置する。検出長は4.20mで、最大幅0.46m、深さ約0.09mを測る。第129号溝跡の南側肩部より掘り起こされ、第126号溝跡に切れ合流する。

遺物の出土は見られなかった。

第129号溝跡（第13・394図）

AW-32・33グリッドに位置する。検出長は7.26mで、最大幅0.77m、深さ約0.28mを測る。横断面は箱形を呈する。北東調査区外沿いを北から東へ、弧を描くように走る。第126・128号溝跡と重複するが、それぞれとの新旧関係は明らかにできなかった。

覆土からは、凝灰岩や片岩が数点出土したが、加工の痕が見られなかったため、図示しなかった。

第130号溝跡（第13・394図）

AW-32～AX-32グリッドに位置する。検出長は9.86mで、最大幅0.51m、深さ約0.08mを測る。横断面は船底形を呈し、北東から南西へ向けて走る。第126号溝跡を切る。

遺物の出土は認められなかった。

第131号溝跡（第12・393図）

AU-29グリッドに位置する。検出長は3.82mで、最大幅1.12m、深さ約0.25mを測る。横断面は箱形を呈する。第123号溝跡を切るが、第124号溝跡との新旧関係は明らかにできなかった。

第135号溝跡までの5条は、第123・124号溝跡から自然堤防の西側へ延びており、しかもほぼ並走している。規模や形状も同様であることから、同時に並存したのではないかと判断される。

覆土からは土師器の破片が3点出土しているが、微

細なため図示できなかつた。

第132号溝跡（第12・394図）

AU-29グリッドに位置する。第131号溝跡の北側約2mに並走し、検出長は4.20mを測る。最大幅0.62m、深さ約0.20mで、横断面はV字形を呈する。第123・124号溝跡と重複する北東から、南西の調査区外へ向けて走る。両溝跡との重複関係は明らかにできなかつた。

遺物の出土は認められなかつた。

第133号溝跡（第12・394図）

AU-29グリッドに位置する。第132号溝跡から約1.5m北に開鑿され、検出長は4.23mを測る。最大幅0.73m、深さ約0.20mで、横断面はU字形を呈する。第123・124号溝跡と重複する北東から、南西調査区外へ向けて走る。第123号溝跡を切るが、第124号溝跡との関係は明らかにできなかつた。第528号土壌埋没後、これを切って構築される。

遺物の出土は見られなかつた。

第134号溝跡（第12・393図）

AU-29グリッドに位置する。第133号溝跡の北側約1.5mに並走し、検出長は3.94mを測る。最大幅0.79m、深さ約0.19mで、横断面は逆台形を呈する。第123・124号溝跡と重複する北東から、南西調査区外へ向けて走る。第123号溝跡を切るが、第124号溝跡との関係は明らかにできなかつた。

遺物の出土は見られなかつた。

第135号溝跡（第12・393図）

AT-29～AU-29グリッドに位置する。第134号溝から4m北に開鑿され、検出長は4.40mを測る。最大幅0.69m、深さ約0.21mで、横断面は箱形を呈する。第123・124号溝跡と重複する北東から、南西の調査区外へ向けて走る。第123号溝跡を切るが、第124号溝跡との関係は明らかにできなかつた。

遺物の出土は見られなかつた。

第136号溝跡（第11・12・393図）

AR-26～AT-28グリッドに位置する。第123・124号溝跡の西側（自然堤防の外側）に並走し、検出長

23.60m、最大幅1.19m、深さ約0.23mを測る。横断面は船底形を呈する。第124号溝跡を切るが、第569号住居跡、および第546号土壌との新旧関係は明らかにできなかつた。

遺物の出土は認められなかつた。

第137号溝跡（第7・391図）

以下の4条はC区の北東部、調査区の拡張に伴って検出された溝跡である。『築道下遺跡Ⅱ』報告分には未見であるため、新規の番号を付した。

第137号溝跡は、AA-21グリッドに位置する。検出長は2.24mで、最大幅0.42m、深さ約0.21mを測る。横断面は箱形を呈する。北東から南西へ向けて走るが、排水側溝の部分で収束するようである。溝跡というよりも、細長い土壌状である。南辺は第553号土壌を切る。

遺物の出土は見られなかつた。

第138号溝跡（第6・391図）

W-17・18グリッドに位置する。検出長は4.36mで、最大幅0.35m、深さ約0.14mを測る。横断面はU字形を呈する。第1116号ピットと重複する北から、南へ向けて走る。『築道下遺跡Ⅱ』で報告した第85号溝跡と同一の遺構と思われるが、確認するには至らなかつた。

遺物の出土は認められなかつた。

第139号溝跡（第7・391図）

X-18・19グリッドに位置する。検出長は6.58mで、最大幅0.33m、深さ約0.16mを測る。横断面はU字形を呈する。第77号溝跡の北側に並走し、西端部は第63号掘立柱建物跡の手前で収束する。

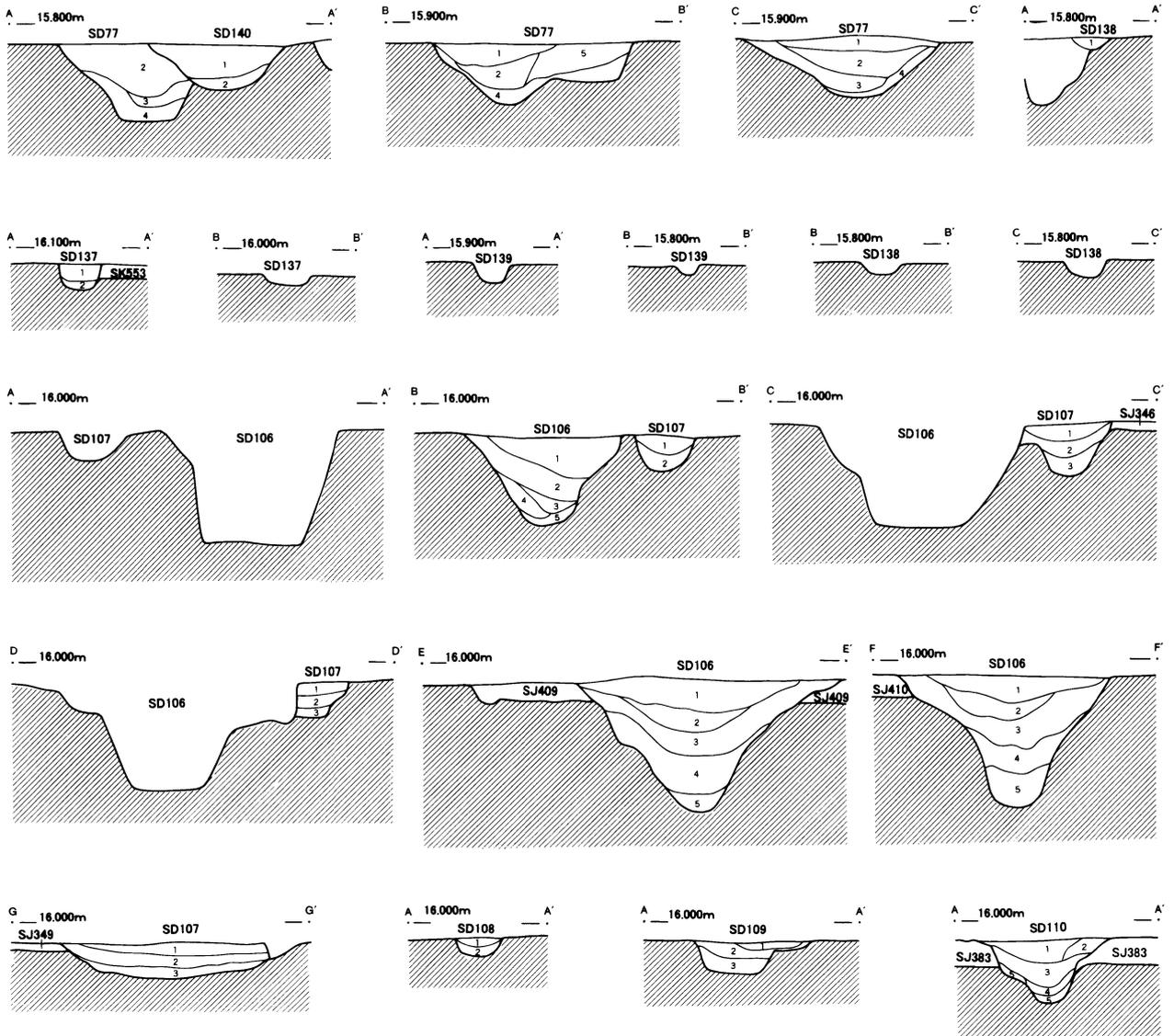
遺物の出土は見られなかつた。

第140号溝跡（第7・391図）

X-18・19グリッドに位置する。検出長は5.38mで、最大幅0.59m、深さ約0.26mを測る。横断面はU字形を呈する。これも第77号溝跡と並走するが、西側の状況は明らかでない。東側は第572号住居跡と重複することなく、急角度で立ち上がり収束する。第77号溝跡の埋没後、これを切る溝跡である。

遺物の出土は見られなかつた。

第391図 溝跡断面図(1)



第77号溝跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。褐灰色粘土を縞状に含む。
2. 10YR2/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。褐灰色粘土を縞状に含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。褐灰色粘土を縞状に含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒を少量含む。褐灰色粘土を縞状に含む。
5. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒を少量含む。

第106号溝跡 土層説明

1. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 焼土粒・地山ブロックを含む。しまりあり。
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色土 地山粒・ブロックを含む。焼土粒多く含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性・しまりあり。第2層に比べ色調暗い。
4. 10YR4/4 褐色土 地山粒を多く含む。
5. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒を混入。しまり・粘性あり。

第107号溝跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒・炭化物粒・焼土粒を含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒を少量含む。

第108号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 微量の焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒を含む。しまり弱い。

第138号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒を少量含む。

第109号溝跡 土層説明

1. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒・ブロックを含む。しまり弱い。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒・粘土ブロックを含む。しまりあり。
3. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を混入。しまりあり。

第110号溝跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 茶褐色土主体。地山粒・暗灰色粘質土多く含む。しまり強い。
2. 10YR3/3 暗褐色土 基本は1層。地山粒を多く含む。色調明るい。
3. 10YR3/4 暗褐色土 基本は1層。地山粒を少量、焼土粒を含む。灰色粘質土を多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 2層基本。砂質地山ブロック(壁崩落土)多く含む。
5. 10YR4/6 褐色土 砂質地山。壁・底の溶軟化土。

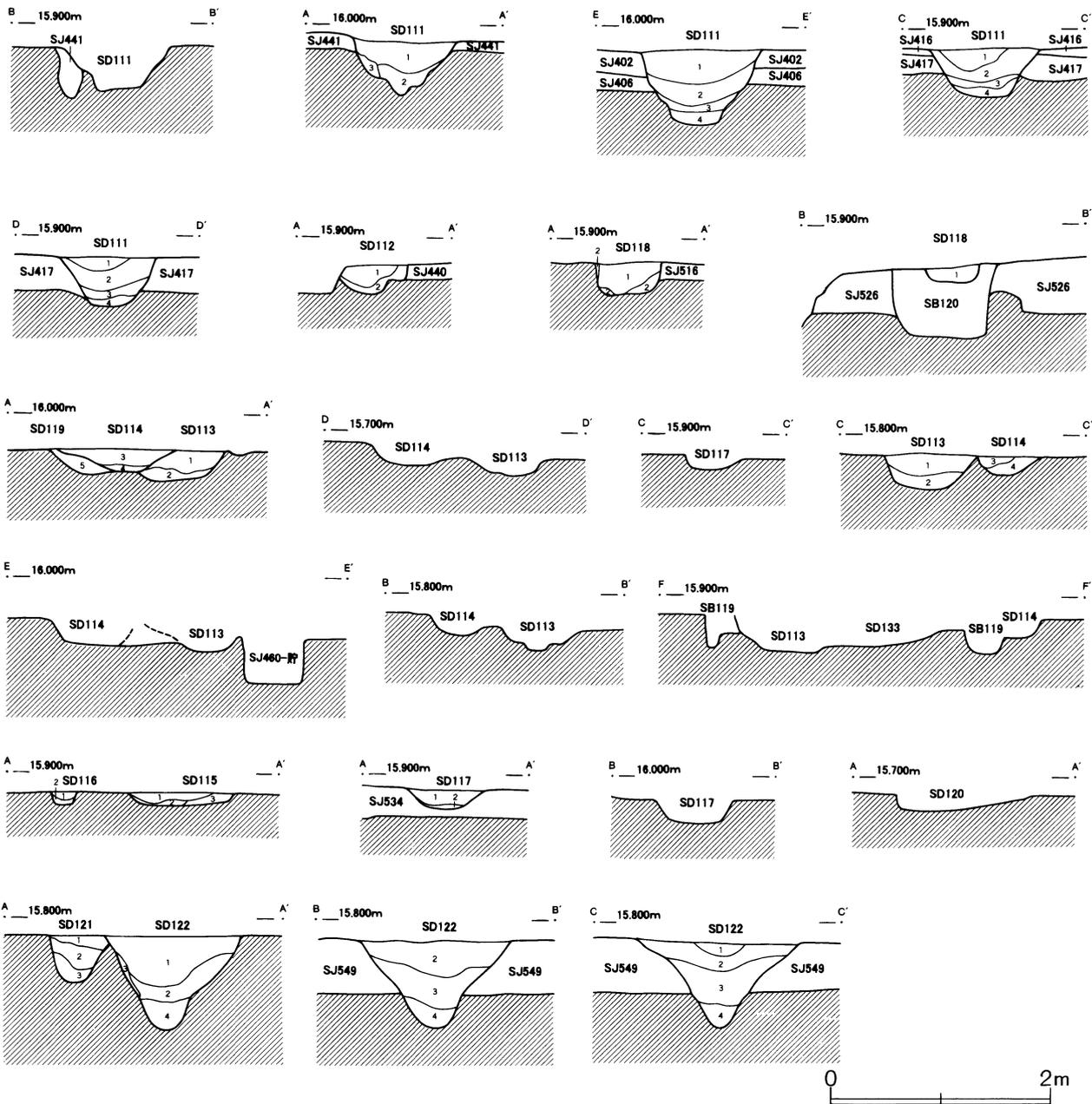
第137号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロックを多く含む。黒褐色土ブロックを少量含む。

第140号溝跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR4/1 褐色土 粘性強い。褐色土ブロックを少量含む。

第392図 溝跡断面図(2)



第111号溝跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒・焼土粒を少量含む。
2. 10YR2/1 黒褐色土 1層より地山粒少なく、焼土粒を多く含む。
3. 10YR2/1 黒褐色土 1層より地山粒多く、焼土粒を含む。
4. 10YR2/1 黒褐色土 1層より地山粒やや多く含む。

第112号溝跡 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 黒褐色土主体。地山粒含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 1層より地山粒を多く含む。

第113・114・119号溝跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒を少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒を多く含む。
3. 10YR6/2 灰黄褐色土 地山粒を少量含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色土 地山粒を少量含む。
5. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・ブロックを少量含む。

第115号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロックを少量含む。
3. 10YR5/3 におい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第116号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を多く含む。

第117号溝跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロックを含む自然堆積層。
2. 10YR2/2 黒褐色土 白灰色粘質ブロックを含む。

第118号溝跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 きめ粗く、ボソつく。混有物ほとんど含まず、単一的。
2. 10YR3/3 暗褐色土 粘質地山粒を多く含む。しまり・粘性強い。

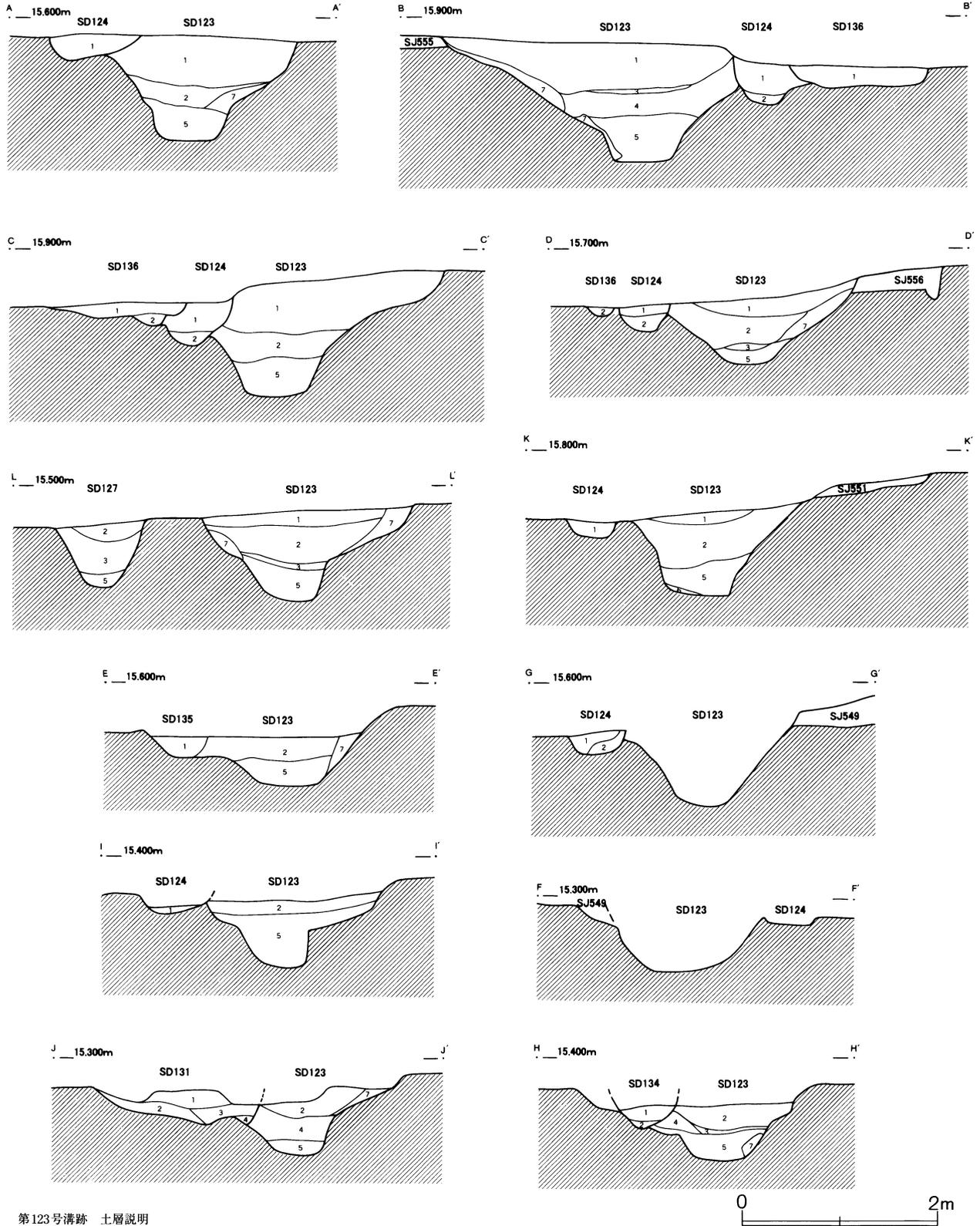
第121号溝跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒を微量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒・炭化物粒を少量含む。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロックを多く含む。

第122号溝跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック・炭化物粒・焼土粒を微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒・ブロックを少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・ブロックを多く含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。しまり悪い。

第393図 溝跡断面図(3)



第123号溝跡 土層説明
 1. 10YR3/4 暗褐色土
 2. 10YR4/1 褐灰色土 粘性弱い。砂質。
 3. 10YR6/1 褐灰色土 白色に近い粘土の薄い層。
 4. 10YR6/1 褐灰色土 粘土層。褐色土ブロック少量。
 5. 10YR5/1 褐灰色土 粘性強い。
 6. 10YR7/1 灰白色土 粘土層。
 7. 10YR3/3 暗褐色土 壁の崩落土。褐色土粒多い。

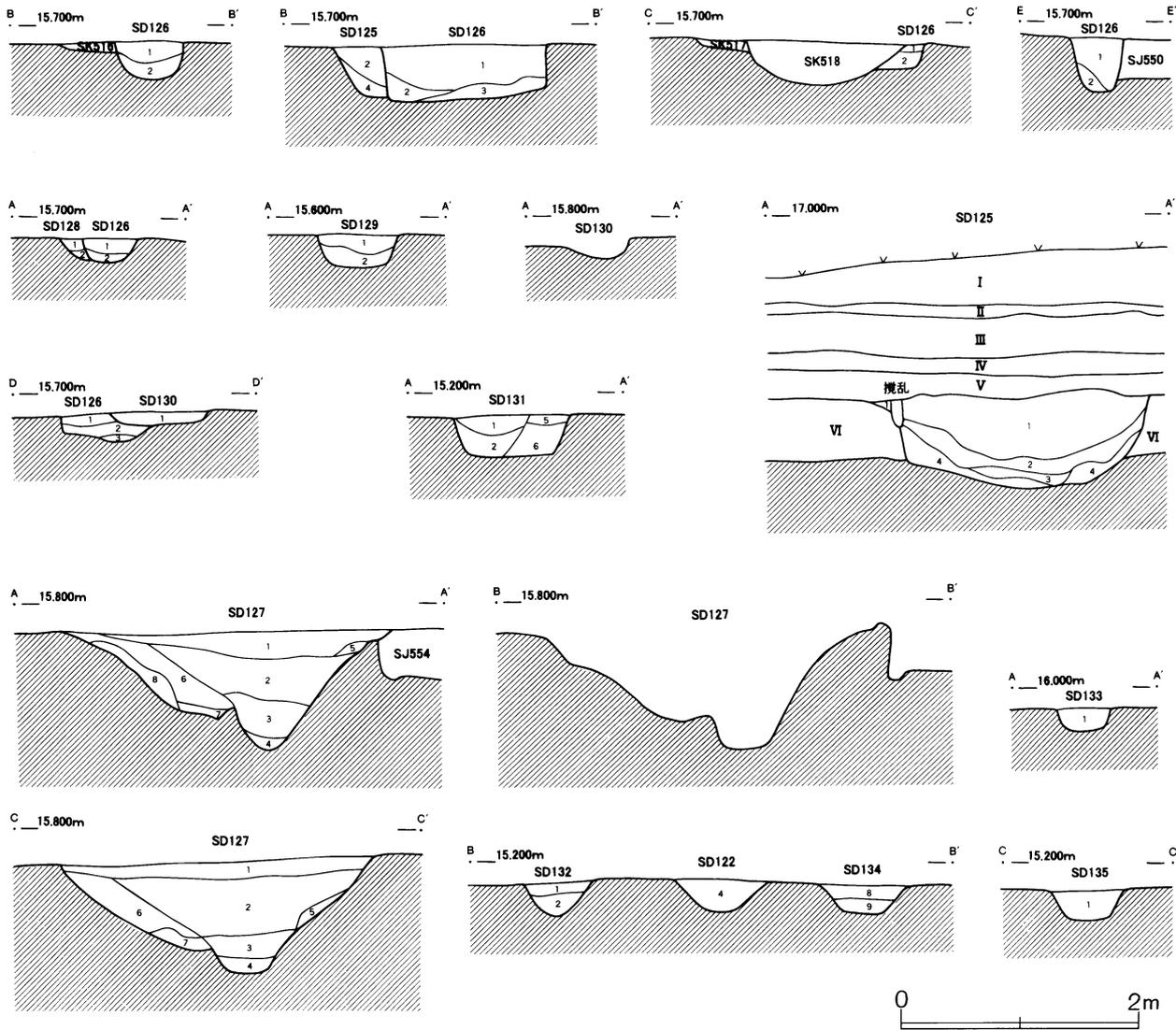
第124号溝跡 土層説明
 1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土粒少量含む。
 2. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土粘土少量含む。砂質。

第134号溝跡 土層説明
 1. 10YR2/1 黒色土 褐色土ブロック含む。
 2. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。

第135号溝跡 土層説明
 1. 10YR2/1 黒色土 褐色土ブロック含む。

第136号溝跡 土層説明
 1. 10YR6/1 褐灰色土 砂質粘土。
 2. 10YR3/3 暗褐色土 褐灰色粘土少量含む。

第394図 溝跡断面図(4)



第125号溝跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土の粒を少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土粒を含む。
3. 10YR4/1 褐灰色土 褐色土を少量、灰色粘土を含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土のブロックを多く含む。

第126号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒を少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック・粒を少量含む。

第127号溝跡 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒を少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐灰色の粘土ブロックを含む。
3. 10YR3/4 黒褐色土 褐灰色土・褐色土のブロックを多く含む。
4. 10YR4/1 褐灰色土 粘性あり。溝跡の底部にたまった土。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。
6. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 黄褐色土・暗褐色粒を含む。
7. 10YR3/3 暗褐色土 褐灰色の粘土ブロックを含む。
8. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 壁の崩落土。

第128号溝跡 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粒を少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山粒を多く含む。

第129号溝跡 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒を微量に含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを多く含む。

第130号溝跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・焼土粒等ほとんど含まない。

第131号溝跡 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土のブロックを少量含む。
2. 10YR4/1 褐灰色土 粘質土。
3. 10YR4/1 褐灰色土 粘質土。少量の砂を含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土のブロックを含む。
5. 10YR2/1 黒色土
6. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土のブロックを含む。

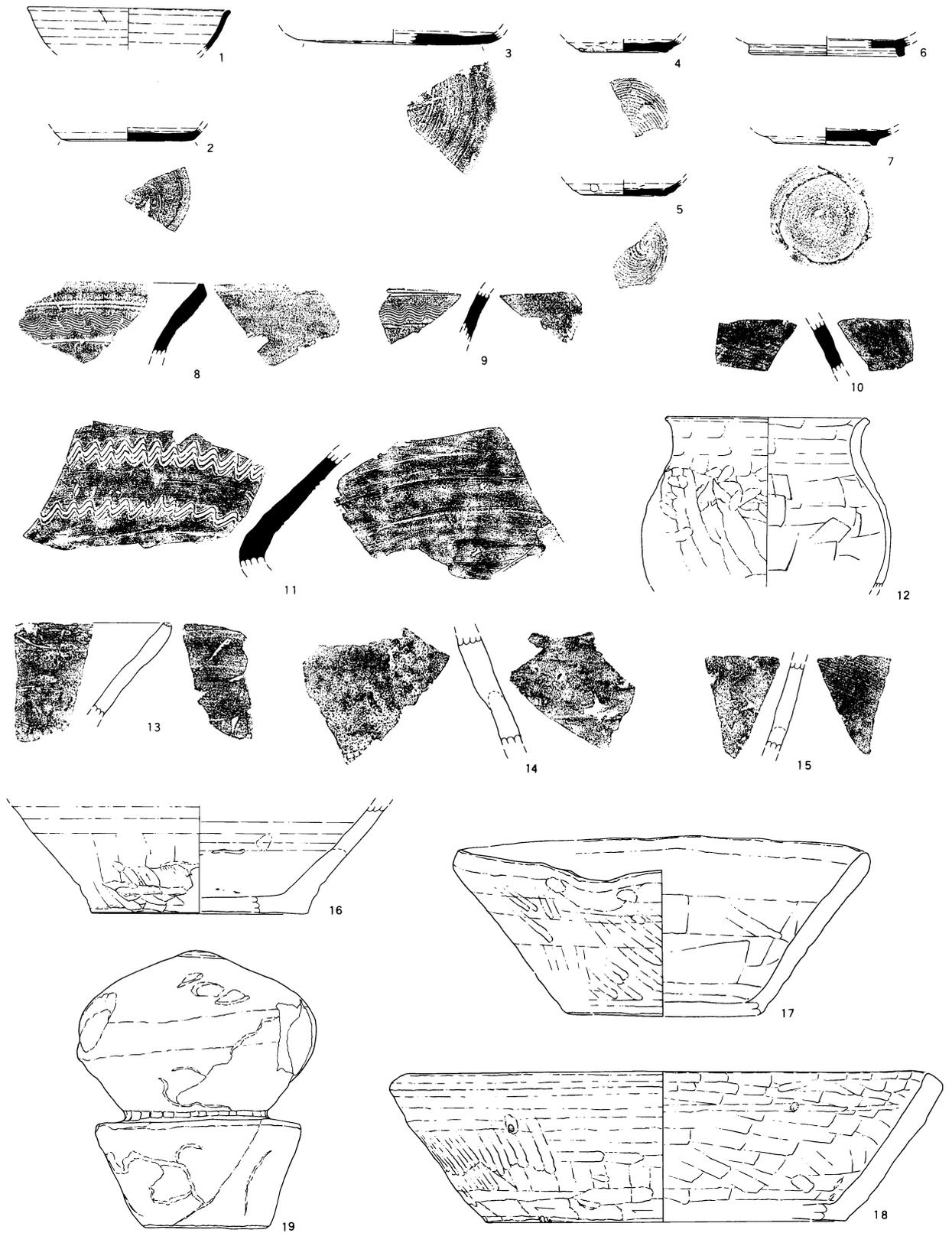
第132号溝跡 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 褐色土のブロックを含む。
2. 10YR2/1 黒色土

第133号溝跡 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土地山のブロック・灰色粘土を含む。

第395図 溝跡出土遺物(1)

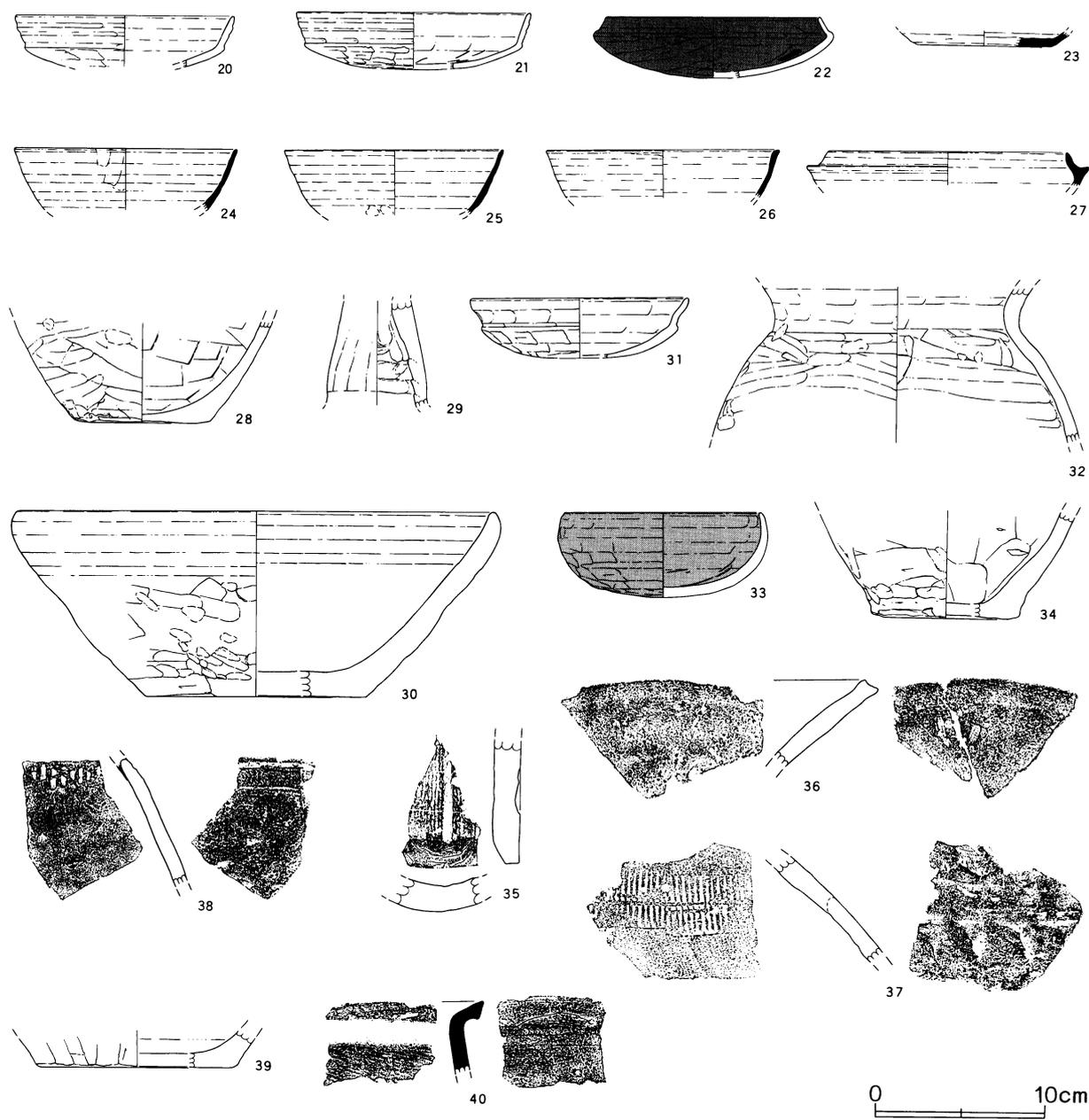


1 ~ 16 - SD77

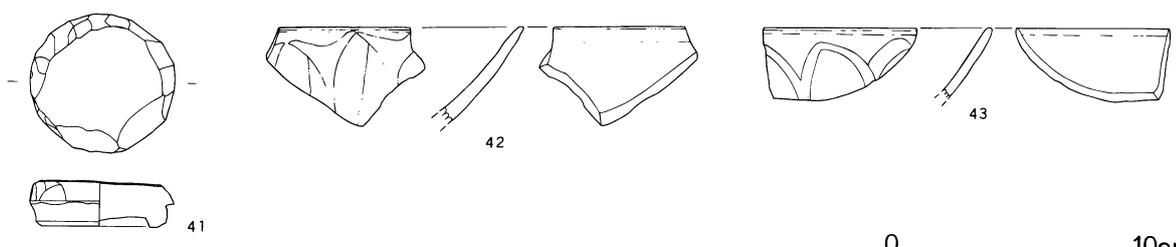
17 · 18 - SD106

19 - SD117

第396図 溝跡出土遺物(2)



0 10cm



0 10cm

- | | | |
|---------------|---------------|---------------|
| 20~28 - SD110 | 33~37 - SD123 | 41 - SD123 |
| 29・30 - SD111 | 38 - SD124 | 42・43 - SD124 |
| 31・32 - SD118 | 39・40 - SD127 | |

第 159 表 溝跡出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SD 77	須恵器坏	(14.0)	(2.9)		細 (W, F, 針)	良	灰 白	破片	南比企
2	SD 77	須恵器坏		(1.0)	(7.9)	細 (W, F, 針)	良	灰	破片	南比企
3	SD 77	須恵器坏		(1.1)	(12.0)	粗 (W, F)	良	灰 白	破片	
4	SD 77	須恵器坏		(1.0)	(6.0)	粗 (W, R, F)	良	灰 白	破片	
5	SD 77	須恵器坏		(1.2)	(6.0)	粗 (W, R, F, 針)	良	灰	破片	南比企
6	SD 77	須恵器高台付碗		(1.4)	(10.7)	粗 (W, R, F)	普	褐 灰	破片	
7	SD 77	須恵器高台付坏		(1.3)	(7.1)	粗 (W, R, 針)	良	灰	20	南比企
8	SD 77	須恵器甕				細 (W, F)	良	灰	破片	
9	SD 77	須恵器甕				細 (W, F)	良	灰	破片	
10	SD 77	須恵器甕				細 (W, F, 針)	良	灰	破片	南比企
11	SD 77	須恵器甕				礫 (W, R)	良	褐 灰	破片	
12	SD 77	甕	14.0	(11.8)		粗 (W, B, R)	良	橙	破片	黒色付着物
13	SD 77	在地系鉢				細 (W, F)	良	灰 白	破片	
14	SD 77	常滑甕				細 (W)	良	灰 褐	破片	
15	SD 77	常滑甕				粗 (W, R)	良	淡 黄	破片	
16	SD 77	常滑鉢		(7.5)	(15.0)	礫 (W, F)	良	橙	破片	
17	SD 106	在地系片口鉢	28.6	(12.5)	(12.8)	細 (W)	普	にぶい 橙	80	
18	SD 106	在地系鉢	(37.9)	(10.3)	(24.8)	微 (W, B)	普	橙	破片	穿孔あり
19	SD 117	五輪塔	16.4	19.3	8.3	凝灰岩		灰 白	90	
20	SD 110	坏	(12.9)	(3.1)		粗 (W, R)	普	にぶい 橙	破片	
21	SD 110	坏		(6.1)	(7.9)	細 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	20	
22	SD 110	坏	(12.7)	(3.6)		粗 (W, B, R)	普	にぶい黄橙	25	内外黒色処理
23	SD 110	須恵器坏		(1.0)	(7.8)	細 (W, F, 針)	良	灰 白	破片	南比企
24	SD 110	須恵器坏	(13.1)	(3.7)		細 (W, B, 針)	良	灰 白	破片	南比企
25	SD 110	須恵器坏	(12.9)	(3.9)		細 (W, F, 針)	良	灰 白	破片	南比企
26	SD 110	須恵器坏	(13.9)	(2.9)		細 (W, R, 針)	良	灰	破片	南比企
27	SD 110	須恵器坏	(14.1)	(2.0)		粗 (W, B)	普	灰	破片	
28	SD 110	甕		(6.1)	(7.9)	礫 (W, C, R)	普	にぶい黄橙	破片	
29	SD 111	土製支脚		(6.3)		粗 (W, B)	良	橙	25	
30	SD 111	在地系片口鉢	(28.6)	(11.1)	(13.1)	粗 (W, B)	普	にぶい 橙	破片	
31	SD 118	坏	(12.9)	3.6		粗 (W, R)	普	橙	40	
32	SD 118	甕		(9.4)		礫 (W, B, R)	普	にぶい 褐	破片	
33	SD 123	坏	(11.7)	5.1		細 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	70	赤彩
34	SD 123	常滑壺		(6.5)	(8.9)	細 (W)	良	にぶい黄橙	破片	赤色付着物
35	SD 123	平瓦				微 (W, B)		黒	破片	
36	SD 123	常滑片口鉢				礫 (W)	良	にぶい 橙	破片	
37	SD 123	常滑甕				粗 (W)	良	灰 黄	破片	自然釉付着
38	SD 124	常滑甕				細 (R)	良	褐	破片	自然釉付着
39	SD 127	瓦質壺		(2.3)	(11.9)	粗 (W, B, R)	普	灰	破片	黒色付着物
40	SD 127	須恵器鉢				粗 (W, 針)	普	灰	破片	南比企
41	SD 123	青磁碗		(1.8)	5.1	微	良	灰オリーブ	破片	
42	SD 124	青磁碗				微	良	オリーブ灰	破片	
43	SD 124	青磁碗				微	良	オリーブ黄	破片	

7. 土器焼成窯跡

第1号土器焼成窯跡（第397図）

U-14グリッドに位置する。『築道下遺跡Ⅱ』で報告すべき位置に検出された遺構ではあるが、遺物が出土したままの状態での切り取り保存したため、本書での報告となった。内容については、既に『中世土器研究82号』（中世土器研究会1996）で紹介しているので、ここではそこに記したものを補足訂正し、関係部分のみを再録することとした。本書と異なる記載については、これを改めていただきたい。

なお、遺構ごとの保存を決定したため、以下に示す計測値や形状には、推定ないし不明な部分がある。遺物も取り出しを行なっていないため、総数については明らかでない。

焼成窯は、中世の墓跡を区画する第60号溝跡の南側肩部に検出された。溝跡に直交するように掘りこまれ、平面は略楕円形を呈する。全長は1.34m、幅は0.40～0.55mである。南側にはくびれ部が認められ、端部は直径32cmの円形となる。このことから本焼成窯は、円形部分を焼成室とする「煙管状窯」、または「キセル窯」と称されるものに含まれよう。

断面は縦横ともに船底状となり、確認面から最深部までは約28cmである。溝跡に開口する焚き口部は緩やかに掘りこまれ、ほぼ平坦な底面となる。但し、焼成室の部分は、未掘であるため明らかでない。壁の立ち上がりは、焼成室側面から中央部までが内傾するのに対し、焚き口部と焼成室奥壁はほぼ垂直である。壁はこの内傾部分まで、非常に良く焼けている。特に上半は、レンガ状に固く焼き締まっている。

天井については、その遺存を確認できなかった。上部には氾濫土が厚く堆積しており、後世の削平などは見られない。窯の南半部には、レンガ状の焼土が土師質土器とともに堆積していた。また北側の溝跡にも、投棄されたと考えられる同様の堆積（灰原？）が存在した。あるいは、天井は製品を取り出す際に破壊、除去

しているのかもしれない。

なお、投棄された土器や焼土は、溝跡の覆土上層から見出されている。「煙管状窯」は溝などの傾斜部を利用するものが多いが、本焼成窯も埋没の進んだ溝とはいえ、その一例に加えることができよう。

遺物はすべて土師質土器である。窯体の焼土ブロック中、および溝跡から140点が出土している。未掘である焼成室の分を加えれば、200点に迫るのではなからうか。ただ完形のものほとんどなく、破片として見出されているので、個体数としての把握はできていない。

これらは形態上、二つの種類に分けられる。一つは口径12cm、器高3.5cm程の坏型土器（第398図41～51、第399図52～89）。いま一つは口径8cm、器高1.5cm程の小皿型土器（第398図1～40、第400図1～51）である。いずれも底面に回転糸切り痕を残し、後者の端部は突出気味となる。焼成は概して良好だが、灰色、ないし黒色で軟質なものが含まれている。数量的には小皿型（91点）が、坏型（49点）の倍近くとなる。

出土した土器から見て、焼成窯の操業時期は14世紀中頃と考えられる。

最後に、焼成窯と墓跡の関係について触れておきたい。墓跡は『築道下遺跡Ⅱ』において報告した通りであるが、土師質土器の投棄された溝跡を南辺とし、これにL字形（コ字形かもしれない）の溝が取りつくものである。

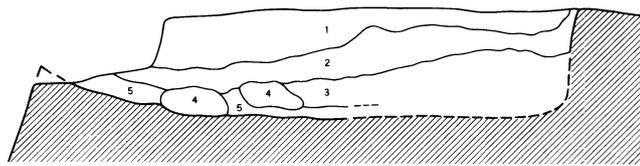
区画内の埋葬施設からは、板石塔婆22基、その台石1基、五輪塔3基以上、蔵骨器6個、埋納焼骨23基が検出されている。これら遺物の時期は、13世紀の後半から14世紀いっぱい主体である。

焼成窯は墓の廃絶前（溝の埋没しきる以前）に構築されたものであろうが、墓跡からは製品である土師質土器はまったく出土していない。

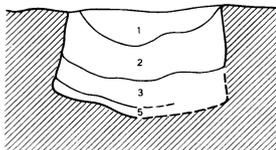
第397図 第1号土器焼成窯跡



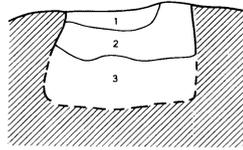
A 16.000m



B 16.000m

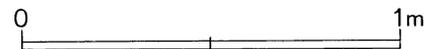


C 16.000m

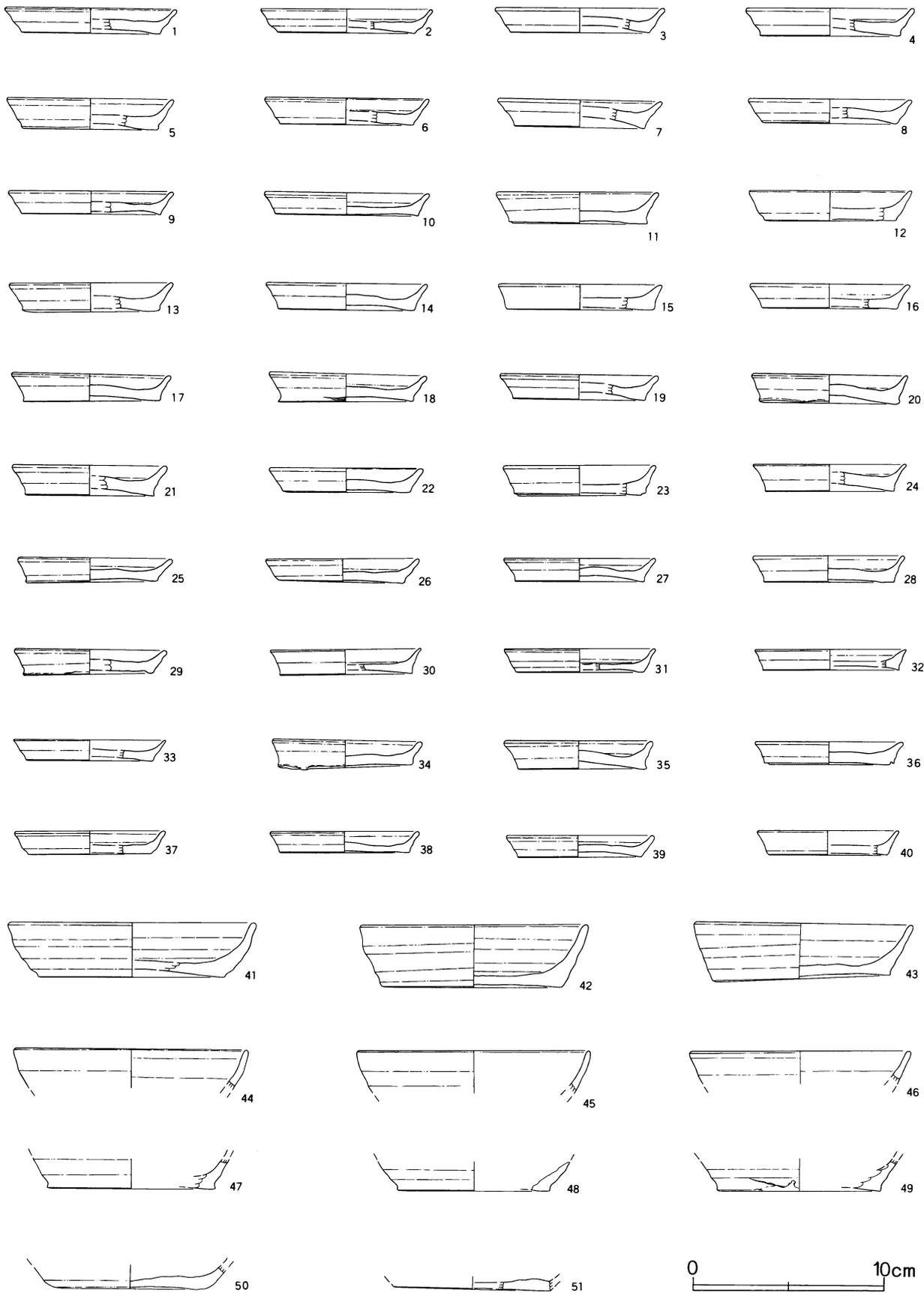


第1号土器焼成窯跡 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック多く含む。天井崩落土か。
3. 10YR2/3 黒褐色土 焼土ブロック主体。天井崩落土か。
4. 10YR4/6 褐色土 地山ブロック含む。天井崩落土か。
5. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物多く含む。灰層。



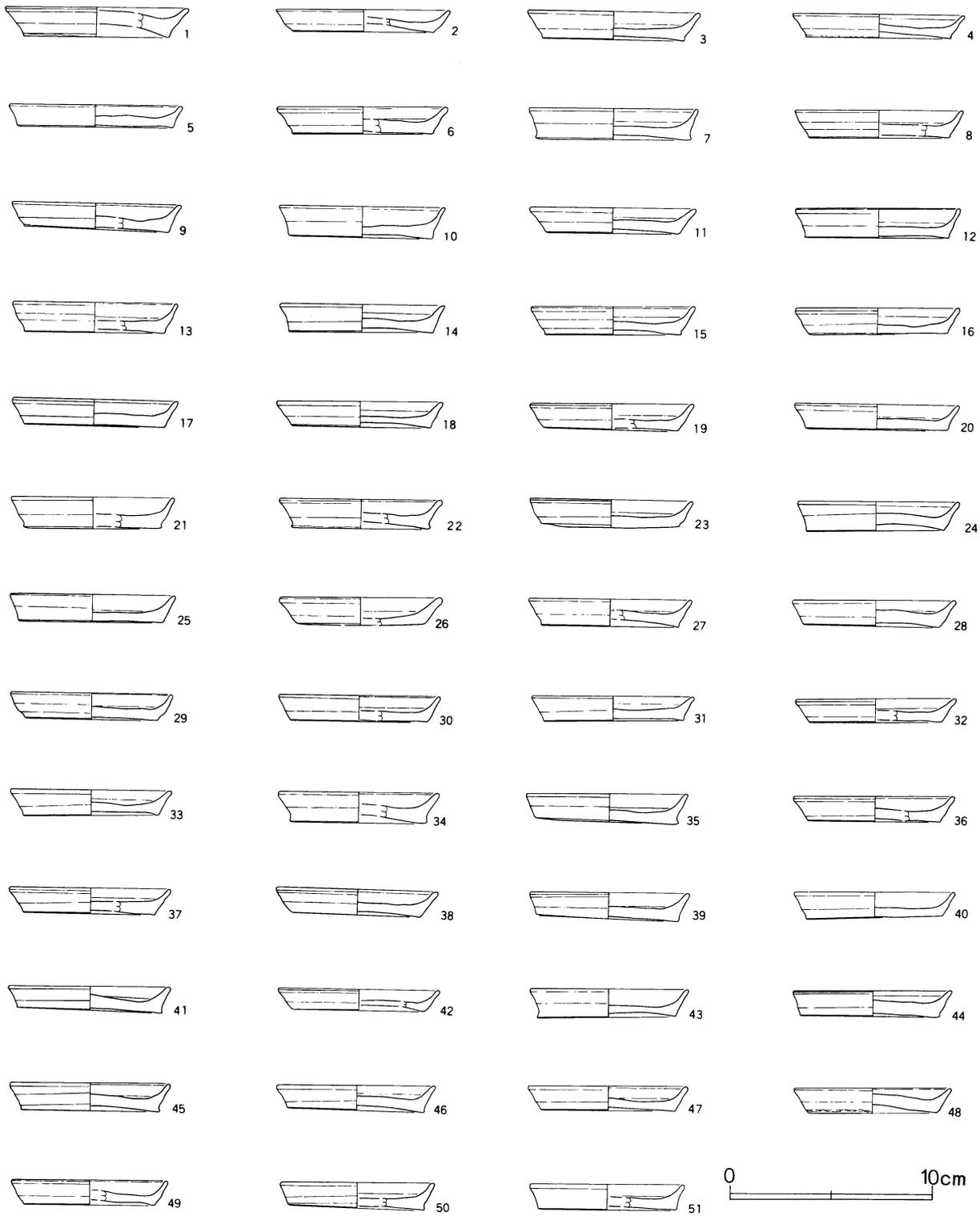
第398図 第1号土器焼成窯跡出土遺物



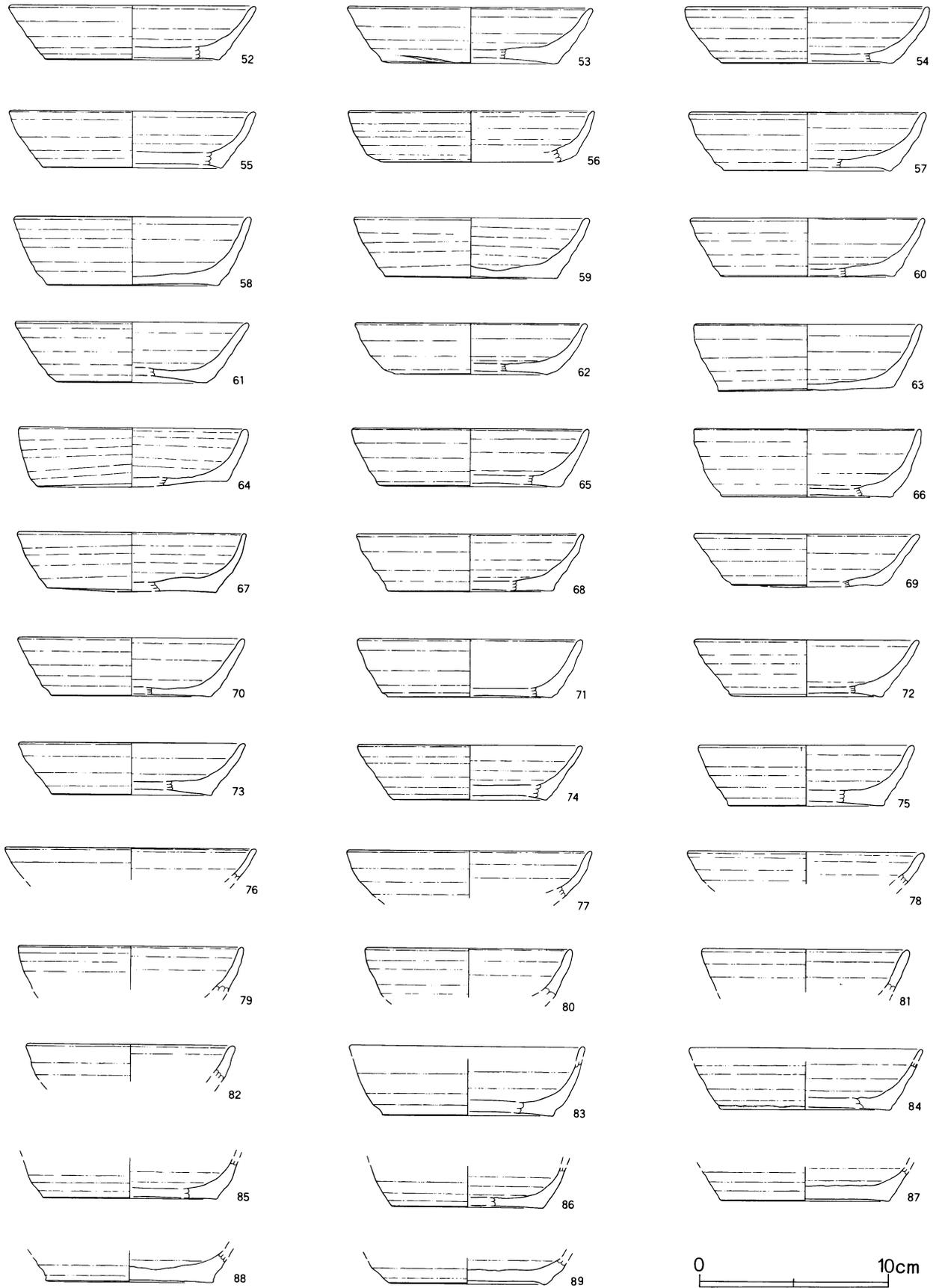
第160表 第1号土器烧成窯跡出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	烧成	色調	残存率	備考
1	かわらけ	(9.0)	1.3	(7.2)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
2	かわらけ	(8.9)	1.3	(7.1)	細 (R, F)		浅黄橙	30	
3	かわらけ	(8.9)	1.3	(7.3)	細 (R)		浅黄橙	20	
4	かわらけ	(8.8)	1.5	(7.9)	細 (R)		浅黄橙	20	
5	かわらけ	(8.7)	1.6	(6.9)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
6	かわらけ	(8.6)	1.4	(7.0)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
7	かわらけ	(8.6)	1.4	(6.8)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
8	かわらけ	(8.6)	1.3	(6.9)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
9	かわらけ	(8.6)	1.2	(7.2)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
10	かわらけ	(8.6)	1.2	(7.4)	細 (R, F)		浅黄橙	20	
11	かわらけ	8.5	1.7	7.2	細 (R, F)		浅黄橙	70	
12	かわらけ	(8.5)	1.6	(6.9)	細 (R)		浅黄橙	破片	
13	かわらけ	(8.5)	1.5	(7.1)	細 (R, F)		浅黄橙	20	
14	かわらけ	(8.5)	1.4	(7.1)	細 (R)		浅黄橙	30	
15	かわらけ	(8.5)	1.3	(7.6)	細 (R)		浅黄橙	破片	
16	かわらけ	(8.4)	1.3	(7.1)	細 (R)		浅黄橙	20	
17	かわらけ	8.3	1.5	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	70	
18	かわらけ	8.3	1.5	7.1	細 (R)		浅黄橙	95	
19	かわらけ	(8.3)	1.3	(6.9)	細 (R, F)		浅黄橙	20	
20	かわらけ	(8.2)	1.5	(7.4)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
21	かわらけ	(8.1)	1.6	(6.7)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
22	かわらけ	(8.1)	1.3	(6.6)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
23	かわらけ	(8.0)	1.6	(6.7)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
24	かわらけ	(8.0)	1.4	(6.8)	細 (R, F)		浅黄橙	30	
25	かわらけ	(8.0)	1.3	6.8	細 (R)		浅黄橙	40	
26	かわらけ	8.0	1.2	6.6	細 (R)		浅黄橙	50	
27	かわらけ	(8.0)	1.2	(6.8)	細 (R, F)		浅黄橙	30	
28	かわらけ	7.9	1.4	6.8	細 (R, F)		浅黄橙	70	
29	かわらけ	(7.9)	1.3	6.7	細 (R, F)		浅黄橙	50	
30	かわらけ	(7.9)	1.3	(6.9)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
31	かわらけ	(7.9)	1.2	(6.7)	細 (R, F)		淡黄	25	
32	かわらけ	(7.9)	1.1	(7.2)	細 (R)		灰黄	破片	
33	かわらけ	(7.9)	1.1	(6.6)	細 (R)		浅黄橙	破片	
34	かわらけ	7.8	1.5	7.0	細 (R, F)		浅黄橙	50	
35	かわらけ	7.8	1.5	6.7	細 (R)		浅黄橙	50	
36	かわらけ	(7.8)	1.2	(6.8)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
37	かわらけ	(7.8)	1.2	(6.4)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
38	かわらけ	(7.8)	1.1	(6.8)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
39	かわらけ	7.7	1.2	6.4	細 (R)		浅黄橙	60	
40	かわらけ	(7.4)	1.3	(6.2)	細 (R)		浅黄橙	破片	
41	かわらけ	(12.9)	2.9	(9.7)	細 (R, F)		浅黄橙	20	
42	かわらけ	11.9	3.3	9.4	細 (R, F)		浅黄橙	90	底部外面に刻書「木」か?
43	かわらけ	11.5	3.0	9.3	細 (R, F)		浅黄橙	70	
44	かわらけ	(12.2)	(2.1)		細 (R, F)		浅黄橙	破片	
45	かわらけ	(12.2)	(2.3)		細 (R)		浅黄橙	破片	
46	かわらけ	(11.6)	(1.7)		細 (R, F)		浅黄橙	破片	
47	かわらけ		(1.6)	(8.7)	細 (R)		浅黄橙	破片	
48	かわらけ		(1.6)	(7.9)	細 (R)		浅黄橙	破片	
49	かわらけ		(1.8)	(8.5)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
50	かわらけ		(1.3)	(7.0)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
51	かわらけ		(0.7)	(8.1)	細 (R, F)		黄灰	破片	

第399図 第60号溝跡（第1号土器烧成窯跡関連）出土遺物（1）



第400図 第60号溝跡（第1号土器焼成窯跡関連）出土遺物（2）



第161表 第60号溝跡出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	かわらけ	(9.0)	1.4	(7.2)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
2	かわらけ	(8.6)	1.1	(6.9)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
3	かわらけ	(8.5)	1.4	(7.0)	細 (R)		浅黄橙	25	
4	かわらけ	(8.5)	1.2	(7.2)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
5	かわらけ	(8.5)	1.1	(7.6)	細 (R)		浅黄橙	20	
6	かわらけ	(8.4)	1.3	(6.9)	細 (R)		浅黄橙	30	
7	かわらけ	(8.3)	1.5	(7.7)	細 (R)		浅黄橙	40	
8	かわらけ	(8.3)	1.4	(7.0)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
9	かわらけ	8.3	1.3	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	70	
10	かわらけ	8.2	1.5	7.1	細 (R)		浅黄橙	40	
11	かわらけ	(8.2)	1.3	(6.6)	細 (R)		浅黄橙	20	
12	かわらけ	8.1	1.5	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	100	
13	かわらけ	(8.1)	1.5	(6.9)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
14	かわらけ	8.1	1.4	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	100	
15	かわらけ	(8.1)	1.4	(6.7)	細 (R)		黄 灰	30	
16	かわらけ	8.1	1.3	6.9	細 (R, F)		浅黄橙	100	
17	かわらけ	8.1	1.3	6.9	細 (R, F)		浅黄橙	80	
18	かわらけ	8.1	1.3	6.8	細 (R, F)		浅黄橙	80	
19	かわらけ	8.1	1.3	6.7	細 (R, F)		浅黄橙	60	
20	かわらけ	(8.1)	1.3	(7.0)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
21	かわらけ	(8.0)	1.6	(6.8)	細 (R)		浅黄橙	20	
22	かわらけ	(8.0)	1.5	(6.8)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
23	かわらけ	8.0	1.4	6.8	細 (R, F)		浅黄橙	90	
24	かわらけ	9.0	1.4	6.8	細 (R, F)		浅黄橙	80	
25	かわらけ	8.0	1.4	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	80	
26	かわらけ	(8.0)	(1.4)	(6.2)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
27	かわらけ	(8.0)	1.4	(6.7)	細 (R, F)		浅黄橙	20	
28	かわらけ	8.0	1.3	6.7	細 (R, F)		浅黄橙	50	
29	かわらけ	(8.0)	1.3	(6.6)	細 (R, F)		浅黄橙	50	
30	かわらけ	(8.0)	1.3	(6.7)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
31	かわらけ	8.0	1.2	6.9	細 (R, F)		浅黄橙	70	
32	かわらけ	(8.0)	1.2	(6.5)	細 (R, F)		浅黄橙	30	
33	かわらけ	7.9	1.8	6.7	細 (R, F)		浅黄橙	50	
34	かわらけ	(7.9)	1.5	(6.7)	細 (R, F)		浅黄橙	25	
35	かわらけ	7.9	1.4	7.0	細 (R, F)		浅黄橙	70	
36	かわらけ	7.9	1.3	6.5	細 (R, F)		浅黄橙	50	
37	かわらけ	7.9	1.3	6.4	細 (R, F)		浅黄橙	60	
38	かわらけ	7.9	1.3	6.3	細 (R, F)		浅黄橙	50	
39	かわらけ	7.9	1.3	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	50	
40	かわらけ	(7.9)	1.3	6.8	細 (R, F)		黄 灰	70	
41	かわらけ	7.9	1.2	7.1	細 (R, F)		浅黄橙	70	
42	かわらけ	(7.9)	1.1	(6.5)	細 (R, F)		浅黄橙	50	
43	かわらけ	7.8	1.4	6.8	細 (R, F)		浅黄橙	50	
44	かわらけ	7.8	1.3	6.9	細 (R, F)		浅黄橙	100	
45	かわらけ	7.8	1.3	6.8	細 (R, F)		浅黄橙	75	
46	かわらけ	7.8	1.2	6.7	細 (R, F)		浅黄橙	70	
47	かわらけ	(7.8)	1.2	(6.6)	細 (R, F)		浅黄橙	40	
48	かわらけ	(7.8)	1.2	(6.3)	細 (R, F)		浅黄橙	30	
49	かわらけ	(7.7)	1.2	(6.5)	細 (R)		浅黄橙	20	
50	かわらけ	7.6	1.3	6.6	細 (R, F)		浅黄橙	40	
51	かわらけ	(7.6)	1.3	(6.8)	細 (R, F)		黄 灰	20	
52	かわらけ	(13.0)	2.9	(9.2)	細 (R, F)		浅黄橙	破片	
53	かわらけ	(12.9)	3.0	(9.3)	細 (R, F)		浅黄橙	20	

第 162 表 第 60 号溝跡出土遺物観察表 (2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
54	かわらけ	(12.9)	3.0	(9.2)	細 (R, F)		灰 黄	破片	
55	かわらけ	(12.9)	3.0	(9.4)	細 (R)		黄 灰	破片	
56	かわらけ	(12.9)	2.7	(9.5)	細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
57	かわらけ	(12.6)	3.0	(8.9)	細 (R, F)		浅 黄 橙	25	
58	かわらけ	(12.5)	3.6	(9.0)	細 (R, F)		浅 黄 黄	20	
59	かわらけ	12.4	3.2	9.1	細 (R, F)		浅 黄 橙	95	
60	かわらけ	(12.4)	3.3	(9.3)	細 (R, F)		黄 灰	25	
61	かわらけ	(12.3)	3.3	(7.9)	細 (R, F)		黄 灰	40	
62	かわらけ	(12.2)	2.7	(8.0)	細 (R, F)		にぶい黄 橙	破片	
63	かわらけ	(12.1)	3.5	9.3	細 (R, F)		にぶい黄 橙	50	
64	かわらけ	12.1	3.2	10.0	細 (R, F)		浅 黄 橙	50	
65	かわらけ	(12.1)	3.1	(9.6)	細 (R, F)		黄 灰	破片	
66	かわらけ	(12.0)	3.6	(8.9)	細 (R)		黄 灰	破片	
67	かわらけ	12.0	3.2	8.9	細 (R, F)		浅 黄 橙	70	
68	かわらけ	(12.0)	3.1	(8.7)	細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
69	かわらけ	(12.0)	2.8	(8.0)	細 (R, F)		黄 灰	20	
70	かわらけ	(11.9)	3.1	(8.5)	細 (R, F)		浅 黄 橙	20	
71	かわらけ	(11.9)	3.1	(8.7)	細 (R)		黄 灰	破片	
72	かわらけ	(11.9)	3.0	(8.2)	細 (R)		黄 灰	破片	
73	かわらけ	(11.9)	2.8	(8.3)	細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
74	かわらけ	(11.8)	2.9	(8.1)	細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
75	かわらけ	(11.5)	3.2	(8.3)	細 (R, F)		浅 黄 橙	20	
76	かわらけ	(13.2)	(1.2)		細 (R)		黄 灰	破片	
77	かわらけ	(12.9)	(2.5)		細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
78	かわらけ	(12.5)	(1.8)		細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
79	かわらけ	(11.8)	(2.3)		細 (R, F)		灰 黄 橙	破片	
80	かわらけ	(11.0)	(2.7)		細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
81	かわらけ	(11.0)	(2.3)		細 (R)		黄 灰	破片	
82	かわらけ	(11.0)	(2.0)		細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
83	かわらけ		(3.0)	(9.0)	細 (R)		にぶい黄 橙	破片	
84	かわらけ		(2.6)	(8.9)	細 (R, F)		灰 黄 褐	破片	
85	かわらけ		(2.2)	(9.1)	細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	
86	かわらけ		(2.2)	(8.0)	細 (R)		黄 灰	20	
87	かわらけ		(1.8)	(8.8)	細 (R, F)		黄 灰	20	
88	かわらけ		(1.7)	(8.8)	細 (R, F)		黄 灰	25	
89	かわらけ		(1.4)	(8.0)	細 (R, F)		浅 黄 橙	破片	

8. ピット

今回、報告の対象となるピットは、第907～1168号までである。なお、調査時に番号を付したものの、その後、土壌や井戸跡に変更したものがあため、総数では235基となる。

ピットは『築道下遺跡Ⅱ』でも述べたように、床やカマドを失った住居跡、あるいは掘立柱建物跡などの柱穴であった可能性がある。これらのピットは、報告分のほかにも、住居跡や掘立柱建物跡が存在したことを

示すものとして評価できよう。

また、ここには含めなかったが、単一の覆土で浅い小穴も多数見られた。ここでは、主に柱痕の観察されたものや、遺物を出土したものを掲載した。

なお、第401～408図に示したのものも含め、1基ずつの記述は避け、一覧表(第163～165表)にまとめることとした。

第163表 ピット一覧表(1)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考	番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
907	AG-22	長方形	0.68	0.48	0.24		946	AH-24	円形	0.25	0.23	0.15	
908	欠番						947	AH-24	円形	0.37	-	0.33	
909	AG-22	長方形	0.57	0.40	0.18		948	欠番					
910	AF-20	円形	0.64	0.62	0.16		949	AG-23	楕円形	0.91	0.51	0.21	
911	AG-20	円形	0.75	0.74	0.14		950	AK-24	方形	0.51	0.49	0.23	
912	AF-22	不整形	0.75	0.70	0.38		951	AK-24	方形	0.63	0.58	0.46	
913	AG-22	楕円形	0.38	0.30	0.35		952	AK-23	長方形	1.03	0.66	0.69	
914	AG-22	楕円形	0.39	0.32	0.37		953	欠番					
915	AG-22	円形	0.54	0.46	0.55		954	AH-19	楕円形	0.62	0.51	0.43	
916	AG-22	円形	0.42	0.34	0.46		955	欠番					
917	AG-22	楕円形	0.58	0.37	0.13		956	欠番					
918	AF-22	隅丸方形	0.32	0.28	0.32		957	AK-23	円形	0.48	0.46	0.23	
919	AH-23	円形	0.42	0.40	0.36		958	AK-23	楕円形	0.93	0.69	0.86	
920	欠番						959	AK-24	円形	0.50	0.48	0.28	
921	欠番						960	AL-26	円形	0.58	0.48	0.14	
922	AF-22	円形	0.32	0.32	0.29		961	欠番					
923	AG-23	円形	0.43	-	-		962	AL-26	円形	0.18	0.18	0.18	
924	AG-21	円形	0.51	0.56	0.33		963	AL-26	楕円形	0.20	0.15	0.18	
925	AH-24	楕円形	0.38	0.33	0.14		964	AL-26	円形	0.35	0.33	0.34	
926	AF-23	楕円形	0.32	0.20	-		965	AL-26	不整形	0.40	0.20	0.17	
927	AF-22	円形	0.29	0.29	0.23		966	AL-26	円形	0.23	0.20	0.31	
928	欠番						967	AL-25	楕円形	0.29	0.22	0.25	
929	AH-19	楕円形	0.84	0.76	0.38		968	AL-25	方形	0.24	0.20	0.16	
930	AH-19	楕円形	0.55	0.46	0.42		969	AM-25	不整形	0.35	0.20	0.28	
931	AG-20	円形	0.68	0.63	0.64		970	AM-25	円形	0.20	-	0.30	
932	AG-20	不明	0.32	-	0.12		971	AM-25	楕円形	0.20	0.12	0.17	
933	AG-19	楕円形	0.56	0.42	0.32		972	AM-25	円形	0.30	0.28	0.30	
934	欠番						973	AM-25	楕円形	0.41	0.30	0.40	
935	AG-19	楕円形	0.45	0.33	0.07		974	AM-25	不整形	0.22	0.20	0.45	
936	AH-22	円形	0.34	0.32	0.33	SJ 404 より古	975	AM-26	円形	0.18	0.17	0.21	
937	AI-24	不明	-	0.36	0.18	SE 164 より古	976	AM-26	不整形	0.34	0.15	0.34	
938	AH-21	円形	0.42	-	0.25		977	AM-25	楕円形	0.21	0.16	0.20	
939	欠番						978	AM-26	円形	0.21	0.18	0.15	
940	AJ-24	楕円形	0.58	0.48	0.27	SK 442 より新	979	AM-26	円形	0.25	0.24	0.19	
941	欠番						980	AM-26	楕円形	0.32	0.18	0.14	
942	欠番						981	AL-25	円形	0.38	0.35	0.30	
943	欠番						982	AL-25	円形	0.24	0.20	0.17	
944	AH-21	円形	0.33	-	-		983	AL-25	円形	0.21	0.19	0.24	
945	AH-24	楕円形	0.33	0.25	0.33		984	AL-25	楕円形	0.51	0.41	0.30	

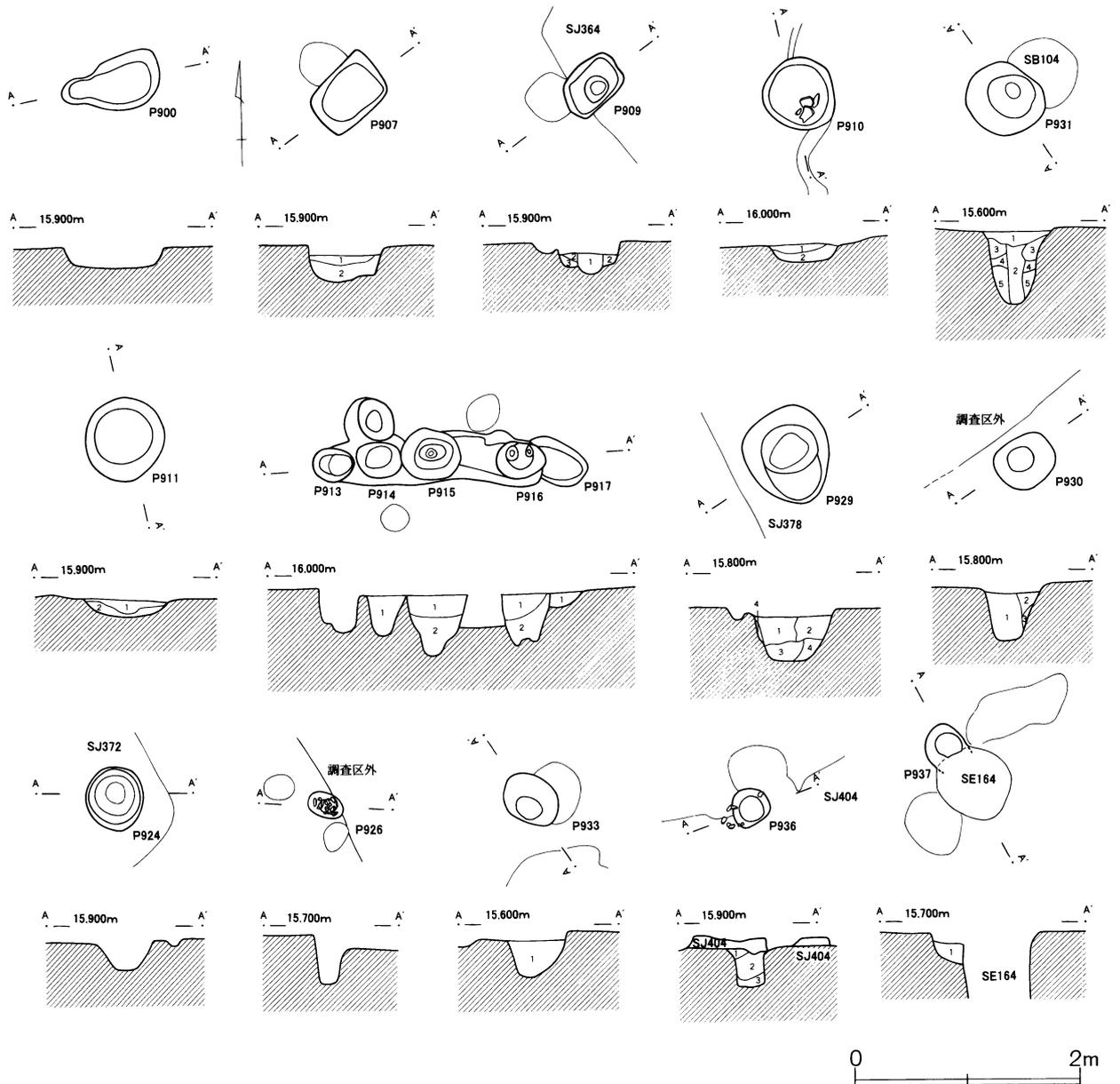
第164表 ピット一覧表(2)

番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考	番号	位置	形態	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
985	欠番						1040	A0-26	楕円形	0.40	0.30	0.29	
986	AM-23	不整円形	0.33	0.30	0.07		1041	A0-26	円形	0.33	0.30	0.16	
987	欠番						1042	A0-27	円形	0.26	-	0.41	
988	AL-24	円形	0.30	0.28	0.16		1043	A0-26	円形	0.39	0.37	0.26	
989	AL-24	不整形	0.20	0.13	0.31		1044	AM-26	不明	0.32	-	0.44	
990	AM-24	不整形	0.34	0.25	0.28		1045	AM-26	不明	0.27	-	0.13	
991	AM-24	円形	0.31	0.29	0.38		1046	AM-26	楕円形	0.40	0.27	0.27	
992	AM-24	円形	0.27	0.25	0.23		1047	AM-27	不整形	0.64	0.48	0.37	
993	AM-23	不整円形	0.35	0.30	0.05		1048	AM-27	円形	0.34	0.30	0.51	
994	AM-23	円形	0.24	-	0.22		1049	AN-27	円形	0.29	0.27	0.14	
995	AN-23	円形	0.26	0.23	0.14		1050	AN-26	円形	0.45	-	0.30	
996	AM-23	不明	0.39	-	0.05		1051	欠番					
997	AM-23	円形	0.33	0.31	0.08		1052	AN-26	不整形	(0.70)	0.35	0.20	
998	AN-23	円形	0.23	0.21	0.33		1053	AN-26	方形	0.23	0.19	0.06	
999	AN-24	円形	0.28	0.26	0.15		1054	AP-27	円形	0.45	0.40	0.28	
1000	AN-24	円形	0.25	0.23	0.21		1055	AL-22	長方形	0.91	0.54	0.49	
1001	AN-24	不整形	0.45	0.25	0.17		1056	AL-22	円形	0.36	0.34	0.12	
1002	AN-24	円形	0.32	0.30	0.32		1057	AL-22	円形	0.47	0.42	0.21	
1003	AM-24	不整形	0.32	0.20	0.26		1058	AL-22	円形	0.34	0.33	0.23	SJ 516 より古
1004	AM-24	楕円形	0.49	0.32	0.23		1059	AS-29	不整円形	0.50	0.42	0.48	
1005	AM-25	円形	0.21	0.18	0.20		1060	AS-29	不整形	0.67	0.29	0.33	
1006	AM-25	不整長方形	0.50	0.23	0.13		1061	AS-29	不整円形	0.22	0.21	0.13	
1007	AM-25	方形	0.42	0.40	0.26		1062	AS-29	楕円形	0.81	0.63	0.21	SK 489 より古
1008	AM-25	隅丸方形	0.36	0.33	0.20		1063	欠番					
1011	欠番						1064	欠番					
1012	AL-24	不整方形	0.40	0.38	0.27		1065	AS-29	隅丸方形	0.45	-	0.53	
1013	AL-25	不整形	0.52	0.28	0.23		1066	AU-30	円形	0.41	0.40	0.07	埋め戻し
1014	AM-24	不整楕円形	0.41	0.35	0.18		1067	AT-29	楕円形	0.46	0.31	0.37	自然堆積
1015	AL-26	楕円形	0.71	0.54	0.53		1068	欠番					
1016	欠番						1069	AR-29	円形	0.49	0.48	0.48	SJ 545 より古
1017	AL-25	円形	0.62	0.61	0.55		1070	AR-29	円形	0.52	0.36	0.41	
1018	AN-25	方形	0.44	0.38	0.15		1071	AS-29	楕円形	0.52	0.37	0.39	P 1074 より古
1019	AN-25	円形	0.46	0.42	0.37		1072	AS-29	楕円形	0.46	0.41	0.35	
1020	AN-25	不整円形	0.40	0.37	0.22		1073	AR-29	円形	0.38	0.36	0.41	
1021	AN-26	楕円形	0.31	0.25	0.17		1074	AS-29	不明	0.28	-	0.08	P 1071 より新
1022	AN-26	円形	0.28	0.26	0.38		1075	AR-28	楕円形	0.63	0.48	0.22	SK 544 より新
1023	AN-26	円形	0.45	0.41	0.32		1076	AR-27	楕円形	0.57	(0.44)	0.41	埋め戻し
1024	AN-26	不整楕円形	0.46	0.37	0.26		1077	AR-28	円形	0.50	0.48	0.16	自然堆積
1025	AN-26	楕円形	0.48	0.39	0.11		1078	AR-28	円形	0.44	0.43	0.14	SJ 553 より古
1026	AN-24	楕円形	0.26	0.19	0.36		1079	AP-26	円形	0.46	0.42	0.24	埋め戻し
1027	AN-24	不整円形	0.32	0.28	0.42		1080	X-19	円形	0.64	0.55	0.71	P 1081 より新
1028	AN-26	円形	0.27	-	0.30		1081	X-19	円形	0.56	(0.41)	0.47	P 1080 より古
1029	AN-27	不整楕円形	0.46	0.33	0.37		1082	X-19	楕円形	0.52	0.44	0.45	
1030	AN-27	不整楕円形	0.46	0.36	0.22		1083	X-19	楕円形	0.50	0.46	0.21	
1031	AN-27	楕円形	0.33	0.26	0.30		1084	X-20	楕円形	0.40	0.32	0.43	
1032	AN-27	楕円形	0.50	0.31	0.28		1085	X-19	不明	0.49	-	0.21	
1033	AN-27	楕円形	0.47	0.34	0.09		1086	X-19	楕円形	0.64	0.50	0.46	P 1087 より古
1034	AN-27	楕円形	0.32	0.23	0.40		1087	X-19	楕円形	0.50	0.40	0.41	P 1086 より新
1035	AN-27	不整円形	0.37	0.33	0.15		1088	X-19	円形	0.50	0.46	0.48	
1036	A0-27	不整円形	0.36	0.34	0.21		1089	X-19	楕円形	0.40	0.30	0.16	SK 557 より新
1037	A0-26	楕円形	0.42	0.36	0.13		1090	Z-20	円形	0.43	0.41	0.11	
1038	A0-27	円形	0.31	0.26	0.31		1091	Y-19	円形	0.51	0.42	0.51	P 1092 より新
1039	A0-27	不整円形	0.31	0.26	0.23		1092	Y-19	楕円形	0.56	0.43	0.40	P 1091 より古

第 165 表 ピット一覧表 (3)

番号	位置	形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考	番号	位置	形態	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	備考
1093	Y-19	楕円形	0.83	0.51	0.20		1131	Z-20	円形	0.34	0.30	0.17	
1094	Y-20	不整形	0.73	0.46	0.59		1132	Z-20	円形	0.42	0.40	0.40	
1095	Y-20	楕円形	0.48	0.42	0.55		1133	Z-20	円形	0.35	0.34	0.24	
1096	Y-20	楕円形	(0.62)	0.58	0.25		1134	Z-20	不整形	0.61	0.41	0.34	
1097	X-19	円形	0.64	0.60	0.30		1135	Z-20	円形	0.41	0.38	0.33	
1098	X-19	不整形	0.54	0.52	0.17		1136	Z-20	円形	0.32	0.31	0.18	
1099	X-19	不整形	0.60	0.48	0.16		1137	Z-20	円形	0.23	0.22	0.11	
1100	X-19	円形	0.48	0.46	0.46		1138	Z-20	円形	0.30	0.29	0.25	
1101	Y-19	不明	(0.70)	(0.42)	0.30	SE 256 より新	1139	Z-20	不明	0.46	-	0.27	
1102	Y-19	不明	0.49	-	0.25		1140	Y-20	不整円形	0.44	0.37	0.50	
1103	X-19	不整円形	0.36	0.32	0.25		1141	Y-20	不整円形	0.45	0.43	0.25	
1104	Y-19	楕円形	0.32	0.25	0.38		1142	AA-21	不整円形	0.44	0.40	0.18	
1105	AB-21	楕円形	0.49	0.40	0.52		1143	AA-20	不整円形	0.60	0.53	1.00	SK 567・P 1144 より新
1106	AB-21	円形	0.35	0.34	0.15		1144	AA-20	不整円形	0.62	-	0.25	P 1143 より古, SK 567 より新
1107	AB-21	楕円形	0.33	0.28	0.23		1145	Z-21	不整円形	0.48	0.47	0.53	
1108	AB-21	楕円形	0.52	0.26	0.16	P 1108 より新	1146	Z-20	隅丸方形	0.54	0.53	0.34	
1109	AB-21	楕円形	0.68	0.56	0.76	P 1107 より古	1147	Z-20	不整円形	0.54	0.44	0.26	
1110	AB-21	楕円形	0.50	0.40	0.37		1148	Z-20	円形	0.38	0.37	0.17	
1111	AA-21	円形	0.48	0.46	0.54		1149	Y-20	方形	0.52	0.47	0.43	
1112	AA-21	楕円形	0.54	0.43	0.58		1150	Y-20	楕円形	0.53	0.44	0.34	
1113	AA-21	楕円形	0.26	0.21	0.29		1151	AA-21	不明	0.41	-	0.10	
1114	AA-21	円形	0.37	0.36	0.10		1152	欠番					
1115	AA-21	円形	0.34	0.32	0.21		1153	Z-20	楕円形	0.60	0.44	0.19	
1116	W-17	円形	0.39	0.34	0.29	SD 137 より古	1154	Z-20	不整長方形	0.78	0.48	0.50	SE 262 より古
1117	AB-21	楕円形	0.52	0.40	0.49	SK 566 より古	1155	V-17	不整形	1.02	0.71	0.23	
1118	AA-21	円形	0.55	0.48	0.31		1156	W-17	不整形	1.36	-	0.62	SD 138 より古
1119	AA-21	楕円形	0.79	0.45	0.47		1157	X-19	不整円形	0.74	0.68	0.58	
1120	AA-20	楕円形	0.61	0.51	0.44		1158	X-18	楕円形	0.55	0.38	0.39	
1121	AA-21	円形	0.58	0.56	0.26		1159	X-19	不整形	-	0.64	0.40	
1122	AA-21	長方形	0.58	0.52	0.48		1160	W-18	円形	0.47	0.43	0.30	
1123	Z-21	円形	0.42	0.39	0.31		1161	W-18	円形	0.48	0.47	0.49	
1124	AA-21	不整円形	0.41	0.38	0.17		1162	W-18	円形	0.32	0.31	0.20	
1125	AA-21	円形	0.44	0.42	0.34		1163	AA-21	不整円形	0.38	0.34	0.32	
1126	Z-20	円形	0.58	0.55	0.23		1164	AA-21	円形	0.48	0.47	0.22	
1127	Z-20	円形	0.55	0.52	0.40		1165	AB-21	円形	0.64	0.62	0.05	
1128	Z-20	円形	0.28	0.27	0.30		1166	AA-21	不整円形	0.48	0.45	0.33	
1129	Z-20	円形	0.44	0.44	0.31		1167	AA-21	円形	0.58	0.48	0.36	
1130	Z-20	円形	0.54	0.52	0.31		1168	AA-21	円形	0.53	-	0.21	

第401図 ピット(1)



ピット907 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット909 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロック含む。

ピット910 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 焼土・炭化物粒少量含む。
2. 10YR5/4 にぶい黄褐色土 地山粒含む。

ピット911 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒・ブロック多く含む。

ピット915 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット914 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒多く含む。

ピット916 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット917 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 焼土粒含む。

ピット929 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 柱痕。焼土・炭化物粒含。
2. 10YR4/4 褐色土 地山粒やや多く含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒・ブロック混入。
4. 10YR5/6 黄褐色土 地山土主体。

ピット930 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 柱痕。焼土・炭化物粒含。
2. 10YR4/4 褐色土 地山粒やや多く含む。
3. 10YR5/6 黄褐色土 地山土主体。

ピット931 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・地山粒含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒含む。しまり弱い。
3. 10YR5/6 黄褐色土 地山土主体。
4. 10YR6/4 にぶい黄褐色土 2層より暗く、しまる。
5. 10YR5/6 黄褐色土 地山土多く含む。

ピット933 土層説明

1. 10YR5/6 黄褐色土 地山粒・ブロック多く含む。

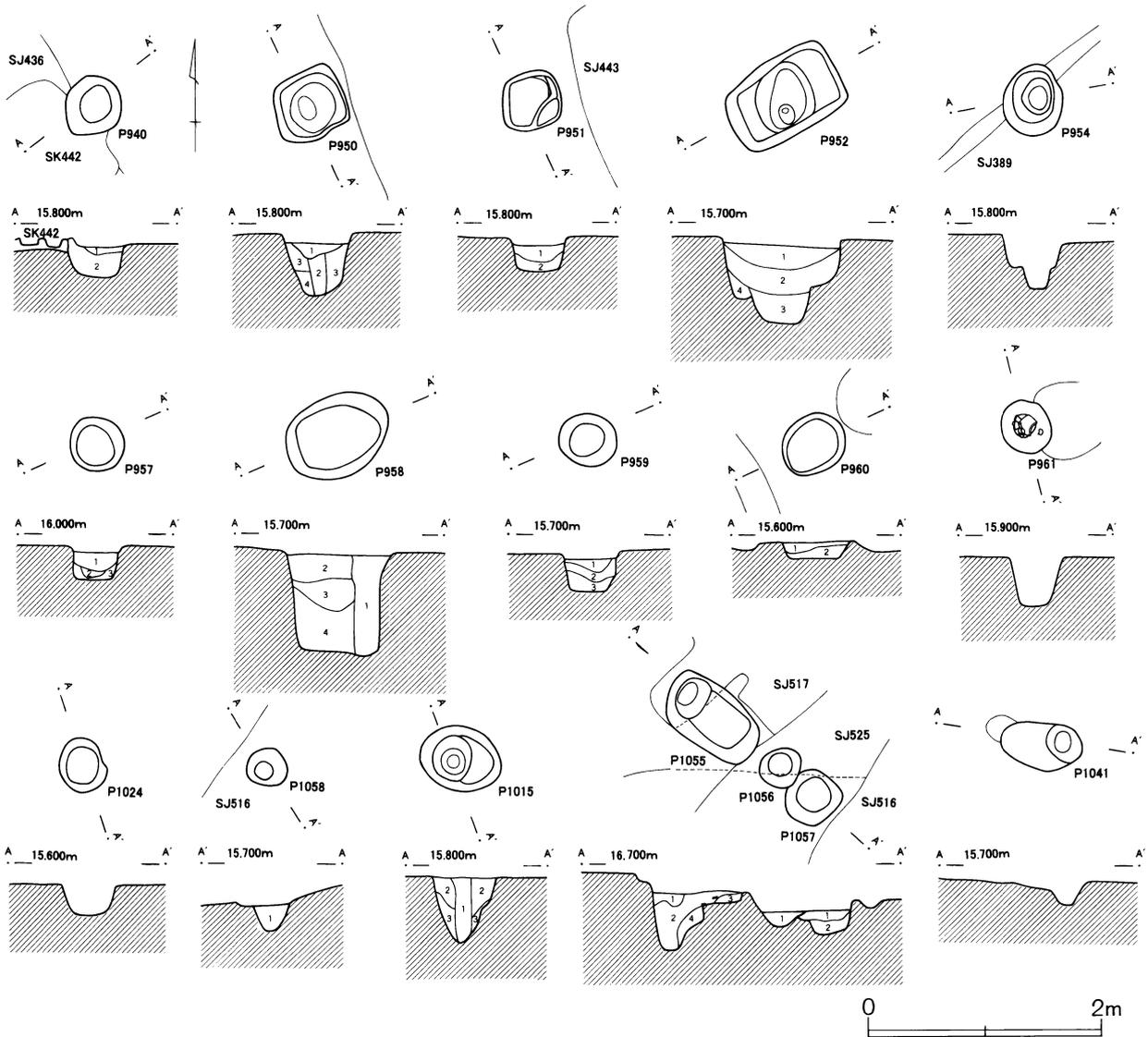
ピット936 土層説明

1. 10YR3/4 黒褐色土 地山粒多く含む。
2. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒多く含む。
3. 10YR3/1 黒褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット937 土層説明

1. 10YR3/1 黒褐色土 地山粒含む。

第402図 ピット (2)



ピット940 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 焼土粒・地山粒含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色土 砂質地山粒含む。

ピット950 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・ブロック含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒若干含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒含む。

ピット951 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒若干含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 3層より粗雑。

ピット952 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒やや多く含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 1層より地山ブロック多い。
3. 10YR3/2 黒褐色土 2層よりしまり・粘性有。
4. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒・ブロック含む。

ピット957 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 きめ細かく、焼土粒含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・ブロック主体。

ピット958 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒多く、焼土・炭化物粒若干含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック主体。
3. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒含み、焼土・炭化物粒を微量に含む。
4. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒・ブロック混入。

ピット959 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 きめ細かく、焼土粒含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒・ブロック主体。

ピット960 土層説明

1. 10YR4/4 褐色土 地山粒含む。
2. 10YR5/6 黄褐色土 地山土多く含む。

ピット1015 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 柱痕。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒微量、黄褐色土粒多く含む。充填土。
3. 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土ブロック多く含む。充填土。

ピット1055 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土ブロック状。焼土粒含。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒少量含む。

ピット1056 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土ブロック・焼土粒少量。

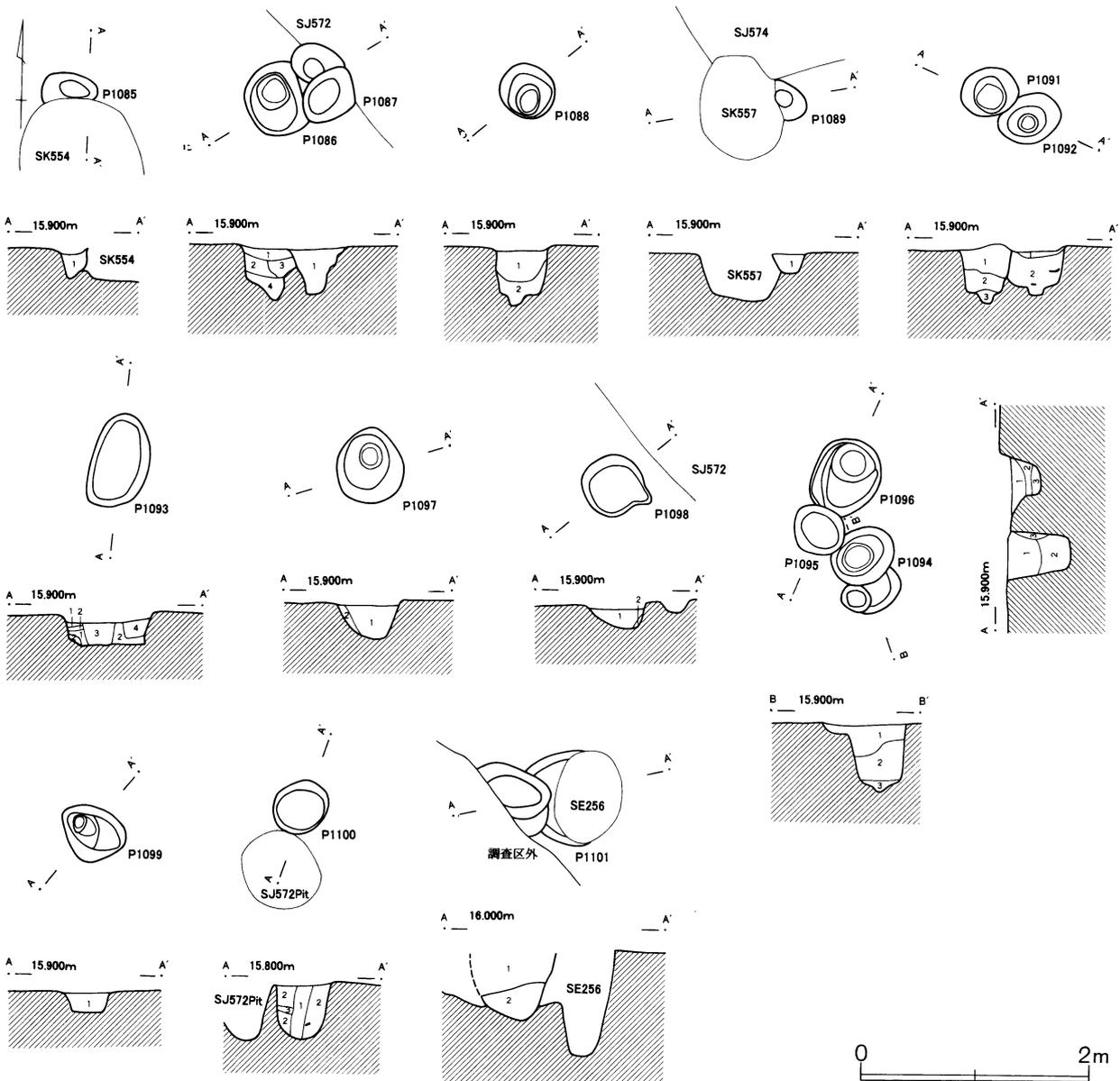
ピット1057 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・ブロック・焼土粒微量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色土粒微量に含む。

ピット1058 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 黄褐色土粒・焼土粒微量含。

第404図 ピット (4)



ピット1085 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 焼土粒少、地山ブロック含む。

ピット1086 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・地山ブロック少量含。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロック少量含む。

ピット1087 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒多く含む。柱痕か。

ピット1088 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット1089 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土

ピット1091 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット1092 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土ブロック多く、炭化物粒地山ブロック少量含む。

ピット1093 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒多く含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック少量含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・褐色土ブロック少含。

ピット1094 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土ブロック・地山ブロック含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・褐色土粒少含。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット1095 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・褐色土ブロック含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
3. 10YR4/4 褐色土 壁の崩れ。

ピット1099 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック含む。

ピット1096 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック多く含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック、焼土粒少量含む。
3. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット1097 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック少量含む。

ピット1098 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 焼土、地山ブロック含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

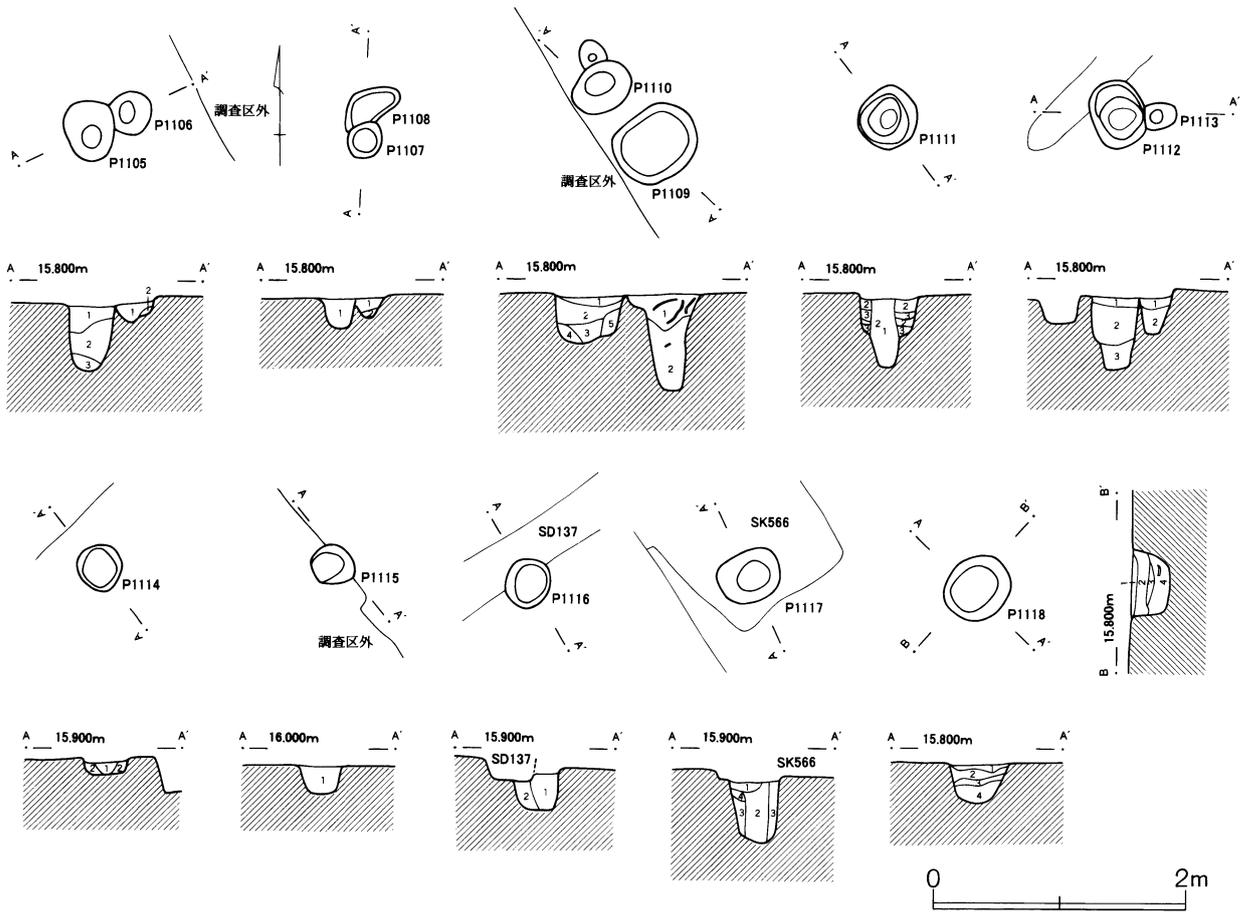
ピット1100 土層説明

1. 10YR3/2 黒褐色土 埋土。焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。柱痕。
3. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット1101 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 土器片・焼土粒少量含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロック少量含む。

第405図 ピット (5)



ピット 1105 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 地山粒含む。焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット 1106 土層説明

1. 10YR2/1 黒色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット 1107 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 下部に地山ブロック多く含む。

ピット 1108 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土粒少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット 1109 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒含む。炭化物少量含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 2層と近い。炭化物粒少量含む。
5. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット 1110 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 下部に地山粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒含む。焼土粒少量含む。

ピット 1111 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土ブロック・炭化物粒少量含む。柱痕。
2. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロック含む。充填土。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。充填土。

ピット 1112 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック含む。炭化物粒少量含む。
3. 10YR2/1 黒色土 炭化物粒含む。

ピット 1113 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 地山粒少量含む。
2. 10YR2/1 黒色土 炭化物粒少量含む。

ピット 1114 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット 1115 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロックが層状に入る。

ピット 1116 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む。

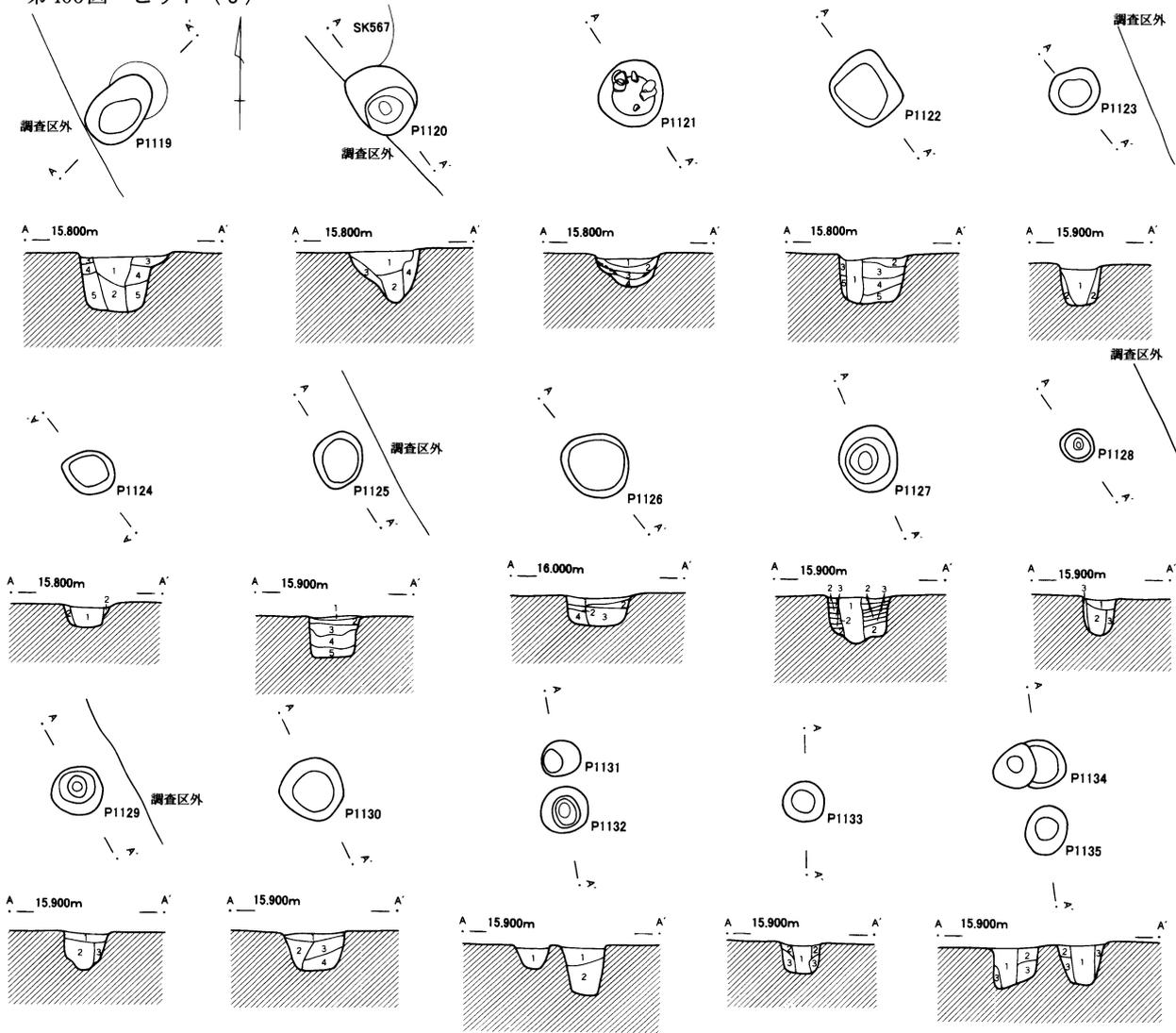
ピット 1117 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロック含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
4. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量含む。

ピット 1118 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロック・地山ブロックの混合層。
2. 10YR3/3 暗褐色土 地山ブロックを少量含む。
3. 10YR4/4 赤褐色土 焼土ブロック層。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 灰と地山の混合層。

第406図 ピット (6)



ピット1119 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量含む。柱痕。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック多く含む。柱痕。
3. 10YR3/4 暗褐色土 地山粒少量含む。充填土。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック含む。充填土。
5. 10YR5/4 におい黄褐色土 地山ブロック多い。充填土。

ピット1120 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。
4. 10YR5/3 におい黄褐色土 焼土粒少量含む。

ピット1121 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 大形の地山ブロック多く含む。
2. 10YR2/1 黒色土 灰に大形焼土ブロック多量含む。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック多、焼土粒少量。
4. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット1122 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少。柱痕。
2. 10YR3/2 黒褐色土 炭化物粒少量。充填土。
3. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量。充填土。
4. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量。充填土。
5. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多い。

ピット1123 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒・炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット1124 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒多く、焼土粒少含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック多く含む。

ピット1125 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
2. 10YR2/1 黒色土 灰層。焼土ブロック少量含む。
3. 10YR4/4 褐色土 大形の焼土ブロック多く含む。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 焼土ブロック・灰を含む。
5. 10YR5/4 におい黄褐色土 焼土ブロック少、地山ブロック多。

ピット1126 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土
3. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物少量含む。
4. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット1127 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・焼土粒少、柱痕。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多い。充填土。
3. 10YR2/3 黒褐色土 充填土。

ピット1128 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1132 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1129 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
2. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
3. 10YR3/3 黒褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1130 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック多く含む。
4. 10YR2/3 黒褐色土 焼土粒少量含む。

ピット1131 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。

ピット1133 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 柱痕。
2. 10YR3/3 暗褐色土 充填土。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多い。充填土。

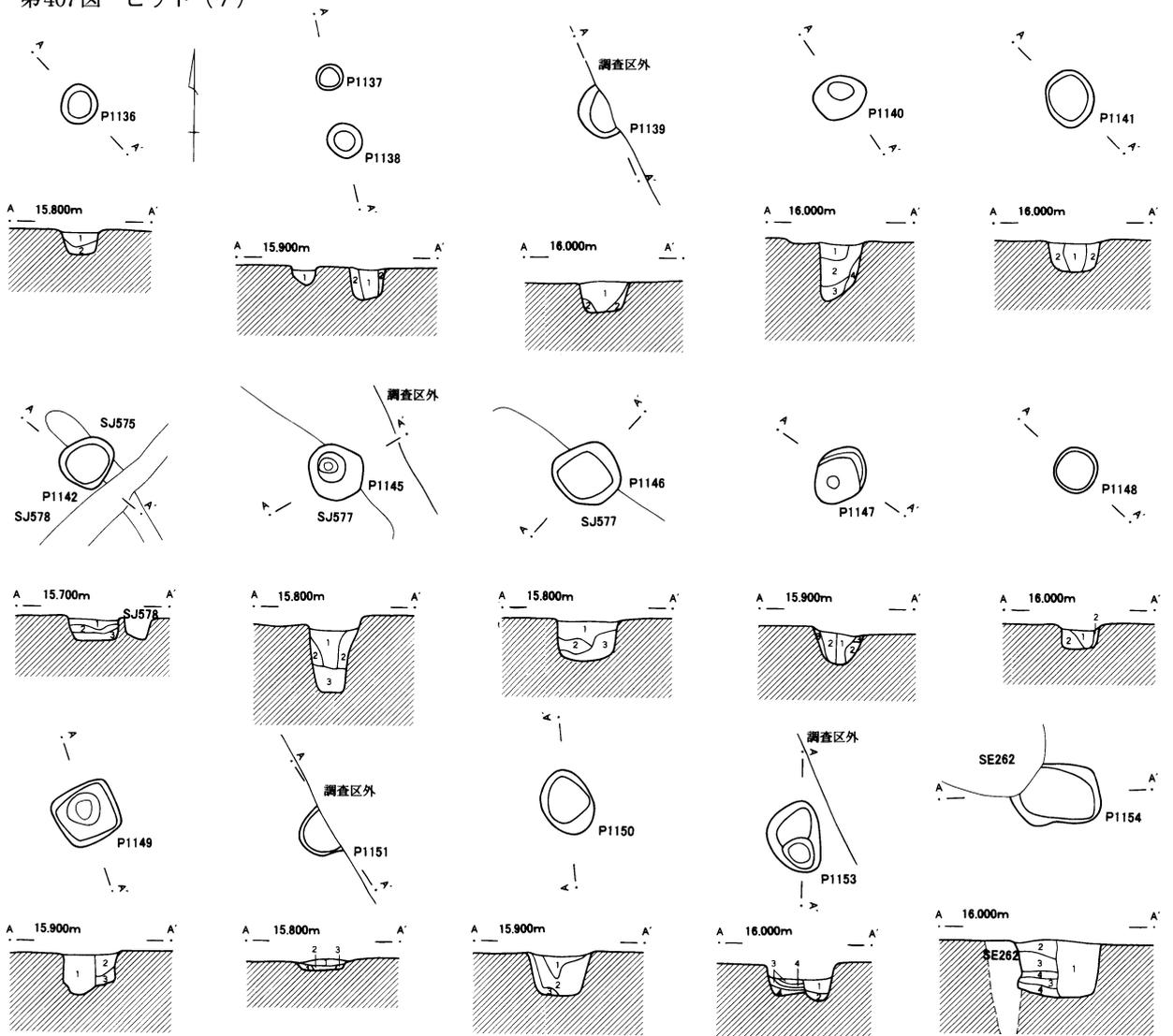
ピット1134 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 柱痕。
2. 10YR3/3 暗褐色土 抜き取り跡。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 充填土。

ピット1135 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。柱痕。
2. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量。抜き取り跡。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 充填土。

第407図 ピット (7)



ピット1136 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロック含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土

ピット1137 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物粒少量含む。

ピット1138 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1140 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
3. 10YR2/3 黒褐色土 褐色土ブロック少量含む。
4. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック。

ピット1142 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土・焼土ブロック少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 焼土ブロック多、炭化物少含む。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土

ピット1145 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 褐色土粒少量含む。柱痕。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1139 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 地山粒多く含む。
2. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

ピット1141 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 焼土粒少量含む。
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1146 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1147 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭化物少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 褐色土ブロック含む。
3. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1148 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土
2. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1149 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 褐色土ブロック多い。柱痕。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土粒含む。充填土。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック含む。充填土。

ピット1150 土層説明

1. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒少量含む。
3. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1151 土層説明

1. 10R4/4 赤褐色土 焼土ブロック多く含む。
2. 10R3/3 暗赤褐色土 焼土ブロック含む。
3. 10YR3/3 暗褐色土

ピット1153 土層説明

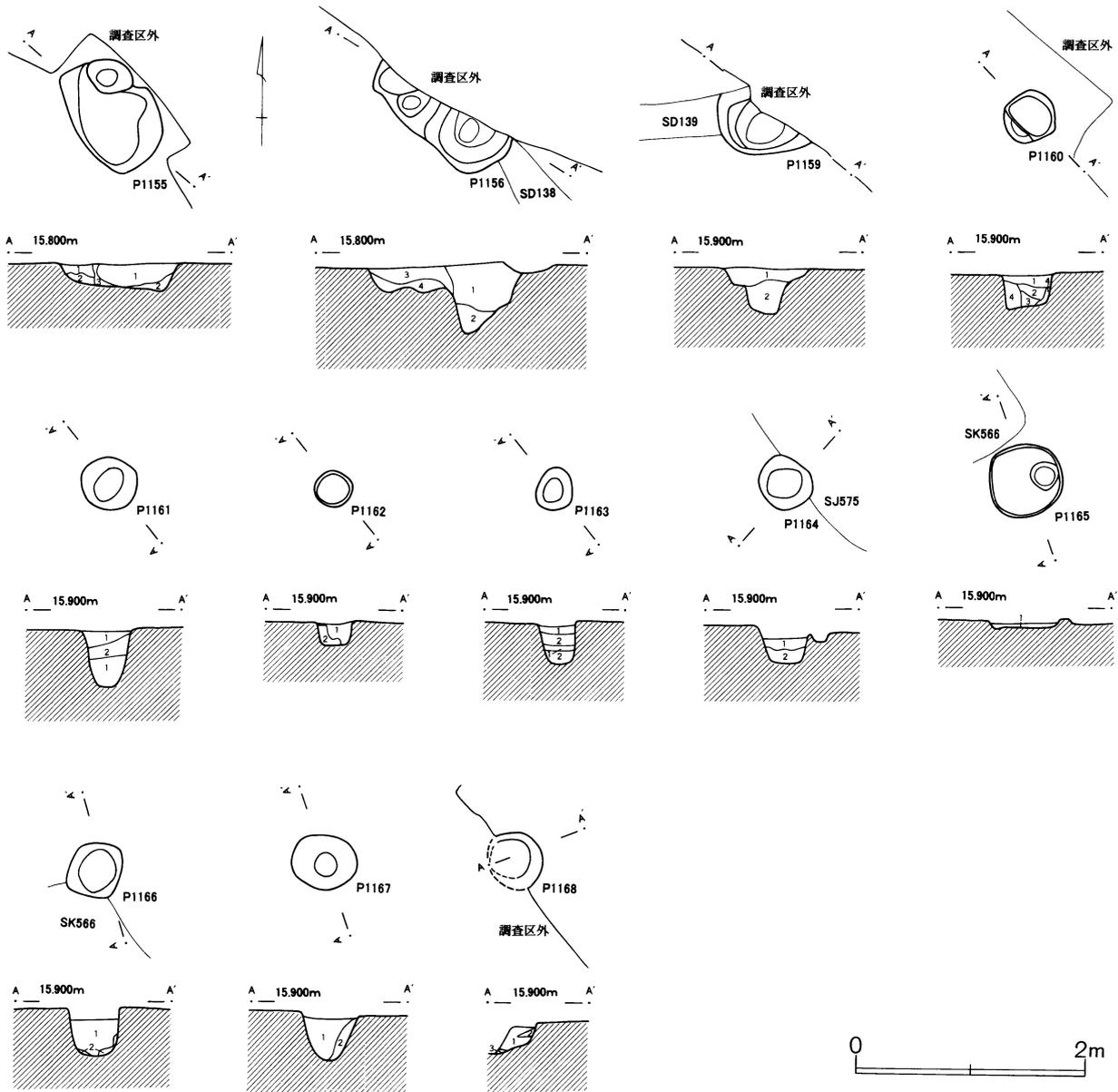
1. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック少量。柱痕。
2. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。柱痕。
3. 10YR3/4 暗褐色土 充填土。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 褐色土ブロックを多い。充填土。

ピット1154 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック少量含む。柱痕。
2. 10YR3/1 黒褐色土 充填土。
3. 10YR4/3 におい黄褐色土 充填土。
4. 10YR3/3 暗褐色土 充填土。



第408図 ピット (8)



ピット1155 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
3. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1156 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土ブロック・炭化物粒含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土
3. 10YR2/3 黒褐色土 焼土・褐色土ブロックを少含む。
4. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1159 土層説明

1. 10YR3/4 暗褐色土 焼土粒少量含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 褐色土ブロック多く含む。

ピット1160 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒少含む。
2. 10YR3/3 暗褐色土 炭化物粒少量含む。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土ブロック多く含む。
4. 10YR4/4 褐色土 褐色土ブロック含む。

ピット1161 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック多く含む。

ピット1162 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック多く含む。

ピット1163 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック多く含む。

ピット1164 土層説明

1. 10YR2/3 黒褐色土 炭化物粒少量含む。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック多く含む。

ピット1165 土層説明

1. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック含む。 充填土。

ピット1166 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック含む。 充填土。

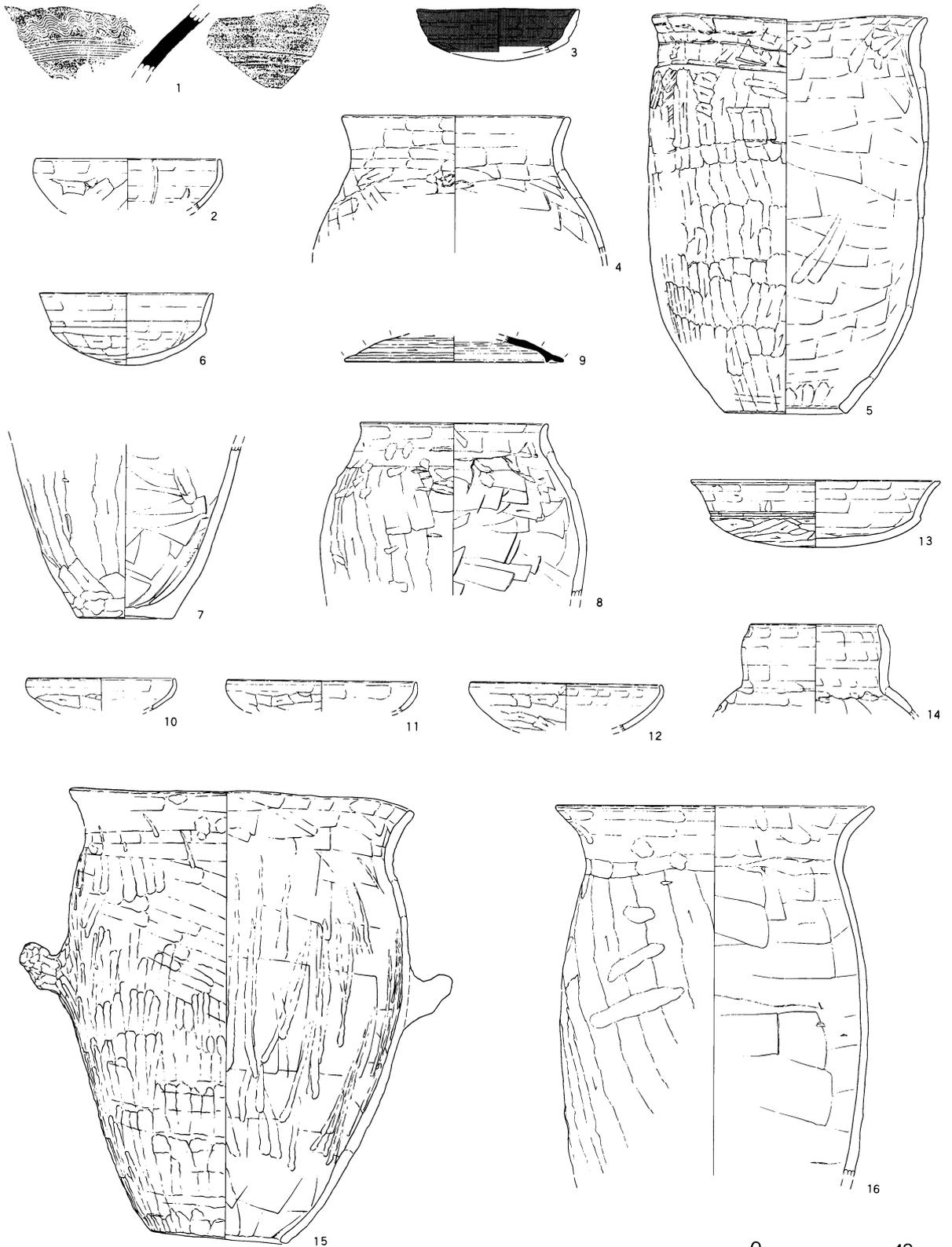
ピット1167 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 柱痕。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック含む。 充填土。

ピット1168 土層説明

1. 10YR3/3 暗褐色土 柱痕。
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 褐色土地山ブロック含む。 充填土。
3. 10YR4/4 褐色土 地山ブロック含む。

第409図 ピット出土遺物 (1)



1 - P914
2 - P924
3 ~ 5 - P926

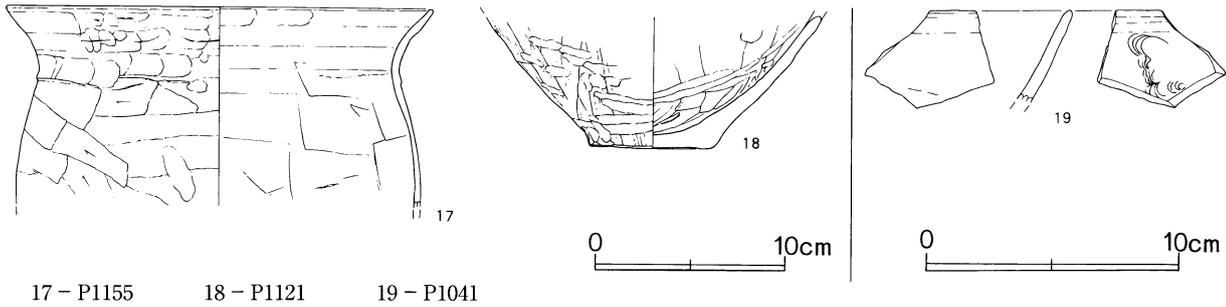
6 - P954
7 · 8 - P961
9 - P1024

10 ~ 12 - P1092
13 - P1098
14 - P1109

15 · 16 - P1110

0 10cm

第410図 ピット出土遺物(2)



第166表 ピット出土遺物観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	Pit 914	須恵器甕				細 (W)	良	黄 灰	破片	群馬
2	Pit 924	坏	(12.6)	(3.5)		細 (W, B)	普	橙	破片	赤彩か
3	Pit 926	坏	(11.0)	(3.0)		微 (W, B)	普	褐 灰	25	内外黒色処理
4	Pit 926	甕	(15.6)	(8.9)		粗 (C)	普	灰 黄	破片	
5	Pit 926	甕	(17.9)	(26.8)	(8.2)	粗 (W, C, R)	良	にぶい黄橙	75	
6	Pit 954	坏	11.8	4.9		礫 (W, B, R)	普	にぶい橙	95	
7	Pit 961	甕		(11.8)	(6.5)	礫 (W, F)	良	にぶい橙	破片	
8	Pit 961	甕	(12.7)	(11.7)		細 (W, B, R)	普	にぶい褐	破片	
9	Pit 1024	須恵器蓋	(14.9)	(1.8)		微 (F)	良	灰	破片	群馬
10	Pit 1092	坏	(9.9)	(2.2)		細 (W, B)	良	橙	20	
11	Pit 1092	坏	(12.8)	(2.1)		粗 (W, B)	良	橙	破片	
12	Pit 1092	坏	(12.9)	(3.2)		細 (W, B, R)	良	橙	破片	
13	Pit 1098	坏	(16.9)	4.5		細 (W, B, R)	良	橙	30	
14	Pit 1109	壺	(8.9)	(6.1)		礫 (W, B, R)	良	にぶい橙	破片	
15	Pit 1110	甕	(23.5)	30.5	9.4	粗 (W, C)	普	にぶい黄橙	95	
16	Pit 1110	甕	(21.6)	(24.9)		粗 (W, B, R)	普	にぶい橙	20	黒色付着物
17	Pit 1155	甕	(22.8)	(10.6)		細 (B, R)	良	橙	破片	
18	Pit 1121	甕		(7.0)	6.6	粗 (W, B, R)	良	にぶい黄橙	破片	
19	Pit 1041	青磁碗				微	良	灰オリーブ	破片	

9. 性格不明遺構

本書では、3基の性格不明遺構について報告する。これまで、土壙と同様の形状をした遺構で、覆土に焼土や炭化物を多量に含むものをこれに含めてきた。しかし今回は、第15号性格不明遺構のように、墓跡と思しきものも含んでいる。別項を立てて扱うべきかもしれないが、調査時の判断を優先させ、ここに掲載する。

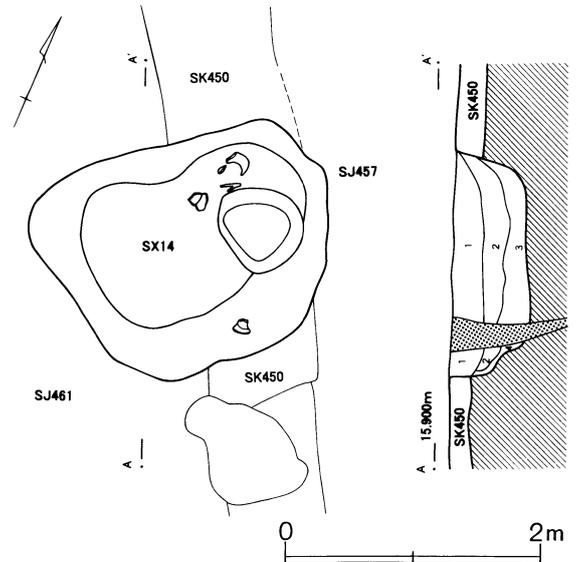
第14号性格不明遺構（第10・411図）

AL-24グリッドに位置する。第461号住居跡・第450号土壙を切り、第457号住居跡に切られる。平面は長径2.35m×短径1.80mの不整形で、深さは60cm程である。底面はおおよそ平坦で、壁の立ち上がりは急である。底面の北側には、円形の掘り込みが見られる。直径は約65cmで、深さは底面から10cm程である。

覆土には焼土と炭化物を多量に含む。

その覆土からは、須恵器・土師器の坏がまとまって出土している。いずれも破片で、一部は住居跡や土壙からの流入と思われる。

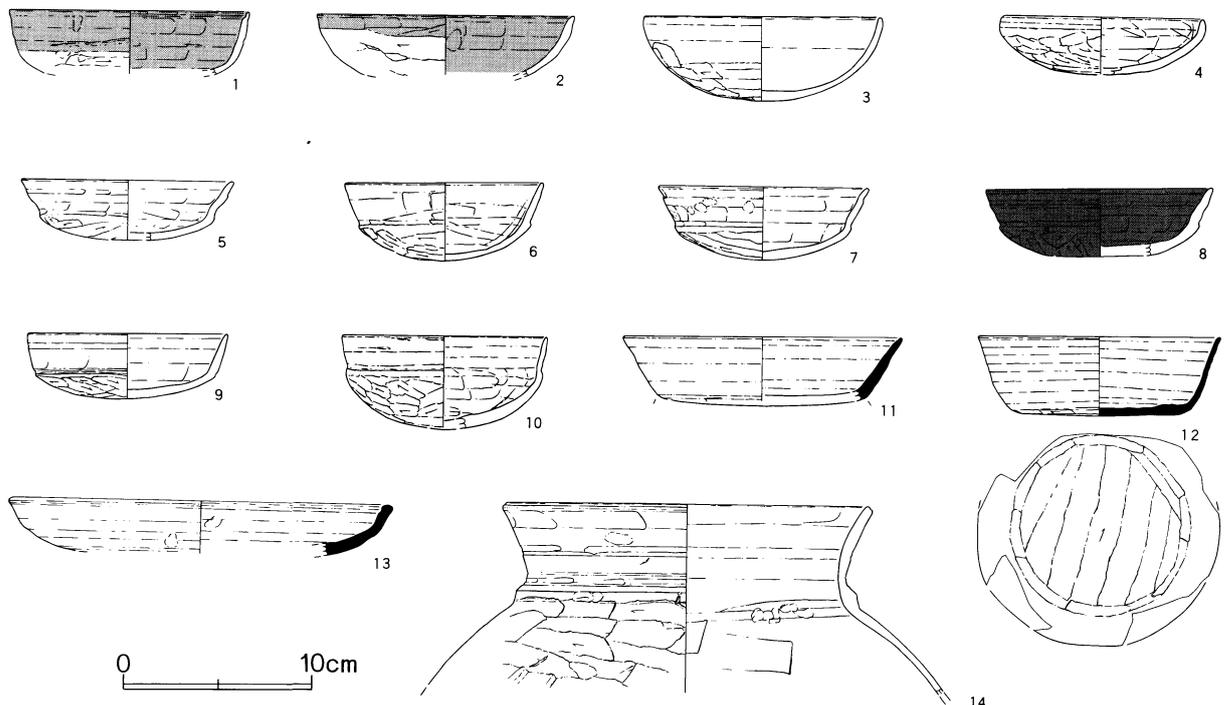
第411図 第14号性格不明遺構



第14号不明遺構 土層説明

1. 10YR2/2 黒褐色土 焼土・炭化物・地山粒微量に含む。
2. 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック少量、炭化物・焼土粒帯状に多く含む。
3. 10YR3/2 黒褐色土 地山粒少量、炭化物帯状に含む。
4. 10YR4/3 におい黄褐色土 地山ブロック多く含む。

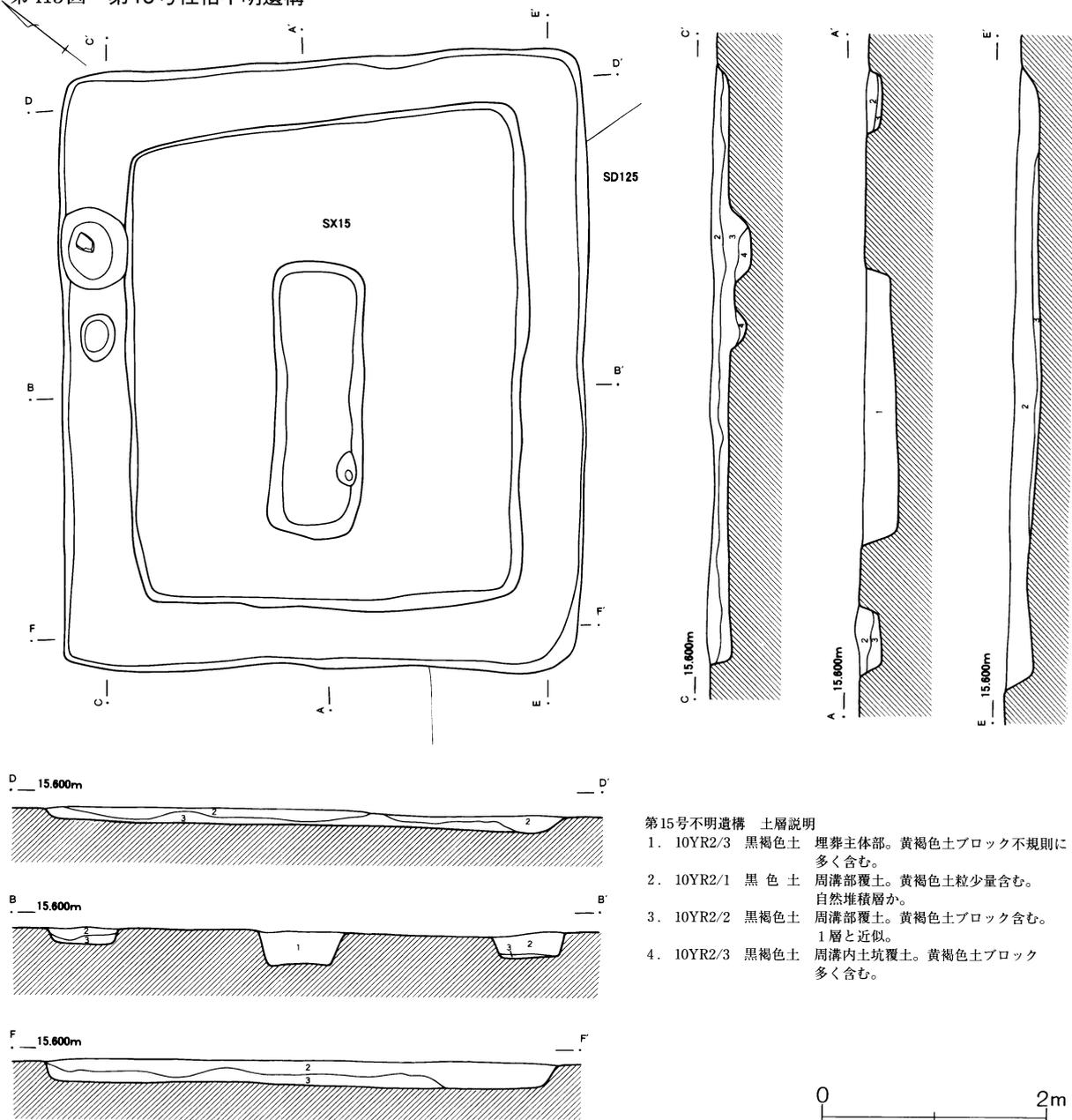
第412図 第14号性格不明遺構出土遺物



第167表 第14号性格不明遺構出土遺物観察表

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(12.8)	(3.4)		細 (R)	良	にぶい 褐	破片	赤彩 黒色処理
2	坏	(13.7)	(3.2)		細 (W, R)	良	にぶい 褐	破片	
3	坏	12.5	4.5		細 (W, R)	普	浅 黄 橙	50	
4	坏	(11.0)	(2.9)		細 (W, B)	良	橙	30	
5	坏	(11.4)	(3.2)		細 (B)	良	褐 灰	25	
6	坏	(10.6)	4.2		微 (B)	良	にぶい黄橙	40	
7	坏	(11.1)	(3.9)		細 (W, B, R)	良	橙	50	
8	坏	(12.1)	(3.6)		細 (W, B, R)	普	にぶい 橙	30	
9	坏	10.7	3.5		細 (W, B, R)	普	にぶい黄橙	80	
10	坏	11.0	4.9		微 (W, B)	普	にぶい黄橙	20	
11	須恵器 坏	(14.9)	(3.4)	(10.6)	粗 (W)	普	灰	破片	
12	須恵器 坏	13.0	4.2	8.5	細 (R)	普	灰 黄	75	
13	須恵器 坏	(20.6)	(2.8)		粗 (W, F)	良	灰	破片	
14	甕	(19.7)	(10.0)		粗 (W, R)	良	にぶい 橙	破片	

第413図 第15号性格不明遺構



第15号性格不明遺構（第13・14・413図）

A X-33グリッドに位置する。第125号溝跡の埋没後、その覆土を掘り込んで構築される。全体は方形の周溝と、中央部の長方形土壇からなる。径5.50m×4.70mで、周溝は幅60~65cm、確認面からの深さは15~20cmを測る。遺構中心部の土壇状の掘り込みは、径2.50m×0.80mで、深さは30cmである。

土壇部の覆土は単一で、人為的に埋め戻したものとされる。主体部であろうが、遺物の出土や、棺等の痕跡は見られなかった。

周溝の北西には、楕円形の土壇が2基検出された。覆土は主体部と同様、人為的な埋め戻しと判断される。

周溝からも遺物の出土は認められなかったが、中世の墳墓跡ではないかと考えられる。

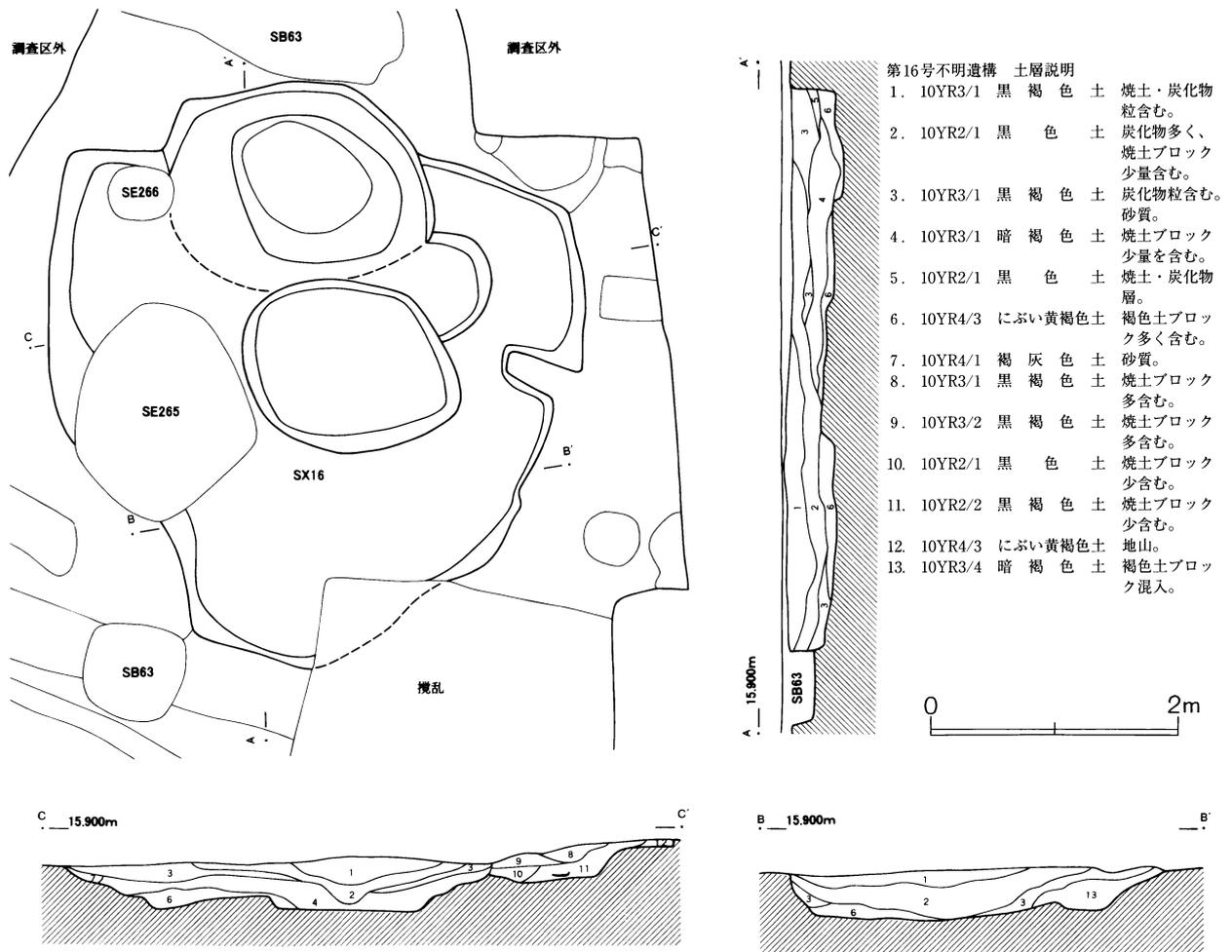
第16号性格不明遺構（第6・7・414図）

W-18グリッドに位置する。第63号掘立柱建物跡を切るが、第265・266号井戸跡との新旧関係は明らかにできなかった。平面は長径約4.70m×短径約4.50mの不整形で、確認面からの深さは25~40cmを測る。底面は凹凸が激しく、壁の立ち上がりは急である。

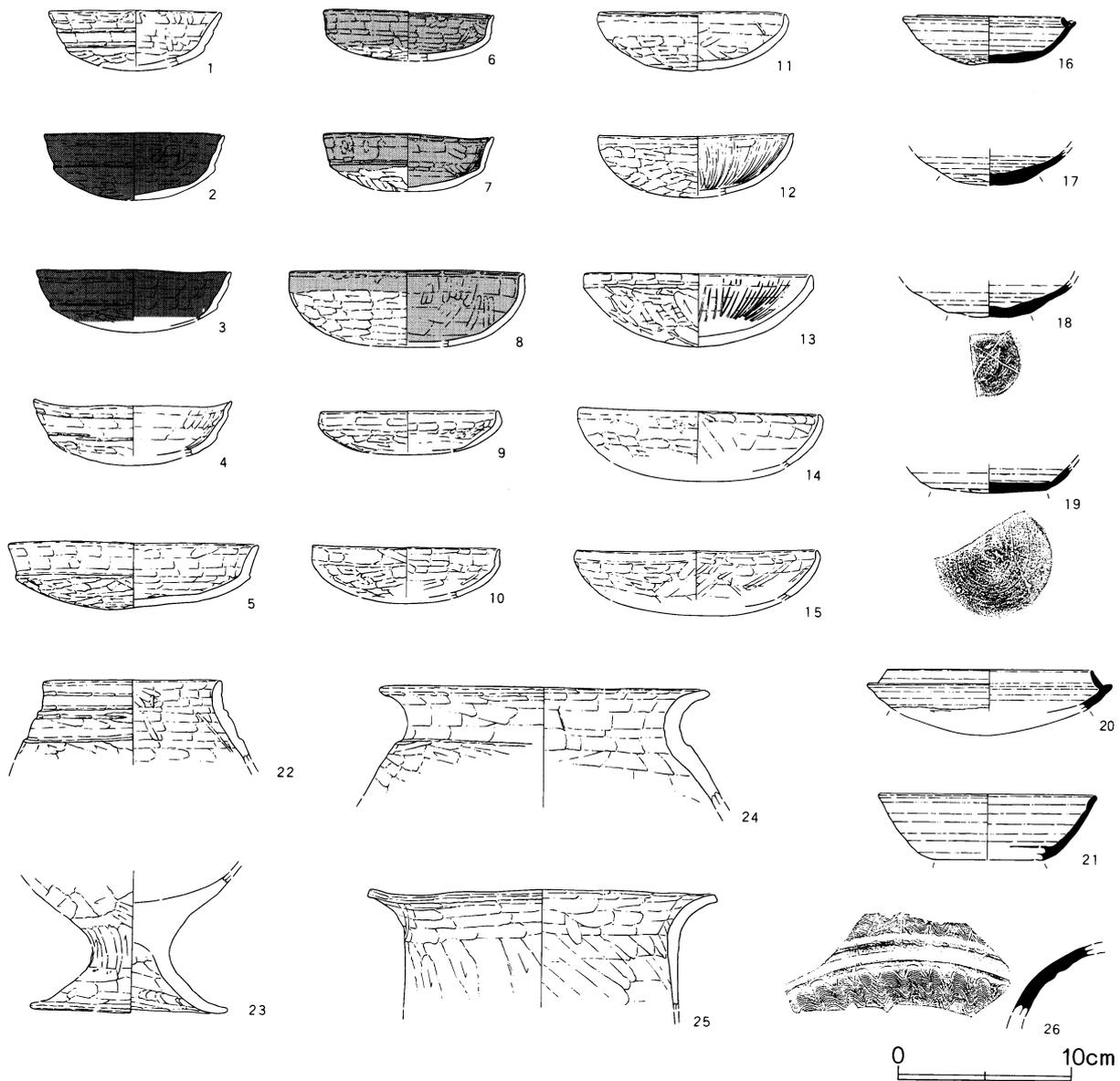
覆土には、焼土や炭化物を多量に含む。

覆土からは古墳時代の土師器、古代の須恵器や土師器がまとまって出土している。但し、古墳時代の遺物は、周囲の遺構からの流入と思われる。このほか、ミニチュアの甌(第426図5)、土錘(第423図10)が見出されている。

第414図 第16号性格不明遺構



第415図 第16号性格不明遺構出土遺物



第168表 第16号性格不明遺構出土遺物観察表(1)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	坏	(10.2)	(3.1)		微(W)	良	にぶい 橙	破片	
2	坏	(10.6)	(3.8)		微(W, B)	普	灰 白	破片	内外黑色处理
3	坏	(11.4)	(2.9)		微(W, B)	普	灰 白	破片	内外黑色处理
4	坏	11.6	(3.3)		微(W, B)	普	浅 黄 橙	45	
5	坏	14.7	3.9		微(W, B)	良	橙	90	
6	坏	(10.0)	(2.3)		微(W)	良	にぶい 橙 褐	50	比企型 赤彩
7	坏	10.0	3.3		細(W, C)	良	赤	70	比企型 赤彩
8	坏	(13.6)	(4.3)		粗(R)	良	橙	40	比企型 赤彩
9	坏	(10.4)	(2.4)		微(W)	普	橙	破片	
10	坏	(11.0)	(2.9)		微(W, B)	普	橙	破片	
11	坏	10.8	3.4		微(W, B)	普	橙	90	
12	坏	11.4	(3.6)		微(W, B)	良	橙	60	暗文
13	坏	(13.4)	(4.2)		微(W, B)	良	橙	35	暗文
14	坏	(14.0)	(3.1)		微(W, B)	良	橙	破片	

第169表 第16号性格不明遺構出土遺物観察表(2)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
15	坏	(19.0)	(2.9)		微(W, B)	普	にぶい 橙	破片	
16	須恵器 坏	8.5	2.9		細	良	灰	80	胎土分析 No.24
17	須恵器 坏		(2.2)		細(W)	良	灰	破片	湖西
18	須恵器 坏		(2.2)		微(W)	良	灰	破片	湖西 底部に窯印
19	須恵器 坏		(1.9)	(6.8)	(針)	良	灰	破片	南比企 転用硯
20	須恵器 坏	(12.0)	(2.5)		細(W)	良	灰	破片	
21	須恵器 坏	(12.8)	(3.8)	(6.4)	(針)	良	灰	破片	南比企
22	小型 壺	(10.4)	(4.9)		粗(R)	良	橙	破片	
23	高 坏		(8.3)	(10.4)	細(W, R)	普	にぶい 橙	破片	
24	壺	(19.4)	(7.0)		細(W, B)	普	褐 灰	破片	
25	甕	(20.4)	(6.7)		粗(C, R)	普	橙	破片	
26	須恵器 甕		(4.4)		細(W)	良	灰	破片	湖西?

10. その他の遺物

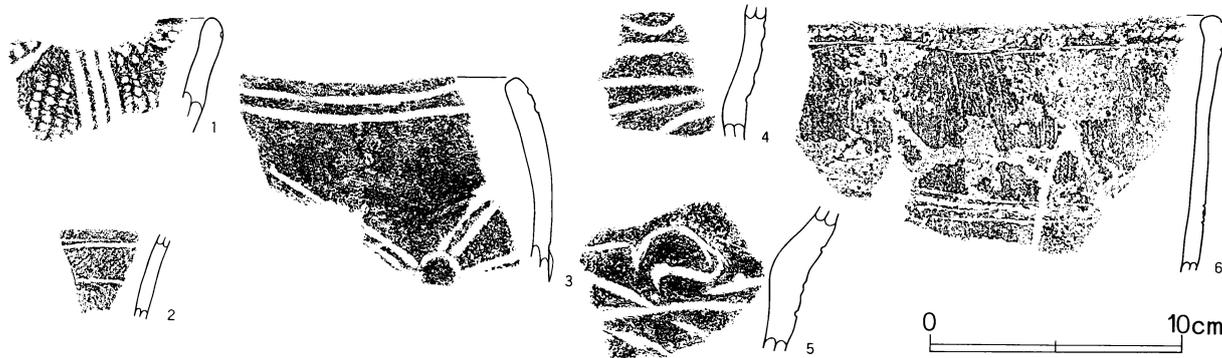
ここでは、遺構に伴わないグリッド出土の遺物や、遺構内出土で、土器以外の遺物をまとめて掲載した。

これらはすべて、本書にかかる調査範囲からの出土であり、築道下遺跡全体のものではない。

(1) 縄文土器 (第416図)

築道下遺跡の調査では、わずかではあるが、縄文時代の遺物も出土している。しかし、遺構は検出されおらず、すべてが遺構外、もしくは後世の住居跡などから発見されたものである。これらの製作期は縄文時代でも後期から晩期がもっぱらで、土器片はいずれも風化が著しい。

第416図 調査区内出土縄文土器



(2) 石器・石製品 (第417図)

石器・石製品は9点を図示した。1はチャート製の有茎鏃で、茎部と先端の双方が欠損する。鏃身の基部が丸みを帯びるため、おのずと短い茎長が推定できる。2もホルンフェルス製の有茎鏃だが、両側縁に段差を

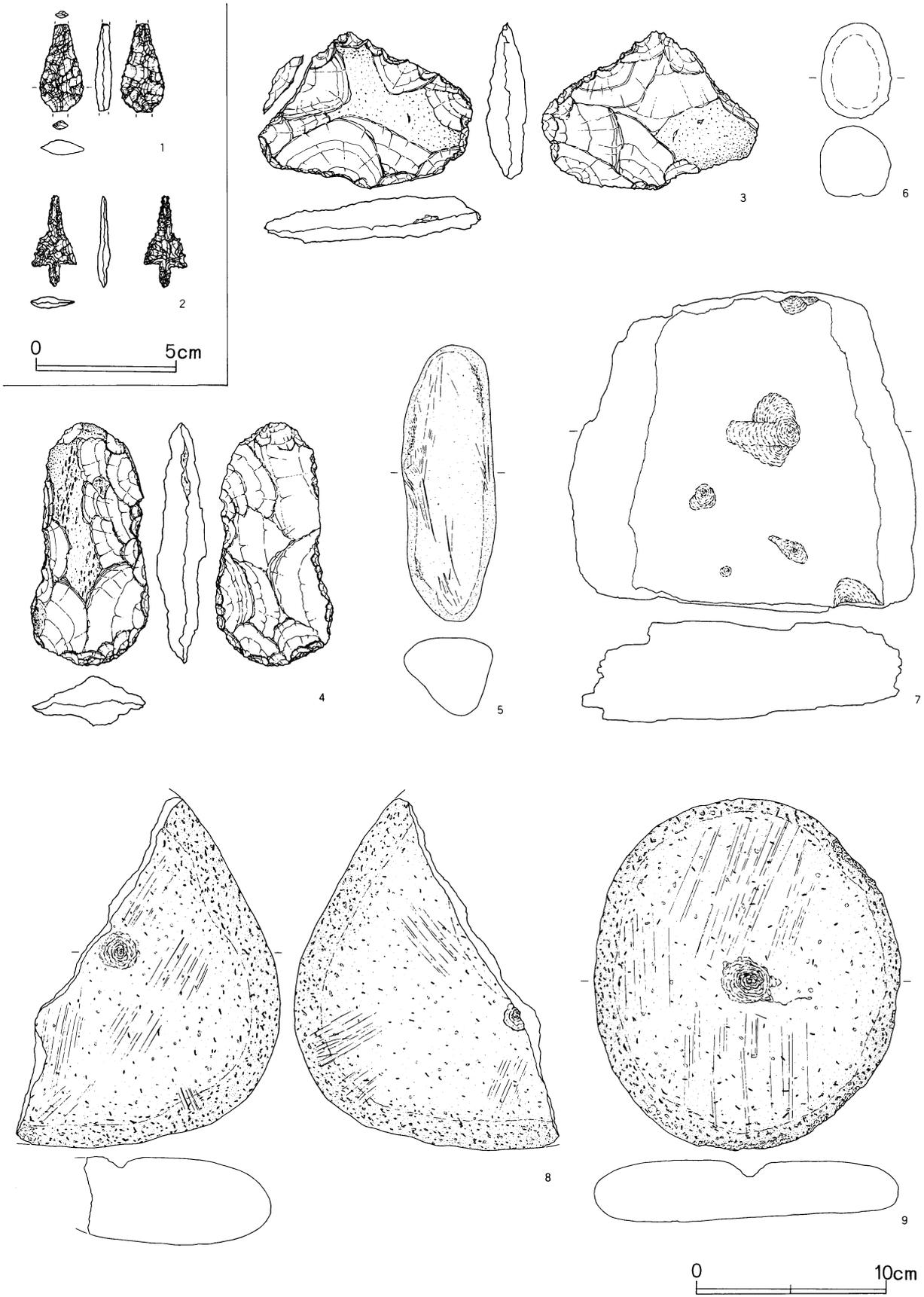
第416図1・2は後期堀之内系の土器である。前者は縄文地の波頂部から三本一単位の沈線を垂下させるI式、後者は帯縄文区画をもつII式精製系土器の一部である。また、3は、類例に乏しいが、曾谷式周辺でまま見られる、内傾する口縁部に二本単位の沈線鋸歯文をめぐるす鉢形土器と考えられる。

これに対し、4~6は安行系の土器で、三叉状の入組文が主要な構図になると考えられる。4・5は晩期3d式に、6の、隆帯をとまわらない条線地の粗製土器はI式に相当するだろう。

設け、いわゆる飛行機鏃としての形態を整えている。

これに加えて、刃器が2点出土している。4はホルンフェルス薄片を用いた撥形の打製石斧だが、正面形態は丸味が強く、刃部は円刃となる。3は薄手の砂岩塊に対し、三角の形状を意図した剥離を加える。礫器

第417図 調査区内出土石器・石製品



の部類に含まれるだろうが、欠損部を頭部に見立てれば、洋梨形の石斧ともとれる。だが、想定できる頭部はあまりにも小さい。

5は表面に擦痕を有する棒状の礫で、6は磨石状の円礫である。7～9は大型の凹石である。7は片岩製

で片面に6箇所、8は角閃石安山岩製で表裏面に各1箇所、9も角閃石安山岩製で片面に1箇所、それぞれ凹部を有する。

1～4、および7～9は縄文時代の遺物と考えられるが、5・6については明確でない。

第170表 調査区内出土石器・石製品観察表

番号	遺構	種類	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	SJ 458	有舌石 鏃	3.1	1.5	0.6	236	チャート	両端部欠損
2	SJ 385	石 鏃	3.3	1.6	4.0	1.08	不明	
3	SD 123	石 匙	8.3	11.3	2.1	169.13	砂 岩	ほぼ均質だが縦方向に流れ有り
4	SD 123	打製石 斧	12.9	5.2	2.7	186.93	ホルンフェルス	3～4ヶ所に自然面残 風化
5	SJ 472	棒状 礫	14.4	4.8	4.1	455.32		擦痕
6	SE 203	磨石 ?	4.9	3.7	3.7	79.03		
7	SE 203	凹 石	18.3	18.2	5.1	2630.00		6ヶ所
8	SJ 537・538	凹 石	17.6	13.0	4.4	1470.00	角閃石安山岩	2ヶ所
9	SJ 527	凹 石	18.3	16.1	3.2	1627.00		1ヶ所

(3) 片岩製品 (第418・419図)

ここで扱う片岩製品とは、不定形の片岩を用い、その側縁に打撃加工を施したものである。出土は井戸跡と溝跡からほとんどで、しかも、1遺構に数点と偏在する傾向が窺われる。

片岩は厚さ2cm前後のものが多いが、大きさや重量はまちまちである。打撃痕は1～2箇所のものが大半で、多いものでは11箇所というものもある。打撃の加

えられた位置は一定せず、その規模にも統一感がない。いずれも丁寧な加工ではなく、1箇所に1度の打撃のみである。

井戸跡と溝跡に集中する点は不明ながら、それらに関係の深い遺物と見ることは可能であろう。あるいは、紐などを打撃痕に巻きつけ、錘的に用いたものではなかろうか。出土遺構から推して、中世の遺物と考えられる。

第171表 調査区内出土片岩製品観察表

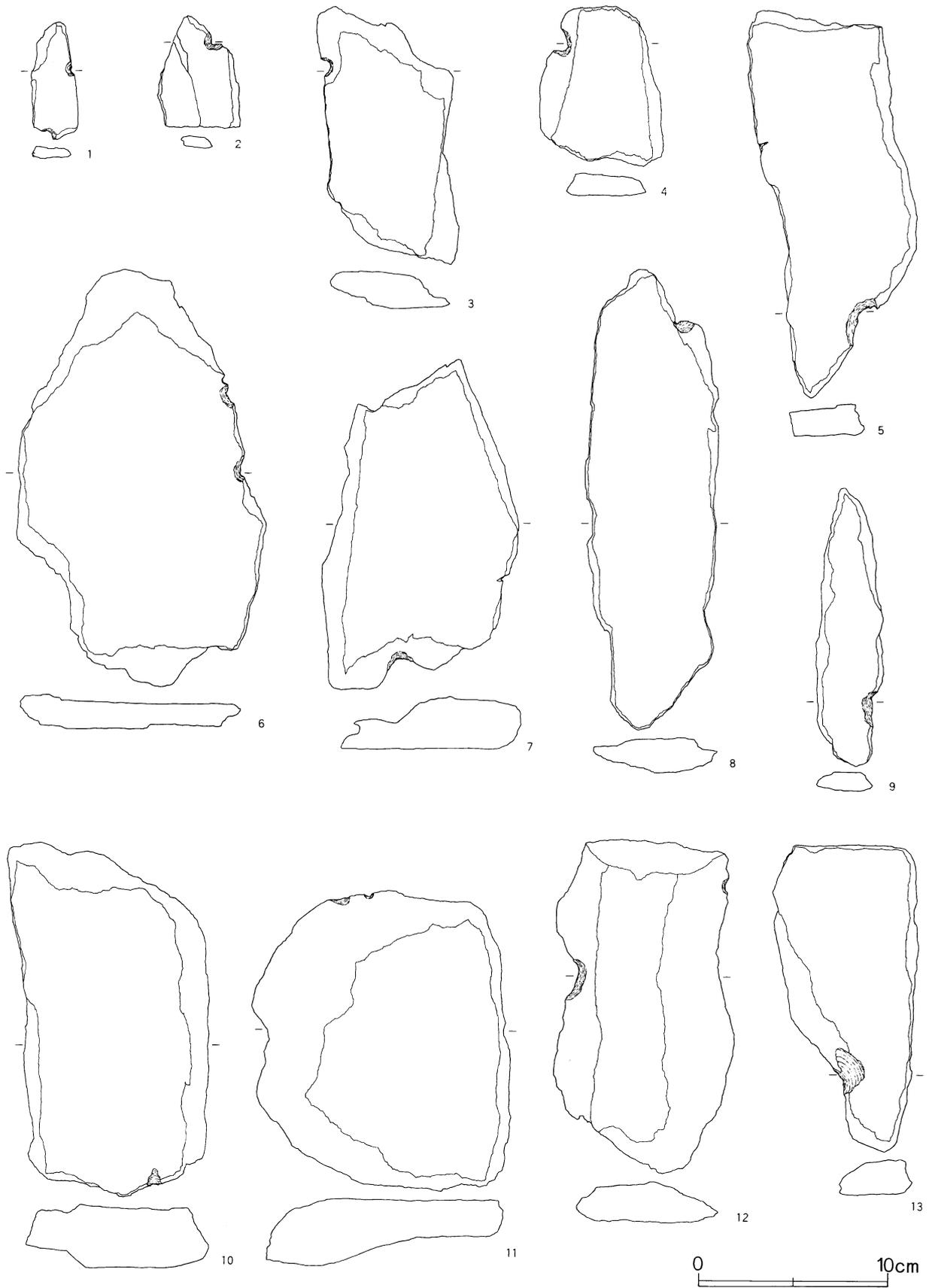
番号	遺構	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考	番号	遺構	縦(cm)	横(cm)	厚(cm)	重さ(g)	備考
1	SK 532	6.2	2.4	0.6	11.41	潰し痕2	14	SD 77	12.4	6.2	1.6	193.66	潰し痕2
2	Pit 914	5.8	4.3	0.6	23.41	潰し痕1?	15	SD 77	10.1	9.2	1.6	180.05	潰し痕3
3	SE 176	12.0	5.8	1.9	258.22	潰し痕1	16	SD 77	12.8	12.7	1.3	288.46	潰し痕8?
4	SE 176	8.1	6.4	1.2	120.61	潰し痕1	17	SD 115	12.2	8.0	2.0	306.75	潰し痕2
5	SE 201	19.9	7.2	1.6	439.24	潰し痕1	18	SD 115	10.8	7.2	1.1	153.37	潰し痕1
6	SE 201	21.3	13.1	1.6	596.25	潰し痕2	19	SD 115	9.1	5.4	0.8	60.14	潰し痕4
7	SE 201	15.5	9.7	2.7	573.15	潰し痕2	20	SD 123	7.4	6.0	1.8	124.01	潰し痕2
8	SE 202	24.1	6.7	1.8	413.66	潰し痕1?	21	SD 124	10.5	7.6	1.3	135.44	潰し痕2
9	SE 202	14.3	3.4	1.0	80.26	潰し痕1	22	SD 124	15.7	7.1	2.2	407.11	潰し痕11
10	SE 203	17.4	9.6	3.2	1081.00	潰し痕1?	23	SD 127	5.4	2.4	0.9	17.31	潰し痕1
11	SE 207	15.5	13.3	3.2	975.99	潰し痕2?	24	SD 127	8.4	4.8	0.9	73.70	潰し痕3
12	SE 244	17.3	9.3	2.1	489.33	潰し痕2?	25	SD 127	8.1	5.3	1.1	43.50	潰し痕4
13	SE 244	16.0	7.6	1.8	510.29	潰し痕1?	26	SD 127	9.8	7.1	1.5	151.59	潰し痕2

(4) 砥石 (第420図)

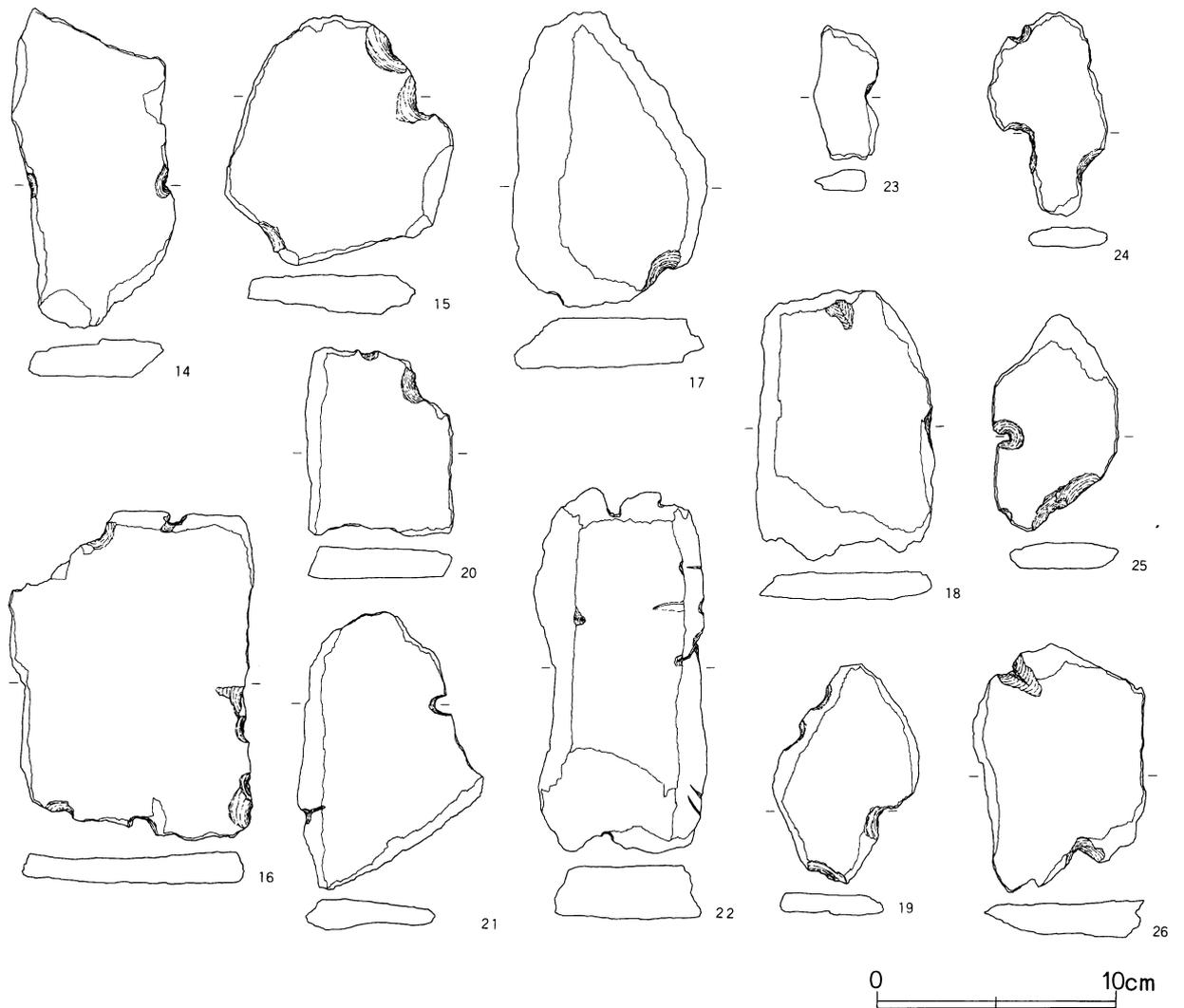
図示した砥石14点は、住居跡・井戸跡・溝跡から出土している。石材は凝灰岩を用いており、小型から中型のものが多い。大半は破損が顕著で、再利用されたものも見られる。

1は表裏面と両側面、および下端に擦痕を有する。再利用品と思われ、かなり薄手である。2は撥形の小用品で、上端部を欠失する。四面と下端面が丁寧に使い込まれている。3は撥形、ないしは短冊形であったと思われるが、中心線を境に割れてしまっている。現

第418図 調査区内出土片岩製品（1）



第419図 調査区内出土片岩製品（2）



状で四面が使用されていることから、破損後の再利用品と判断される。孔も本来のもの下に、新たに穿ちなおされている。4は短冊形ながら、上下端と側面の一方は欠失している。全体は煤けており、破断面の一部ははその後面に面取りがなされる。このため、不意の破損なのか、故意の切断なのかは明らかでない。5は分銅形であったと思われるが、上下端と裏面を欠失する。6は分銅形で、上端の一部と下端部を欠く。四面と裏面の一角が使用され、裏面には未貫通の穿孔が見られる。7は撥形で、上端部を大きく欠失する。四面および下端部が丁寧に使い込まれ、中央部はかなり薄くなっている。8は撥形で、四面と上下の端面が使用されている。表裏面の上端部には未貫通の浅い穿孔が

施される。9は短冊形を呈し、上下端部を欠く。四面および下端部欠失部に、やや粗い条痕状の使用痕が見られる。また、全面が薄く煤けている。10は大型の砥石であるが、上下と2面を欠失する。全体に火熱を受けており、赤変や煤けが認められる。11は撥形の片岩製で、全面が使用されている。砥石として扱ったものの、全体的に丸みが強く、擦痕も不明瞭である。あるいは、丁寧に研磨された石製品であるかもしれない。12は部分的な残存で、裏面には金属の刃器で削ったと思しき痕跡が多く認められる。13もやや異質で、砥石に含めて良いか躊躇される。台形状の製品で、石材も砂岩である。表裏面と一側面は良く使い込まれ、滑沢となっている。また残る一側面には、薬研状の条線が

第420図 調査区内出土砥石



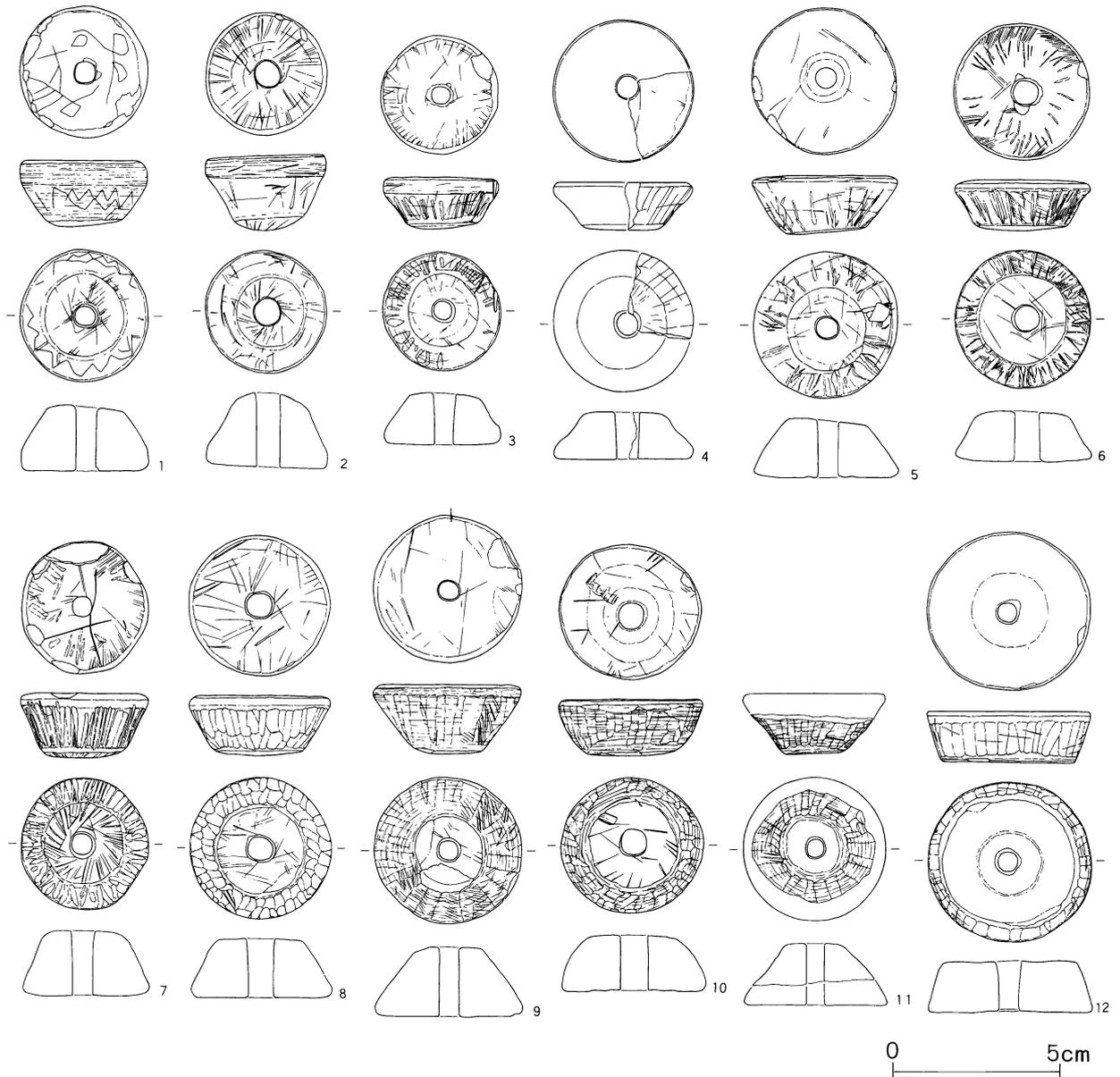
切り込まれる。14は分銅形の大型品で、四面が丁寧に
使われている。上下の端部はともに欠くが、条痕状の

使用痕がよく残る。

第172表 調査区内出土砥石観察表

番号	遺構	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	孔	番号	遺構	縦 (cm)	横 (cm)	厚 (cm)	重さ (g)	孔
1	SE 146	4.4	3.2	0.5	13.61		8	SJ 543	8.6	3.1	2.7	136.36	1ヶ所
2	SJ 387・388	3.4	2.1	1.4	15.91		9	SE 162	8.3	3.0	1.7	104.98	
3	SD 123	5.4	2.5	2.2	36.05	2ヶ所	10	SJ 506・510	14.5	7.0	4.5	519.71	
4	SD 111	7.4	4.8	2.5	162.23		11	SJ 488	8.8	4.3	2.1	117.38	
5	SE 176	9.5	6.2	2.7	268.60		12	SJ 493	9.7	5.4	2.3	150.45	
6	SJ 443	6.7	2.9	2.6	77.62	1ヶ所	1	SJ 471	9.9	9.5	4.3	362.49	
7	SJ 417	5.9	3.1	1.4	45.80		14	SE 146	22.4	4.8	4.4	1194.00	

第421図 調査区内出土紡錘車



(5) 紡錘車 (第421図)

今回報告する紡錘車は12点で、一つが土壌であるほかは、すべて住居跡からの出土である。このうち、第387号住居跡と第472号住居跡からは、3点ずつが検出されている。住居跡とともに遺存状態が良好で、土器などの出土も多い。こうした傾向は築道下遺跡全体にいえることながら、1軒から3点というのは極めて特異である。

紡錘車の大部分は滑石片岩を用いている。このほかには、4のような凝灰岩製のものもある。大きさはおよそ直径4cm、厚さ1.5cm、重さ40g前後である。

大半は上下面ともに平坦で、下面が狭く断面が逆台形となる。ただし、2は下面が丸みを有し、12はそれが広い。また、側面は急傾斜ながら、10のように膨らみの強いものも見られる。

表面は8～11のように金属器による削痕を残すものの、5～7のように丁寧に研磨された後、削りの加えられたものなどが認められる。

さらに、1は側面に鋸歯文、上面に絵画と思しき線刻が、4は側面から下面にかけ放射状の線刻が、それぞれ施される。7も上面に「×」状の線刻がある。

第173表 調査区内出土紡錘車観察表

番号	遺構	径 (cm)	厚 (cm)	孔径 (mm)	重さ (g)	番号	遺構	径 (cm)	厚 (cm)	孔径 (mm)	重さ (g)
1	SJ 387	3.8	1.9	6.0	43.03	7	SJ 472	3.8	1.9	6.0	41.43
2	SJ 387	3.6	2.2	7.0	38.48	8	SJ 513	4.2	1.7	7.5	44.76
3	SJ 387	3.5	1.6	5.5	26.24	9	SJ 553	4.4	2.1	6.0	51.41
4	SJ 461	(4.2)	1.4	(7.0)	7.21	10	SJ 556	4.3	1.7	8.2	44.08
5	SJ 472	4.6	1.7	6.0	46.09	11	SJ 558	(3.6)	(1.2)	5.5	16.03
6	SJ 472	4.1	1.5	7.5	34.61	12	SK 366	4.8	1.5	6.0	66.00

(6) 玉類 (管玉・ガラス玉・白玉・土玉・土錘)

a. 管玉 (第422図 1～12)

管玉はいずれも、いわゆる碧玉製である。2～11はガラス玉とともに、第514号住居跡からまとまって出土している。10個のうち2点は3cm弱、残りの8点は2cm程度である。太さは0.75cm前後ではほぼ一定し、穿孔はすべて片側から行なわれている。ガラス玉と組み合わせられ、一連の装飾品をなしていたものと考えられ

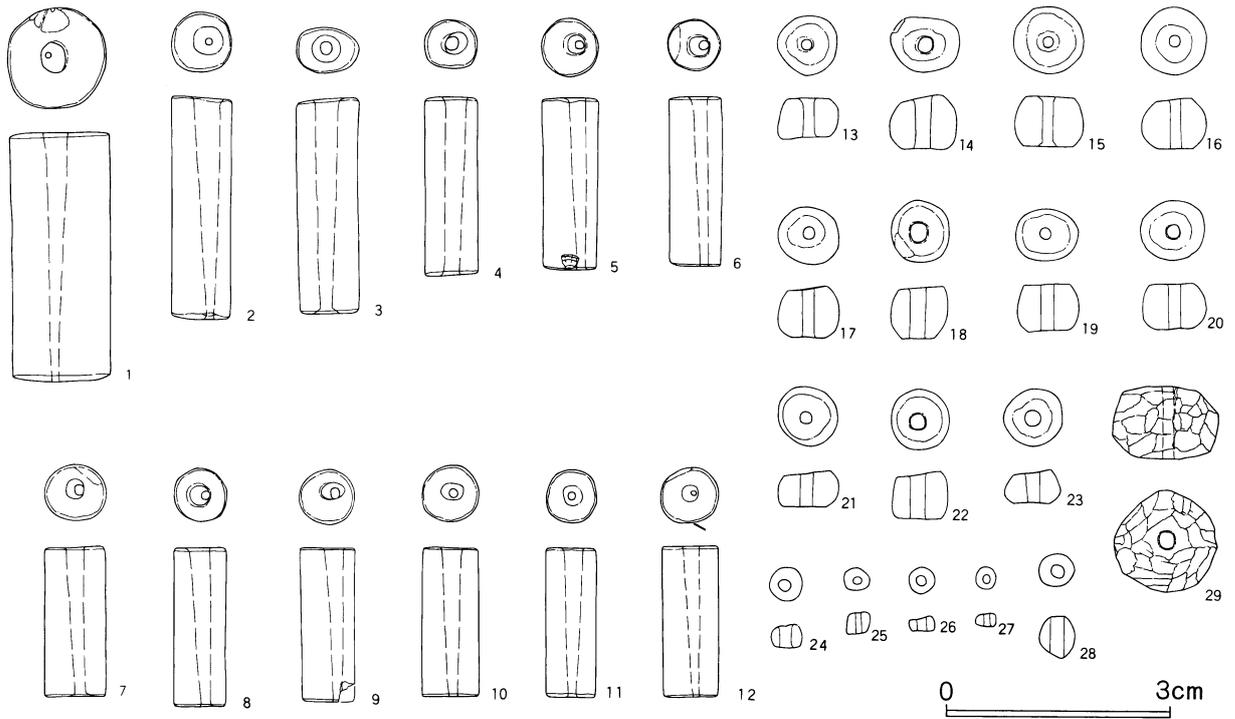
る。通常の住居跡からの出土であることは、極めて異例である。

なお、化学分析ではSiO₂の値が低く、MgOの値が高いもの、SiO₂の値が高く、MgOの値が低いもの、という2種類に大きく分かれるという結果を得ている(付編参照)。これは石質の違いということであるが、産出地などは明らかとし得ない。

第174表 調査区内出土玉類観察表

番号	遺構	種類	縦 (mm)	横 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)	番号	遺構	種類	縦 (mm)	横 (mm)	孔径 (mm)	重さ (g)
1	SJ 418	管玉	33.5	13.2	1.0～3.2	12.15	16	SJ 514	ガラス玉	8.5	6.0	1.5	0.76
2	SJ 514	管玉	29.0	8.0	1.0～3.5	3.05	17	SJ 514	ガラス玉	7.5	6.0	1.5	0.63
3	SJ 514	管玉	28.0	6.8	1.5～3.5	2.60	18	SJ 514	ガラス玉	8.0	7.0	2.0	0.60
4	SJ 514	管玉	24.0	7.0	2.5～3.0	2.24	19	SJ 514	ガラス玉	7.5	6.0	1.5	0.59
5	SJ 514	管玉	23.0	7.5	1.0～2.5	2.21	20	SJ 514	ガラス玉	8.0	6.0	1.5	0.60
6	SJ 514	管玉	22.0	7.0	1.0～2.5	2.06	21	SJ 514	ガラス玉	8.0	4.5	1.5	0.43
7	SJ 514	管玉	20.0	7.5	1.0～2.0	2.24	22	SJ 514	ガラス玉	8.0	6.0	2.0	0.58
8	SJ 514	管玉	21.0	7.0	1.0～2.5	1.74	23	SJ 514	ガラス玉	7.5	4.0	1.5	0.31
9	SJ 514	管玉	20.0	7.5	1.0～2.7	1.82	24	SJ 514	ガラス玉	4.5	3.0	1.5	0.11
10	SJ 514	管玉	20.0	7.5	1.0～2.5	2.11	25	SJ 514	ガラス玉	3.5	3.0	1.0	0.07
11	SJ 514	管玉	20.0	7.0	1.0～2.5	1.75	26	SJ 514	ガラス玉	3.5	3.5	1.5	0.07
12	表採	管玉	20.0	7.5	1.0～2.0	2.29	27	SJ 514	ガラス玉	3.0	2.0	1.0	0.07
13	SJ 501	ガラス玉	5.5	8.0	1.5	0.41	28	SJ 385・387・388	石製小玉	5.0	5.5	2.0	0.11
14	SJ 514	ガラス玉	6.5	7.9	2.0	0.71	29	SJ 558	滑石製丸玉	14.0	9.5	2.0	2.47
15	SJ 514	ガラス玉	6.5	9.5	1.5	0.82							

第422図 調査区内出土玉類



b. ガラス玉(第422図13~27)

ガラス玉も13を除き、すべて第514号住居跡からの出土である。大ぶりの10点(14~23)は径8mm、厚さ6mm前後で、やや明るい青色と、深く濃い青色に分けられる。いくぶんいびつなものもあるが、上下の面はおおよそ平坦である。小ぶりの4点(24~27)は径3.5mm、厚さ3mm前後で、いずれも淡い青色、スカイ・ブルーである。

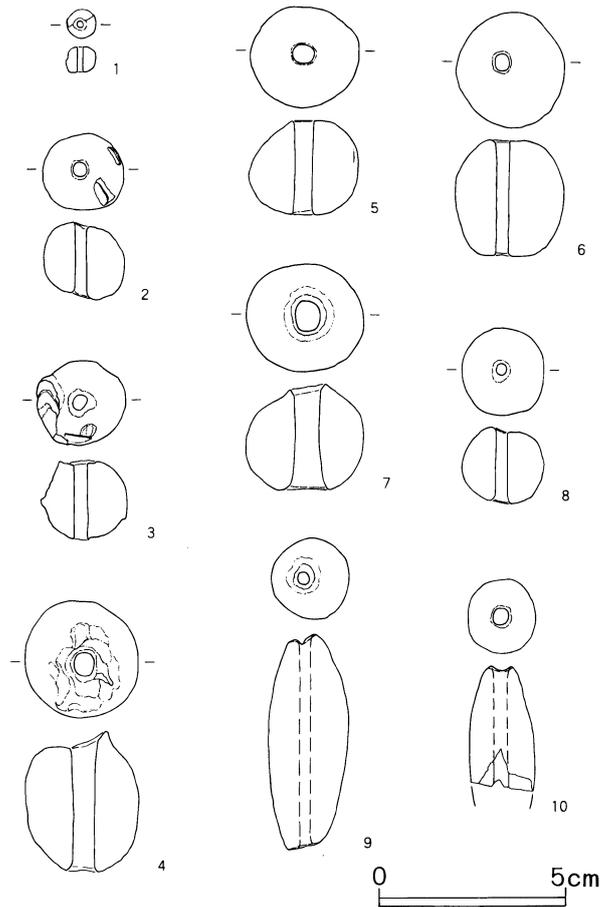
これらも化学分析を行なったところ、その成分から、大ぶりのものはソーダ・ライムガラス、小ぶりのものはソーダガラスに分化できるとの結果を得た。ただし産地などについては、明らかとし得なかった。

c. 白玉(第424図)

掲載した29点の白玉は、そのほとんどが住居跡からの出土である。第510号住居跡から4点、第366号・第382号、第387号の各住居跡から3点ずつ見出されている。

いずれも滑石製で、直径・厚さ・孔径はまちまちである。断面は円筒状のものが多く、これに13・20・25のように算盤玉状となるもの、18のように太鼓の胴部

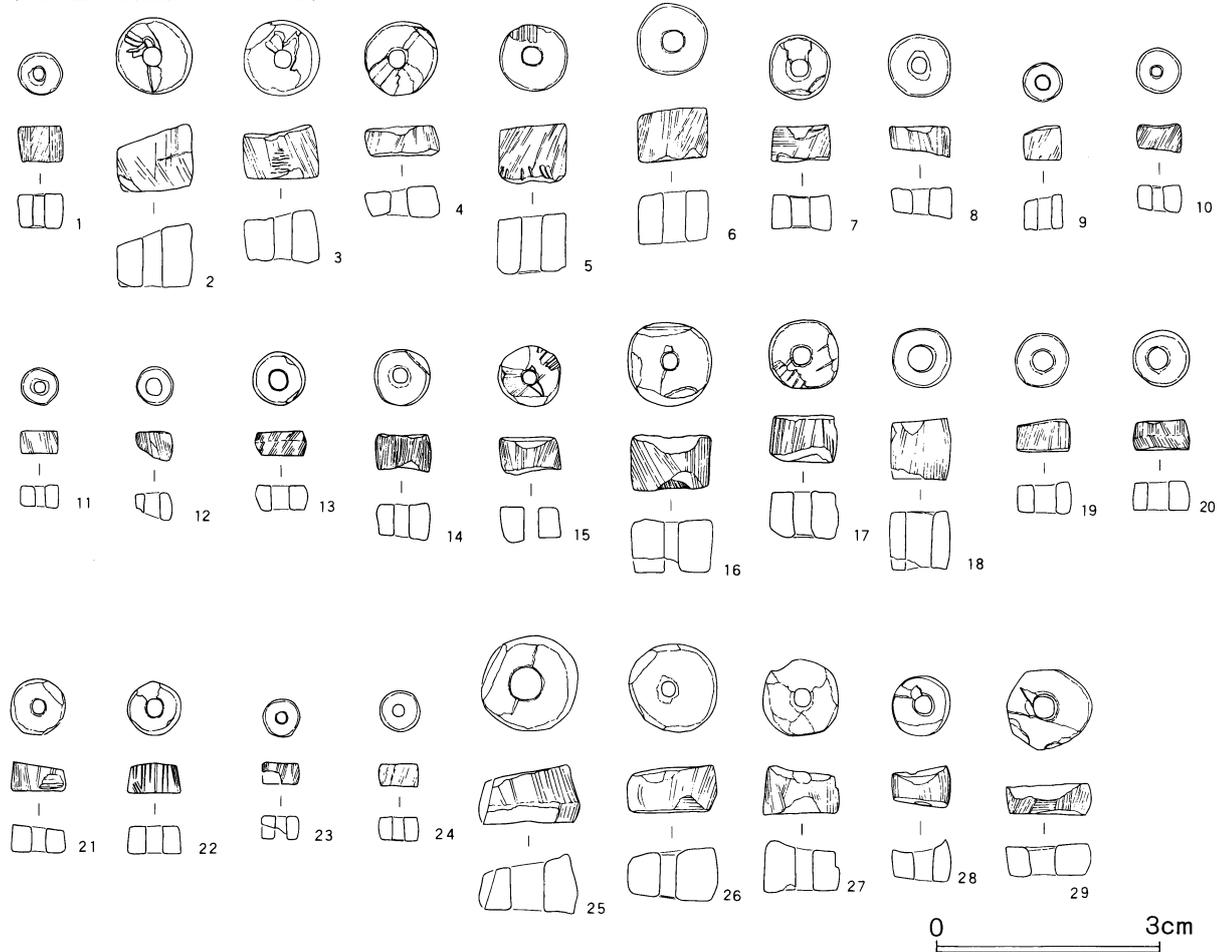
第423図 調査区内出土土玉・土錘



第175表 調査区内出土土玉・土錐観察表

番号	遺構	種類	縦(mm)	横(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	番号	遺構	種類	縦(mm)	横(mm)	孔径(mm)	重さ(g)
1	SJ386	土玉	0.8	0.7	1.5	0.44	6	SJ558	土玉	3.0	3.0	3.5	22.68
2	SJ507~509	土玉	2.2	1.9	3.0	8.26	7	SJ554	土玉	3.2	2.7	6.5	23.52
3	SJ543	土玉	2.3	2.1	3.5	10.71	8	SK464	土玉	2.3	2.0	3.0	8.34
4	SK571	土玉	3.0	3.4	5.5	32.47	9	SJ351	土錐	2.1	5.7	3.0	23.34
5	SJ550	土玉	3.0	2.5	4.5	17.59	10	SX16	土錐	1.9	(3.3)	4.0	10.87

第424図 調査区内出土滑石製白玉



第176表 調査区内出土滑石製白玉観察表

番号	遺構	直径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	番号	遺構	直径(mm)	厚(mm)	孔径(mm)	重さ(g)
1	SJ351	6.0	4.5	1.5	0.29	16	SJ485	11.0	7.0	2.0	1.55
2	SJ366	10.0	8.0	2.5	1.42	17	SJ495	9.2	6.0	2.5	0.58
3	SJ366	10.5	7.0	2.3	1.16	18	SJ508	7.5	8.3	3.5	0.76
4	SJ366	9.5	4.0	2.2	0.59	19	SJ514	7.0	4.0	3.0	0.36
5	SJ382	9.0	7.5	2.5	1.04	20	SJ510	7.5	4.0	2.9	0.33
6	SJ382	9.5	6.5	3.0	0.98	21	SJ510	7.0	4.0	1.9	0.23
7	SJ382	8.5	5.0	2.5	0.52	22	SJ510	7.0	4.0	2.5	0.29
8	SJ385	8.5	4.0	2.0	0.39	23	SJ510	5.0	3.0	1.5	0.12
9	SJ387	5.0	4.5	2.0	0.16	24	SJ551	5.0	3.0	1.7	0.14
10	SJ387	5.6	4.0	1.5	0.18	25	SJ552	11.3	8.0	4.5	1.80
11	SJ387	5.0	3.0	1.0	0.10	26	SJ559	11.8	6.0	2.1	1.33
12	SJ388	5.0	4.0	2.8	0.13	27	表採	10.5	6.0	2.2	0.99
13	SJ397・398	7.0	3.1	2.5	0.24	28	表採	7.5	5.0	2.1	0.49
14	SJ452	7.1	5.0	2.0	0.42	29	Y-19ケリッド	11.5	4.0	3.5	0.66
15	SJ472	8.3	5.0	1.9	0.41						

状となるものなどが加わる。

なお、白玉ではないが、第422図28は材質不明の石製小玉、29は滑石製の丸玉である。後者は金属の刃器で整形されており、全面に削痕が見られる。

d. 土製丸玉(第423図1～8)

土玉は住居跡から6点、土壙から2点を出土したにとどまる。遺構の覆土から単独で検出されたものがほとんどであり、これまでのように、土器の出土が多い住居跡というような傾向は窺えない。

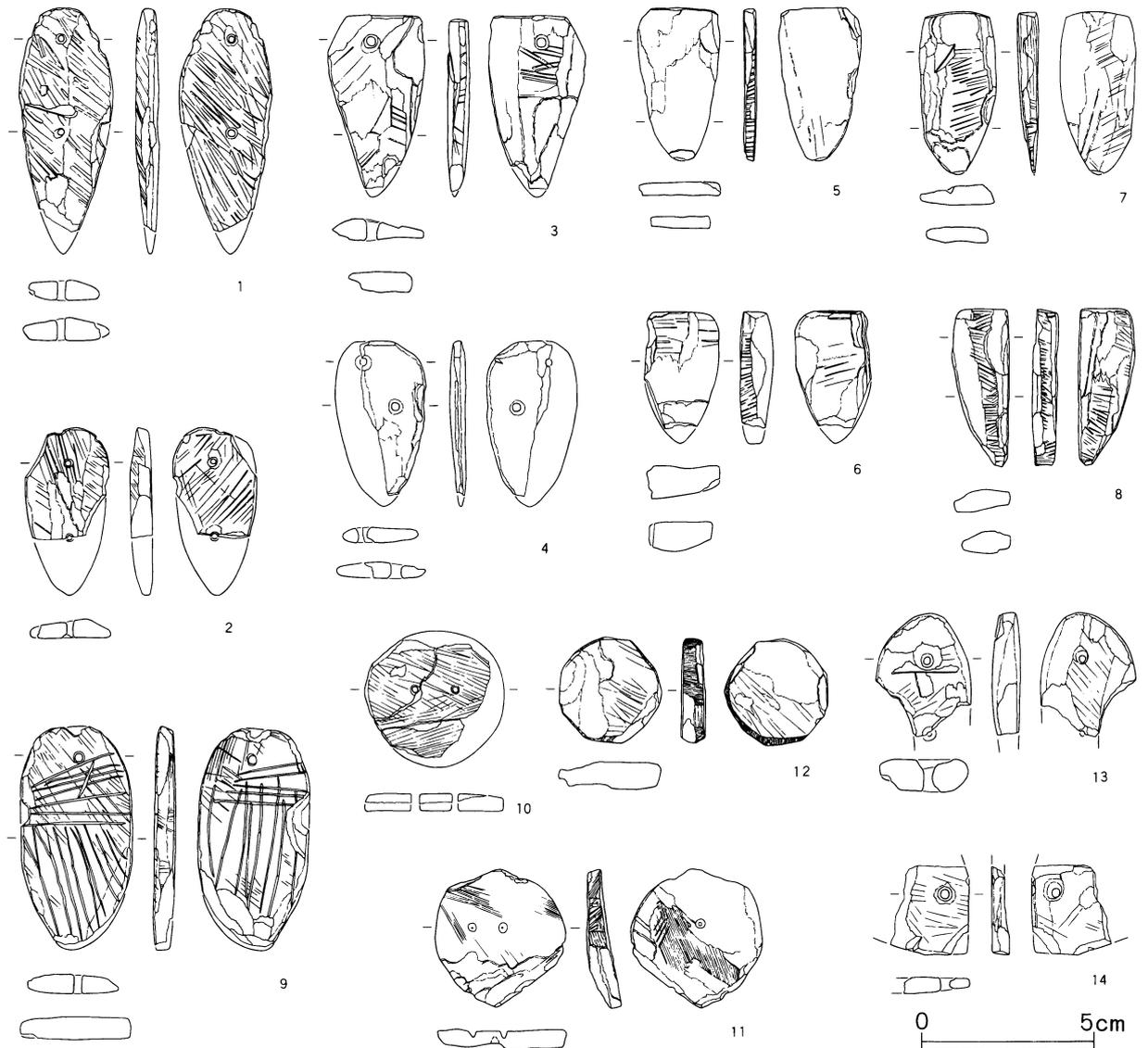
ともに焼成は良好で、1のように小粒なもの、4～

7のように大粒のもの、2・3・8のようにその中間のものが認められる。

e. 土錘(第423図9・10)

土錘は第351号住居跡、および第16号性格不明遺構からそれぞれ1点が検出されたにすぎない。『築道下遺跡Ⅱ』においても触れたが、遺跡の立地が元荒川に沿った自然堤防上であるにもかかわらず、土錘の出土はかなり少ないといえる。この点は生業の中でも、漁労への依存度が低かったことを物語るもの、と理解することができよう。

第425図 調査区内出土滑石製模造品



(7) 滑石製模造品 (第425図)

今回報告する滑石製模造品は14点である。1～8は剣形品と思われるが、第458号住居跡から出土した4点は無孔である。また、4は2孔の位置がやや不自然であるため、断定は避けておきたい。9は表裏に線刻が施されており、孔を目に見たてれば魚のようでもある。しかし、全体の形状と線刻のあり方から、ここでは堅櫛を表現したものと見ておきたい。10は有孔円板、11はその未製品で、両面からの穿孔は未貫通である。12は無孔の円板で、穿孔が試みられた様子はない。14も方形状の有孔円板の一部であろう。13は部分的な残存ながら、馬形ではないかと考えられる。

る。しかし、全体の形状と線刻のあり方から、ここでは堅櫛を表現したものと見ておきたい。10は有孔円板、11はその未製品で、両面からの穿孔は未貫通である。12は無孔の円板で、穿孔が試みられた様子はない。14も方形状の有孔円板の一部であろう。13は部分的な残存ながら、馬形ではないかと考えられる。

第177表 調査区内出土滑石製模造品観察表

番号	遺構	種類	縦(mm)	横(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	番号	遺構	種類	縦(mm)	横(mm)	孔径(mm)	重さ(g)
1	SJ 387	剣形	(6.4)	2.7	6.5	14.98	8	SJ 458	無孔剣形	4.5	1.6	7.5	8.07
2	SJ 385・387	剣形	(3.2)	2.4	6.0	6.72	9	SJ 388	堅櫛?魚?	6.2	3.2	6.5	20.89
3	SJ 532	剣形	4.9	2.9	6.0	11.06	10	SJ 388	有孔円板	4.0	3.9	(3.0)	4.06
4	SJ 429	剣形	(4.4)	(1.9)	4.5	4.76	11	SJ 443	有孔円板	3.9	3.8	5.0	12.80
5	SJ 458	無孔剣形	4.4	2.4	3.5	6.60	12	表採	無孔円板	3.0	2.9	7.0	9.63
6	SJ 458	無孔剣形	(3.3)	(2.1)	9.5	9.47	13	SJ366	馬形?	(3.5)	(2.7)	8.0	10.05
7	SJ 458	無孔剣形	4.6	2.2	6.0	8.59	14	AD-19ケ'リッド	有孔円板?	(2.6)	(2.3)	4.7	5.12

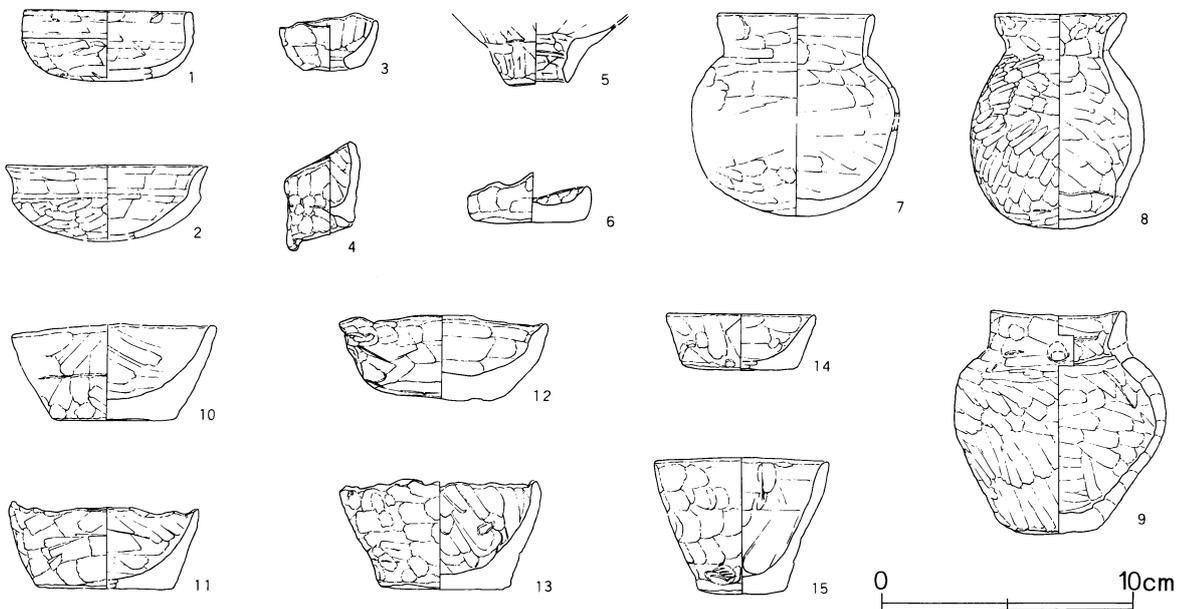
(8) ミニチュア・手捏ね土器 (第426図)

ここに掲載した15点の遺物は、日常什器の類とは明らかに異なるものであるため、それぞれの遺構出土土器とは分けて扱った。

1と2は杯のミニチュアである。作りは精緻で、通常のもの以上に丁寧である。ただ、非常に小型であり、実用性には乏しいと思われる。12も杯、ないしは碗状である。3と5は甑のミニチュアである。5は破片ながら、作りは丁寧に焼成も良好である。これに較べると3は手捏ね風で、模造品といった印象を受け

る。極めて小型ながら、造形は原物に忠実である。4は何らかの模造品であろうが、その原物は不明である。一見すると、臼のようにも思える。6・10・11・13～15は、手捏ね状の容器形土製品である。13以外はヘラ状工具による撫でや削りが施されており、厳密な意味では手捏ねといえないが、その形状から同一に扱う。このうち、10・11・13の3点は第366号住居跡からの出土である。7～9は壺のミニチュアである。これらも作りは実用品と同様で、表現は忠実である。9の頸部には、一対の穿孔が見られる。

第426図 調査区内出土ミニチュア・手捏ね土器



第 178 表 調査区内出土ミニチュア・手捏ね土器観察表

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	SJ 512	ミニチュア(坏)	(6.7)	(2.7)		細 (B)	普	灰 黄 褐	30	白? 頸部に一對の穿孔あり
2	SJ 549	ミニチュア(坏)	(8.1)	(2.9)		微 (W)	良	明 褐 灰	30	
3	SJ 377	ミニチュア(甌)	3.8	2.0	1.8	細 (W, F)	普	浅 黄 橙	80	
4	SJ 397	模 造 品	3.0	(4.2)	2.7	粗 (W, B)	普	に ぶ い 橙	90	
5	SX 16	ミニチュア(甌)	(2.4)	2.4		粗 (W, R)	良	に ぶ い 赤 褐	破片	
6	SJ 385	手 捏 ね	4.8	(2.0)	4.5	粗 (W, B, R)	普	に ぶ い 黄 橙	80	
7	SJ 382	ミニチュア(壺)	(6.3)	(8.1)		礫 (C, 片)	普	に ぶ い 黄 橙	50	
8	SJ 472	ミニチュア(壺)	5.3	8.6		細 (W, B, C)	良	に ぶ い 橙	100	
9	SJ 475	ミニチュア(壺)	(5.3)	8.7	3.4	粗 (W, R)	良	に ぶ い 黄 橙	80	
10	SJ 366	手 捏 ね	(8.1)	3.8	4.9	細 (W, B, C, R, 片)	普	に ぶ い 橙	60	
11	SJ 366	手 捏 ね	5.5	3.3	5.4	粗 (W, B, C, R, 片)	普	に ぶ い 橙	70	
12	SJ 446	ミニチュア(坏)	(6.9)	5.4	3.4	礫 (W, R, 片)	普	に ぶ い 黄 橙	70	
13	SJ 366	手 捏 ね	7.9	4.3	5.3	粗 (W, B, C, R, 片)	良	に ぶ い 黄 橙	100	
14	SJ 383	手 捏 ね	(5.9)	2.2	(4.4)	微 (W, B)	良	に ぶ い 褐	45	
15	SJ 446	手 捏 ね	8.3	3.3	5.2	粗 (W, B, R)	良	橙	80	

(9) 鉄製品 (第427・428図)

鉄製品は住居跡をはじめ、掘立柱建物跡・土壇・井戸跡・溝跡・ピット・性格不明遺構それぞれから出土している。特定の遺構や時期的に集中する傾向は窺われず、製品も多岐にわたっている。

1～7は鎌で、いずれも小型のものである。細身の刃部は内湾し、6・7の先端部は鉤の手状となる。残存する着柄部から見ると、柄は刃に対してほぼ直角となるものと、鈍角となるものの2種類に分けられる。

8～14は刀子と思われるが、14は小刀とすべきかもしれない。茎はともに短く、目釘穴は見とめられない。区の作り出しは明瞭で、8には柄の責め金具が残

存する。

15も刃器状であるが、全体に太めで側縁部は丸みが強い。茎と思しき部分には、目釘穴状の穿孔を有する。16はやや身幅のある小刀と思われるが、刃は鈍い。

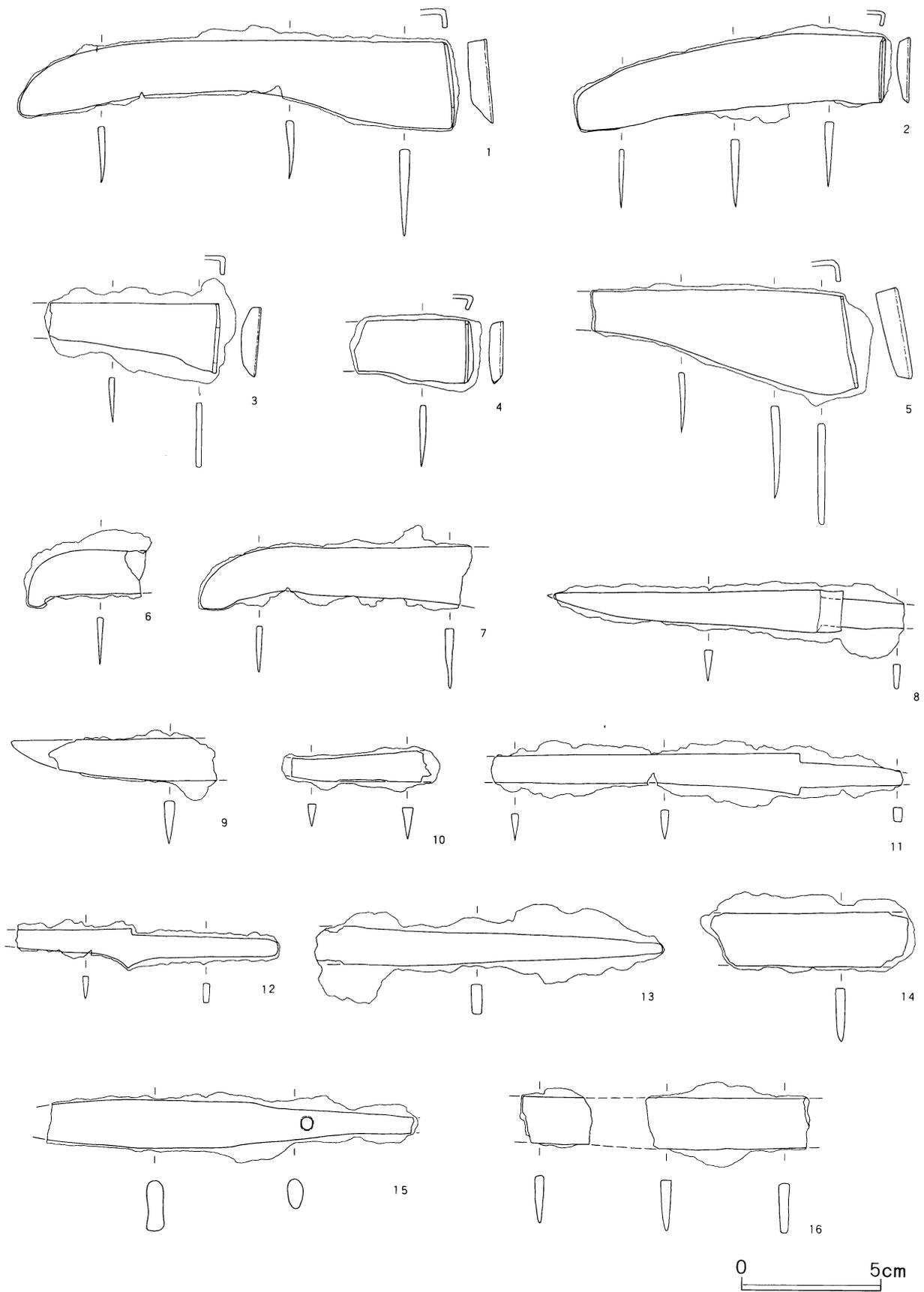
17は完存の角釘である。頭部は鑿で切り込みを入れ、先端を折り曲げて作り出している。18～20も釘の欠損品と思われる。

21は突出部を有する棒状品である。刃部を失うが、鎌ではないかと思われる。22～29は棒状の性格不明品である。断面は楕円形となるものと、方形となるものが見られる。26はごく細身で薄い製品である。明瞭な刃部は見られないが、刀子かもしれない。他は釘、な

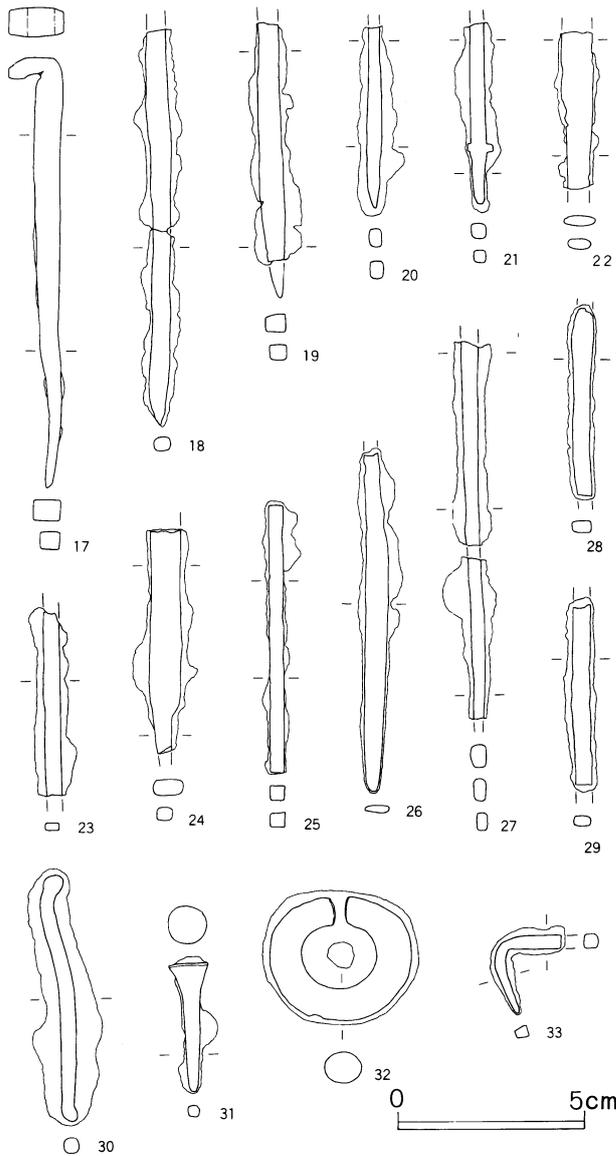
第 179 表 調査区内出土鉄製品観察表

番号	遺構	種類	重さ (g)	長×幅・径×厚 (cm)	備考	番号	遺構	種類	重さ (g)	長×幅・径×厚 (cm)	備考
1	SJ 378	鎌	43.34	15.5×3.1×0.4		18	SJ 452	不明品	17.08	10.5×0.4	釘か
2	SJ 512	鎌	59.64	11.1×2.4×0.3		19	SJ 474	不明品	11.43	6.3×0.7×0.5	釘か
3	SJ 513	鎌	33.70	6.1×2.5×0.2		20	SJ 402	不明品	8.93	4.9×0.5	釘か
4	SJ 385	鎌	18.05	4.2×2.3×0.2		21	SJ 425	棒状品	8.67	4.8×0.4	鎌か
5	SJ 437	鎌	60.82	9.2×3.6×0.3		22	SJ 474	棒状品	6.02	4.2×0.9×0.3	
6	SJ 512	鎌	13.49	4.0× - ×0.3		23	SJ 430	棒状品	5.68	4.9×0.5×0.2	
7	SJ 515	鎌	30.71	9.7×2.1×0.3		24	SK 513	棒状品	12.48	5.9×0.8×0.4	鎌か
8	SJ 513	刀 子	40.50	12.5×1.9×0.3		25	Pit 1102	棒状品	9.96	7.2×0.4×0.4	
9	表採	刀 子	13.63	6.0×1.5×0.4		26	SJ 366	棒状品	10.96	9.0×0.6×0.2	刀子か
10	SD 121	刀 子	10.55	4.7×1.1×0.4		27	SX 14	棒状品	16.06	9.7×0.6	
11	SD 106	刀 子	60.68	14.6×1.4×3.0		28	Pit 1111	棒状品	5.70	5.0×0.6×0.3	
12	SJ 461	刀 子	17.19	9.3×0.3		29	SJ 505	棒状品	4.71	4.8×0.5×0.3	
13	SJ 501	刀 子	58.95	12.3×0.4		30	SJ 430	不明品	18.01	6.5×0.4	
14	SE 262	刀 子	48.84	7.1×1.9		31	SB 120	不明品	3.57	3.9×1.0	釘か
15	SE 146	不明品	43.98	13.1×1.1×0.5		32	SB 120	耳環	41.54	3.4×3.8×1.0	
16	SK 513	不明品	45.73	10.1×1.8×0.4	小刀か	33	SJ 444	不明品	5.19	0.4×3.1	鏃か
17	SE 147	釘	22.58	11.4×0.8×0.6							

第427図 調査区内出土鉄製品（1）



第428図 調査区内出土鉄製品（2）



いしは鉄の可能性はある。

30は丸棒状の製品で、全体は緩い「S」字を描き、両端部は丸く膨らむ。31は短いビスのようで、頭部は平坦に仕上げられている。32は耳環であろう。錆に厚く覆われるものの、円環の切れ目は明確である。33は鉤の手に屈曲した棒状の製品で、一方の端部が尖っている。その形状から見て、鋸と思われる。

(10) その他のグリッド出土遺物 (第429図)

ここには表土除去時に採集された土器類を掲載した。いずれも本来は遺構に伴っていたものだろうが、これを明らかにすることはできなかった。

1～6は土師器の坏で、このうち1～3は赤色塗彩が施される。6は皿状で、内面には放射状の暗文が観察される。

7は高台付きの須恵器坏、8・9は須恵器の蓋、10～13は須恵器の坏である。8のつまみは特異で、半円状に粘土が貼りつけられたのみである。10の底部とその周縁、12の底部は回転ヘラ削り、9の上面と11の底部は回転糸切り離しである。

14～18は土師器の甕、19・20は須恵器の甕である。産地は19が秋間、20が南比企と考えられる。

21は中国龍泉窯産と思われる青磁の碗で、内面に櫛歯状工具による掻き目が見られる。

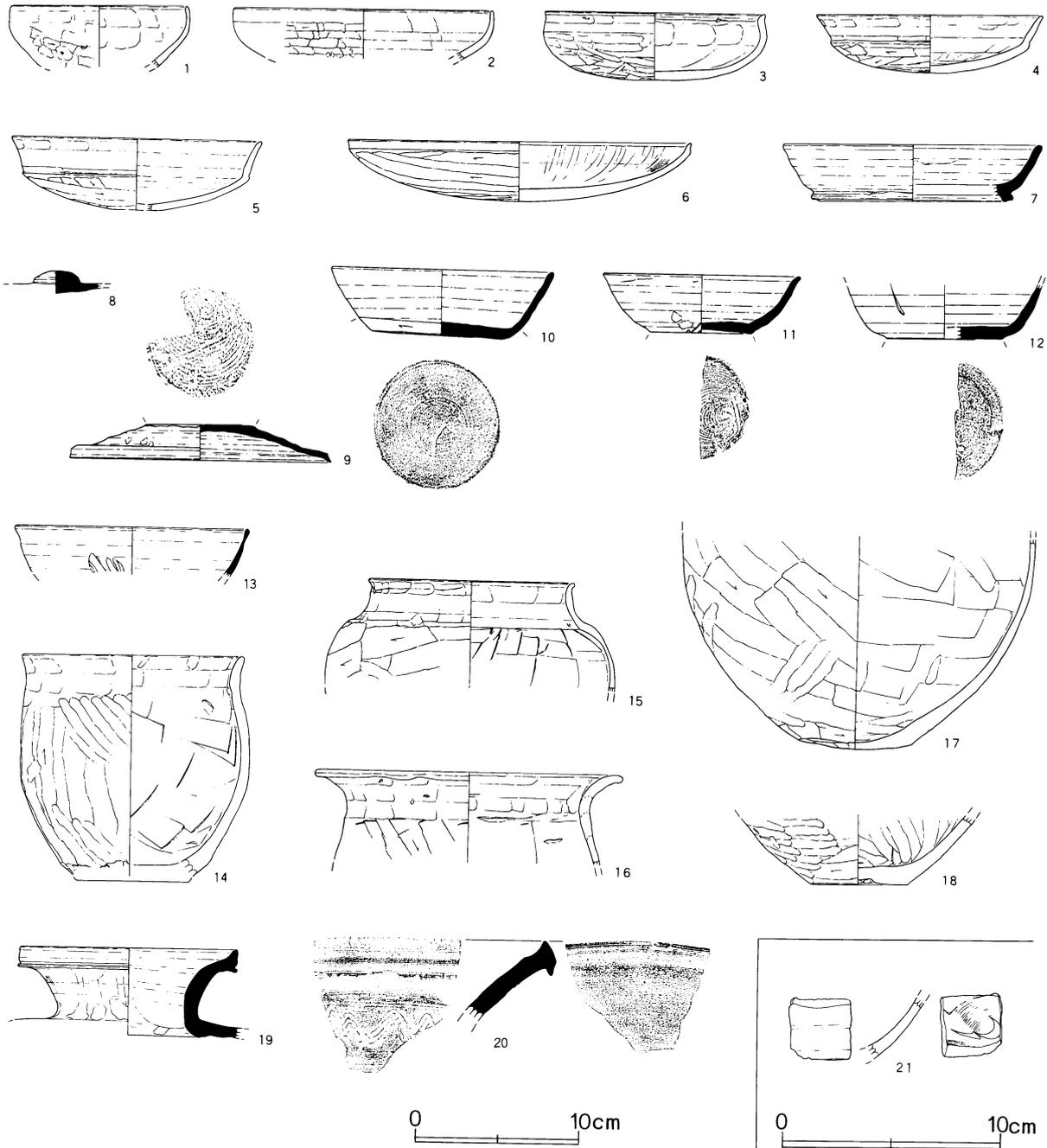
第180表 グリッド出土遺物観察表 (1)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1		坏	(10.8)	(3.8)		細 (W, B, R)	普	浅黄橙	破片	赤彩
2		坏	(16.8)	(3.1)		礫 (W, R)	良	橙	破片	赤彩
3	AL-23	坏	(13.5)	4.1		礫 (W, C, R)	良	にぶい橙	40	赤彩
4	AG-21	坏	14.0	3.6		細 (B, R)	良	橙	95	
5	AI-22	坏	(15.5)	4.4		微 (B, R)	普	浅黄橙	25	
6	AI-22	坏	(21.1)	3.7		細 (B, R)	普	にぶい橙	25	内外黒色処理か? 暗文
7		須恵器高台付坏	(16.0)	3.5	(12.5)	微 (F)	良	灰白	破片	
8	X-19	須恵器蓋		(1.4)		細 (W, B, R)	普	灰白	破片	秋間?
9	W-19	須恵器蓋	16.2	2.2	6.7	粗 (W, F)	良	灰	80	末野
10	AH-20	須恵器坏	13.8	4.0	8.0	粗 (W, F, R, 針)	良	灰	95	南比企
11		須恵器坏	(12.1)	3.6	(6.3)	礫 (W, 針)	良	灰	50	南比企
12		須恵器坏		(3.3)	(7.2)	粗 (W, F, 針)	良	灰	25	南比企
13	AH-22	須恵器坏	(14.5)	(3.0)		粗 (W, F, 針)	良	灰	破片	南比企

第181表 グリッド出土遺物観察表(2)

番号	出土遺構	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
14		甕	(13.8)	(13.7)		礫 (W, R)	良	灰 褐	60	
15	AA-18	甕	(12.7)	(6.6)		細 (B, R)	良	にぶい 橙	破片	
16		甕	(19.0)	(5.6)		礫 (W, R, 片)	良	にぶい 黄橙	破片	
17		甕		(13.1)	7.0	礫 (W, B, R)	普	にぶい 黄橙	破片	
18	AG-18	甕		(4.3)	6.0	礫 (W, R)	良	にぶい 橙	破片	
19	AL-26	須恵器 甕	13.4	(5.4)		微 (F)	良	灰 白	破片	秋間
20	X-19	須恵器 甕				粗 (W, F, 針)	良	灰	破片	南比企
21	X-19	青磁 碗				微	良	オリーブ 灰	破片	龍泉

第429図 グリッド出土遺物



V 結語

1. 築道下遺跡出土土器について

3ヵ年にわたる築道下遺跡の調査では、住居跡789軒、掘立柱建物跡241棟、土壇1254基、井戸跡583基、溝跡429条など、数多くの遺構が検出されている。これらより出土した遺物の量は膨大で、その時期は縄文時代、および古墳時代～中世におよんでいる。

調査で得られた成果は極めて大きく、沃野「忍の地」の歴史解明に、多大の寄与をなすものと評価できる。遺跡のおおまかな特徴を列挙すれば、

- ①元荒川の左岸自然堤防上に展開する大規模な複合遺跡で、古墳時代後期～中世の集落跡を中心とする。
- ②遺構間の重複は極めて激しく、その密集度は非常に高い。
- ③古墳時代後期の集落の形成・発展は、北方約3kmに位置する埼玉古墳群の動向と、ほぼ軌を一にしている。(第一の盛期)
- ④古墳時代末～奈良時代には大型の掘立柱建物群が出現し、“官”ないし“有力私”の拠点的な様相を窺わせる。(第二の盛期)
- ⑤出土した土師器の坏には、関東地方在来の須恵器坏蓋・身模倣坏、小針型坏、比企型坏、有段口縁坏、北武蔵型坏があり、時期によって多様な共伴関係を示す。
- ⑥出土した須恵器には、末野や南比企という埼玉県内の窯跡製品のほか、湖西(静岡県)、新治(茨城県)、秋間や金井(群馬県)といった、他地域の窯跡群からもたらされた製品も数多く見られる。
- ⑦中世の集落内は溝で区画され、方形のブロックに分割された様子が窺える。(第三の盛期)
- ⑧区画内には板石塔婆や五輪塔、瀬戸・常滑・渥美・

(1) 土師器坏類の分類

坏Ⅰ類 須恵器の坏蓋・身を“模倣”した、関東地方の古墳時代後期を象徴する坏類である。

坏蓋模倣坏は体部・口縁部ともに深く、口縁部が内湾気味に直立するものから、次第に浅く扁平とな

在地産の蔵骨器を出土した墓地や、土師質土器(かわらけ)の焼成窯などが営まれている。中心は13世紀後半から14世紀代である。

- ⑨川辺の集落であるにもかかわらず、井戸が異様に多く掘削されている。
- ⑩集落はたび重なる元荒川の氾濫により、15世紀はじめ頃に廃絶する。ということになる。

より細かく見れば、古代の地震痕跡が観察されること。1軒の住居跡からガラス玉と管玉が一括出土していること。紡錘車の出土が多いこと。川辺の集落としては、土錘の出土が少ないこと。2軒の大型住居跡が並列して構築されていること。焼土や土器を多量に含む大型土壇(性格不明遺構)が多く見られること。など、さらに多くの特色を挙げることができる。

いま、これら全てについて触れる用意はないので、上に掲げたもののうち、⑤・⑥という古墳時代～奈良時代の出土土器について、若干の検討を行なってみよう。特に⑤は地域的な特徴とあってよく、それぞれの“型”の並行関係を検証するための好材料となっている。

築道下遺跡の出土土器については、既に『築道下遺跡Ⅰ』および『同Ⅱ』において考察が加えられている。また、埼玉県の北部地域の土器編年についても、多くの優れた研究業績がある。このため、以下ではこれらの成果に基づき、主に坏類の分類と、その時期的変遷を追ってみることとした。

なお、検討の対象とする土器群は、上述のように遺構間の重複が著しいため、比較的遺存状態が良好で、かつ出土点数の多いものを対象とした。

り、口縁部は外傾ないし外反するものへと変化していく。口径は12～13cm台が中心で、一旦、大型化の傾向を示した後、小型化してしまう。

坏身模倣坏は坏蓋模倣坏に比して出土量は少ない。

その出現は坏蓋模倣坏に遅れ、しかも姿を消すのはかなり早い。口縁部は長めで強く内屈するものから、短くやや起き上がり気味のものへと推移する。やはり扁平化の道を辿り、大型化を経て、小型化していく。また、内外面ともに黒色処理の施されたものが多い。

坏Ⅱ類 坏蓋模倣坏のうち、特に大型で口縁部の大きく外反するものを坏Ⅱ類とした。築道下遺跡の古墳時代後期を特徴づける土器で、量的にも他類を圧倒している。

こうした形態の坏類は、行田市小針遺跡(B地区)の調査ではじめて確認され、担当者の斎藤国夫氏によって、何よりもその精選された胎土、白色の堅緻な焼き上がりが目されるようになった(斎藤1980)。

こうした白色系の坏に対し、田中広明氏は「小針型坏」の名称を与え、同形態ながらも赤橙色のものは「小針型坏と類似する土器」として弁別した(田中1991)。それまでの型式認定に関するいきさつについては、中島洋一氏が簡潔にまとめている(中島1993)ので触れないが、築道下遺跡の様相を考慮すれば、田中氏の認識が妥当なものだと判断される。

ただし、築道下遺跡では白色系のものは一割にも満たず、その大半は赤橙色系の「小針型坏と類似する土器」である。形態を重視するという立場からすれば、両者を積極的に分離する必然性は見当たらないため、田中氏の見解を尊重しつつも、これらを「小針型‘系’坏」として総体的に扱うこととした。

現在のところ、小針遺跡では白色系のもの、築道下遺跡では赤橙色系のものを主体的に出土している(両者の相違については、最後に触れる。)が、その分布圏ははっきりしていない。

坏Ⅲ類 口縁部がS字状に短く外反し、内面と口縁部外面が赤色塗彩されるのを基本とした坏類、いわゆる「比企型坏」である。また、厳密な意味では比企型坏とはいえないが、在来の模倣坏の影響を強く受けたものや、浅い椀様のものもここに含めた。

比企型坏や共伴する坏類については、既に井上肇氏(1979)や水口由紀子氏(1989)、渡辺一氏(1991)、村田

健二氏(1992)、富田和夫氏(1992)などによる優れた考察がある。総括的な検討を行なった水口氏によれば、比企型坏は5世紀末頃、和泉式坏形土器の系譜(須恵器模倣坏とは異なる在地性の強い器形)から生まれたもので、その後、定形化した器形と安定した生産体制が成立し、7世紀後半に終焉を迎える。

これに対して富田氏は、定形化したものは同期に解体してしまうが、「続比企型坏」とでもいべき土器群は継続し、これが鳩山窯跡群を主体とする在地の須恵器生産が本格化する8世紀前葉、急速に消滅していくと補考した。氏はこの現象を「民需を当初から強く志向した鳩山窯跡群をはじめとする南比企窯跡群産須恵器が土器器供膳器を駆逐したものと理解される」と結んだ。

比企型坏の主な分布圏は比企地方から入間、多摩地方に及ぶものとされる。

坏Ⅳ類 口縁部が複数の段によって形成される坏類である。この特徴から「有段口縁坏」と呼ばれ、埼玉県北部から群馬県南部の平野部を中心に分布する。

田中広明氏は有段口縁坏の総合的な分析を行ない、その出自はわからないとしながらも、「それまでの坏模倣坏とは全く製作技法の異なる食膳具として、6世紀後葉に登場する。その後8世紀初頭まで、3つの内部系列にそれぞれ変化の方向性が読み取れ、5つの生産の発達段階を認められた。」ことを明らかとした。その終末は、「須恵器の大規模生産が、より旧来の土器生産、特に有段口縁坏の生産の縮小に拍車を掛けた」、7世紀末～8世紀初頭に置いている(田中1991)。比企型坏のところで見た富田氏の見解と同様、背景に律令国家の姿が窺える点で興味深い。

築道下遺跡では、氏のいうA系列とB系列のものが見られる。

坏Ⅴ類 丸底で口縁部が内屈、ないし内湾するものである。大型で体部の深い椀状のものや、内面に放射状の暗文を有するものなどもここに一括した。

これらの坏類は「北武蔵型坏」や、「内屈口縁坏」と称される一群の土器で、鈴木徳雄氏(1984)をはじめ、赤

熊浩一氏(1985)、富田和夫氏(1996)、大屋道則氏と栗岡潤氏(1998)などによる詳細な分析研究がある。

鈴木氏の示された変遷傾向を受け、赤熊氏は口縁部の形態が屈曲(内屈)→内湾→直立と推移するとした。また、在来の模倣坏とは形態上に大きな差異が認められることから、その出自を金属碗に求めている。この

(2) 小針型‘系’坏の細分と変遷(第430図)

上述のように、蓋坏模倣坏のうち比較的大型で、口縁部が大きく開くものを坏Ⅱ類とした。厳密な意味では、白色系の堅緻な焼成のものを「小針型坏」というべきであるが、ここでは同形態で赤橙色系のやや軟質なものも含め、「小針型‘系’坏」と総称して分類の対象とする。

坏ⅡA類 体部が浅く、長い口縁が外湾しながら開くものである。体部は小さめで、口縁部との作り分けは明瞭である。

初現となる1段階では、第Ⅰ類の模倣坏と形態上大きな相違はないが、法量的には口径15cm、器高5.8cmとかなり大型である。その後、口径は16~17cmと拡大し、口縁部は大きく開いていく。このため、全体に潰れた印象が強くなる。5段階になると小型化し、口径は15cmほどとなる。口縁はさらに外反し、より扁平なものとなる。

坏ⅡB類 体部は丸みを有し、短い口縁が外湾しながら開くものである。体部と口径の変化から、次の3系列に分化できる。この場合、B2類とB3類はB1類からの派生と捉えた。

B1類は大きめ体部で、口縁部との境はしっかり作り出される。器高に対する口縁部と体部の割合は、およそ1対1を踏襲する。口径も大きな変化はなく、16cm台を中心に変遷する。扁平化は進行するものの、口縁部の外反はあまり大きくなならない。作りがやや粗雑なため、類型としての統一感は薄い。やはり5段階に至って小型化する。

B2類は口縁部が短く、体部は深めである。両者の作り分けはB1類よりもやや弱く、口縁部の外反は小さい。口径は3段階で15cm前後、4・5段階で16~17

ほか、出現が突発的(7世紀中葉)であること、初現段階から法量分化されていること、供膳具としてそれまでの模倣坏にとって変わることなど、極めて特徴的な坏類といえる。

分布は有段口縁坏同様、埼玉県北部から群馬県の平野部に及んでいる。

cm台である。扁平化への推移は認められるが、口径や4cm強と低い器高の変化は小さい。

B3類は体部が小さく、口縁部が外湾しながら大きく「八」の字状に開く。直線的に立ち上がってくる体部と、大きく広がる口縁部は緩い「く」の字を描き、境となる外面の沈線は不明瞭である。口縁端部は平坦で、沈線を有するものも見られる。体部は2段階では深い。3~4段階と経るに従い次第に浅くなり、口径の大型化と相俟って扁平化が急速に進む。口径は2段階で17cm強程度であったものが、3段階では18cm台になる。しかし、4段階では17cm台に逆転し、5段階に相当するものは見受けられなくなる。小型化が他よりも一段階早いことと関係するのだろうか。

大型で扁平という点ではⅡC類と共に他を圧倒し、小針型‘系’坏を象徴するタイプといえる。

坏ⅡC類 体部は浅く小さめで、長い口縁が外湾しながら開くものである。B類に含めるべきとも思われるが、体部に対して口縁部がかなり長いため、これを分化した。

両者の境はB3類よりも屈曲が強く、外面の沈線もはっきりしている。口縁部は体部から一旦直立し、そこから大きく外反する。端部は平坦なものが多く、沈線の加わるものも少なくない。体部の立ち上がりはB3類に比して丸みを帯び、器壁は口縁部よりも薄い。

2・3段階で15~17cmだった口径は、4段階で17~19cmへと大型化する。これは口縁部がより外方へ開いたため、体部は潰れながらも、大きさとしての変化はほとんどない。5段階ではやはり小型化し、口縁部はさらに外反、扁平な器体となる。

坏ⅡD類 浅めの体部から、口縁が直線的に大きく

外反するものである。器高に対する体部と口縁部の割合はおおよそ1対1で、両者の境となる屈曲部の沈線は明瞭である。

D1類は体部と口縁部の屈曲がやや強く、口縁部はわずかに外湾気味となる。口径15cm前後、器高4cm強と小型である。

D2類は器壁の屈曲がほとんどなく、口縁部の広がり直線的で踏ん張りがある。口径17cm前後、器高5cm以上と大型である。

ともに4段階以降は不明となる。6・7段階に1点ずつを置いてみたが、系列として追えるか否か疑問である。6段階とした第418号住居出土のものは口縁部がやや肥厚しており、坏II類とするよりも、児玉地域などの坏に近縁性を求めるべきかもしれない。

坏II E類 丸みの強い深い体部に、短く外湾する口縁部を有するものである。器壁の屈曲は弱く、体部と口縁部の境ははっきりしない。

1段階から認められるが、2～3段階で扁平化し、4段階では見られなくなる。口径は15～16cmでほぼ一定している。

坏II F類 長い口縁が一旦直立し、端部が内湾気味となるものを一括した。体部が浅いものや深めのもの、大型のものや小型のもの、また口縁の開きなどでいくつかに分けられるようである。系列としての統一性はごく乏しい。

5段階の3点は異質で、別の系統を考えたほうがよいかもしれない。

坏II G類 丸みのある深めの体部から、短めの口縁が強く外湾して開くものである。焼成や塗彩などから、3つの系列に分けられる。

G1類は体部が深く、丸みを帯びるものである。口縁部は短く、強く外湾して開く。体部と口縁部の屈曲はきつく、境は明瞭に作り出される。

G2類は体部がやや浅く、平底風の安定感を持った器体である。口縁部の外反度は弱く。端部は先鋭となる。

何よりもG2類で特異なのは、内外面が赤色塗彩さ

れ、しかも胎土や焼成が比企型坏と同一であるという点である。このように、比企型坏の特徴を備えたものであるならば、白色系を特徴とする小針型坏の系統に含めるべきではないのかもしれない。しかし、大型で口縁が大きく開く点は、他の小針型‘系’坏と遜色のあるものではない。よって、ここでは比企型坏の製作技法で作られたもの、ないしは小針型‘系’坏の影響を強く受けた比企型坏の一種、と捉えておきたい。

G3類は体部がやや浅く、口縁部が長めとなるものである。2段階にのみ認められ、3段階以降は変遷が追えない。

坏II H類 扁平な器体で体部が浅く、口縁端部が屈曲して錨状になるものである。器壁は「S」字状となり、体部と口縁部の境は至って不明瞭である。

口径と器高の比率から、大型で扁平なもの(H1類)と、小型で深みのあるもの(H2類)に分けられる。

3段階から存在が認められるものの、それ以前のものについては系譜が辿れない。

坏II I類 極めて扁平で、口縁も最大限まで開いたものである。全体的には、坏というよりも皿といった印象が強い。内外両面ともに黒色処理が施される。

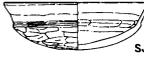
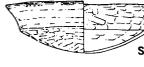
5段階の第472号住居跡1軒のみに認められるもので、どの系統から推移したものか明らかにできない。あるいは有段口縁坏のうち、田中氏がC系列としたものの影響を受けているのであろうか。

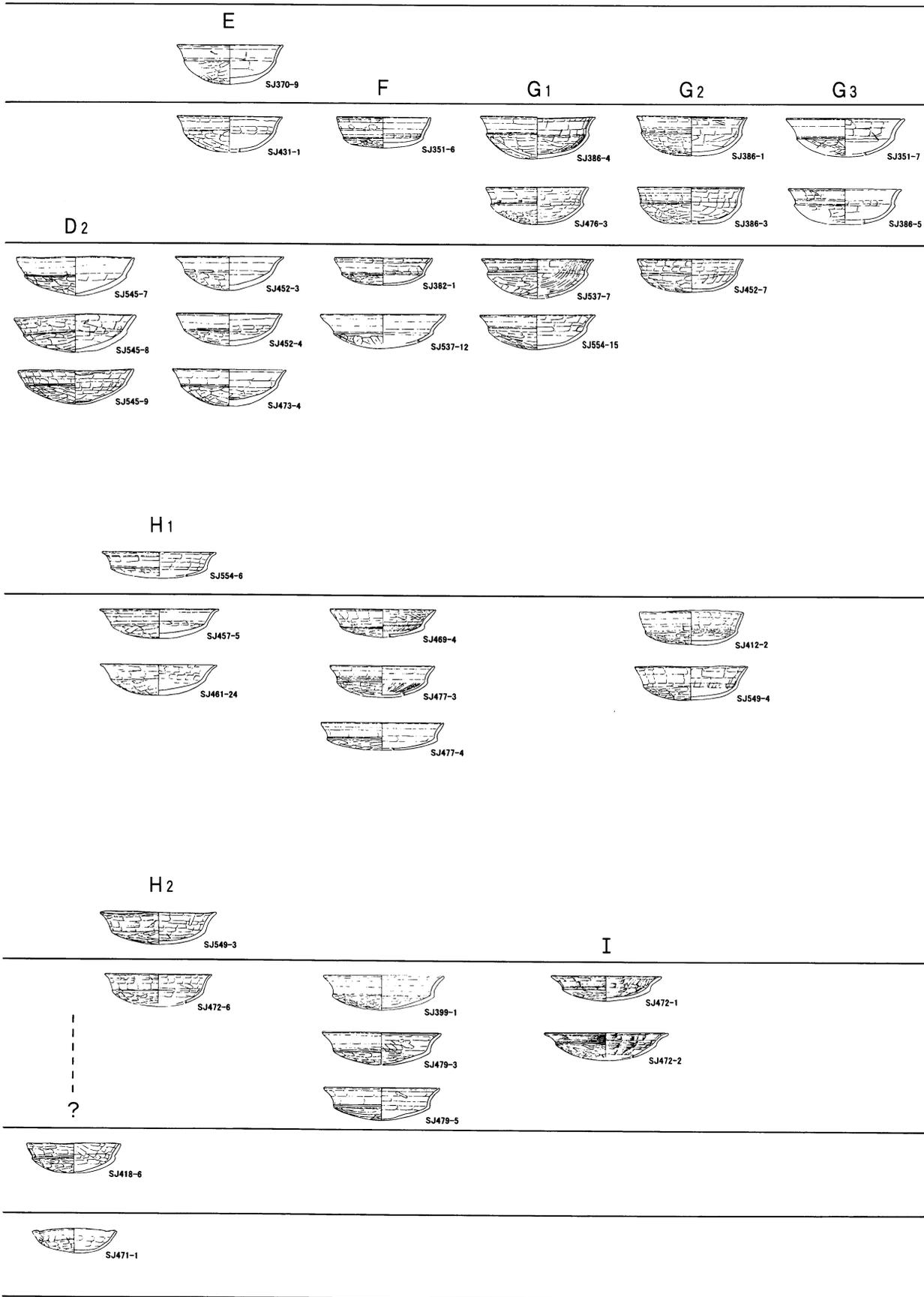
以上、細分に過ぎたきらいはあるが、小針型‘系’坏を9系列に分類してみた。赤色塗彩されたG2類や、黒色処理の施されたI類などは、白色を特徴とする小針型坏の中に含むべきではないかもしれない。これらの全体的な変遷としては、おおよそ次のように捉えることができよう。

1段階 在来的な須恵器模倣坏の中から、大型で口縁部の大きく開くものが出現する。しかもそれは1タイプだけではなく、体部と口縁部の形態差によって、複数が用意された。

2段階 新たな出現も含め、さらに多くの形態が派

第430図 坏Ⅱ類（小針型‘系’坏）の細分と変遷

1 段階	A  SJ385-7	B1  SJ370-8					
2 段階		 SJ431-2	B3  SJ431-3	C  SJ478-2	D1  SJ445-2		
3 段階		B2					
	 SJ537-8	 SJ452-2	 SJ452-9	 SJ506-13	 SJ452-10	 SJ382-2	
		 SJ461-18	 SJ506-7	 SJ537-9	 SJ452-11	 SJ400-4	
		 SJ543-1	 SJ506-8	 SJ545-5	 SJ473-3	 SJ400-5	
		 SJ554-13	 SJ554-7	 SJ545-6	 SJ545-10	 SJ473-2	
		 SJ554-14			 SJ554-11		
		 SJ554-18					
4 段階	 SJ461-15	 SJ457-4	 SJ534-4	 SJ457-8	 SJ412-5		
	 SJ461-16	 SJ461-17		 SJ461-21	 SJ412-6		
		 SJ461-19		 SJ461-22	 SJ457-7		
		 SJ461-20		 SJ461-25	 SJ457-9		
		 SJ554-17		 SJ532-7	 SJ461-23		
					 SJ461-26		
5 段階	 SJ472-8	 SJ472-7	 SJ479-4		 SJ485-9		
	 SJ485-10		 SJ485-11		 SJ485-12		
(6 段階)							
(7 段階)							



生ずる。基本的なものはこの段階にほぼ出揃い、定形化の前途を模索する。

3段階 出土量は飛躍的に増える。口縁部はより外方へ開いて大型化し、体部は浅く扁平化する。B1・B3・C類が小針型系坏の定型・典型を主張した。

4段階 定形化タイプの一層の大型化と扁平化が進む一方、作りが粗雑化する。またD・E・G類などは、この段階で姿を消していく。

5段階 出土量は激減し、主流(定形化)タイプは小型化する。作りは粗雑となり、口縁の外反と扁平化は極まる。反面、F・I類のように作りが丁寧で、系譜の辿れないタイプのものが現れる。

6・7段階 ほとんど全てのタイプは、その姿を窺うことができない。変遷図には掲示したものの、上述したように、D2類とした第418号住居跡出土のもの

(3) 出土土器の変遷(第431・432図)

I期 今回の報告範囲には良好なものが見当たらないため、『築道下遺跡II』に収録した第109・143号住居跡の出土土器を転載した。

坏I類は定形化以前の模倣坏で、和泉型の椀類を伴う。この時期の坏類については、前掲報告書で大屋氏が詳細な分析を行なっているので参照されたい。

II期 I期に成立した坏I類は、やや小型で扁平化する。口縁は長めで、直立している。これに伴って坏III類(比企型坏)が出土するようになる。体部は深く、椀状である。甕は長胴化し、甗は大型化する。

III期(坏II類1段階) 坏I・III類に伴って、大型で口縁部の外反した坏II類(小針型‘系’坏)が出現する。坏I類に比して器形は多様であり、器壁もかなり厚い。

IV期(坏II類2段階) 坏I類は大型で口縁部の外反するもの、坏身模倣坏が見られる。

坏II類は大型化し、緒タイプが出揃う。出土する住居跡が急激に増加するのも無視できない。

坏III類は口径が際立って増大し、逆に器高は低く扁平化する。

V期(坏II類3段階) 坏I類のうち、蓋模倣坏は扁平化し、体部と口縁部を分ける沈線は弱くなる。

は、他地域の系統の坏から派生したもの、と考えたほうがよさそうである。

7段階に置いた第471号住居跡出土の坏はこの系列で捉えられなくもない。しかし、かなり異質である。後で触れるように、6段階と7段階は連続するものではなく、土師器の変遷からみれば、1時期ほどの間も空く。

もし、6・7段階のものを小針型‘系’坏と位置づけることができれば、それは細々ながらも命脈を保つことになる。しかし、別の系統のものとする、小針型‘系’坏は5段階で全て消滅することになる。可能性としては、後者のほうが高いように思われる。

次に、こうした小針型‘系’坏出現と変遷の背景を考えるため、築道下遺跡で出土した坏類を中心に、土器群の全体的な変遷を見ておきたい。

坏II類はさらに大型化し、体部は潰れて扁平な器体となる。出土量は飛躍的に増え、集落としても最盛期を迎えた感がある。バリエーションの多様性の中にあって、B1・B3・C類のごとく、定形・典型化が表出してくる。

坏III類は口縁端部の屈曲が弱く、器壁の描く「S」字は緩やかなものとなる。

この段階で、はじめて坏IV類(有段口縁坏)が出現する。口径の大きな扁平な器体で、内湾気味の口縁部は2～3段である。

須恵器の坏は口縁の立ち上がり急で、端部内面に浅いながらも沈線を残す。MT85～TK43型式古段階のものに並行すると思われる。

VI期(坏II類4段階) 坏I類のうち、身模倣坏はやや小型・扁平化し、内屈する口縁も短くなる。

坏II類は引続き大型・扁平化が進行する。作りはやや粗雑となり、定形化したもの以外は極端に出土量が減少、ないし認められなくなる。

坏III類も大型・扁平化が窺え、口縁端部の屈曲はほとんどなくなる。

坏IV類は口縁部が外反し、体部との屈曲が弱い。須

恵器坏は扁平で、内屈して立ち上がる口縁は短い。TK43型式に並行するとしても、新しい段階のものではなかろうか。

甕は長胴化が進行し、細身となる。口縁の屈曲は弱く、短く外反する。

VII期(坏II類5段階) 坏I類の身模倣坏は口縁がさらに短く、かつ立ち気味となってくる。

坏II類は一転、小型化を示し、口縁の外反と扁平化は極端となる。出土量が極めて少ないうえ、作りも粗雑で、前段階からの推移をはっきり追えないものが多い。ほぼ、この段階で消滅するものと考えられる。

坏III類は次のVIII期とともに全く見られず、空白期となる。

坏IV類は器形の変化こそ少ないが、段を分ける沈線は不明瞭となり、形骸化する。

甕は最大径がやや上位に移り、短い口縁の外反はより短くなる。

VIII期(坏II類6段階?) 第418号住居跡出土土器が該当するのみで、他に同様の土器組成を持つ住居跡は認められない。VII期の土器との差異が大きく、ガラリと変わった印象が強い。比較する土器もほとんどなく、一種の断絶性が窺える。

坏I類の身模倣坏は小型化し、体部と口縁部の屈曲は弱くなる。口縁部はさらに短く、より立ち気味となる。

坏II類は前段でも触れたように、いずれの系統下にも明確なものが置けない。第418号住居出土の坏をどう見るかであるが、やはり、本類よりも他地域の坏の影響から派生したものとするべきだろう。

坏IV類はそれまでのものとは異なり、口縁が「八字」状に大きく開くものが出現する。田中氏が有段口縁坏B系列とされたもので、はっきりした沈線で段が表出されている。

須恵器は坏蓋が2点共伴している。化学分析は行っていないが、おそらく、群馬県内の窯跡製品であろう。

甕はさらに細長く、底部が小さくなる。最大径は胴

部上位にあり、口縁は短く外屈する。

IX期 坏I類は作りが粗雑で、小型なものとなる。体部と口縁部の作り分けも不明瞭で、出土はごく少量である。

坏III類は2段階ほどの空白期を置いて、再度出土するようになる。小型で、体部と口縁部は明瞭な境がなく、富田氏がいうところの「腰」で区別される(富田1992)。口縁は直立し、端部内面は沈線状のくぼみを有する。

坏IV類は口径が大きく扁平なものと、口縁部が外反し体部の深いものが共伴する。前者はVII期までの系譜のものとは異なり、口縁は内湾し、その端部は内削ぎ状となる(田中分類のA4)。

なお、第458号住居跡からは、北総地域の坏ではないかと考えられるものが1点出土している。半球状の深い体部に、外反する短い口縁が付く。その境の部分は外面が凹線、内面が稜線で分けられる。内面は刷毛調整痕が明瞭に残る。

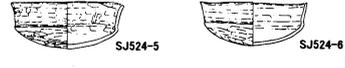
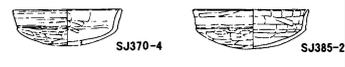
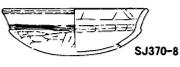
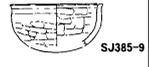
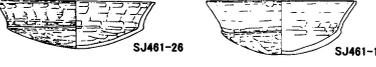
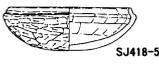
甕は口径が胴径を上回り、膨らみの取れた形状となる。口縁は緩いながらも、「く」字状となる。

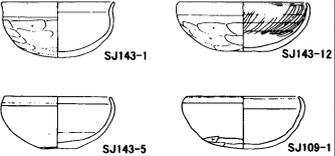
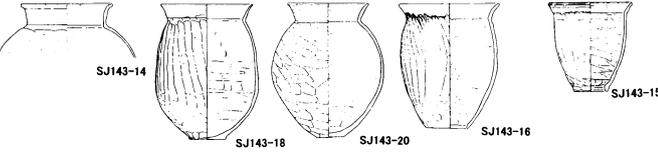
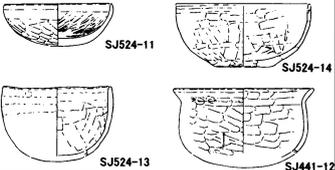
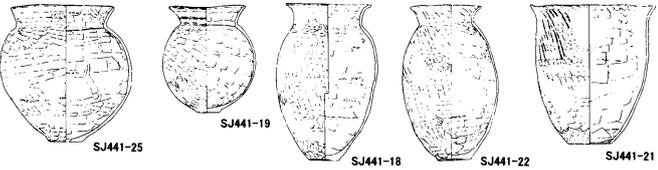
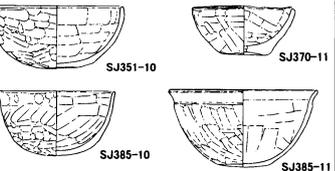
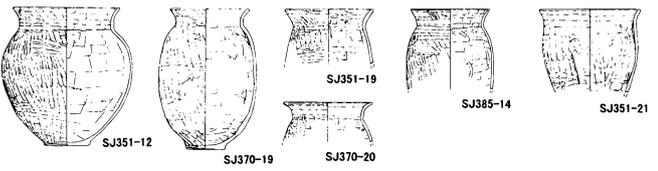
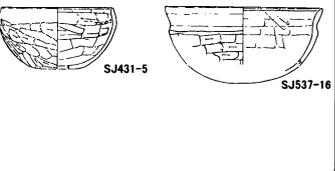
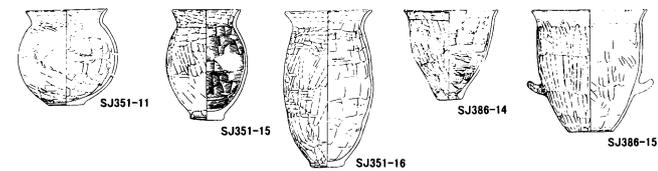
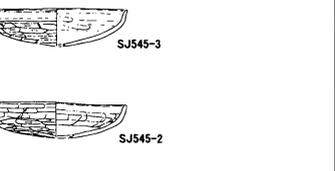
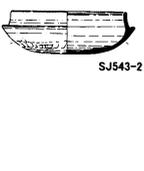
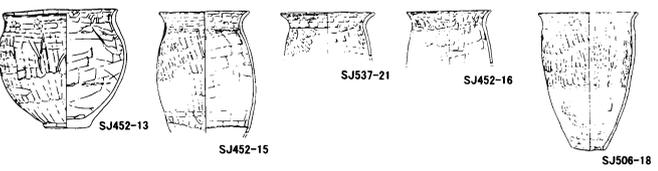
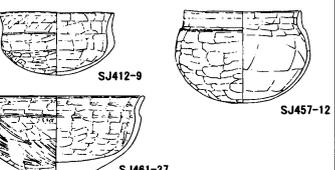
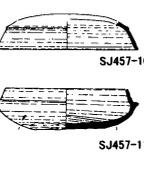
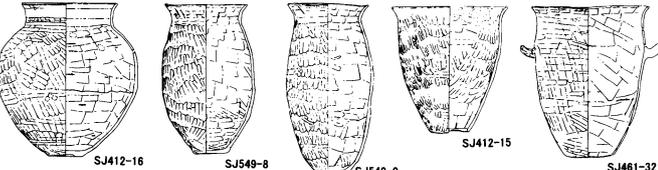
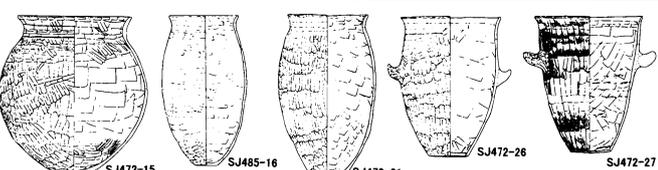
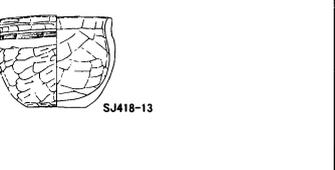
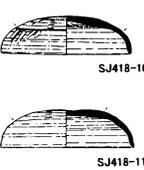
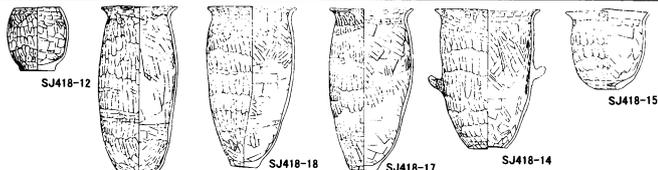
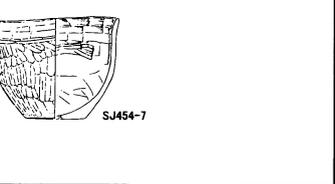
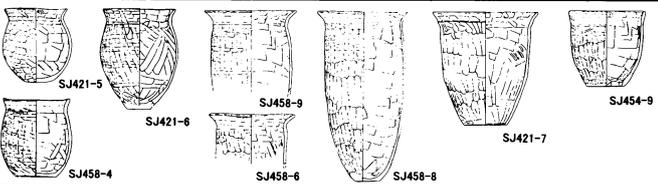
X期(坏II類7段階?) 坏I類は該当するものが認められなかった。これに対し、坏III類はこれまでの補完的立場を逆転し、突如として食膳具の中心となる。口縁部が小さく「S」字を描く在来的なもの、強く外湾して立ち上がるもの、模倣坏の影響を受けたものなど、形態にバラエティーは多いものの、大きさ、特に口径は斉一的である。

坏IV類は小型で、深めの器体が主体となる。体部は小さめで丸みがあり、口縁は長めで大きく外反する。口縁部は2~3段で、ごく浅い沈線が巡る。体部との境も沈線で分けられるが、屈曲は弱く明瞭でない。

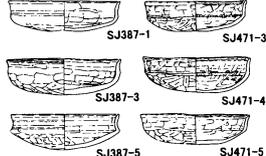
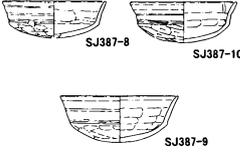
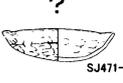
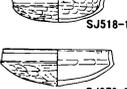
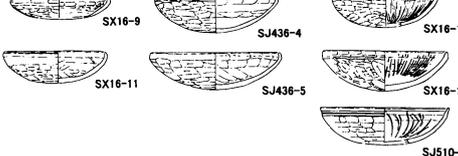
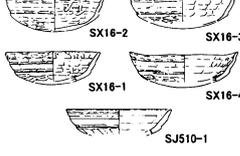
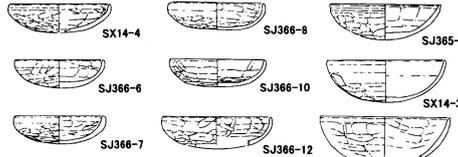
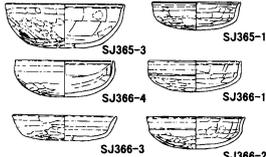
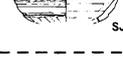
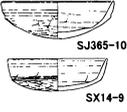
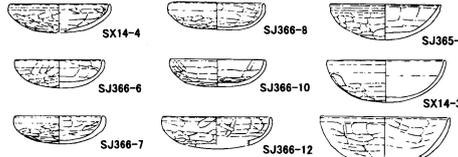
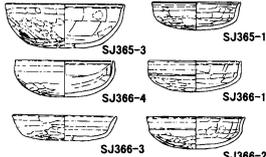
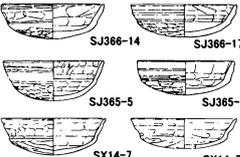
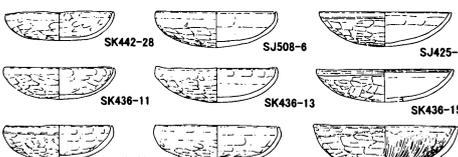
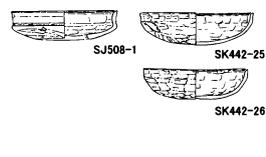
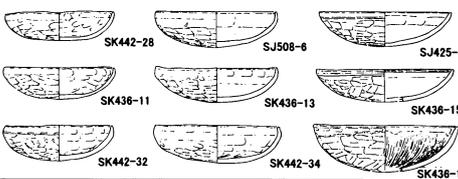
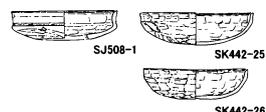
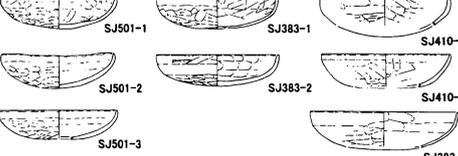
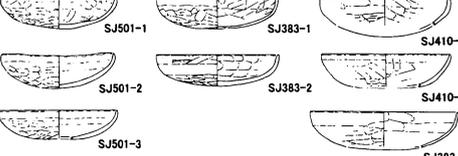
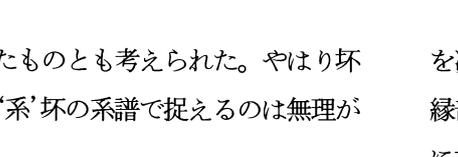
第471号住居跡出土の坏は口縁部が内湾気味に大きく開く。坏I類のものとは明らかに異なり、他に類例が見られない。このため、前段では坏II類の可能性を払拭できず、その最終段階のものとして変遷図に掲載した。ただし、そこでも述べたように、時期的に連続性が追えず、かつ系列上にあたるVIII期のものは、他地

第431図 土師器の変遷(1)

	坏 I 類	坏 II 類	坏 III 類	坏 IV 類
I 期	 			
II 期	 		 	
III 期	 	 	 	
IV 期	 	 	 	
V 期	 	 	 	 
VI 期	 	 	 	 
VII 期	 	 		 
VIII 期	 	<p>?</p> 		 
IX 期	 	<p>北総地域?</p> 	 	 

椀・皿・鉢類	須恵器	壺・甕・甌類
		
		
		
		
		
		
		
		
		

第432図 土師器の変遷(2)

	坏 I 類	坏 II 類	坏 III 類	坏 IV 類
X 期		?		
				
XI 期 (古)				
				
XI 期 (新)				
				
XII 期				
				
XIII 期				
				

域の坏の影響を受けたものとも考えられた。やはり坏 II 類とした、小針型‘系’坏の系譜で捉えるのは無理があるだろうか。

甕は細身で、口縁部は屈曲が強く外反度を増す。

XI 期(古) 坏 I 類は蓋・身模倣坏ともに小型で、形態上の差異が少なくなる。いずれも口縁は短く、体部が深めである。身模倣坏は口縁部の内屈が弱く、この段階以降は出土が見られなくなる。

坏 III 類は前段階の形態で小型化したもののほか、口径がやや大きく扁平な碗形となるもの、碗形でも大型で深めのものなど、機能分化を思わせる組成となる。「腰」は下がり、全体的に低い位置となる。

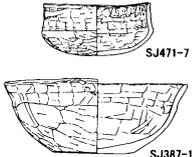
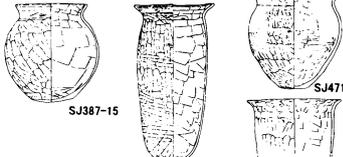
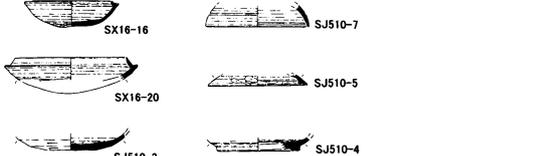
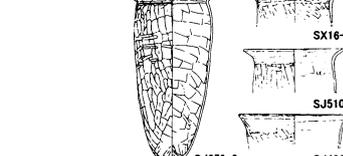
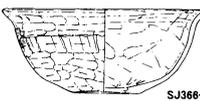
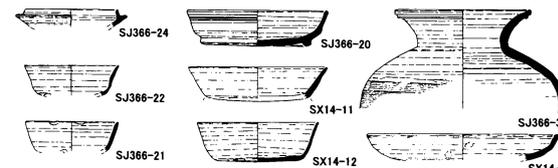
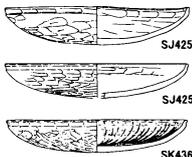
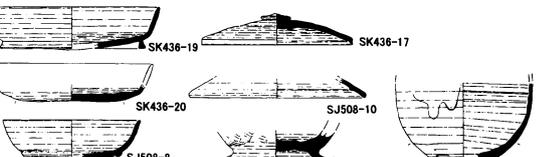
坏 IV 類は小型・扁平化が進行する。口縁は 2 段で、段を表出する沈線は浅く弱い。

坏 V 類はこの段階に突如として出現し、しかも他類

を凌駕して食膳具の中心となる。丸底の碗形態で、口縁部は短く内屈するもの、口縁部はほぼ直立し、内面に放射状の暗文を有するものなどが見られる。前者には口径 10~11cm の小型なもの、同じく 13~14cm の大型なものがある。後者も大小があるほか、外面の口縁端部に沈線を有するものもないものがある。

またこの時期には、大型で扁平な皿形土師器の共伴が認められる。口縁部は短く、わずかに外反して立ち上がる。これも内面に放射状の暗文を持つものが見られる。須恵器も新たな展開が現出する。短い受け部を有するいわゆる坏 H とこれの蓋、坏 G とセットになると考えられる返りのある蓋、高台の付く坏など、湖西産と観察されるものが多く認められるようになる。

甕は頸部から下方へ次第にすぼまる形態で、口縁部は強く屈曲して鏢状に外反する。

椀・皿・鉢類	須 恵 器	壺・甕・甌類
		
		
		
		
		

主に掲載した遺物は第16号性格不明遺構からの出土である。この種の遺構は『築道下遺跡Ⅱ』で報告した第9号性格不明遺構など、良好なセットを出土する機会が多い。字義通り遺構の性格は明らかとしないが、『築道下遺跡Ⅱ』を担当した栗岡氏は、こうした出土状況を、坏Ⅴ類の「法量分化の完成とそれに伴う前代の食器の廃棄が、その実態として想定できる。」とした。そして、「前代の遺制にまつわる遺物の廃棄が一括貯蔵品に対して行われるならば、それに含まれる須恵器は、土師器と年代を異にする場合もある。」と捉えた(大屋・栗岡1998)。本書でⅪ期が明分化できない点も、同様の現象によるものと思われる。

Ⅺ期(新) 上述のように、出土土器の組成上明分化できない部分があるため、Ⅺ期は区分せずに新古の様相として掲示した。

坏Ⅰ類は体部と口縁部の屈曲がよりなだらかで、全体は椀状を呈するようになる。

坏Ⅲ類は古様相と変わらないが、器形や大きさのバラつきが多い。

坏Ⅳ類は形態上の多様性が窺え、段を分ける沈線はほとんど形骸化している。

坏Ⅴ類はやや扁平化し、口縁は内湾から直立気味となる。

須恵器に非在地産のもの割合が高い点は同様ながら、器種は豊富となり、群馬県地域の窯跡製品も多く混じてくるようである。

Ⅺ期 坏Ⅰ・Ⅳ類は見られない。他地域の遺跡ではこれ以降も存続するので、これをもって消滅したとはいえないが、坏Ⅳ類などは急速にその生産量を減じたことは明らかであろう。

この現象を田中氏は、「暗文土器と北武蔵型坏が、食膳具内の土師器の主体となり、各地で大規模な協業による須恵器窯が操業を開始し、集落の食膳具の一端を担うことになる。この二つの異なった生産体制、が「食器の律令時代的様相を支えていく。」ものと捉えた(田中1991)。その時期は7世紀末から8世紀初頭であるが、築道下遺跡のような第2次供給地は、終焉を迎えるのはより早いとされる。

坏Ⅲ類も例外ではなく、急激な減少が認められる。扁平で、粗雑な作りとなる坏Ⅴ類を除き、坏類の激減するのが本期の特色である。多少の時期的前後はあるといえ、こうした傾向は坏Ⅲ類を主体とする比企地域でも、坏Ⅳ類を主体的に供給する地域でも、ほぼ同様である。この点で、田中氏の視点は説得力に富むものと評価できよう。

坏Ⅴ類は他の坏類が激減する中であって、引続き出土量が多く、食膳具の主体をなす。口縁部は内湾から直立傾向にあり、暗文坏では扁平化の進行が窺える。

皿は体部がやや深めで、口縁部はさらに短く直立気味である。

須恵器はいわゆる「出っ尻」となる高台付の坏、返りの消失した蓋、壺などが見られる。湖西・金井・末野

(4) 各期の年代観

古墳時代から奈良・平安時代の遺物については、これまで共伴する須恵器から年代が比定されてきた。しかし、その須恵器をいかに見るか、いかに位置づけるかという点では、研究者間に見解の相違がない訳ではない。とはいえ、近年ではここで多くを引用している田中氏や、富田氏などによる優れた研究があり、須恵器のみに頼らずとも、土師器による編年の可能性がかなり高まっている。

そこで、以下ではそれらの年代観に立脚しつつ、須恵器も援用して、各期の年代観を示すこととする。

I期は模倣坏の成立期で、私が以前に報告した砂田・柳町遺跡の第Ⅲ期に相当する。そこでは次期にTK23型式の須恵器坏が伴うことから、5世紀の第Ⅲ四半期の年代を与えた(剣持1993)。築道下遺跡の場合も、

などの製品が混在する。

XII期 坏はⅤ類のみとなる。扁平化が進行し、口縁は直立する。小型のものは歪みが目立ち、大型のものには「腰」のような湾曲が付く。皿はXII期のものとは異なり、体部は深めで口縁は大きく外反する。器壁は緩やかに立ち上がり、微かに「S」字を描く。須恵器は大型の坏と蓋が中心で、小型の蓋には返りが見られない。

第501号住居跡からは、金井窯跡群産の削り出し高台付きの坏が5点、集中して出土している。1軒あたりの保有量としても注目される。また、第467号住居跡出土のものは末野窯跡群産ながら、形態的に特異である。

甕は口縁がやや長く延び、外面調整は横方向のヘラ削りとなっている。

これ以降の遺物については住居跡が見当たらず、その他の遺構でも良好なセットは抽出できない。C区ではXII期で住居の構築が見られなくなり、土壌などがわずかに残るだけとなる。集落の中心はXIII期以降、F区へと移っていく。

ほぼ同時期と見て大過ないものとする。

II期はやや時間を置くかもしれないが、口縁部は未だ長く直立していることから、第I四半期を中心とする6世紀の前葉と見ておきたい。

III期は坏Ⅱ類、すなわち小針型‘系’坏の出現期で、IV期が小針遺跡B地点の10号住居址と同時期と考えられる。斎藤氏は同住居址の出土土器を、榛名二ツ岳噴出火山灰(F A)降下前後、6世紀中葉前後に求められた。この点を加味するならば、築道下遺跡のⅢ・Ⅳ期は、第II四半期を中心とする6世紀中葉と位置づけられよう。

V期は小針遺跡B地点の6号住居址、VI期は同じく2号住居址並行に押さえられる。6号住居址は6世紀の第Ⅲ四半期、2号住居址は第IV四半期に位置づけられよう。

れ、築道下遺跡Ⅴ・Ⅵ期と整合する。ただし、築道下遺跡の場合はその後の変遷から、Ⅵ期を第Ⅳ四半期でも古段階に、小針型‘系’坏が終焉すると考えられるⅦ期を、その新段階に置きたい。

Ⅷ期は6世紀の末葉から7世紀の初頭が相当しようが、須恵器の蓋を見る限り、7世紀には下らないかもしれない。

(5) 小針型‘系’坏の評価

築道下遺跡の性格や集落の盛衰という点では、7世紀後半以降の土器様相を検討することも重要である。しかし、ここではそれを詳述する用意も力量もないため、古墳時代の坏類、特に小針型‘系’坏の消長とその背景についてだけ触れておきたい。

小針型坏の出現と社会状況の関係について、はじめに言及したのは斎藤国夫氏である。前段の年代観でも触れたように、氏は小針遺跡B地点の分析から3段階の変遷(その後の第3次調査では5段階)を示され、出現の時期をFA降下前後の6世紀中葉前後に求められた。そして、「直立していた口縁部が外に開いて行く変化。それに伴う口径の大型化が6世紀後半から7世紀の特徴である。次の段階として、『小型化の傾向へと向い、『さらなる小型化や暗文系土器、有段口縁坏と8世紀前半頃共伴することによってこの土器群は消滅する』とされた(斎藤1990)。

田中広明氏は小針型坏の出現を、「埼玉古墳群中の稲荷山古墳と二子山古墳に挟まれた、小円墳群の形成過程に変化の現れる段階」(田中1992)、終焉をTK43型式の段階(田中1991 以下の引用は全て同書)に位置づけた。前者は6世紀第Ⅱ四半期、後者は6世紀末を指す。

築道下遺跡から出土した小針型‘系’坏についても、消滅の時期を除けば、斎藤氏が提示されたような変遷を跡付けることができる。すなわち、模倣坏の中から大型のものとして出現し、次第に口縁部の外反に伴う口径の大型化と扁平化が進行し、出土量(生産量)が増大して最盛期を迎える。しかし、それも長くは続かず、扁平化が進行したまま小型化へと転じ、出現時の

次いで、Ⅸ期は7世紀の第Ⅰ四半期、Ⅹ期は第Ⅱ四半期に置く。

Ⅺ期は坏Ⅴ類の出現する時期で、富田編年(坂野・富田1996)のⅣ段階(西暦660~675年)、Ⅻ期は同じくⅤ段階(西暦675~695年)に相当しよう。Ⅻ期は7世紀末から8世紀第Ⅰ四半期ということになろう。

状況を裏返すかのように出土量は激減、急速に消滅するということになる。

付け加えるならば、出現後は一気に多様化し、その中から数系の定形化・典型化したものが現れる。定形化しなかったものは継続せず、ごく短期間で姿を消していく。一方、定形化したものも継続性が強いとはいえず、同様の経過を辿る。

年代的には、6世紀第Ⅱ四半期に登場し、瞬く間に食膳具の中心を占めるようになる。ところが、それも束の間、7世紀を待たずに急速に消滅してしまうということになる。

つまり小針型‘系’坏とは、極めて特徴的な形態と展開を示しながらも、驚くほどの短期間で自己完結してしまう土器なのである。

では、このような小針型‘系’坏の出現と展開・消滅の背景には、いかなる社会的状況が反映されているのであろうか。

斎藤氏は成立の背景について、「特徴ある土器の一群の出現は、埼玉古墳群における前述した六世紀中葉から後半にかけての政治的な変動期と一致し、その変動に何らかの外的な力を想定させるものである。」と捉えた。ここにいう特徴ある土器の一群とは小針型坏のことで、政治的な変動期とは、「鉄砲山古墳から將軍山古墳へと移行すると考えられる首長権の移動」を指している(斎藤1984 以下の引用は全て同書)。

これに対して田中氏は、出現の意味を「小針遺跡の隆盛は、小針型土器の独自の生産と、一中略一埼玉地域の墳墓の新たな編成秩序に支えられている。埼玉古墳群を軸としたネットワークは、本来、比企型坏の集

落を支持母体としていたらしい。その支持母体を払拭し、埼玉古墳群の家産的な集落が、独自の型式の食膳具を採用した」と評価した。

さらに小針型坏の供給圏は、『生出塚埴輪窯跡群の供給圏と一致し、いわば「埼玉経済圏」を形成する。この経済圏は、埼玉古墳群のもつ首長権(国造権)の影響範囲と政権の内部構造を示すかもしれない。』とし、小針型坏は、「生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給、とくに埼玉古墳群の新たな展開とかかわりがあったと考え」た。田中氏は古墳よりも集落からの出土が遅れることから、小針型坏はまず、古墳への供献用土器として採用されたものと見ているようである。

両氏が述べるように、小針型坏および小針型‘系’坏を、埼玉古墳群との関係抜きに語ることはできないだろう。分布圏は判然としないものの、独自の土器を出現させ、それを主体化させた背後に、大きな社会的・政治的エネルギーや、それに起因する変動を感じない訳にはいかない。

小針遺跡同様、築道下遺跡も古墳時代後期、5世紀の後葉から集落の形成が開始される。小針型‘系’坏出現以降に大規模化を遂げるが、それはあくまで集落の推移の中で捉えられる出来事であり、決して断絶がある訳ではない。6世紀末頃に小針型‘系’坏が消滅し、集落も一時衰退してしまう状況も含めれば、古墳時代の集落という意味での築道下遺跡の動静は、大要、埼玉古墳群のそれと一致しているといえる。

一体、小針型‘系’坏出現期となる6世紀の第Ⅱ四半期(あるいはそれ以前)、埼玉古墳群にはいかなる変容が起こっていたのであろうか。

斎藤氏は首長権の移動を考えた。これを古墳群の分析から導き出そうとしたのは増田逸朗氏である。氏は古墳群中の古墳を主軸方位や規模などから、稲荷山・二子山・鉄砲山古墳という大型墳グループ、愛宕山・瓦塚・奥の山古墳という小型墳グループ、中の山・將軍山・丸墓山古墳という中型墳グループに分類した。そして、それぞれの変遷を示された上で、「將軍山グループは稲荷山グループとは明らかに主軸の方位が異

なり、大きく西に振る。これは、稲荷山グループとは系譜的に異なり、愛宕山グループと同様に同一親族の別グループとして扱うことが可能である。ここに初めて稲荷山系譜の最高首長権が移動したことになる。」とされた(増田1982)。さらに、『日本書紀』安閑天皇紀の記事をふまえ、その時期を「畿内政権の強力な介入による埼玉政権の動揺期とし、これによる権力の移動を考え、屯倉設置もあり得る時期」と位置づけた。

これを受け、斎藤氏は「行田市北西部の地域集団の自立化と、比企地方における地域集団の分散化が示す状況が、鉄砲山古墳に示される代表的首長権の弱体化の背景」とし、將軍山への転換を、「畿内政権による国造制という新しい支配体制の中に掌握されたことを意味する」と捉えた。

一方、田中氏は生出塚埴輪窯跡群の埴輪の供給と連動した、埼玉古墳群の新たな展開を想定されている。氏のいうところの「新たな展開」が何を指すのか、咀嚼し切れないところはあるが、小針型坏の出現を「小円墳群の形成過程に変化の現れる段階」とされていることから、増田氏の示した主軸方位の規制を意識したのかと思われる。その上で、「本来の比企型坏の食膳具集団の居住域に、強引に成立した小針型坏の食膳具集団は、生出塚体制の成立を背景としていた。しかし比企型坏の食膳具集団の支援なくしては、埼玉古墳群も成立しなかった」ことを導き出した。

終焉についてはどうであろうか。これも埼玉古墳群の動向に見てみたい。斎藤氏は「六世紀中葉前後に低湿地の開発を進展させ、さらに七世紀前後に最も拡大させた池守遺跡を初めとする北西部の地域集団は、その農業基盤を背景とし、また政治的な連繋の中から七世紀初頭から前半頃、將軍山から首長権を獲得した。それは八幡山の出現において帰結したと思われるが、この場合の首長権は国造職の移動としてとらえられるものである。」と結論づけた。

増田氏はこの首長権の移動を、「氏族交替さえ可能性として十分考えられる。」としている。

これら諸氏の論点を、築道下遺跡に見る小針型‘系’
坏の消長に応用するならば、おおよそ以下のようにま
とめることができよう。

①沖積低地の開発で獲得した農業基盤を根拠に、行田
市北西部の地域集団が自立し、比企地方ではその分
散化が進行、比企型坏の供給圏が権力基盤であった
稻荷山系の首長権は弱体化する。こうした状況を背
景に、6世紀第Ⅱ四半期頃、国造制という支配体制
をにらんだ畿内政権の強力な介入の下、同族内で首
長権の移動が起きる。

この動きと連動して、その集団は生出家埴輪窯跡
群の埴輪生産・供給体制を背景として、強引に小針
型‘系’坏を成立させる。

小針型‘系’坏は、そうした家産的集団(首長権を
獲得した氏族グループ)の導入した、極めて属性の
強い家産的な土器であった。このため急速に多様化
し、形態的な安定(定形化)は図りづらかったものと
推測される。供給も生出家埴輪窯跡群の埴輪のそれ
を通じ、古墳への供献という形であり、食膳具とし
て一般化し、広域に波及したのではないようである。
その意味で、田中氏の「家産的」という見解は卓
見であると思う。

このように考えると、小針遺跡や築道下遺跡は、
將軍山古墳に代表される新たな首長集団と関係が深
い集落ということになる。ただし、小針の集落は白
色系の「小針型坏」を、築道下の集落は赤橙色の「小
針型坏と類似する土器」を食膳具の主体とする。こ
こに、同様の食膳具集団でありながらも、首長集団
としてはその内部において、質的な差を有していた
であろうことが読み取れる。

②やがて、小針型坏および小針型‘系’坏を家産的土器

とした政権中枢の集団は、八幡山古墳に代表される
行田市北西部の、自立した地域集団(異氏族か?)に
首長権を奪われる。小針型‘系’坏と、これを主体的
な食膳具とした築道下集落の急激な衰退と終焉を考
えれば、その時期は6世紀の後葉から末頃に求めら
れる。それは、埼玉古墳群での古墳築造の終息と軌
を一にしている。

以上思いつくまま、小針型‘系’坏の消長と背景につ
いて、先学の研究を頼りに評価してみた。結果、諸氏
の埼玉古墳群に対する分析と、先に行なった築道下遺
跡の小針型‘系’坏の様相には、変遷面において高い整
合性が認められた。これを一言でいえば、小針型‘系’
坏とは、埼玉政権における新首長集団の家産的土器で
あった。ということになる。

この家産的集団内には、白色系の「小針型坏」を主用
する集落と、赤橙色の「小針型坏と類似する土器」を主
用する集落が存在する。周辺地域の古墳への供給が白
色系であることを考慮すれば、前者は集団の核を構成
するグループ、後者はそれを支えた外郭のグループ、
と考えることもできる。もしそうであるならば、この
土器にはある種の規制が働いていたことになる。二つ
の土器の違いは、首長権を握る中枢の氏族グループ
と、傍系ないしは擬制的な関係下に結集したグループ
の違いを表わすのであろうか。それぞれの集落の性格
については、なおその異同を検討する必要がある。

築道下遺跡に見る小針型‘系’坏の消長は、埼玉古墳
群の展開と不離の関係にある。ゆえに、沃野「忍の地」
に印された一つのエポック・メーカーな出来事とし
て、より認識を深めねばならない。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 1985 『将監塚・古井戸Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第71集
- 井上 肇 1979 「7世紀の坏形土器について～南比企地方を中心として～」『埼玉県立博物館紀要』6
- 大屋道則・栗岡 潤1998 『築道下遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第199集
- 剣持和夫 1993 『ウツギ内・砂田・柳町』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第126集
- 斎藤国夫 1980 『小針遺跡発掘調査報告書－B地区－』行田市文化財調査報告書第10集 行田市教育委員会
- 斎藤国夫 1984 「埼玉古墳群をめぐる諸問題」『原始古代社会研究』6 原始古代社会研究会
- 斎藤国夫 1990 『小針遺跡－第3次調査報告書－』行田市遺跡調査会報告書第2集 行田市遺跡調査会
- 鈴木徳雄 1984 「いわゆる北武蔵系土師器坏の動態」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 田中広明 1991 「古墳時代後期の土師器生産と集落への供給－有段口縁坏の展開と在地社会の動態－」『埼玉考古学論集』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 田中広明 1992 『新屋敷東・本郷前東』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第111集
- 富田和夫 1992 『稻荷前遺跡(A区)』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第120集
- 中島洋一 1993 『行田市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』行田市文化財調査報告書第28集 行田市教育委員会
- 坂野和信・富田和夫1996 「飛鳥時代の関東と畿内－北関東における7世紀の土器様相－」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会
- 増田逸朗 1982 「辛亥銘鉄剣出土古墳の概要と埼玉古墳群－首長権の変遷と性格－」『月刊 考古学ジャーナル』201
ニュー・サイエンス社
- 水口由紀子1989 「いわゆる比企型坏の再検討」『東京考古』7 東京考古談話会
- 村田健二 1992 『桑原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書第121集
- 渡辺 一・竹野谷俊夫1991 『鳩山窯址群Ⅲ』鳩山窯址群遺跡調査会・鳩山町教育委員会

付編 築道下遺跡出土遺物の科学分析

1. 分析の目的

築道下遺跡からは789軒の住居跡、241棟の掘立柱建物跡をはじめ、土壙や井戸跡など数多くの遺構が検出されている。その時期は古墳時代後期より中世にまでおよんでおり、時期的な偏在もなく、遺跡全体に分布している。

遺構から出土した膨大な量の遺物は、大部分が土師器や須恵器、陶磁器を中心とする土器類である。これにガラス製の玉、滑石製模造品や碧玉製管玉、板石塔婆などの石製品、容器や下駄、桶などの木製品、鎌や鋏、刀子などの鉄製品、等々も少なからず見出されている。

築道下遺跡の調査ではこうした種々の遺物のうち、須恵器、ガラス玉、管玉、木製品、種子、人骨などについて化学分析を実施している。分析結果については『築道下遺跡Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ』において、それぞれ付編として掲載した。

本書では、対象となった調査範囲にかかわる須恵器の胎土分析、およびガラス玉と管玉の分析について収録するが、以下では、まず分析の目的と結果の概略について触れておくこととする。委託先より提出された分析報告(抜粋)については、次節以降にこれを掲載する。

(1) 分析の目的

須恵器の胎土分析

検出された古墳時代末から奈良・平安時代の遺構では、土師器に伴って多くの須恵器が出土している。器種は壺や甕、高台付きを含めた坏類や蓋など豊富である。それぞれの形態や胎土はバラエティーに富み、製品の生産地は複数におよぶことが窺われた。

このことは調査当初より注意されていたことで、担当者間では、集落の性格を考える上で重要な要素であるとの認識を持っていた。つまり、複数の生産地からもたらされた須恵器の出土を、その消費地としての集落、築道下遺跡においてどのように捉えるかというこ

とである。

各製品ごとの生産地、それらの数量、時期的な多寡などは無論のこと、その背景にある流通システム、管理体制のように、地域史として解明されねばならない問題も数多く派生してくる。

こうした点を担当者間で協議した結果、数々の問題を考察していく上には、まず須恵器の生産地を比定することが先決、との結論に達した。そこで、別々の生産地と観察された須恵器を用い、胎土の化学的分析を実施することとした。また、副次的ではあるが、肉眼観察による産地識別と化学分析の同定結果が一致すれば、前者による分類がより確かなものとなる、という期待もかけられた。

試料の選出については静岡や群馬など、他地域の製品と思われるものとし、末野窯跡や南比企窯跡など、在地の製品は避けることとした。器種的には統一をとらなかったが、坏類や蓋が中心である。

分析は各事業年度(報告書単位)ごとに行ない、総数は52点にのぼる。このうち本書で対象となるのは、13点である。これ以外の分析結果については、それぞれの報告書を参照されたい。

13点の分析試料は別掲の図に示すとおり、9軒の住居跡と1基の性格不明遺構からの出土遺物で、壺と甕各1点、高台付きの坏6点、平底の坏1点、蓋4点である。

そして、これらの試料に対する実際の分析実験は、(株)第四紀地質研究所の井上巖氏に委託した。井上氏には試料の提出に先立ち、以下の観察所見を伝えてある。

- ①分析委託した試料は、全て築道下遺跡から出土した須恵器であること。
- ②これらの須恵器は、8世紀前半を中心とする時期に位置づけられるものであること。
- ③器種的には小型から中型の一般的什器で、特異なも

のではないこと。

④肉眼観察によって想定される各々の産地。(分析報告の第3表に、「肉眼観察」として記載。)

なお、提供する試料は井上氏の指示により、3cm四方ほどを各須恵器から切り取った。その部位はまったくの任意で、統一性はない。

これを受け、井上氏からはX線回折試験、および化学分析試験による同定を実施するとの方法提示があった。

ガラス玉・管玉の分析

遺構の各節で述べたように、築道下遺跡C区の第514号住居跡からは、14顆のガラス玉と10顆の管玉が出土している。両者は混在しながらも、おおよそ二つのブロックとなって見出されている。ただし、故意に埋納した様子はなく、投棄、あるいは流入したような状況であった。本来は一連、ないし二連の装飾品を形作っていたのではなからうか。

通常、このような装飾品は古墳の副葬品として出土するもので、一般的な住居跡覆土からというのは、極めて特異である。この点は、その所有形態に問題を提起するものといえよう。いずれにせよ、1軒の住居跡に集中して出土したことは、一括資料として高い価値を認めざるを得ない。

そこで、ガラス玉と管玉の成分分析を行ない、それぞれの異同の有無を確認することとした。一括遺物の成分が同様であれば製作も同時、あるいは材料が同一という可能性は高いはずである。生産地や流通経路などが明らかとなることを期待したいが、両者ともにこれを比定しうるほどのデータ集積はないようで、この点では資料提供という形にとどまるかもしれない。

分析対象となるガラス玉と管玉、計24点の試料は須恵器の胎土分析同様、(株)第四紀地質研究所の井上巖氏に委託した。井上氏には試料提出に先立ち、これも以下の条件と所見を伝えてある。

①分析は遺物を破損せずに行なうこと。

②試料は築道下遺跡から出土したガラス玉と碧玉製の管玉で、古墳時代後期に属する1軒の住居跡から、

一括して出土したこと。

③ガラス玉や管玉としては、特段異質なものではないこと。

試料提出時、井上氏からは試料分析の実験方法について、蛍光X線による非破壊分析を実施するとの提示があった。

(2) 分析報告の取り扱い

須恵器の胎土分析、ガラス玉・管玉の化学分析ともに、井上氏からは実験結果をふまえ、本文・図表・写真・チャートからなる大部の報告書が提出された。しかし、同書の内容は実験の条件や方法論まで多岐におよんでおり、本書にこれを全て収録することは事実上不可能である。報告書には分析資料として不要なものではなく、明示しなければならないことばかりではあろうが、次節以下では分析の結果を中心に掲載し、その他の化学的データや写真、記述の大半はこれを編集者の責任において割愛した。

(3) 分析の結果

須恵器の胎土分析

須恵器胎土中の粘土鉱物、および造岩鉱物同定のためのX線回折試験では、①土器胎土のタイプ分類、②石英(Qt)－斜長石(Pl)の相関、各々によるグループ分類がなされる。

①は築道下遺跡の分析試料全体で4タイプ、②は同じく3グループとその他、となっている。②は井上氏の「土器胎土中に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を製作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといったことは個々の集団が持つ土器製作上の固有の技術であると考えられる。」という論拠から実施されている。このため、このグループ分類では、各グループがおおよそその生産地を表現することとなっている。

化学分析では、①酸化ケイ素(SiO_2)－酸化アルミニウム(Al_2O_3)の相関から3グループ、②酸化第二鉄(Fe_2O_3)－酸化マグネシウム(MgO)の相関から4グループ、③酸化カリウム(K_2O)－酸化カルシウム

(CaO)の相関から3グループ、それぞれに分類されている。ここでも各グループには、生産地ごとの製品が分かれて集中している。

以上の分析結果は、現在までに分析のかかった各窯跡の分析データとの対比が行なわれ、最終的に生産地の比定が示される。今回、試料とした須恵器の生産地として挙げられたのは、埼玉県の末野窯跡群、静岡県の湖西窯跡群、群馬県の秋間窯跡群と金井窯跡群の4窯跡群である。

また、肉眼観察による生産地の識別についても、かなりの精度で一致することが確認された。一部、湖西窯跡群としたもの(坏や蓋などの小型製品)が、秋間窯跡群と分類されたが、窯跡試料の分析が進捗すれば、この点も克服しうるものと思われる。

ガラス玉・管玉の分析

ガラス玉の化学分析は、①酸化ケイ素(SiO_2)－酸化アルミニウム(Al_2O_3)の相関から2グループとその他、②酸化ナトリウム(Na_2O)－酸化カルシウム(CaO)の相関から2グループとその他、それぞれに分類される。

①・②ともに試料のガラス玉は、粒径の大きなものと小さなものに分かれる。成分の違いから、前者はソーダ・ライムガラス、後者はソーダガラスと分離されている。この相違は大きさや色調によって、明確に分類できるものである。

管玉の化学分析は①酸化ケイ素(SiO_2)－酸化アルミニウム(Al_2O_3)の相関から2グループ、②酸化第二鉄(Fe_2O_3)－酸化マグネシウム(MgO)の相関から1グループとその他、③酸化カリウム(K_2O)－酸化カルシウム(CaO)の相関から1グループとその他、それぞれに分類されている。

①～③により、管玉は大きく3種類に分かれると結論されているが、これが石材の産出地を示すものなの

か否か、現状では明言し難いようである。

以上、化学分析の目的を明らかとし、結果を提出された報告書から抜書した。

須恵器の胎土分析については、考古学的な遺物の観察や識別が有効であり、期待された結果を得られたものとする。逆に湖西産と観察したものうち、坏や蓋は秋間産であるとの結果を得たことは、今後の識別の大きな視点となる。

これまでに分析を行なった52点の須恵器のうち、最も多かったのは秋間窯跡群の16点である。次いで末野・湖西の両窯跡群の8点、金井窯跡群の7点、不明の4点、茨城県新治窯跡群の1点となっている。このうち、末野窯跡群の製品と分析された8点は、当初より末野産として提出したものではない。肉眼では金井・新治の両窯跡群、あるいは千葉市周辺の窯跡ではないかと観察されたものである。もちろん、ここに現れた数字が出土、すなわち搬入量の多寡を示すものではない。

ガラス玉と管玉については、生産地や産出地の比定までにはおおよばなかったが、ガラス玉には成分が異なる2種類の製品の存在することが明らかとなった。それはコバルト・ブルーの大粒のもの(ソーダ・ライムガラス)と、スカイ・ブルーの小粒のもの(ソーダガラス)で、その違いは求める色調による作り分けと思われる。

いずれの分析にせよ、出土遺物を化学的に検証・解明していくには、分析依頼者が確たる目的意識を持ち、直接分析に当たる化学者と強く意志の疎通を図ることが肝要である。それがあって、初めて良い結果を得られるのであり、遺物の背景に潜む諸課題を検討する前提となるのである。今回、実施した分析作業の反省として、痛感した次第である。

2. 土器胎土分析

(株)第四紀 地質研究所 井上 巖

X線回折試験及び化学分析試験

(1) 試料

分析に供した試料は13点で、第1表胎土性状表に示す通りである。

分析はX線回折試験・化学分析を実施した。なお、実験条件および結果の取り扱いについては、『築道下遺跡I』に掲載されているため割愛した。

(2) X線回折試験結果

タイプ分類

タイプ分類は既報告の『築道下遺跡I』および『築道下遺跡IV』とともに行った。

第3表土器分類表に示すように土器胎土はA～Dの4タイプに分類された。

Aタイプ：Hb 1成分を含み、Mont, Mica, Chの3成分に欠ける。

Bタイプ：Mica, Hb, Chの3成分を含み、Mont 1成分に欠ける。

Cタイプ：Mica 1成分を含み、Mont, Hb, Chの3成分に欠ける。

Dタイプ：Mont, Mica, Hb, Chの4成分に欠ける。須恵器は高温で焼成されているために鉱物が分解し、ガラスに変質している。そのため、4成分が検出されない。

最も多いタイプはDタイプで、Cタイプは3個で、Aタイプは1個である。原土はすべてBタイプで、土層断面上の差はない。

石英(Qt)－斜長石(Pl)の相関について

土器胎土に含まれる砂の粘土に対する混合比は粘土の材質、土器の焼成温度と大きな関わりがある。土器を制作する過程で、ある粘土にある量の砂を混合して素地土を作るといことは個々の集団が持つ土器制作上の固有の技術であると考えられる。

自然の状態における各地の砂は固有の石英と斜長石比を有している。この比は後背地の地質条件によって各々異なってくるものであり、言い換えれば、各地の砂はおのおの固有の石英と斜長石比を有していると言える。

Qt－Pl相関からI～Ⅲの3グループとその他に分類された。

Iグループ：Plが250以上の領域に分散する。末野の須恵器が集中する。

IIグループ：Qtが800～3700、Plが50～150の領域にあり、湖西と秋間－1の領域が重複する領域にある。

IIIグループ：Qtが3800～6000、Plが50～150の秋－2の領域にある。

湖西、秋間－1、金井窯跡群は領域が重複するが、末野窯跡の土器は明らかに焼成温度が低くPlが異なる領域にあり、明瞭に分類される。

(3) 化学分析結果

第2表化学分析表に示すように、既分析の『築道下遺跡I』の土器とともに築道下遺跡の土器を化学分析した。

分析結果に基づいて SiO_2 － Al_2O_3 、 Fe_2O_3 － MgO 、 K_2O － CaO の相関関係を検討した。

SiO_2 － Al_2O_3 の相関について

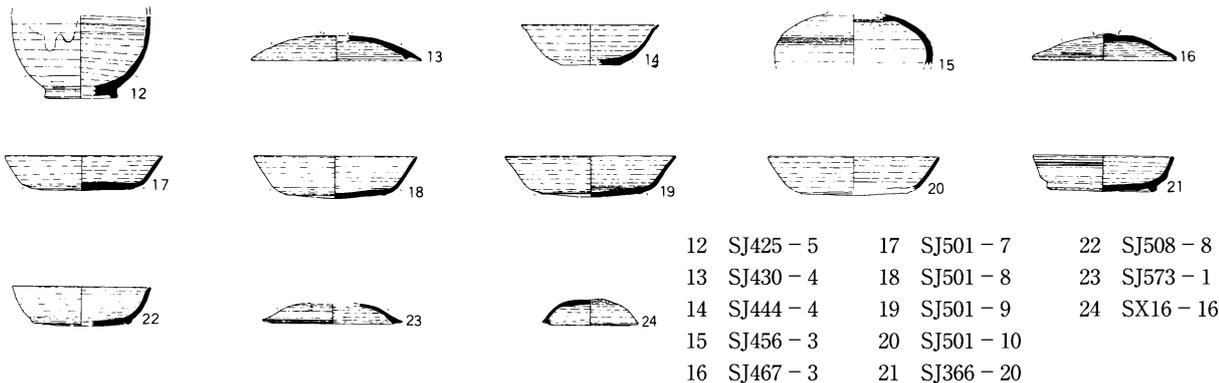
SiO_2 － Al_2O_3 の相関から、I～Ⅲの3グループに分類された。

Iグループ： SiO_2 が53～67%、 Al_2O_3 が17～27%の領域にあって、末野窯跡の須恵器が集中する。

IIグループ： SiO_2 が64～67%、 Al_2O_3 が23～27%の領域にあって、金井窯跡群の須恵器が集中する。

IIIグループ： SiO_2 が66～76%、 Al_2O_3 が15～23%

分析試料



の領域にあって、秋間窯跡群の須恵器と湖西窯跡群の須恵器が共存する。

Fe₂O₃-MgOの相関について

Fe₂O₃-MgOの相関から、I～IVの4グループに分類された。

Iグループ：Fe₂O₃が3～8%、MgOが0.2～1.0%の領域にあって秋間窯跡群の須恵器が集中する。

IIグループ：Fe₂O₃が2～4%、MgOが0～0.7%の領域にあって、湖西窯跡群の須恵器が集中する。

IIIグループ：Fe₂O₃が4～8%、MgOが0～0.5%の領域にあって、金井窯跡群の須恵器が集中する。

IVグループ：Fe₂O₃が9～13%、MgOが0.2～0.8%の領域にあって、末野窯跡の須恵器が分布する。

K₂O-CaOの相関について

K₂O-CaOの相関から、I～IIIの3グループに分類された。

Iグループ：K₂Oが1.3～2.0%、CaOが0.2～1.0%の領域にあって、金井窯跡群の須恵器が集中する。

IIグループ：K₂Oが1.0～4.0%、CaOが0～1.0%の領域にあって、秋間窯跡群、湖西窯跡群、末野窯跡の須恵器が混在する。

IIIグループ：K₂Oが2.4～3.4%、CaOが0～1.0%の領域にあって、湖西窯跡群の須恵器が集中する。

(4) まとめ

・土器胎土はA～Dの4タイプに分類され、Bタイプは原土、Dタイプは高温で焼成された須恵器で、鉱物が分解してガラス化したものに分類された。

・X線回折試験に基づくQt-P1相関では末野窯跡の須恵器はIグループに集中し、P1の強度が高く、焼成温度が他と比較して低い。IIグループには湖西窯跡群と秋間窯跡群の1の須恵器が集中し、IIIグループには秋間窯跡群の2の須恵器が集中する。秋間窯跡群と湖西窯跡群の須恵器は領域を同じくし、類似する傾向が認められる。

・化学分析結果では湖西窯跡群と秋間窯跡群の須恵器はSiO₂-Al₂O₃の相関では同じ領域にあり明瞭に分類されないが、末野窯跡と金井窯跡群の須恵器は異なる領域にあり、明瞭に分類される。Fe₂O₃-MgOの相関では湖西窯跡群、秋間窯跡群、金井窯跡群、末野窯跡の須恵器は異なる領域にあり、明瞭に分類された。

・現在の各窯跡の分析データと対比した分類では湖西窯跡群と言われる須恵器のうち大型の長頸壺類は湖西窯跡群の須恵器と一致するが、坏や蓋などは秋間窯跡群の須恵器の領域に分析値が入る。この点については今後の課題として残る。

第1表 胎土性状表

試料番号	タイプ分類	組成分類		粘土鉱物				造岩鉱物				器種	時期	肉眼観察					
		Mo-Mi-Hb	Mo-Ch, Mi-Hb	Mont	Mica	Hb	Ch(Fe)	Ch(Mg)	Qt	Pl	Crist				Mullite	K-fels	Halloy	Kaol	Pyrite
12	D	14	20				2234	106	369	199					171		須惠器長頸壺	8CE	秋間
13	D	14	20				1981	435	164								須惠器蓋	8CE	群馬?
14	D	14	20				5006	88	92	60	88						須惠器坏	8CE	湖西
15	D	14	20				4244	63	88	102	106			83			須惠器長頸壺	8CE	湖西
16	D	14	20				2753	87	342	196				159			須惠器蓋	8CE	湖西
17	D	14	20				2284	81	1224	118	100			120			須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
18	D	14	20				1802	102	1226	133				114			須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
19	D	14	20				1684	82	1206	144				133			須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
20	D	14	20				1472	83	1210	144	96			136			須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
21	D	14	20				4049	81	504	168				136			須惠器高台付坏	8CE	湖西
22	D	14	20				4138	88	92	123	120			118			須惠器高台付坏	8CE	湖西
23	D	14	20				2211	418	130								須惠器蓋	8CE	金井?
24	D	14	20				2254	121	114	93				94			須惠器坏	8CE	湖西

Mont: モンモロロナイト Mica: 雲母類 Hb: 角閃石 Ch: 緑泥石 (Ch: Fe 一次反射, Ch: Mg 二次反射) Qt: 石英 Pl: 斜長石 Crist: クリスタバライト Mullite: ムライト K-fels: カリ長石
Halloy: ハロイサイト Kaol: カオリナイト Pyrite: 黄鉄鉱 Au: 普通輝石 Py: 紫輝石

第2表 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	NiO	Total	器種	時期	肉眼観察
12	0.33	0.43	19.38	72.00	2.57	0.38	0.93	0.57	3.00	0.41	100.00	須惠器長頸壺	8CE	秋間
13	0.99	1.50	25.92	58.59	1.85	0.99	1.67	0.57	7.64	0.27	99.99	須惠器蓋	8CE	群馬?
14	0.29	0.45	24.27	65.43	2.26	1.12	1.05	0.48	4.53	0.13	100.01	須惠器坏	8CE	湖西
15	0.00	0.45	18.36	67.79	2.87	0.82	1.63	0.40	7.37	0.31	100.00	須惠器長頸壺	8CE	湖西
16	0.34	0.59	22.82	67.74	2.90	0.36	1.05	0.41	3.64	0.16	100.01	須惠器蓋	8CE	湖西
17	0.36	0.18	23.41	67.96	1.97	0.57	1.20	0.23	4.03	0.10	100.01	須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
18	0.22	0.22	23.93	65.86	1.81	0.58	1.15	0.70	5.52	0.01	100.00	須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
19	0.19	0.11	24.21	66.13	1.64	0.51	1.35	0.38	5.47	0.00	99.99	須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
20	0.19	0.08	25.00	65.84	1.72	0.47	0.99	0.51	4.93	0.26	99.99	須惠器高台付坏	8CE	秋間or金井
21	0.54	0.32	16.95	74.02	2.47	0.59	0.85	0.29	3.82	0.16	100.01	須惠器高台付坏	8CE	湖西
22	0.54	0.44	21.31	69.25	2.67	1.32	0.97	0.44	3.06	0.00	100.00	須惠器高台付坏	8CE	湖西
23	0.55	0.95	25.49	55.82	3.03	0.63	1.44	0.91	10.80	0.38	100.00	須惠器蓋	8CE	金井?
24	0.98	0.63	24.56	62.53	2.81	0.57	1.08	0.59	6.23	0.00	99.98	須惠器坏	8CE	湖西

Na₂O: 酸化ナトリウム MgO: 酸化マグネシウム Al₂O₃: 酸化アルミニウム SiO₂: 酸化ケイ素 K₂O: 酸化カリウム CaO: 酸化カルシウム TiO₂: 酸化チタン MnO: 酸化マンガン Fe₂O₃: 酸化第2鉄 NiO: 酸化ニッケル

第3表 土器分類表

試料番号	タイプ分類	器種	時期	肉眼観察	SiO ₂	Fe ₂ O ₃	K ₂ O	Pl	分析結果
12	D	須恵器長頸壺	8CE	秋間	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西
13	D	須恵器蓋	8CE	群馬?	末野	末野		高	末野
14	D	須恵器坏	8CE	湖西	金井	秋間	秋間?	?	秋間?
15	D	須恵器長頸壺	8CE	湖西	秋間	秋間?	秋間		秋間
16	D	須恵器蓋	8CE	湖西	湖西	湖西	湖西?	湖西	湖西
17	D	須恵器高台付坏	8CE	秋間 or 金井	金井	金井	金井		金井
18	D	須恵器高台付坏	8CE	秋間 or 金井	金井	金井	金井		金井
19	D	須恵器高台付坏	8CE	秋間 or 金井	金井	金井	金井		金井
20	D	須恵器高台付坏	8CE	秋間 or 金井	金井	金井	金井		金井
21	D	須恵器高台付坏	8CE	湖西	秋間	秋間	秋間	秋間	秋間
22	D	須恵器高台付坏	8CE	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西	湖西
23	D	須恵器蓋	8CE	金井?	末野	末野	秋間?	高	末野
24	D	須恵器坏	8CE	湖西	金井	秋間	秋間	秋間	秋間

SiO₂:酸化ケイ素 Fe₂O₃:酸化第2鉄 K₂O:酸化カリウム Pl:斜長石

3. ガラス製丸玉・碧玉製管玉の化学分析

(株)第四紀 地質研究所 井上 巖

(1) 実験条件

化学分析は日本電子製 J S X 3200 型蛍光 X 線分析装置でおこなった。

実験条件は加速電圧：30kV、電流：自動、有効測定時間：20秒でおこなった。

分析指定元素は Na, Mg, Al, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr の 13 元素である。

(2) 結果の取り扱い

化学分析結果は酸化物として、ノーマル法(13元素全体で100%になる)で計算し、化学分析表を作成した。化学分析表に基づいて $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$, $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{MgO}$, $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ の各図を作成した。

第1表化学分析表には築道下遺跡から出土した碧玉とガラス玉の分析値が記載してある。

分析結果に基づいて第1図 $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図(碧玉)、第2図 $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{MgO}$ 図(碧玉)、第3図 $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図(碧玉)、また、ガラス丸玉については第4図 $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図(ガラス丸玉)、第5図 $\text{Na}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図(ガラス丸玉)を作成した。

(3) 碧玉の化学分析結果

第1表化学分析表には築道下遺跡の碧玉とガラス丸玉の分析値が記載してある。

$\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ の相関について

第1図 $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように I と II の 2 グループに分類される。

I グループには 1、6、8、10、14 の 5 個が 87~90% の領域、II グループには 7、13、15、19、20 の 5 個が 90~93% の領域にそれぞれ集中し、明瞭に分かれる。

$\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{MgO}$ の相関について

第2図 $\text{Fe}_2\text{O}_3 - \text{MgO}$ 図に示すように I ~ II の 2 グループとその他に分かれる。I グループには 7、13、15、20 の 4 個が 1.5~2% の領域、II グループには 1、6、8、10、19 の 5 個が 23% の領域に各々集中

する。

14 は Fe_2O_3 と MgO の値が高く、異質である。

$\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ の相関について

第3図 $\text{K}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図に示すように I グループとその他に分かれる。I グループは K_2O が 2~4.2% の領域にあって、1、6、7、10、13、15、19、20 の 8 個が集中する。8 と 14 は I グループには属さず、異質である。

(4) ガラス丸玉の化学分析結果

ガラス丸玉の化学分析結果も第1表に記載してある。

$\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ の相関について

第4図 $\text{SiO}_2 - \text{Al}_2\text{O}_3$ 図に示すように I と II の 2 グループとその他に分類される。I グループは Al_2O_3 の値が高い領域にあるもので、4、9、23、24 のガラス小玉が集中する。このガラス小玉は CuO が 0.5~1% 高い値を示し、銅による発色と推察される。II グループは Al_2O_3 の値が 2~4% の領域にあって、2、3、12、16、17、21、22 の 7 個のガラス大玉が集中する。このガラス大玉は CoO の値が 0.07~0.18% と高く、コバルトによる発色と推察される。この 2 グループはともに、 SiO_2 の値が 65~75% の領域にある。ガラス大玉の 5、11、18 はともに分散し、異質である。

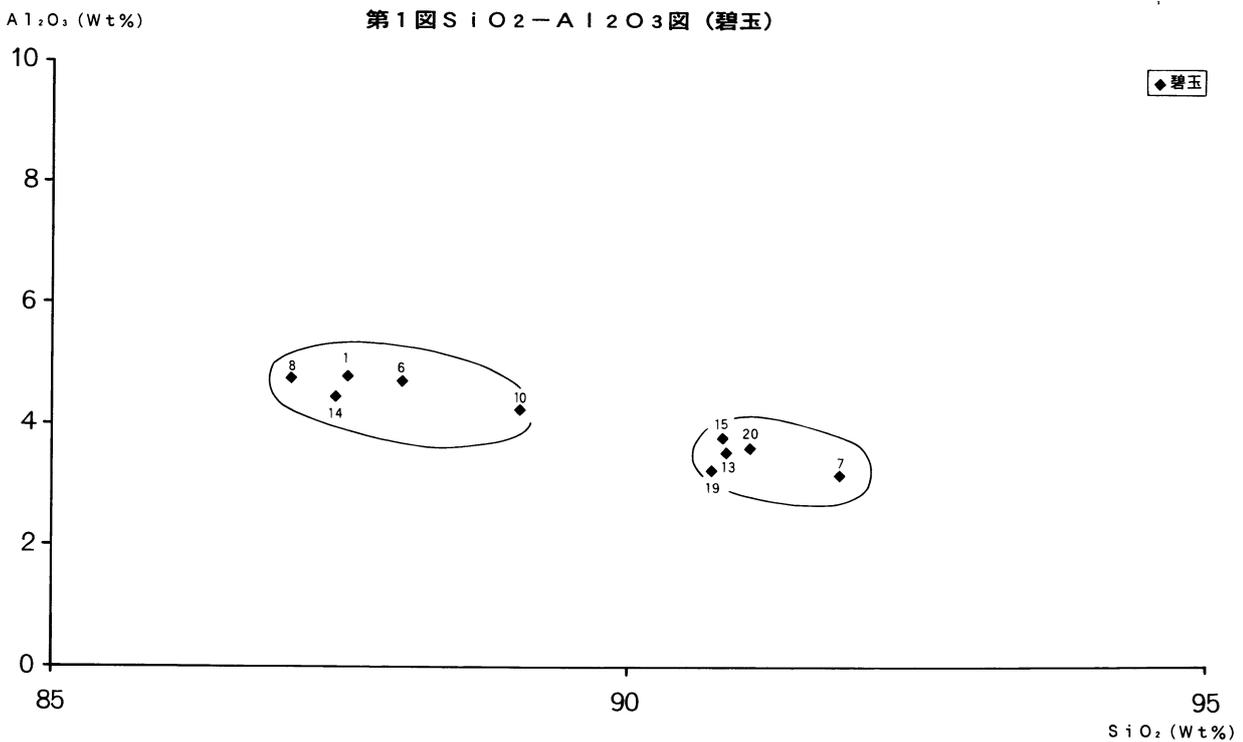
$\text{Na}_2\text{O} - \text{CaO}$ の相関について

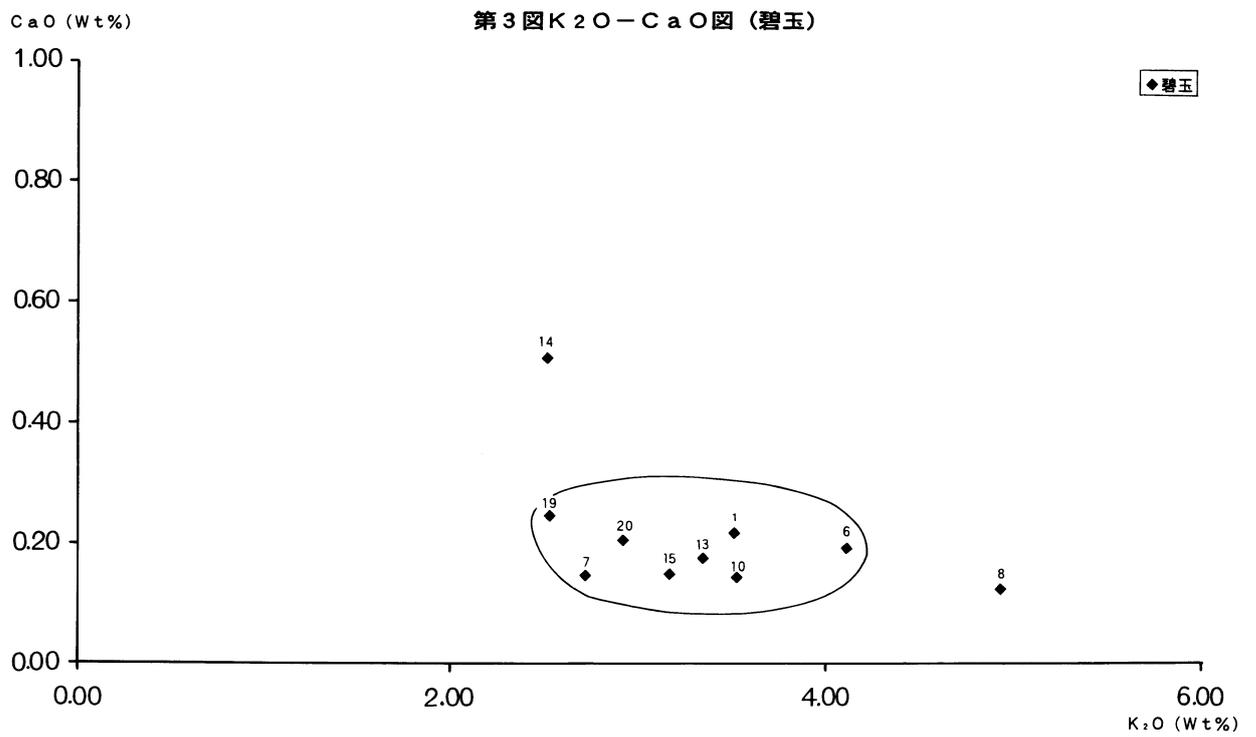
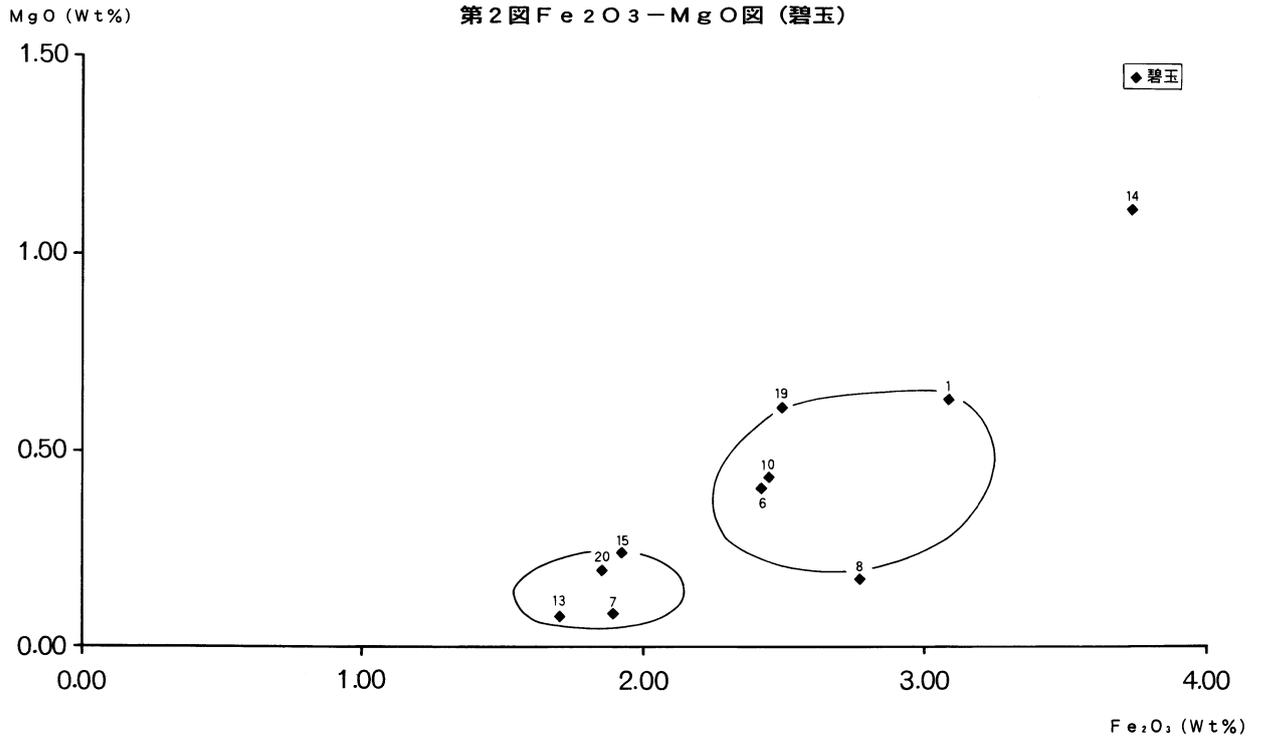
第5図 $\text{Na}_2\text{O} - \text{CaO}$ 図に示すように 2 グループとその他に分かれる。I グループは Na_2O が 6~13% の領域にあって、4、9、23、24 の 4 個のガラス小玉が集中する。II グループは Na_2O が 6~15% の領域にあって、2、3、12、16、14、21、22 の 7 個のガラス大玉が集中する。ガラス大玉は CaO の値が 5% 以下の低い領域に集中し、明らかに成分が異なる。ガラス小玉はソーダガラス、ガラス大玉はソーダ・ライムガラスと分離できるように見受けられる。

(5) まとめ

- 碧玉は大きくは2種類に分かれる。SiO₂の値が低く、MgOの値が高い碧玉、SiO₂の値が高く、MgOの値が低い碧玉の2種類である。この2種類の中で8と14は異質であり、大きくは3種類になると推察される。
- ガラス丸玉はその色によって明瞭に分類される。薄

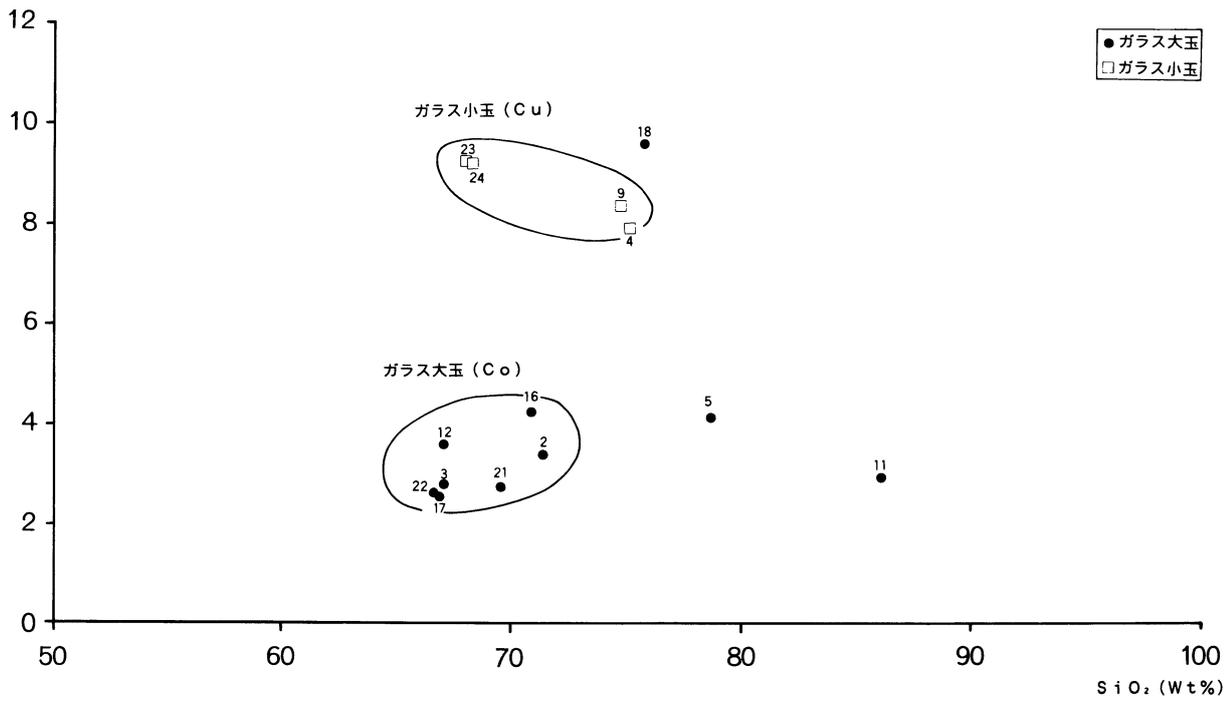
いブルーのガラス小玉は銅で発色し、CaOの値が5%以下のソーダガラスと濃いブルーのガラス大玉はコバルトで発色し、CaOの値が5~10%と高く、ソーダ・ライムガラスと明らかに成分が異なる。5、11、18はガラス大玉の中ではNa₂Oの値が低く、異質である。このように見えてくるとガラス丸玉は3種類、特にガラス丸玉大玉は2種類あると推察された。





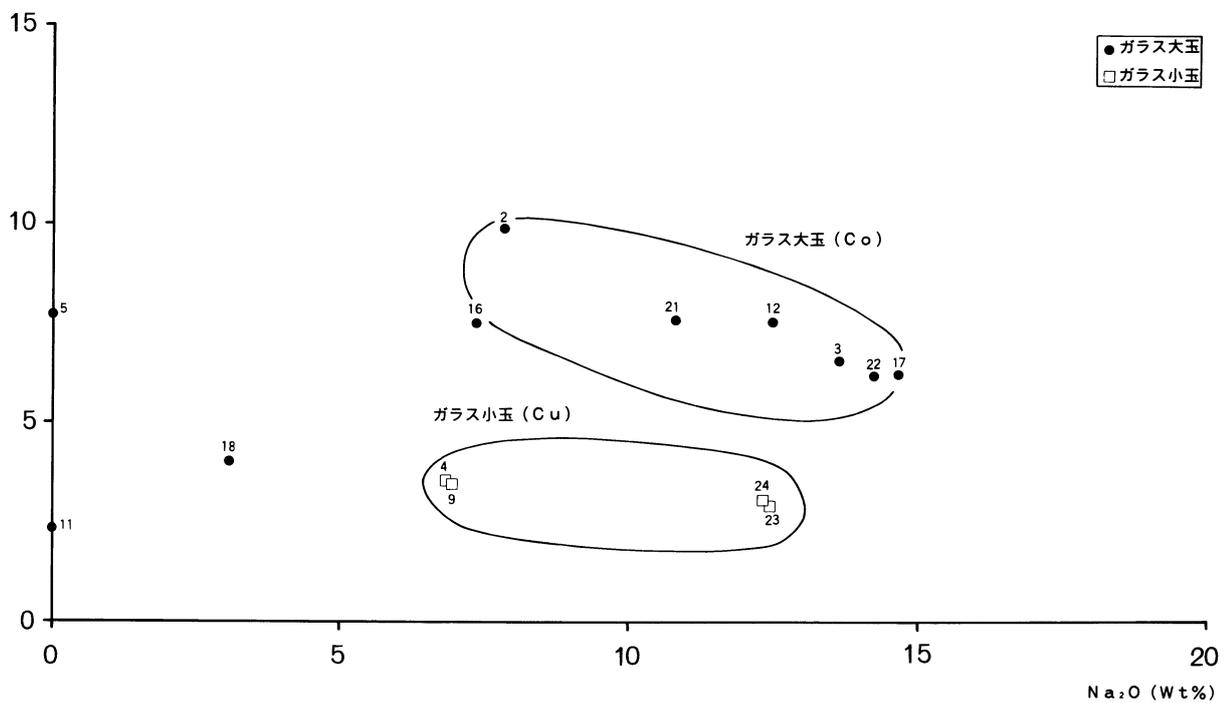
Al₂O₃ (Wt%)

第4図 SiO₂-Al₂O₃図 (ガラス玉)



CaO (Wt%)

第5図 Na₂O-CaO図 (ガラス玉)



第1表 化学分析表

試料番号	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃	C ₂ O	NiO	CuO	Rb ₂ O	SrO	PbO	Total	Rb (I)	Sr (I)	種類	図版番号	
1	0.0000	0.6253	4.7800	87.5774	3.5138	0.2161	0.1611	0.0061	3.0845	0.0000	0.0000	0.0019	0.0265	0.0075	0.0000	100.0002	1250	344	碧	玉	6
2	7.8399	0.4549	3.3901	71.4133	1.1326	9.8571	0.1187	2.3245	2.1270	0.1817	0.0387	0.2884	0.0000	0.1892	0.6439	100.0000	0	1492	ガラス大玉	18	
3	13.6146	3.6507	2.7809	67.1105	3.9487	6.5904	0.1890	0.1900	1.5990	0.0561	0.0116	0.0790	0.0062	0.0877	0.0856	100.0000	355	4926	ガラス大玉	21	
4	6.8493	0.0000	7.9123	75.1234	2.7583	3.5307	0.7416	0.0479	1.9002	0.0158	0.0158	0.9987	0.0162	0.0732	0.0167	100.0001	700	3094	ガラス小玉	26	
5	0.0000	1.9029	4.1322	78.7311	2.4664	7.7061	0.4069	0.4433	2.9663	0.1585	0.0117	0.3876	0.0028	0.1543	0.5301	100.0002	93	5030	ガラス大玉	22	
6	0.0000	0.4042	4.6998	88.0459	4.1169	0.1913	0.0988	0.0000	2.4182	0.0000	0.0000	0.0039	0.0179	0.0013	0.0017	99.9999	1193	84	碧	玉	3
7	0.0000	0.0841	3.1821	91.8245	2.7223	0.1453	0.1151	0.0124	1.8963	0.0000	0.0000	0.0015	0.0121	0.0013	0.0031	100.0001	705	73	碧	玉	8
8	0.0000	0.1719	4.7343	87.0881	4.9239	0.1231	0.1598	0.0029	2.7691	0.0000	0.0000	0.0045	0.0207	0.0016	0.0000	99.9999	1084	80	碧	玉	11
9	6.9486	0.0851	8.3293	74.7858	2.7055	3.4632	0.6852	0.0626	1.8153	0.0000	0.0107	0.9289	0.0097	0.0606	0.0090	99.9998	490	2988	ガラス小玉	25	
10	0.0000	0.4297	4.2352	89.0624	3.5305	0.1435	0.1134	0.0000	2.4416	0.0000	0.0015	0.0070	0.0215	0.0103	0.0034	100.0000	1089	511	碧	玉	10
11	0.0000	0.0365	2.9246	86.1584	4.3545	2.3295	0.2735	1.8255	1.9135	0.0966	0.0208	0.0323	0.0173	0.0169	0.0001	100.0000	924	883	ガラス大玉	23	
12	12.4661	3.2571	3.5823	67.1226	2.7565	7.5410	0.3034	0.2835	2.1926	0.0736	0.0116	0.1445	0.0074	0.0925	0.1654	100.0001	370	4508	ガラス大玉	19	
13	0.0000	0.0786	3.7742	90.8174	3.3422	0.1746	0.0904	0.0000	1.7040	0.0000	0.0000	0.0000	0.0164	0.0022	0.0000	100.0000	904	121	碧	玉	7
14	0.0000	1.1094	4.4416	87.4637	2.5175	0.5057	0.1689	0.0022	3.7310	0.0000	0.0019	0.0060	0.0339	0.0136	0.0046	100.0000	1681	660	碧	玉	9
15	0.0000	0.2383	3.5445	90.8406	3.1686	0.1478	0.1113	0.0000	1.9279	0.0000	0.0018	0.0030	0.0169	0.0012	0.0012	100.0001	966	79	碧	玉	2
16	7.3581	3.2597	4.2167	70.8991	3.6622	7.5086	0.3233	0.3811	1.8609	0.0889	0.0051	0.1189	0.0012	0.1456	0.1705	99.9999	43	4985	ガラス大玉	15	
17	14.6562	4.9132	2.5627	66.8960	2.4263	6.2304	0.2523	0.0910	1.5389	0.0781	0.0000	0.1041	0.0003	0.1060	0.1445	100.0000	16	5151	ガラス大玉	20	
18	3.0888	0.1419	9.5775	75.7856	2.6636	4.0012	0.8353	0.2574	2.1277	0.0000	0.0102	1.0696	0.0115	0.1078	0.3218	99.9999	430	3914	ガラス大玉	14	
19	0.0000	0.6075	3.2460	90.7244	2.5282	0.2450	0.1213	0.0052	2.4893	0.0000	0.0062	0.0022	0.0191	0.0057	0.0000	100.0000	1032	301	碧	玉	5
20	0.0000	0.1947	3.6129	91.0470	2.9252	0.2043	0.1347	0.0000	1.8548	0.0000	0.0099	0.0000	0.0127	0.0002	0.0035	99.9999	732	10	碧	玉	4
21	10.8042	3.2153	2.7278	69.5658	3.5404	7.6012	0.1482	0.0580	1.7642	0.0812	0.0069	0.1712	0.0031	0.0950	0.2176	100.0001	165	4933	ガラス大玉	17	
22	14.2161	4.9393	2.6163	66.7147	2.6304	6.2064	0.2536	0.0962	1.8334	0.0711	0.0082	0.1393	0.0010	0.1109	0.1631	100.0000	56	5765	ガラス大玉	16	
23	12.4168	0.1795	9.2440	68.0519	3.9256	2.9116	0.6768	0.0553	1.8651	0.0000	0.0085	0.5838	0.0147	0.0616	0.0049	100.0001	697	2861	ガラス小玉	24	
24	12.2974	0.0000	9.1699	68.3310	3.8166	3.0881	0.6886	0.0606	1.8572	0.0000	0.0056	0.6146	0.0105	0.0593	0.0007	100.0001	524	2899	ガラス小玉	27	

Na₂O: 酸化ナトリウム MgO: 酸化マグネシウム Al₂O₃: 酸化アルミニウム SiO₂: 酸化ケイ素 K₂O: 酸化カリウム CaO: 酸化カルシウム TiO₂: 酸化チタン MnO: 酸化マンガン Fe₂O₃: 酸化第2鉄 C₂O: 酸化コバルト NiO: 酸化ニッケル CuO: 酸化銅 Rb₂O: 酸化ルビジウム SrO: 酸化ストロンチウム PbO: 酸化鉛 Rb: ルビジウム (I) Sr: ストロンチウム (I)